

殷周時代における長江中流域の青銅器文化の形成と展開

譚, 永超

<https://hdl.handle.net/2324/4784370>

出版情報：九州大学, 2021, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

殷周時代における長江中流域の青銅器文化の形成と展開

譚永超

九州大学人文科学府
令和4年1月

目次

序 章	1
第1章 先行研究における課題と本研究の目的、方法	6
第1節 本論で扱う長江中流域の自然的空間範囲	6
第2節 長江中流域における青銅器とその文化様相をめぐる研究史	8
1、中原青銅器と地方青銅器	8
（1）華中型青銅器	
（2）江西地区、新干青銅器群	
（3）湖南青銅器群	
（4）中国の東南地方および嶺南地域（南方青銅器）	
2、長江中流域の青銅器文化に対する認識の到達点	10
第3節 長江中流域における地方型青銅器の型式分類と編年の研究史	12
1、青銅尊・壺の型式分類と編年	12
（1）青銅尊・壺の認識	
（2）青銅尊・壺の型式分類	
（3）青銅尊・壺の編年	
2、青銅饒をの型式分類と編年	14
（1）青銅饒の型式分類	
（2）青銅饒の変化	
（3）青銅饒の編年	
3、青銅甬鐘の型式分類と編年	16
（1）青銅饒と甬鐘	
（2）青銅甬鐘の型式分類	
（3）青銅甬鐘の編年	
4、青銅鼎の型式分類と編年	17
（1）越式鼎、いわゆる「越式鼎」、在地系鼎の諸定義	
（2）青銅鼎の型式分類	
（3）青銅鼎の編年	
第4節 問題の所在	19
1、青銅器文化全般に関する問題点	
2、分類編年上の問題	
第5節 本論における目的、資料、方法	20
1、本論の目的	
2、対象資料	
3、研究方法	
第2章 殷代における長江中流域の青銅尊・壺	23
第1節 青銅尊・壺の型式分類	23
1、形式の再検討	
2、属性抽出	25
（1）青銅尊の属性抽出	

(2) 青銅尊の属性相関による型式設定	
(3) 青銅壘の属性抽出	
(4) 青銅壘の属性相関および型式設定	
第2節 青銅尊・壘の編年	31
1、長江流域における墓による一括遺物	
2、長江流域における青銅尊・壘の併行関係	
3、中原型青銅尊・壘との併行関係	
4、時期の設定	
第3節 殷代における青銅尊・壘の分布状況	34
1、尊壘Ⅰ－1期	
2、尊壘Ⅰ－2期	
3、尊壘Ⅱ期	
4、尊壘Ⅲ期	
第4節 殷代における地方型青銅尊・壘に関する考察	38
1、中原型青銅尊・壘との比較	
2、扱われ方からみた地方型青銅尊・壘の地域性	
第5節 小結	43
 第3章 殷周時代における青銅鏡の系譜とその展開	44
第1節 青銅鏡の型式分類	44
1、用語の説明	
2、形式の設定	
3、青銅鏡の属性抽出	45
(1) 小型青銅鏡の属性抽出	
(2) 大型青銅鏡の属性抽出	
4、小型青銅鏡の属性相関および型式設定	47
(1) 小型青銅鏡A型	
(2) 小型青銅鏡B型	
5、大型青銅鏡の属性相関および型式設定	48
(1) 大型青銅鏡A型	
(2) 大型青銅鏡B型	
(3) 大型青銅鏡C型	
第2節 青銅鏡の編年	52
1、小型青銅鏡の時期設定	
2、大型青銅鏡の時期設定	
3、青銅鏡の編年	
第3節 殷周時代における青銅鏡の分布状況	55
1、鏡Ⅰ期	
2、鏡Ⅱ－1期	
3、鏡Ⅱ－2期	
4、鏡Ⅲ期	
5、鏡Ⅳ－1期	
6、鏡Ⅳ－2期	
第4節 殷周時代における青銅鏡の系譜とその展開	61

1、系譜関係からみた大型青銅鐃の地域性	
2、殷周時代における青銅鐃の展開	
第5節 小結	64
第4章 長江中流域の青銅甬鐘の展開	65
第1節 青銅甬鐘の型式分類	65
1、用語の説明	
2、青銅甬鐘の分類	
3、青銅甬鐘の属性抽出および型式設定	66
(1) 属性抽出	
(2) 型式設定	
第2節 青銅甬鐘の編年	71
第3節 各時期における青銅甬鐘の分布状況	73
1、鐘Ⅰ-1期	
2、鐘Ⅰ-2期	
3、鐘Ⅱ期	
4、鐘Ⅲ期	
第4節 長江中流域の青銅甬鐘の考察	77
1、鐘Ⅰ期および、地方型甬鐘の起源	
2、中原青銅甬鐘との比較	
3、長江中流域青銅甬鐘の展開	
第5節 小結	81
第5章 殷周時代における長江中流域の青銅鼎の展開	82
第1節 青銅鼎の型式分類	82
1、形式分類	
(1) 胴部形態	
(2) 足部形態	
(3) 属性の相関と形式設定	
2、地方型青銅鼎の型式設定	86
(1) Aa型の型式設定	
(2) Ab型の型式設定	
(3) Ac型の型式設定	
(4) B型の型式設定	
(5) C型の型式設定	
(6) Da型の型式設定	
(7) Db型の型式設定	
(8) Dc型の型式設定	
(9) E型の型式設定	
第2節 地方型青銅鼎の編年	94
第3節 各時期における青銅鼎の分布状況	97
1、鼎Ⅰ期	
2、鼎Ⅱ期	
3、鼎Ⅲ期	

4、鼎Ⅳ期	
第4節 殷周時代における長江中流域の青銅鼎の展開	101
1、地方型青銅鼎の地域性と変遷	101
(1) A型	
(2) B型	
(3) C型、D型	
(4) E型	
2、長江中流域の青銅鼎の展開	104
(1) 鼎Ⅰ期(西周前期～西周中期)	
(2) 鼎Ⅱ期(西周後期～春秋前期)	
(3) 鼎Ⅲ期(春秋中期～春秋後期前半)	
(4) 鼎Ⅳ期(春秋後期前半～戦国前期)	
第5節 小結	105
第6章 地方型青銅器の出土状況とその考察	106
第1節 青銅彝器の各型式の相互関係および時間設定	106
第2節 長江中流域の青銅彝器文化の扱われ方の検討	107
1、埋納青銅器の検討	116
(1) 単数埋納	
(2) 集中埋納のパターン1	
(3) 集中埋納のパターン2	
2、副葬青銅器の検討	112
(1) 集団墓	
(2) 特定個人墓	
第3節 小結	120
第7章 長江中流域青銅器文化の形成と展開	121
第1節 青銅器の変化傾向の概観	121
第2節 長江中流域青銅器文化の展開様相	122
1、第Ⅰ期の様相	
2、第Ⅱ期の様相	
3、第Ⅲ期の様相	
4、第Ⅳ期の様相	
5、第Ⅴ期の様相	
第3節 長江中流域青銅器文化の形成・展開とその社会	129
結 語	133
図出典	136
表出典	139
参考文献	140
附 表 長江中流域青銅彝器の一覧表	

図版目次

図 1-1	中国における長江中流域の位置	1
図 1-2	長江における主要な支流の地理的位置	1
図 1-3	中原青銅器文化編年と地方型青銅器	2
図 2-1	本論における長江中流域自然区の範囲	7
図 2-2	本論で及ぼす中国大陸の行政区画	21
図 3-1	中原青銅尊・壘・甗の形態	23
図 3-2	尊形器の器高と肩最大径の相関	24
図 3-3	円肩尊、折肩甗の形態	24
図 3-4	青銅尊の各部位の名称	25
図 3-5	胴部デザインの属性変異	25
図 3-6	側視形の属性変異	26
図 3-7	肩部の牲首の属性変異	26
図 3-8	側視形の肩高比	26
図 3-9	長江中流域の青銅尊の型式	27
図 3-10	青銅壘の俯瞰形、各部位の名称	28
図 3-11	俯瞰形の変化方向	28
図 3-12	胴部文様配置の変化方向	28
図 3-13	補助文様の変化方向	29
図 3-14	長江中流域の青銅壘の型式	29
図 3-15	長江中流域の青銅尊・壘の編年	33
図 3-16	尊壘Ⅰ-1期における青銅尊・壘の分布状況	34
図 3-17	尊壘Ⅰ-2期における青銅尊・壘の分布状況	35
図 3-18	尊壘Ⅱ期における青銅尊・壘の分布状況	36
図 3-19	尊壘Ⅲ期における青銅尊・壘の分布状況	37
図 3-20	中原地域と長江第Ⅰ期器高の比較	38
図 3-21	時期ごとに地方型青銅尊・壘の器高	38
図 3-22	中原型青銅尊の肩部、頸部の文様	39
図 3-23	動物形青銅酒器	39
図 3-24	中原地域の青銅尊	39
図 3-25	中原型と地方型の胴部デザインの比較	39
図 3-26	牲首の接合技法の比較	40
図 3-27	器壁による技法差	40
図 3-28	青銅尊・壘の扱われ方の地域性	41
図 3-29	遺跡と出土地点の位置	42
図 4-1	甬鐘の各部位の名称	44
図 4-2	青銅鐃の各部位の名称	44
図 4-3	青銅鐃の器高と数量の相関	45
図 4-4	小型青銅鐃の属性変異	45
図 4-5	大型青銅鐃の属性変異	46
図 4-6	小型青銅鐃の型式	48
図 4-7	大型青銅鐃の型式	49
図 4-8	青銅鐃の編年	54

図 4-9	饒Ⅰ期における青銅饒の分布状況	55
図 4-10	饒Ⅱ-1 期における青銅饒の分布状況	56
図 4-11	饒Ⅱ-2 期における青銅饒の分布状況	57
図 4-12	饒Ⅲ期における青銅饒の分布状況	58
図 4-13	饒Ⅳ-1 期における青銅饒の分布状況	59
図 4-14	饒Ⅳ-2 期における青銅饒の分布状況	60
図 4-15	華中型青銅器の饗餐文様	61
図 4-16	華中型方格乳釘文	62
図 5-1	青銅甬鐘の各部位名	65
図 5-2	区画線の属性変異	66
図 5-3	主文様の属性変異	66
図 5-4	青銅甬鐘の共通する属性の変異	67
図 5-5	青銅甬鐘 A 型の型式	68
図 5-6	青銅甬鐘 B 型の型式	69
図 5-7	青銅甬鐘の編年	72
図 5-8	鐘Ⅰ-1 期における青銅甬鐘の分布状況	73
図 5-9	鐘Ⅰ-2 期における青銅甬鐘の分布状況	74
図 5-10	鐘Ⅱ期における青銅甬鐘の分布状況	75
図 5-11	鐘Ⅲ期における青銅甬鐘の分布状況	76
図 5-12	A1a 式、A1b 式甬鐘—器高と重量の相関	80
図 5-13	A2 式甬鐘—器高と重量の相関	80
図 5-14	B1 式甬鐘—器高と重量の相関	80
図 5-15	中原型甬鐘の動物意匠	77
図 5-16	中原型甬鐘側鼓部の鳥記号および銘文の拓本	78
図 5-17	中原型と地方型甬鐘形態の相関	80
図 5-18	饒Ⅳ期と鐘Ⅰ-2 期の分布差	79
図 6-1	青銅鼎の形態	83
図 6-2	地方型青銅鼎の形式	85
図 6-3	地方型青銅鼎 Ab 型の属性変異	86
図 6-4	地方型青銅鼎 Ab 型の胴部文様	86
図 6-5	深高比×口縁部の相関	87
図 6-6	地方型青銅鼎 Ac 型の型式変化	88
図 6-7	地方型青銅鼎 B 型胴部のサイズ	88
図 6-8	地方型青銅鼎 C 型の属性変異	89
図 6-9	Da 型の口径×器高との相関	90
図 6-10	地方型青銅鼎 Da 型の属性変異	90
図 6-11	地方型青銅鼎 Da 型の型式変化	91
図 6-12	地方型青銅鼎 Db 型の型式変化	92
図 6-13	地方型青銅鼎 E 型の型式変化	92
図 6-14	地方型青銅鼎の編年	96
図 6-15	鼎Ⅰ期における地方型青銅鼎の分布状況	97
図 6-16	鼎Ⅱ期における地方型青銅鼎の分布状況	98
図 6-17	鼎Ⅲ期における地方型青銅鼎の分布状況	99
図 6-18	鼎Ⅳ期における地方型青銅鼎の分布状況	100
図 6-19	地方型青銅鼎 A 類の在地化	101

図 6-20	地方型青銅鼎 B 型の在地化	102
図 6-21	地方型青銅鼎 C 型の在地化	102
図 6-22	地方型青銅鼎 D 類の在地化	102
図 6-23	地方型青銅鼎 E 型の在地化	103
図 7-1	単数埋納の模式図	107
図 7-2	長江中流域における単数埋納の動物形青銅器	107
図 7-3	長江中流域における集中埋納の分布	108
図 7-4	集中埋納パターン 1 の模式図	109
図 7-5	音階記号の数値化	109
図 7-6	音楽機能の比較	110
図 7-7	湘潭青山橋集中埋納の青銅器	111
図 7-8	大悟雷家山集中埋納の青銅器	111
図 7-9	長江中流域における墓の分布	112
図 7-10	寧郷炭河里西周銅器墓と高砂脊墓地の相関	112
図 7-11	高砂脊墓地の青銅器を副葬する墓	113
図 7-12	炭河里西周銅器墓の青銅器を副葬する墓	113
図 7-13	資興旧市春秋墓地の墓規模	114
図 7-14	衡陽赤石古墓群の相関	114
図 7-15	桃江腰子畚墓地の相関	114
図 7-16	長江中流域における集団墓地規模の比較	115
図 7-17	桃江腰子畚墓地の青銅鼎の分布	116
図 7-18	特定個人墓と集団墓地規模の比較	117
図 7-19	特定個人墓	118
図 7-20	第Ⅴ期の特定個人墓の一括遺物	119
図 8-1	器種と扱われ方の相関	121
図 8-2	時期ごとの扱われ方のセリエーション	121
図 8-3	地方型青銅器サイズの比較	121
図 8-4	第Ⅰ期の様相	123
図 8-5	第Ⅱ期の様相	124
図 8-6	第Ⅲ期の様相	126
図 8-7	第Ⅳ期の様相	127
図 8-8	第Ⅴ期の様相	128
図 8-9	殷周時代における長江中流域の社会変化	132

表目次

表 2-1	自然地理区の区分	7
表 3-1	青銅尊の属性相関表	30
表 3-2	青銅罍の属性相関表	30
表 3-3	青銅尊の型式分類の対応表	31
表 3-4	青銅罍の型式分類の対応表	31
表 3-5	長江流域の墓の一括遺物	32
表 4-1	小 A 型の属性相関	48
表 4-2	小 B 型の属性相関	48

表 4-3	大 A 型の属性相関-----	49
表 4-4	大 C 型の属性相関-----	50
表 4-5	小型青銅鏡の型式分類の対応表-----	51
表 4-6	大型青銅鏡の型式分類の対応表-----	51
表 4-7	大型青銅鏡の共伴関係-----	52
表 5-1	A 型青銅甬鐘の属性相関-----	70
表 5-2	B 型青銅甬鐘の属性相関-----	70
表 5-3	青銅甬鐘の型式分類の対応表-----	69
表 6-1	青銅鼎の胴部形態と足部形態の相関-----	84
表 6-2	地方型青銅鼎 Ab 型の属性相関-----	87
表 6-3	地方型青銅鼎 B 型の属性相関-----	89
表 6-4	地方型青銅鼎 C 型の属性相関-----	89
表 6-5	地方型青銅鼎 Da 型の属性相関-----	91
表 6-6	青銅鼎の型式分類の対応表-----	93
表 6-7	桃江腰子侖墓地の編年の対応-----	94
表 7-1	地方型青銅器の編年-----	106
表 7-2	高砂脊遺跡、炭河里遺跡の銅器墓の比較-----	113
表 7-3	集団墓地の青銅器の出土率-----	115
表 7-4	特定個人墓の青銅器の出土率-----	118

序 章

本論は中国殷周時代の併行期、いわゆる中国青銅器時代の長江中流域における青銅器文化の展開過程を、主に青銅彝器の分析を通じて明らかにするものである。長江中流域青銅器文化とは、中原地域の殷後期から春秋時代に転換する政治変動の背景において、長江中流域を中心として広範に出現した、地方型青銅器を生産し、消費した在地文化を指す。地



図 1-1 中国における長江中流域の位置

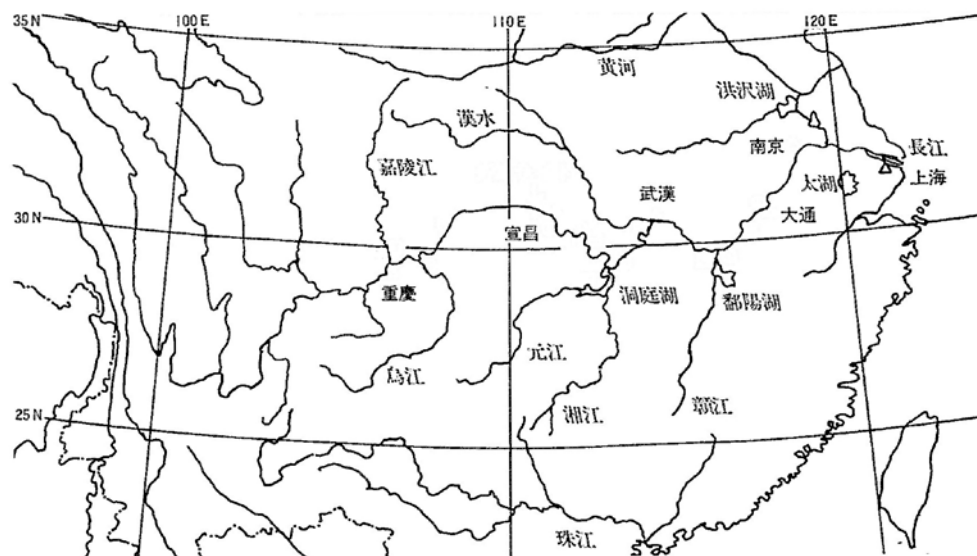


図 1-2 長江における主要な支流の地理的位置

方型青銅器には、殷周青銅器には該当しないものが若干あり、小群を形成すると指摘されてきた（林 1981）。本論で対象とする時期は、殷後期に併行する地方型青銅器文化の開始から、春秋後期における楚文化の成立に向かう、長江中流域における独特の青銅器文化の形成期である。

ここで、長江中流域という用語は単に地理的な範囲ではない。西周時代に関しては、湖南省、江西省を中心として、浙江省、福建省という東南地方をも含む青銅器型式の共通性が見られ、湘贛青銅器文化圏が認識されている（角道 2014）。また春秋時代の青銅武器では、広東省、広西省という嶺南地域を含みつつ、湖南省を中心とした型式の共通性（湘江・嶺南系青銅器）が見られる（西江 1987）。こうしたことから、長江中流域の湖南省を中心として東南、嶺南地域を含む地域を、ここでは長江中流域と呼ぶことにする。本流域の青銅器は中原地域の殷周青銅器と異なり、独特の文化を形成しており、本論はその特質を明らかにするものである。

殷周時代とは、中国の黄河中流域を中心として繁盛した青銅器時代である。河南省、陝西省を中心とする諸遺跡は中原青銅器文化の中心である。『史記』の記述によれば、成湯による夏の滅亡から周の武王克殷までの間が殷王朝であり、武王が殷の帝辛を牧野に破って西周王朝が成立、そして周平王の東遷から諸侯国争覇が春秋戦国時代となる。長江中流域に関しては、『史記』周本紀に「昭王南巡狩不返、卒於江上」、『竹書紀年』に「周昭王十六年、伐楚荊、洪漢」とあり、西周前期後半の昭王が、長江中流域の諸勢力を討った事が知られる（宮本 2020）。また、『左伝』襄公十三年の「赫赫楚国、而君臨之、撫有蛮夷、奄征南海、以属諸夏」は、春秋中後期の楚国が諸蛮の力を統合し、諸侯を服属させる力を蓄えたことを示している（間瀬 1986）。以上の記載は、春秋中後期の楚国が長江中流域に進入する以前に、中原文化とは大きく異なる地方固有の文化が存在したであろうことを予測させる（図 1-3）。文献史学に基づくと、西周時代には周王の権威が確立し、封建制によって、政治的影響力を拡大させ、より安定した領域支配が可能になった（松丸 1980、伊藤 1987）。春秋時代に入ると諸侯が自立化し、周の王権が衰退、中原諸侯が競合し、戦争が頻発した（渡辺 2019）。「侯馬盟書」によると、晋国を代表とする中原諸侯国の紛争調停、すなわち会盟が举行され、貢獻制を基盤とする封建的秩序が維持された。一方で、周王権の不安定化が進むとともに、春秋初期に楚が武王（紀元前 740 年～前 690 年）という王号を称した（渡辺 2019）。その後、楚荘王（紀元前 614 年～紀元前 591 年）が周王に

中原文化の編年	中原青銅器文化	長江中流域青銅器
殷前期	二里岡文化	盤龍城類型・鄭州系（鈴木 2013）
殷後期	殷墟文化	華中型青銅器（難波 1998）
西周前期 西周中期 西周後期	西周文化	湘贛青銅器（角道 2015）
春秋前期 春秋中期 春秋後期	諸侯国の展開 （齊文化、楚文化、三晋文化など）	湘江・嶺南系青銅器（西江 1987）
戦国前期 戦国中期 戦国後期		楚系青銅器（袁・張 2015）

図 1-3 中原青銅器文化編年と地方型青銅器

「鼎の軽重を問ひ」、邲の戦いで中原諸侯国の晋国を撃破し、ついに周王と並び立つ王権の樹立を展開したのである（丸橋 2020）。このように、春秋時代の楚は北へ向かって拡大したのであって、長江以南の地域に対する関心は少なかった。戦国時代以降、湖北に位置する曾、随などの諸侯国を併呑し、湖南までにまたがる広大な領地が、楚の有効支配下に入ったのである（丸橋 2020）。本論は、こうした楚文化以前の長江中流域の青銅器文化の具体像を解明するのが課題である。

図 1-3 は、先行研究による長江中流域の各種青銅器と、中原青銅器文化のおおよその併行関係を表現したものである。少なくとも西周時代から春秋時代にかけて、長江中流域の青銅器文化は存続している。殷後期については、長江中流域の地方型青銅器（Kane 1974、高 1981、林 1981、Bagley 1987）、華中型青銅彝器（難波 1998）などの諸論説を考慮すれば、長江中流域青銅器文化の起源が殷後期に遡る可能性もある。

こうした中原と長江中流域という差異はどのように発生したのだろうか。青銅器を受容した社会の発達度および生業基盤の差異によって、新たな青銅器文化が生じるという考え方がある（宮本 2009）。中国新石器時代以来、家畜よりも稲作と狩猟・漁撈に比重を置く長江流域、アワをはじめとする穀物栽培と家畜の飼育、狩猟・漁撈を行う黄河流域という差異が指摘されている（甲元 1992）。殷周時代に入っても、哺乳類動物の消費が家畜優位型である中原地域、シカ優位型（野獣優位型）である長江流域という地域性がある（岡村 2005）。こうした生業基盤、さらにはそれに基づく社会の差異によって、長江中流域青銅器文化が中原青銅器文化と異なる展開となった可能性があろう。しかしながら、長江中流域において、中原型青銅器を受容、選択したことが、当該地域の社会様相の変化とどのように結びついたのかは明らかになっていない。本論が長江中流域に注目する理由は、長江中流域の青銅器文化の展開の解明によって、当該地域の社会様相が明らかになることが期待されるからである。ところで、当該地域の在来文化は、土器に基づいて地域区分される場合があり、新石器時代以来の長江中・下流域は、いわゆる印文陶文化圏に包括される。この印文陶文化圏の成立を、中原文化の進出に対する周辺社会としての中国東南地方全体のフィードバックと捉える見解がある（中村 1996）。とはいえ、中原地域とは異なり、政治的まとまりは形成せず、文化的まとまりとして評価されるのが一般である（西江 1995）。

長江中流域に入る前に、中原を一瞥しておこう。殷周時代の中原青銅器文化は殷文化、周文化という不連続性を持つが、これは殷、西周王朝の交替、西周王朝の崩壊、諸侯国の勃興という歴史的視座によるものである。一方で、青銅彝器の形態、文様の型式学分析では、殷代から春秋前期にかけての系譜的連続性が見られ（林 1984、難波 1995）、春秋中期から戦国時代にかけて諸侯国の系統に分岐していく（林 1986）。あるいは、青銅彝器の扱われ方（儀礼）、生産体制の変化などの諸現象によって、殷後期、西周中後期、春秋中期などの時間点に、中原青銅器文化の変革期が考えられている（宮本 2016、2020）。このように、中原青銅器文化の展開は、王朝の交替という歴史的観点とともに、青銅器それ自体の検討を通じて、おおよそ明らかになってきている。

以下では、本論の主である長江中流域の様相を見ていく。長江中流域で出土した青銅器は製作場所が発見されておらず、当該地域発見の青銅器が、ほかの地域からの搬入であるとする見解がある。例えば、殷遺民が資源獲得、あるいは政治変動による避難のため、青銅器を伴って南下、長江中流域に來たというのである（夏 1972、張 1979）。一方で、Kane 氏は、殷文化より影響を受けつつ、独特な青銅器が存在したと考えた。長江流域を中心とする江南地方出土の青銅尊、甗、罍、鼎、饒などに、いくつかの地域色を見出し、当該地域の製作であると指摘した（Kane 1974）。さらに、青銅器自体の形態、文様の検討から、「地方型青銅器」と共通した特徴が見出されていくことになる。在地生産という論点はお

おむね支持され（林 1981、Bagley 1987、難波 1998）、殷中期以降の長江中流域では、鑄造技術の習得によって、中原青銅器と異なる製品を生み出し、独自の地方型青銅器文化を形成したと考えられた（林 1981）。その後は、地方出土の青銅器に関して、中原地域製作の搬入品、中原青銅器の模倣品、在地集団が創出した製品に区分して議論がなされてきた（熊 1986、何 1993、施 2003、向 2008、張 2009、彭 2011）。つまり、長江中流域の青銅器は中原型、融合型、地方型に分けられ、中原文化との交流を通じて、在地集団が次第に脱中原化し、在地生産が行われたと解釈されたのである。さらに具体的なものは難波氏による論攷であり、殷墟文化に属する技法、文様を基盤として、長江中流域を中心とした地域において、地方型青銅器という独自の体系が成立したと考えられた（難波 1998）。こうした青銅器製作の独自性は、青銅器の文様・形態（Kane 1974、林 1981、Bagley 1984、張 2008）、それらの技法（難波 1998、張 2004、蘇・李 2017）に関して、中原地域の青銅工房との差異が論拠とされてきた。一方で、こうした青銅器生産の担い手であったと思われる長江中流域の在地集団が、どのような段階を経て、青銅器の在地生産を始めたのかに関しては、明らかでない部分が多い。

これまで、長江中流域における地方型青銅器を取り上げ、型式変化による系譜関係の検討は、長江中流域青銅器文化を理解しようとしたものであった。地方型青銅器をめぐる検討では、長江中流域の文様の共通性が見られる華中型青銅器（難波 1998）、長江中流域で見られた大型青銅鑊、青銅鐘といった青銅楽器（林 1981、高 1984、1993、何 1996、施 2003、向 2008）を取り上げ、当該地域で独立的に創出することや、中原文化の系譜との関連が指摘された。他では、長江流域で見られた越式鼎（彭 1984、熊・呉 1985、何・何 1986、李 1995、向 2005）が取り上げられ、在地集団による展開が考えられた。方法的には、長江中流域の青銅器の型式組列および年代を確定し、当該地域の文化様相が推定された。しかしながら、殷周時代における長江中流域の青銅器文化の研究は、中原中心論そして文化伝播論を基礎とする面が多い。すなわち、当該地域の青銅器文化の連続的展開が明らかにされていない。確かに、外部の影響は、周辺に位置する社会の一つの特徴とも考えられよう（樋口 1963、Chang 1977）。しかしながら、外部の影響は在地集団による生産や流通と密に関連している。こうした在地集団の重要性は、例えば、区系類型論にみられる。つまり、新石器時代以来の長江中流域においても、在来文化の基盤が中原文化と異なり、諸地域の地域色が存在するというのである（蘇 1997）。これは、従来の中原中心論とは異なるものである。他の例としては、東アジア全体における青銅器時代では、北方青銅器文化と接触する中で、中原青銅器文化が独自の文化内容と技術を発展させていった（宮本 2020）ことが挙げられる。長江中流域もまた、中原青銅器文化と接触する中で、それとの類似性および、地方型青銅器としての自律性を有したことが予想される。従って、長江中流域の青銅器研究では、殷周青銅器の型式序列、系譜をそのまま用いるのではなく、当該地域の青銅器の系譜そのものを明らかにしつつ、さらに精度の高い研究を行うべきである（馬 1997）。本論で強調したいのは、殷周時代に併行する中原地域以外の青銅器に関する、中原との類似性よりむしろ、在地生産や在地集団に対する認識なのである。

上述のように、殷周時代における長江中流域の在来文化は、生業、土器など諸方面での特異性が指摘されてきたが、本論で注目する青銅器も、こうしたものの一つである。青銅器の文化圏は、土器の文化圏（向 2008、豆 2011）と重なり合いながら、長江中流域に位置する地域社会を構成している。とはいえ、資源・技術習得が限られた青銅器は、土器とは社会的位置づけが異なるものである。また、長江中流域の青銅器については、製作場所が不明である。従って、土器による文化圏と青銅器をそのまま結び付けることは難しい。むしろ、青銅器の反映するものは土器と異なり、当該地域の社会組織の階層や儀礼、そし

てそれに関わる経済などであることが考えられる。こうした青銅器の特異性を用いた研究としては、村野氏による周代湘江流域における地方型青銅鼎の検討が挙げられる。青銅鼎と階層性との関連から、社会像を復元できる可能性が提示されている（村野 2005）。或いは、土器に比べて分布の広い青銅器によって、長江中流域に位置する諸地域の社会を、通地域的に把握しうることも考えられよう。

また、こうした青銅器の性質を鑑みると同時に、中原青銅器文化が、首長制社会の中で、祖先祭祀を行う祭儀国家（岡村 2005）による青銅彝器を基礎に展開すること（宮本 2020）を参照すると、長江中流域の青銅器文化に基づいて、社会複雑化のモデルを提示できる可能性がある。楚文化進入の以前、つまり領域国家より前の段階であった長江中流域について、バンド、部族、首長制（Service 1962）ないし平等社会、ランク社会、階層社会（Fried 1967）という新進化主義の立場から説明できる可能性があるのである。しかしながら、こうした社会の複雑化は、ある状況から生じた岐路を選択したものとして、ある均衡から他の均衡へ移行したものとも解釈できる（明石 2002）。内的な変化が注目されてきた中原とは対照的に、長江中流域では、外来の中原青銅器を大きく受容しており、社会複雑化の過程も特異なものであることが予想されよう。

このように本論では、従来注目されて来なかった、長江中流域における地方型青銅器の系譜の連続性、その在地文化の展開過程、および社会様相を明らかにしようとするものである。本論で明らかにしようとする長江中流域における青銅器文化の展開過程は、中国殷周時代から秦帝国の成立という歴史的過程の独自性を強調しておきたい。つまり、中国青銅器時代という背景の下、長江中流域における青銅器文化の展開、社会変化をなるべく他地域と比較可能な形で把握したい。このことによってこそ、長江中流域青銅器文化の一般性と特殊性を明らかにするのは、中国青銅器時代の研究に対して意義を有するものと考えられるのである。

第1章 先行研究における課題と本研究の目的、方法

本論は、殷周時代における長江中流域の青銅器文化の展開を、主に青銅器を用いて解明するものである。詳細な学史の検討に入る前に、長江中流域の地理的空間を紹介しよう。

第1節 本論で扱う長江中流域の自然的空間範囲

長江中流域とは、湖北省西部に位置する宜昌市から、江西省九江市に属する湖口県までの長江主河道の中段を指す。現中国の行政区画の華中地区の湖北省全体、湖南省の中北部、江西省の北西部を含んでいる。長江中流域の主河道は湖北省宜昌市で、三峡の峡谷部から出て、平野部を流れるようになる。湖北省の宜昌市から、河床の高低差は小さくなり、流れは緩やかになり、川幅は広く、河道は分岐、蛇行する。湖北の枝江から湖南城陵磯までは、荊江とかつて呼ばれた。長江の武穴から九江は、両岸から迫る山地丘陵および沈下の地質構造によって、沖積扇を形成している。また、長江主河道が北から南へ変化したため、長江の沿岸地域に2つの古い湖（雲夢澤、彭蠡澤）が出現した。さらに河床の改変のため、長江の南側では湖南、江西の北部に洞庭湖と鄱陽湖が出現した（楊 2006）。宜昌市から長江は蛇行しつつ南東方向へ流れを変えていく。また、湖南省岳陽市で洞庭湖と接した後は、北東へ流れる。さらに、湖北省武漢市で漢江と合流し、南東方向へ向かう。そして、江西省九江市湖口県で、淡水湖としては中国最大の面積を持つ鄱陽湖と接し、北東方向へ流れを変えるのである。長江中流域における大きな支流としては、長江の北岸で漢水、南岸では、洞庭湖で合流する湘江、沅江、澧水、資水、鄱陽湖で合流する贛江がある。

次に、『中国自然地理総論』によって、地勢、地質運動、気候、自然史の変遷および人類活動に伴う自然に対する影響などの諸要素を考えたい。表2-1のように本地域は、東部モンスーン区「Ⅰ」、華中・華南湿潤亜熱帯地区「(Ⅲ)」の北亜熱帯長江中下流域平原混交林区(8)、および中亜熱帯長江南岸丘陵盆地照葉樹林区(11)である(中国科学院 1985)。華中・華南湿潤亜熱帯地区「(Ⅲ)」は、北亜熱帯秦嶺、大巴山混交林区(9)、中亜熱帯浙閩沿海山地照葉樹林区(10)、中亜熱帯四川盆地照葉樹林区(12)、中亜熱帯貴州高原照葉樹林区(13)、中亜熱帯雲南高原照葉樹林区(14)南亜熱帯嶺南丘陵照葉樹林区(15)をも含んでいる(中国科学院 1985)。(9)は(8)と同じように混交林であり、地理的に隣接している。(10)、(15)も丘陵盆地照葉樹林で、隣接している。一方で、(12)、(13)、(14)は長江上流域に位置する高原であり、(11)との差が比較的大きい。したがって、地形、気候、自然資源の類似性からいうと、長江中流域は、長江下流域、嶺南地域を含めた華中・華南湿潤亜熱帯地区の一部であるといえる。こうした地理的概念を念頭に置き、長江中流域の中心地域および波及地域を一括し、便宜上、長江中流域青銅器文化と呼ぶことにしたい。この長江中流域青銅器文化に対応するのは、黄河流域の殷、周における、中原青銅器文化である。なお、中原と関連が深い、領域国家の形成期である春秋戦国時代の楚国を楚文化と呼ぶ。

表 2-1 自然地理区の区分（中国科学院 1985 より）

大区	自然地区	自然区
I、東部モン スーン区	(I) 東北湿潤、半湿 潤温帯地区	1、大興安嶺タイガ区 2、東北東部山地広葉混交樹林区 3、東北平原森林草原区
	(II) 華北湿潤、半湿 潤温帯地区	4、遼東、山東半島落葉広葉樹林区 5、華北平原半夏生落葉広葉樹林区 6、冀晋山地半夏生落葉広葉林、森林草原区 7、黄土高原森林草原、ステップ区
	(III) 華中、華南湿潤 、亜熱帯地区	8、北亜熱帯長江中下流域平原混交樹林区 9、北亜熱帯秦嶺、大巴山混交樹林区 10、中亜熱帯浙閩沿海山地照葉樹林区 11、中亜熱帯長江南岸丘陵盆地照葉樹林区 12、中亜熱帯四川盆地照葉樹林区 14、中亜熱帯雲南高原照葉樹林区 15、南亜熱帯嶺南丘陵照葉樹林区 16、南亜熱帯、熱帯台湾島照葉樹林、雨緑林区
	(IV) 華南熱帯湿潤地 区	17、瓊雷熱帯雨林、雨緑林区 18、滇南熱帯雨林区 19、南海諸島熱帯雨林区
II、西北乾燥 帯	(V) 内モンゴル温帯 草原地区	20、西遼河流域ステップ区 21、内モンゴル高原ステップ、砂漠ステップ区 22、オルドス高原ステップ、砂漠ステップ区
	(VI) 西北温帯及び温 帯砂漠地区	23、アルシャ高原温帯砂漠区 24、ジュンガル盆地温帯砂漠区 25、アルタイ山脈草原及びタイガ区 26、天山山脈草原、タイガ区 27、タリム盆地温帯砂漠区
III、青蔵高原	(VII) 青蔵高原地区	28、ヒマラヤ山脈南部山地熱帯、亜熱帯森林区 29、蔵東、川西横断山地タイガ、高山草地区 30、蔵南山地サバナ区 31、羌塘高原、青南山地高寒草原、山地草原区 32、ツァイダム盆地及び崑崙山脈砂漠区 33、崑崙山脈高寒砂漠、砂漠ステップ区

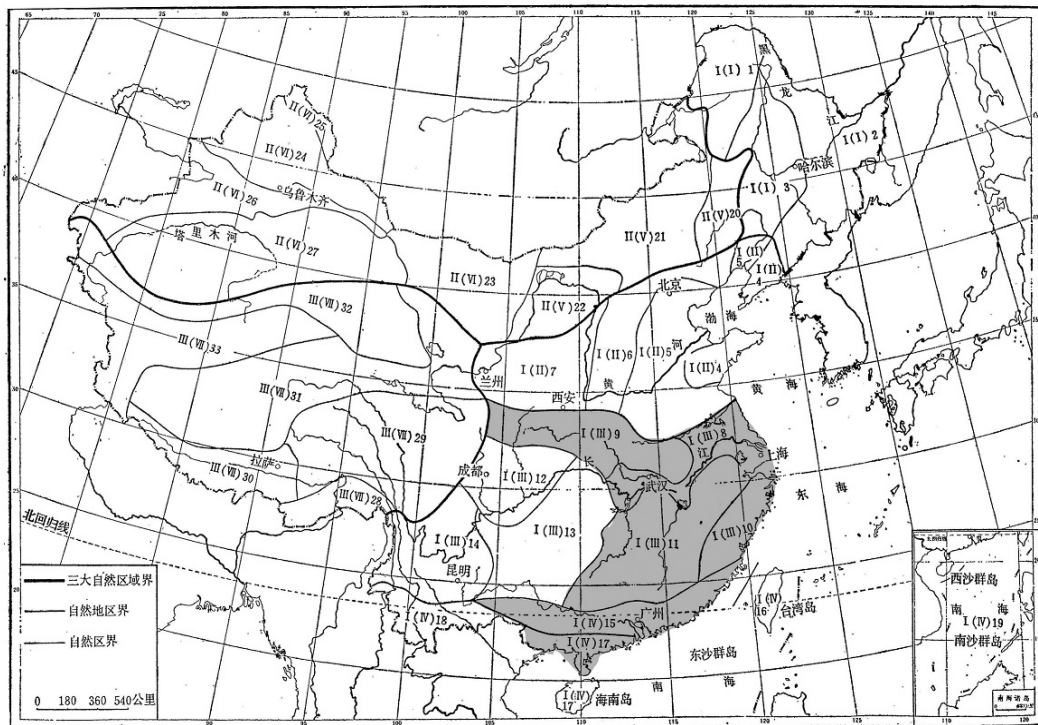


図 10.1 中国綜合自然地理区划示意图

図 2-1 本論における長江中流域自然区の範囲（中国科学院 1985 より）

第2節 長江中流域における青銅器とその文化様相をめぐる研究史

1、中原青銅器と地方型青銅器

1970年代以前から、長江流域において青銅器が偶然に発見されている。最初、これらの資料は少なく、中原青銅器文化に属するものと考えられた（夏 1972）が、当該地域で発掘資料が増える一方で、欧米、および日本の博物館蔵品に類似する要素が注目され、欧米の学者がこれらの型式学的検討を行い、中原青銅器と比較し、その異なる性質を指摘した。Kane氏は、殷代における中国南方地域の青銅器と、中原青銅器を比較し、型式の差異を根拠として、中原青銅器文化とは異なる在来文化が存在することを提唱した（Kane 1974）。その後Bagley氏によって、こうした特徴をもつ青銅器の一群が「南方青銅器」と定義された（Bagley 1987）。青銅器発見の増加に伴い、青銅器の文化要素が検討され始めた。熊伝新氏は湖南省の殷周時代青銅器を整理し、文化要素を考慮し、中原型、融合型、地方型に分けた（熊 1986）。その後の学史の殆どでは、地方出土青銅器について、形態上、中原型、融合型、地方型という区分を採用している（何 1986、高 1989、彭 1999、向 2008）。

こうして中原地域の殷文化に併行する時期から、長江中流域で中原青銅器の型式と異なる青銅器が存在することが明らかになり、これらは地方型青銅器と呼ばれている。地方型青銅器の性格は、中原青銅器との関連性で論じられることが多く、その特質はあまり言及されていない。二里頭文化以来の中原地域では、青銅容器を製作するという独自性が認められてきた（佐野 2004、宮本 2005）ので、容器を主体とする地方型青銅器も、中原地域の容器を受容、在地的に変容したと考えられてきたのである。ただし、青銅器を受容した社会の発達度および生業基盤の差異によって、それぞれ新たな青銅器文化が生じたものという観点（宮本 2009）を参考にすると、青銅器を在地で受容、生産、消費した人間集団（Kane 1974、林 1981）に焦点を当てる必要がある。一方で、中原青銅器との類似性を根拠に、中原青銅器文化の中心地域から人の移動を伴って、青銅器が搬入されたと考える説がある（夏 1972、張 1979）。こうした、中原文化の拡散を要因とする一元的解釈は多くの論考でみられる。本論では、中原文化の広がりという文化伝播現象を認める一方、それを受容する地域文化の自律性とその背景を解明するものである。すなわち、殷周時代における地方型青銅器の類似性や独自性を、中原青銅器文化と比較してどのように評価できるのかに関心がある。

さて、長江中流域における青銅器群には、地域的なまとまりが幾つか認められる。それは、華中地域、湘江流域、贛江流域であり、このほか、長江中流域を越えた嶺南地域あるいは中国の東南地方にも、類似した青銅器が散見される。従来の研究史からみると、地方型青銅器は「華中型青銅器」、「湖南青銅器群」、「新干青銅器群」、そして長江流域を越え、東南中国に位置する嶺南地域、浙江省、福建省などに散布する青銅器（「南方青銅器」）に区分される。以下で、各地の青銅器群について説明しよう。

（1）華中型青銅器

華中地域（江漢平原を中心とする地域）で出土した青銅器。殷文化の影響を受けているが、長江流域を中心とする江南地方で出土している青銅尊、罍、甗、鼎、饒などに、地域色が見出され、在地集団を通じて製作されたと考えられている（Kane 1974）。その後さらに、青銅器の形態、文様の検討が進み、共通特徴がまとめられた（林 1981、Bagley 1987）。

華中地域における青銅器製作は、殷墟文化に属する技法、文様を基盤として、殷文化の集団が華中地域に植民し、在地集団とともに地方型青銅器を、文様体系も含めて、成立させたと考えられている（林 1981、1994）。青銅器製作に関しては、文様、形態、鑄造技法などが検討された（林 1981、難波 1998、張 2004、蘇・李 2017）。

具体的にいうと、林氏は青銅器の形態、羽渦文の共通性によって、一つ緊密な群を形成することを指摘した（林 1994）。さらに製作技法の共通性、および湘鄂・洞庭湖を中心とする華中地域における分布から、「華中型青銅器」が認識された（難波 1998）。その後、張昌平氏が華中型青銅器の大型青銅尊、壺を取り上げ、型式は変化するものの、製作技法が古い段階から存続していくことが指摘され、青銅器製作の人間集団を一集団と考えた（張 2004）。さらに、蘇栄誉氏・李建毛氏が大型青銅尊、壺の犧首の製作技法を考察し、当該地域で発達していく様相が確認された（蘇・李 2016、2017）。以上のように、先行研究では、殷後期頃、長江中流域では在地生産、および型式の共通性が認められた。しかしながら、生産開始の時期や状況の詳細については不明である。

（2）江西地区、新干青銅器群

1989 年、江西省樟樹市新干県で新干大洋洲遺跡が発見され（彭 1991）、1997 年に発掘報告書が刊行されている（江西省文物考古研究所 1997）。発見された青銅器は二里岡期の古い特徴を保ちつつ、この地方特有の装飾を併せ持つような様相を呈しており、このことが新干大洋洲出土の青銅器の性格に関して、研究者の間で意見が分かれる原因となっている。新干大洋洲遺跡の青銅器は、贛江流域の青銅器文化の一部と考えられることもある（彭 1992）が、新干大洋洲で在地生産が認められた方鼎（末房 1998）、扁足鼎（山本 2013）は江西地区であり見られない。一方で、新干大洋洲青銅器群および贛江流域にも見られるのは、大型青銅饒、青銅甬鐘、そして青銅工具、武器などの小型青銅器である。他にも、青銅尊、壺、甗などの流通が認められ（施 1997、張 2004）、大型青銅饒については湖南型、江浙型という地域性が認識された（殷・曹 1989）。贛江流域は長江中流域の東側に位置しており、長江中下流域の流通の中継地点として機能していた可能性もある。

（3）湖南青銅器群

湖南青銅器の発見は 1940 年代に遡り、海外各地の博物館に伝湖南省出土の青銅器が存在する。1950 年代から 1960 年代にかけて、偶然の取得品の他、湖南省寧郷黄材遺跡が発見された（高 1962）。1970 年代以降は、春秋戦国時代に相当する時期の墓で、様々な青銅器が発見されている。さらに発掘調査が進み、湖南省の石門皂市遺跡では、殷文化要素を持つ墓、土器の他、小型青銅工具類、武器類も発見された（何介鈞 1992）。高氏は湖南省で見られた青銅器の形態、文様、金属成分などを取り上げ、中原地域と比較した結果、青銅器技術を受け入れ、在地生産が展開したことを指摘した。すなわち、殷文化の影響の下、殷中期頃、青銅鑄造技術が湖南省に伝播、在地集団と融合し、青銅容器の生産が始まるとした（高 1981）。同年、林氏は、殷周文化以外の青銅器群を整理し、型式学分析を通じて、文様、形態などの地域色を持つ青銅器として、大型青銅饒が湖南地域で創出されたと考えた（林 1981）。その後、大型青銅饒、越式鼎などの出土が多くなり、器物の研究がさらに展開した（彭浩 1984、殷・曹 1989、高 1993、施 1997、彭適凡 1998、向 2005、2008 ほか）。朱氏は、殷後期頃、湖南省で青銅器文化が出現、発展したことを推測した（朱 1995）。

（4）中国の東南地方および嶺南地域（南方青銅器）

長江中流域外の周辺地域においても、出土状況、形態などの特徴が長江中流域と共通するものがある。殷周時代の嶺南地域（広西省、広東省）、中国の東南地方（福建省、浙江省）出土の青銅器は、湘贛青銅器文化圏（角道 2014）、湘江・嶺南系青銅器（西江 1987）、そして、いわゆる印文陶文化圏の範疇に収まる。したがって、これらの青銅器は南方の特徴を持つ、長江中流域の青銅器文化の一部ではないかと評価されている。

2、長江中流域の青銅器文化に対する認識の到達点

長江中流域の青銅器文化の展開に関しては傅氏の見解がある。それは、殷王朝が長江中流域に進出し、それを基盤に、盤龍城文化→新干青銅器文化→寧鄉青銅器文化と展開するというものである（傅 2004）。こうした相対年代の認識は妥当であるものの、それぞれは文化様相も異なっており、直接の連続的变化は考えにくい。例えば、盤龍城文化では青銅器の地域性を読み取ることができるが（張 2003、鈴木 2017）、文化全体としての内容は殷王朝の南方拠点といえる。一方で、新干青銅器文化、寧鄉青銅器文化では地域性が顕著であり、異なる地方型青銅器文化であるとする見解が殆どである（彭 1992、施 1997、村野 2005、向 2008、山本 2013 など）。以上のような議論は青銅器を中心とする議論であるが、長江中流域青銅器文化に関する先行研究では、地方型青銅器を、青銅器出土地近くの土器文化に結び付けることが多い（彭 1987、1992、2011、施 1997、向 2008）。一方で、青銅彝器の分布として、殷末～西周時代の湘贛青銅器文化圏とする見解（角道 2014）、或いは、青銅彝器の類似性、および扁茎式青銅劍の系譜に基づき、春秋戦国時代の湘江・嶺南系青銅器分布圏とする見解（西江 1987）がある。また、殷代に遡る時期では、湖北省、湖南省を中心とする地域の青銅器は、「華中型青銅器」（林 1981、難波 1998）、さらには華中型青銅器文化（宮本 2005）として捉えられている。つまり、各時期の青銅器の分布に基づいて、種々の文化圏を設定するのが、学史における一つの特徴といえる。

こうした場合、殷代～西周時代と、春秋戦国時代に区分される場合が多い。つまり、中原青銅器文化における年代枠に基づくわけである。例えば施勁松氏は、殷代～西周時代における湖南省出土青銅器（青銅尊、大型青銅饒、青銅甬鐘、青銅鼎）について、型式学検討から、地域色、すなわち地方型青銅器を看取した（施 1997、1998、2002、2003）。殷後期から、当該地域で大型青銅饒の在地的系譜が捉えられ（施 1997）、大型青銅酒器である尊も中原とは異なる特徴を持ちつつ、長江全流域に流通したとする（施 1998）。なお、施氏は湖南省の青銅器群の検討から、複雑社会が形成されていないとしているが（施 2018）、どのような社会段階かについては具体的には示していない。殷、西周時代に限ると、熊建華氏による青銅器研究が挙げられる（熊 2013）。氏は湖南省で出土した青銅器をすべて取り上げ、型式、製作技法、人間集団について、中原文化との相違を提示した（熊 2013）。これらの研究は、中原青銅器の年代枠を用いており、在地的な変化の動向を直接的に把握することが困難であることが指摘出来よう。

このような年代枠の問題を、ある程度解決したものとして、湘江流域を主眼とした向桃初氏の研究が挙げられる。向桃初氏は、中原地域の殷王朝から秦帝国統一期にかけての中国青銅器時代という大きな枠組みの下、湘江流域の青銅器文化の展開過程を示した（向 2008）。氏は、湖南省の各遺跡出土の土器の型式学分析を通じて、詳細な編年を行った後、大型青銅饒、越式鼎などの地方型青銅器を編年した（向 2005、2006、2008）。また、湘江流域青銅器文化の展開様相も示している（向 2008）。つまり、殷末周初期頃、殷人が南遷し、湘江流域に達し、西周前期から春秋後期にかけて青銅器文化が展開した。そして、春秋後期頃、楚文化の領域の拡張の下、青銅器文化は衰退するものの、青銅器の形態は伝統を維持し、秦帝国統一まで存続すると指摘した（向 2008）。地域性の形成および展開の要因について、湘江流域が閉鎖的な地理環境で外来要素が入りにくいこと、また、中原地域の他、周辺地域に存在する文化系統との交流の存在を考えている（向 2008）。向氏も先行研究の諸氏見解と同様（林 1981、高 1993、施 1997）、大型青銅饒は地方型青銅器としている。さらに青銅鼎も地方型青銅器とされ、後の越式鼎と関係がある、湘江流域青銅器文化の特徴であるとされる（向 2005）。こうした系譜変遷に基づき、湘江流域の青銅器文化

の段階が殷、西周、春秋時代の中原青銅器文化の展開とは異なり、地方固有な展開様相を呈するという結論を導き出された。しかし氏の論では、湘江流域の青銅器文化が、主に外的要因によって展開していることになる点、そして、青銅器そのものの分布域について湘江流域を一括している点が問題である。確かに、氏は土器によってより細かな地域区分をしているが、例えば、田中氏・松永氏による広域土器分布圏の「ハイレベル」、「ローレベル」の議論（田中・松永 1984）を考えた場合、少なくとも青銅器は土器とは異なったレベルにあり、青銅器についてもそのものより詳細な検討が必要になることがわかる。

次に地域社会内の変化を考察する研究として、村野氏、西江氏の研究が挙げられる（村野 2005、西江 1987）。上述のように、村野氏は、湘江流域の青銅鼎の動態と埋納青銅器や墓の検討をもとに、階層差やその社会再生産のあり方を検討した。結果として、青銅鼎による階層性が西周中期に向上する一方、西周後期以降、相対的に平等的傾向を示す社会になっていく。したがって、湘江流域の青銅器社会の実態は、特に階層化の点で、外部との交流に依存するとされた（村野 2005）。また、西江氏は湘江流域、嶺南地域の青銅器の類似性から、これらを湘江・嶺南系青銅器群とした。殷、西周併行において、当該地域が「窖藏青銅器の段階」であり、春秋併行に入ると、湘江・嶺南系青銅器の段階、戦国併行が楚墓系文化であると指摘した（西江 1987）。また、湘江・嶺南系青銅器の段階に流行した扁茎式銅剣の系譜を明らかにしたほか、当該地域の湘潭青山橋の中で出土された青銅鼎、青銅甬鐘なども「地方型」と位置づけた（西江 1987）。これらの研究では、外部、特に中原や東南地方との交流が、および湘江流域の社会変動、特に階層化において、重要であることが示されている。本研究ではこうした視点を取り入れ、さらに西周時代に限らず、大型青銅鏡、青銅甬鐘も含めて検討していきたい。

以上は、湘江流域を中心とする青銅器文化に関連するが、同じく長江中流域に位置する新干青銅器群や吳城遺跡のような、贛江流域を中心とする青銅器文化も存在する（上記 1、（2）参照）（江西省文物考古研究所 1997、江西省文物考古研究所・樟樹市博物館 2005）。新干大洋洲商墓の青銅器群を除き、贛江流域で出土した青銅器の扱われ方は、湘江流域と同じく埋納であり、両者を統一して湘贛青銅器文化圏とする見解がある（角道 2014）。一方で、新干青銅器が贛江流域の青銅器とは分布様相が異なり、青銅器の製作技術が独占された状況が指摘されている（山本 2013）。本論で新干青銅器群を対象資料として扱わないが、長江中流域青銅器文化編年において、重要な指標となる。そこで新干青銅器の諸研究について簡単に整理しておきたい。

新干大洋洲商代大墓の性格に関しては、主に祭祀坑説、墓葬説に分けられる。墓葬説の支持者は、墓で確認できる二層台、棺槨痕跡（江西省文物考古研究所 1997、彭 1992、2011）に基づき、祭祀坑である三星堆遺跡とは異なるとする。一方、祭祀坑説の支持者は、中原地域の墓葬と比較し、その性格の差異を強調し、墓葬ではなく祭祀坑としての性格が強いと考えた（彭 1994、胡 2010）。こうした中で、山本氏はすべての出土遺物を取り上げ、配置の検討を通じ、従来の一元的認識を改め、儀礼の場としての墓葬という認識を示した（山本 2013）。次に、新干大洋洲遺跡の年代問題については、彭明瀚氏がまとめている（彭 2010）。それによると、殷墟 1 期説（孫 1992、1993）、殷墟前中期説（李 1991、Bagley 1997）、殷墟 3～4 期説（鄒 1990、李 1998）、殷末周初期説（高 1994、1998、末房 1995、1999）、西周中期説（林 1994）、春秋前期説（馬 1997）が見られる。これらの説では青銅器の年代を検討し、伝世を考慮して、各器物の最も新しい時期を遺跡の年代とする。一方で、山本氏は、当該遺跡で在地製作の可能性が最も高い扁足鼎を取り上げ、その系譜関係によって、殷末周初期（殷後期～西周前期）に一気に多くの青銅礼器が作られたとした（山本 2013）。また、彭適凡氏は型式学分析を通じて、新干青銅器を中原型、融合型、地方型に分けた（彭

1999)。中原型青銅器は中原地域と全く同じ型式、融合型が中原型に地方的特徴を加えたものであり、地方型青銅器が中原地域で見られない型式である。ただし、中原型も搬入品は少なく、在地生産の可能性が高いという（彭 1999）。これは、上述した湘江流域の青銅器が中原型、混合型、地方型¹⁾に区分できるという見解（熊伝新 1986、熊建華 2013）に合致する。このように、新干青銅器も湘江流域と同じく、中原青銅器文化の影響の下、自らの社会のあり方に適応し、自律的な受容が行われた可能性が高い（彭 2011、山本 2013）。

なお、王権の初期の段階においてそれを持つ首長は「呪術師」性格が色濃く、厚葬墓が存在するが、国家発生に至るまでの権力の一段階であり、さらに贛江流域の青銅器が新干大洋洲に集中することや、再分配の現象が見られないことを根拠とするものと指摘され、「非階層的」な社会と強調している（山本 2013）。一方、上位者、下位者に区分される、階層社会が想定され、上位者による青銅器のコントロールが想定される見解も見られる（施 2018）。

第3節 長江中流域における地方型青銅器の型式分類と編年の研究史

本節は、殷周時代における長江中流域の青銅器文化の基礎である青銅礼器（青銅尊・罍、青銅饒、青銅甬鐘、青銅鼎）に対する型式学および編年研究を整理し、その到達点を示すものである。以下、器種ごとに見る。

1、青銅尊・罍の型式分類と編年

（1）青銅尊・罍の認識

尊・罍という名称は、おもに中国の宋代の古典文献『考古図』に記載された青銅器の名称²⁾に由来する。異なる形態の青銅器を名付け、分類することが、この時代から既に行われていた。しかしながら、尊・罍に似た器物には自名がなく、機能の共通性が想定でき、盛酒器に分類されている³⁾。さらに全体形態から、円尊（有肩尊）、方尊、口円身方尊、觚形尊、觶形尊、鳥獸尊などと区別して呼ばれている（林 1984、朱 1995、岳 2006 ほか）。本論で扱う青銅尊・罍の場合、有肩尊、大口尊、折肩罍、截頭尊など名付けられることがある（林 1984、朱 1995、施 1997）。長江流域で出土したものでは、円尊（有肩尊）、折肩罍（截頭尊）以外は僅かである。

長江中流域の青銅尊・罍の源流は、二里岡文化期の盤龍城遺跡、鄭州商城、あるいは殷後期の殷墟遺跡から出土した殷前中期の青銅尊・罍に求めることができる。鄭州商城白家莊2号墓で出土した青銅罍、盤龍城遺跡採集尊は、饕餮文顔面の凸表現が顕著であり、胴体以下の部分は、平凸表現である。このような青銅尊・罍が長江中流域に伝わっていった。難波氏は、Bagley 氏による有肩尊の変遷を基礎とし（Bagley 1987）、青銅尊・罍の胴部文様を中心に型式学的検討を加え、華中型浮き彫り饕餮文への発達過程を示した（難波 1998）。中原では、太線饕餮文、輪郭饕餮文という平面的に主文と地文が完全に分離した様式の饕餮文が、殷墟2期に現れ（難波 1995）、同時期以降、華中型太線饕餮文、華中型輪郭饕餮文などの文様形態が展開していく（難波 1998）。こうした華中型の文様を施文する大型青銅酒器に代表される、長江中流域の青銅器群を華中型青銅器と認識した（難波 1998）。一方、殷中期～殷墟2期の有肩尊、截頭尊という中原型青銅器には、囙文、井文

¹⁾ 製作地によって、中原生産型、地方生産型とする見解もある（高 1992）。

²⁾ 実際の図面からみると、壺あるいは簋である（朱 1995）。

³⁾ 元々酒器の総称であるが、容庚氏が『考古図』を取り上げ、觚觶という酒器を排除し、尊という名称が決められた（容 1941）。

の交互に配された文様帯、羽渦文、水鳥形の装飾などが地域の特徴を看取できる（林 1981、1994）。このような一群は、中原青銅器の伝統を強く保持しているが、青銅器の利用に中原青銅器との大きな相違があることが指摘されている（林 1981）。

（2）青銅尊・壺の型式分類

中原型青銅尊・壺の型式分類について、先行研究では分類基準を設定する方法は2つがある。一つは、型式学に基づき、青銅器を分類するもの、もう一つは、金石学研究に基づく名称を検討し、形態区分する方法である。青銅尊・壺の場合、梅原氏が形態による分類を提唱したが（梅原 1940）、分類基準の客観性が不足するとの批判がある（林 1984）。その後、李済氏は生物学における目、属、種という概念を取り上げ、客観的分類を試み、圈足目の尊形器、高体方肩甗形器とした（李 1948）。しかし、氏の分類では、同様の目の中で機能が異なり、混乱を招いている（朱 1995）。こうした過程を経て、中原型青銅器は主に金石学研究に基づいて自名（その器物自体が有する金文による名称）、用途などの検討を行い、形態を区分する場合が殆どである。例えば林氏は、青銅尊の形態によって、截頭尊、有肩尊、觚形尊などに分け（林 1984）、朱氏は有肩尊、無肩尊などに細分する（朱 1995）。一方、長江流域で出土した青銅尊・壺の場合、青銅器の自名がなく、用途の検証が不可能である。そこで、中原型青銅器の名称から類推することとなるが、加えて形態的検討を行わねばならない。

まず、先行研究（中原地域）における青銅尊・壺の型式変化を整理しよう。林巳奈夫氏は、中原地域殷代の青銅尊・壺の側視形に焦点を当て、型式変化の連続性を詳細に示した。青銅尊では、肩部が広く、腹部が丸みを帯びて収縮、短圈足のものから、肩部が狭く、折腹、高圈足へ変化する。口径は段々と外へ伸び、肩径より長くなり、湾曲程度が水平方向に偏るようになる。青銅壺も尊の形態変遷と同様であるが、口径は一貫して肩径を超えない（林 1984）。一方で朱鳳瀚氏は、青銅尊・壺について足部高、胴部の屈曲の度合い、装飾、文様の複雑化を考慮し、4式に分類する。氏の青銅壺は林氏が設定した截頭尊に一致する（朱鳳瀚 1995、2009）。岳洪彬氏の研究では、青銅尊・壺の全体の形態、肩部形態、足部形態の共通性が認識され、口径と肩径の差異、器高によって、型式変化の方向を提示した。肩径が口径より大きいもの（Aa型）、小さいもの（Ab型）、そしてAb型に類似するが、器高が異なるものをAc型とした。さらに、林氏の指摘する形態変化に基づき、文様の複雑化を考えたうえで、Ab型とAc型の時期差を示した（岳 2006）。

次に長江流域における青銅尊・壺を整理する。林巳奈夫氏は地域色を確認したうえで（林 1981、1994）、地方出土の青銅尊・壺の型式変化と中原地域のそれを比較し、中原青銅尊、壺の併行関係を示した（林 1981）。さらに、長江流域の青銅器が文様で自らの特徴を持つことから、製作者が在地集団、もしくは中原地域から来た集団である可能性を提示した（林 1981）。さらに施勁松氏は、長江全流域で出土された青銅尊を研究対象とした。青銅尊の文様モチーフの差異が認識され、それぞれの型式的差異が示された（施 1997）。しかし、氏は系譜関係について言及しておらず、併行関係については議論の余地が存在する。また、分布の提示によって、長江流域では、東西方向の交流が行われていたことが推測された（施 1997）。張昌平氏は、施氏の分類を細分し、青銅尊をA～E型の5型式に、青銅壺をA～C型の3型式に分けた（張 2004）。両氏の研究では、南方地域の全ての青銅尊・壺の起源は、先行する中原型青銅尊・壺に求められるとされる（施 1997、張 2004）。難波氏はBagley氏の有肩尊の変遷（Bagley 1987）に基づいて、文様、牲首、扉稜、器形から詳細的に型式学分析を行った（難波 1998）。胴部文様では、中原青銅器の浮き彫り饕餮文から華中型浮き彫り饕餮文が生まれたとする。浮き彫り饕餮文を持つ青銅尊の型式組列に従い、中原地域の青銅尊との併行関係を求め、該当地域の各類青銅器との併行関係を検討した。難波

氏の研究は、地方型青銅尊・壺をめぐる型式変化の方向を示した点で非常に重要である。

(3) 青銅尊・壺の編年

先行研究からみると、長江流域の青銅尊・壺はおおよそ殷墟時期に収まる。ここでは、中原型青銅器の編年研究史の詳細は説明しないが、殷墟時期の中原青銅器の年代観は四時期区分(鄒 1965)が基本で、青銅器の変遷によって、各前半、後半に区分される(林 1984、難波 1995、岳 2006)。

長江流域出土の青銅尊・壺は二里岡期から殷墟末期にかけて存続する。先学で示された中原青銅器文化との対応関係はおおよそ頷ける。ただし、難波氏の編年案では、文様の系譜を考慮し、長江流域出土の青銅尊・壺の上限年代を殷墟 1 期末頃とした(難波 1998)が、形態、鑄造技法を中心とした、張氏、施氏の編年では二里岡期の技法が用いられることが指摘されている(施 1997、張 2004)。また、林氏はこれらの一群が殷中期～殷後期、すなわち、二里岡上層期～殷墟 3、4 期に相当する時期であるとする(林 1981)。したがって、青銅尊・壺の上限年代に関しては議論の余地があると言える。これは、長江中流域の青銅器の在地生産だけではなく、地方型青銅器文化の開始に関する、極めて重要な問題である。

2、青銅鐃の型式分類と編年

(1) 青銅鐃の型式分類

青銅鐃は殷周時代の長江中流域青銅器文化において年代を示す最も重要な指標として重視されていた。まず、青銅鐃に関する記述は、『周礼』、『説文解字』、『古今楽録』⁴などの古典文献にもある。例えば『周礼』鄭注では、青銅鐃は、形態が青銅鈴に類似するが、鈴舌がなく、棒状の把手があり、鼓の音を停止させる楽器とされている⁵(羅 1930)。容庚氏は『説文解字』金部⁶の記載通り、サイズ差によって青銅鐃あるいは青銅鉦に区分した。さらに、羅氏の分類が春秋戦国時代の句鑼も含んでいると批判した(容 1941)。林巳奈夫氏は『周礼』考工記⁷の青銅甬鐘の各部位の名称を取り上げ、青銅鐃に当てはまる部位を名付け、青銅鉦と呼んだ。鐘と相似た断面杏仁形の器体に、短い円筒状または長い棒状の柄をつけた楽器で、短い円筒形の柄に木柄を挿したものと定義した(林 1984)。一方、殷墟で発見された甲骨卜辞⁸にも青銅鐃に関する記載が見られる。李純一氏、裘錫圭氏は甲骨文字の「庸」の研究を通じて、青銅鐃が祭祀や雨乞いなどで使用されたものとした(裘 1980、李 1996)。さらに、発見が増えるとともに、青銅鐃は中原地域の墓から出土するほか、サイズが大きなものも長江中下流域で発見されている。これらには西周時代の青銅甬鐘の枚部、篆部などの形態的類似性を見出せる場合があり、早期甬鐘と呼ばれることもあった(殷・曹 1989)。彭適凡氏は、贛江流域で出土した青銅鐃、甬鐘を検討し、青銅鐃は、旋部に吊り下げ機能を持つ「幹」がないものであると考えた(彭 1996)。鐃の名称について、中国の研究者は主に青銅鐃と呼称するが多いが、林巳奈夫氏は鐃を鉦と呼んでいる。従って、鐃、鉦、庸、早期甬鐘といった名称が学史上用いられてきたことになるが、本論では便宜上、林氏の定義を用いつつも、名称は青銅鐃と呼ぶことにする。青銅鐃も青

⁴ 「凡金為樂者有六、皆鐘之類也。曰鐘、曰鐃、曰鐃、曰鐃、曰鐃、曰鐃」(『古今楽録』)

⁵ 「以金鐃止鼓、以金鐃通鼓。」(『周礼』「地官鼓人」)、「鐃、如鈴、無舌、有秉、執而鳴之、以止擊鼓。」(『周礼』「地官鼓人」鄭玄注)

⁶ 「鐃、小鉦也。軍法、卒長執鐃。从金堯聲。」(『説文解字』金部)

⁷ 「鳧氏為鐘。兩欒謂之鈦、鈦間謂之于、于上謂之鼓、鼓上謂之鉦、鉦上謂之舞、舞上謂之甬、甬上謂之衡。鐘懸謂之旋、旋虫謂之幹。鐘帶謂之篆、篆間謂之枚、枚謂之景。于上之之遂。」(『周礼』考工記)

⁸ 「奠其奏庸夷、旧庸大京武丁」(『小屯南地甲骨』4343)、「王乍(作)用(庸)奏」、「雨庸无(舞)」(『甲骨文合集』3256、12839)、「口戌卜貞、庸、不雨。」(『殷虛書契後編』1・4・2)、「其置于于丁。」(『殷契粹編』474)

銅尊・壘と同じく、中原地域、長江流域に区分する研究が殆どである。

殷璋璋氏・曹淑琴氏の研究では、殷周時代の青銅饒を取り上げ、分布差を読み取り、中原型、江浙型、湖南型に分け、形態差を検討した。中原型は記号銘文が記されており、甬部の旋がなく、甬長と鉦体が短いもの、湖南型は太線饕餮文を施文するもの、江浙型は獸目が突出し、雲雷文を施文するものである（殷・曹 1989）。他に、青銅饒のサイズまた平面形⁹の差異を認識し、小型、大型に区分する見解がある（林 1984、朱 1995、李 1996）。銑長÷銑間距の比率を計算し、数値 1 以上（細長）の鉦部と、1 未満（太短）の鉦部を区別、さらに器高 25cm 以下が小型青銅饒、25 cm あるいは 30 cm 以上のものを大型青銅饒に含めるのである（朱 1995、李 1996）。現在でも小型、大型の区分は一般的である。

小型青銅饒の細分では、甬部の平面形と、鉦部の口縁形態が注目されてきた。李氏の見解では、甬部の平面形に関しても、台形、長方形、逆台形に区分できるという（李 1996）。一方、朱鳳瀚氏は、口縁部の屈曲度により細分する。Ⅰ型は口縁部が凹む、Ⅱ型は口縁部が平らなものである（朱 1995）。しかしながら、こうした区分では各属性の変化方向や系譜的関連が明らかにされておらず、系譜において重要である文様（難波 1998、鈴木 2017）の差異も考慮されていない。また、李氏、朱氏の対象資料は博物館蔵品、収集品、あるいは伝世品が多く、検証が困難である資料である。『中国音楽文物大系』によると、青銅樂器には宋代などの倣古作品も見られるので、対象資料を批判的に扱うことも重要であろう。

大型青銅饒の細分にもいくつかの見解がある。上述の湖南型、江浙型に区分する見解（殷・曹 1989）のほか、枚部の有無、文様のモチーフ、篆部の有無などが基準とされるが、鉦部文様で系統差を認識し、型式分類を行うことが多い。つまり、獸面文、雲雷文、乳釘文、枚付き、齒文などの特殊文様といった種類別で系統差が示され（高 1993、施 1997、彭 1998、向 2008、井 2010）、それぞれのモチーフの中で、鉦部文様、鉦部平面形、枚部形態などの属性変異、ひいては型式変化を示すのである。これらのうち、施氏、向氏、彭氏の見解は、高氏の分類に加味したものであるが、単位同士に重複が存在し、鉦部文様表現の系統差については異論の余地がある。一方で、李純一氏の場合、青銅樂器としての機能を持つ枚部に注目し、形態の差異によって、無枚青銅饒（Ⅰ型）、乳釘青銅饒（Ⅱ型）、有枚青銅饒（Ⅲ型）に区分する（李 1996）。また、甬鐘に特有の篆部に注目し、無篆青銅饒（A 型）、有篆青銅饒（B 型）とする見解もある（熊 2013）。殷・曹氏が論じた大型青銅饒の中で地域色、これらが小型青銅饒から生まれたこと¹⁰、さらに樂器機能を考慮しつつ、各型式の変遷とその根拠について以下で再考する必要がある。

（2）青銅饒の変化

小型青銅饒の型式学研究では、凸線文→獸面文、無旋台形甬部→有旋かつ長い甬部という変遷が指摘されている（殷・曹 1989、李 1996）。しなしながら、こうした変化の方向は検証されたものではない。中原青銅器編年に沿った形で纏められたものであり、再検討の余地があると言える。

大型青銅饒の場合、系譜関係をめぐって大きく 2 つの見解がある。一つは、獸面文が退化し、雲雷文が出現、両目が突出する変化である（高 1993）。もう一つは高氏の変化方向とは逆に、雲雷文青銅饒から旋部が生まれ、そこから獸面文青銅饒へ変化したというものである（何 1996）。他では、旋部の出現、獸面文の太線が隆起、地文の出現という方向性が指摘されているが（高 1993、向 2008）、獸面文のルジメント化、および枚部の発達とい

⁹ 平面形は銑長÷銑間距の数値によって決まる。銑長とは銑の長さであり、銑間距とは両銑間の長さである

¹⁰ 大型青銅饒は中原地域の小型青銅饒と形態上類似する。大型青銅饒の年代については異論が多いが、それが小型青銅饒から生まれたことは一般的認識と言ってよい（林 1981、高 1989、向 2008）。

う、逆方向の結論が導かれる場合もある（施 1997、彭 1998）。一方で、枚部付き、あるいは乳釘付きの大型青銅鐃が、甬鐘に近い型式へ変化していくという点は、共通見解と言ってよい（殷・曹 1989、李 1996、施 1997、彭 1998、向 2008、井 2010）。つまり、鉦体が細長化、枚部が顕著化、旋部の出現など変化方向である。さらに、楽器として機能を考慮し、音楽機能の強調という方向が提示されたこともある（華・賈 1983、李 1996）。こうした変遷は、それぞれ検証する必要がある他、系譜別によって展開様相が異なることも予想され、検討の余地があるといえよう。

（3）青銅鐃の編年

小型青銅鐃は、殷墟文化期の編年体系（鄒 1965、張 1979、楊錫璋・楊宝成 1980、林 1984、朱 1995、岳 2006）に位置づけられてきた。すなわち、共伴する殷墟期の中原青銅器によって、その年代を構築するのである。

一方で、大型青銅鐃は偶然の発見が多く、共伴による編年は不可能である。例えば、上記のように獣面文→雲文へという鉦部文様表現の扁平化を指摘する研究においては（高 1993、向 2008）、獣面文はおおよそ殷後期とされる（高氏は殷墟 2 期（高 1993）、向氏は殷墟 3 期以降（向 2008））。また、雲文青銅鐃が新干大洋洲商墓で出土しており、この墓の上限年代は二里岡期に遡る。そこで、雲文青銅鐃の上限年代も二里岡期とする見解がある（羅泰 1991）。高氏、何氏は、報告書に基づいて新干大洋洲商墓を殷墟 2 期併行と考えるので、大型青銅鐃の上限年代も殷墟 2 期となる（高 1993、何 1996）。他では、大型青銅鐃およびその文様要素が春秋時代に併行する地方型青銅器に類似するため、春秋時代に下げる意見もある（陳 1997、馬 1997）。とはいえ、形態上では青銅鐃は青銅甬鐘に繋がるということが指摘されており（林 1981、王 2015、宮本 2020）、下限年代がおおよそ西周に併行することは予想される。

3、青銅甬鐘の型式分類と編年

（1）青銅鐃と甬鐘

青銅甬鐘は、主に西周時代に流行した打楽器で、セット関係を成す場合は編鐘と呼ばれる¹¹（朱 1995）。中原地域における青銅甬鐘の用途については既に検討がある（林 1984、朱 1995）。一方で、長江流域で出土した青銅甬鐘は、西周文化との関連が高いと考えられるが、それらを取り上げた論攷は少ない。また青銅甬鐘は、その起源について議論される場合が多く、主に中原説、南方説、融合説に分けられる。以下で詳しく説明したい。

1980 年代以前には、殷文化の小型青銅鐃から甬鐘が生まれるという説が提唱されている¹²（陳 2005、熊 2013）。方建軍氏は音楽機能を考えたうえで、西周時期の甬鐘は 3 セットで扱われ、殷後期の小型青銅鐃のセット関係に類似すること、また、演奏方法からみると、吊り下げる機能を持つ幹部が小型青銅鐃から出現し、長江流域の大型青銅鐃に見られないことを依拠として、中原地域を起源地とした（方 1989、1992）。一方で青銅甬鐘は、形態では小型青銅鐃の差異が大きい一方で、大型青銅鐃とは形態的に共通する（枚、旋、篆）ことから、青銅甬鐘が大型青銅鐃から生み出されたと考える見解がある（林 1981、高 1993、施 1997、彭 1998、向 2008、王 2015）。この見解は、西周前期の中原地域では青銅甬鐘の在来要素が見られないことによっても補強される（林 1981、施 1997、彭 1998、高 2009）。さらに、王友華氏は型式学分析に加えて、編列構造を詳細に検討した（王 2015）。王氏の見解では、中原型甬鐘の一部が長江流域から搬入された可能性が示唆される。融合

¹¹ 「掌教擊磬、擊編鐘。教縵樂、燕樂之鐘磬。凡祭祀、奏縵樂。」（『周礼』春官宗伯・磬師）

¹² 中原型青銅甬鐘を中核的テーマとはしないものの、王国維、郭沫若、容庚、唐蘭、郭宝鈞などの諸氏の論考では中原説が唱えられた（陳 2005、熊 2013）。

説は、大型青銅饒が西周中期に中原で受け入れられると同時に、殷文化の小型青銅饒からの要素も合わせて、青銅甬鐘が生まれたと考えるものである（宮本 2020）。

（2）青銅甬鐘の型式分類

先学では、中原地域の甬鐘を対象資料とした型式分類が殆どである。林氏は、青銅甬鐘諸属性の変化から編年を行った（林 1984）。朱文璋、呂琪昌両氏は、先秦時期（西周～戦国時代まで）の青銅甬鐘を取り上げ、全体の形態が徐々に細長くなり、鼓部の面積が拡大し、枚が長くなると指摘した（朱・呂 1994）。李純一氏は先秦時期の青銅甬鐘を、その分布域から、周式（Ⅰ型）、楚式（Ⅱ型）、越式（Ⅲ型）、巴式（Ⅳ型）に区分した（李 1996）。長澤氏は西周時代における中原地域の青銅甬鐘を取り上げ、篆部（区画線）形態により、乳釘文（甲）、円圈文（乙）、凸線文（丙）、沈線文（丁）に大別し、鼓部における主文様の変遷過程を示した（長澤 2017）。宮本氏は、長澤氏の分類を基礎に、鼓部文様の意匠差によって、羽文、L字形虺龍文、顧首鳥文に大別した。さらに、鑄型の変化を想定し、区画線が凸線から沈線へ、文様の複雑化を示した（宮本 2020）。

一方で地方型甬鐘は、大型青銅饒とともに型式学的検討が行われる場合が多い（林 1981、施 1997、彭 1998）。向桃初氏は湖南省出土の甬鐘について、区画線の形態から分類し、円錐枚→円柱枚→長円柱枚、および短甬部→長甬部という変化を考えた（向 2008）。熊建華氏も向氏と同様の資料によって、円錐枚→円柱枚→長円柱枚という同様の結論を導いている（熊 2013）。彭適凡氏は、江西省出土の甬鐘について、甬部形態が中空の円筒状→実心の断面台形という変遷に基づいて、3 区分を行った（彭 1998）。施勁松氏は対象地域を広げつつも、彭氏と同じく 3 分する（施 1997）。なお、地方型甬鐘のこうした変化については、検証されているわけではないことを付言する必要がある。

（3）青銅甬鐘の編年

先行研究では、中原流域の青銅甬鐘は、おおよそ春秋前期までに収められるとされている。これは、西周時代の中原青銅器編年から導かれた年代観である。従って、時期区分も中原編年（林 1984、王世民・陳公柔・張長寿 1999、角道 2014）に基づいたものとなっており、前、中、後期という三時期区分で、それぞれが前半、後半に分けられている。宮本氏の論考は、こうした編年の到達点を示すものである（宮本 2020）。

長江流域の青銅甬鐘に関しては、中原型との比較、およびそれに共伴する中原青銅器を根拠に年代を与えようとするのであるが（施 1997、彭 1998、向 2008、熊 2013）、西周時代の窖藏遺構の一括性には問題があることが指摘されている（宮本 2020）。例えば、窖藏遺構では西周前期～西周後期までの青銅器が共伴している場合がある。従って、やはり型式学的検討を検証可能な形で行うことが求められている。

4、青銅鼎の型式分類と編年

（1）越式鼎、いわゆる「越式鼎」、在地系鼎の諸定義

殷周時代における儀礼、祭祀活動において、青銅鼎の重要性は言うまでもない。青銅鼎の起源は二里头文化に遡る。長江中流域については、いわゆる「越式鼎」を中心とした型式分類が殆どである。まず「越式鼎」の定義を見てみたい。1980 年頃、俞氏は戦国中期の楚墓に、楚式鼎とは異なる鼎があることに注目し、越式鼎の概念を提唱した（俞 1980）。楚国の人々が製作したのではなく、幾何印文陶文化において共通する「百越」という民族集団（中村 1996）¹³の所産とされたのである。越式鼎の形態は、主に腹部が深く、蓋が扁

¹³ 「百越」という民族集団は歴史学的研究によって、「呉越」、「南越」、「西甌」、「骆越」に分けられ（蒙 1983）、長江下流域を含む中国東南地方、嶺南地域に分布するとされる。長江中流域には、「揚越」、「夷越」、「夔越」という集団が存在し、楚人とは異なるとされる（蒙 1983）。

平、足部が細く、外反する特徴が見られる（無文外反足鼎、いわゆる「越式鼎」）（俞 1980）。その後、発掘調査が進むとともに、越式鼎に近い形態で、春秋中期頃に遡るもの（「越式鼎」古段階）が知られた（横倉ほか 1990）。さらに西周時期に遡る、在地的特徴を持つ鼎は、在地系鼎と呼ばれている（村野 2005）。ところが、以上の在地系鼎、「越式鼎」古段階、いわゆる「越式鼎」を全て同一系譜とみなし、越式鼎として一括する見解（向 2005、2008）もある。

（2）青銅鼎の型式分類

彭浩氏は、西周中期～戦国併行の長江中下流域、および嶺南地域における墓で出土する、独特の鼎（倣銅土製鼎を含む）を越式鼎として、型式分類を試み、口縁、胴部、足部形態によって、4 区分がなされた（彭 1984）。彭浩氏は、小型化、胴部最大径位置の下移、底部平坦化、足部が太短くなる他、耳部の位置などによって型式変化を示した。ただし、系譜関係までは言及していない。さらに、これらの研究を再検討し、西周併行の長江中下流域における青銅鼎を越式鼎の古段階、春秋前期～漢代にかけての無文、足部外反の青銅鼎を典型的越式鼎とする見解が出された（横倉ほか 1990）。ここでは、戦国期以前の鼎について細分も行われ、直腹、方耳のもの（A 類）、盤状口縁、くびれた頸部のもの（B 類）、附耳、扁平状の足部のもの（C 類）、その他の地方型鼎が区別されている（横倉ほか 1990）。横倉氏らは典型的越式鼎について、A 類は足部の平面形が直線化、耳部が外反する変化（1 式→2 式）を指摘する一方、B 類、C 類では春秋後期～戦国中期にかけて、あまり型式変化しないとする。

その後、典型的な越式鼎が春秋中期以前に遡る可能性があることが、湖南省桃江腰子畚春秋墓地（益陽市文物管理处 2003）で明らかとなった。そこで、向氏は長江中流域の越式鼎について、古段階に位置する在地系鼎（村野 2005）を含め、越式鼎の定義を拡大した（向 2005、2008）。つまり、西周～漢代の長江中下流域における地域色を持つ鼎を越式鼎とした。口縁形態によって侈口（A 類）、小平折口（B 類）、大平折口（C 類）、収斂口（D 類）、大盤状口（Ea 類）、小盤状口（Eb 類）の 6 類に区分し、さらに足部形態の差異によって細分した（向 2005）。ただし、細別分類が計 16 種類に上ることは、やや細かすぎる印象を与える。村野氏は、殷末～漢代併行の長江中流域の青銅鼎について、口縁、耳、足部の相関を検討し、在地系系統を幾つか抽出した（村野 2005）。いわゆる「越式鼎」の古段階に限ると、在地系 A では、口縁外反化と浅腹化を軸とし、耳部、足部の文様の有無、胴部文様のモチーフの改変との相関から、中原型を祖形とするⅠ式→Ⅳ式への在地変化が指摘された。一方、在地系 B では、足部断面形が半円形→三日月形→半弧形と変化し、胴部形態、耳部文様の有無、胴部文様が在地系 A と相関する。これによって、在地系 B のⅠ式→Ⅲ式への変化が指摘され、在地土器を祖形とする変遷方向が検証された（村野 2005）。村野氏の分類は、属性の相関によって、分類単位が検証されている点で画期的である。

（2）青銅鼎の編年

彭氏は各越式鼎を、型式変化によって、西周中期、春秋中期、戦国後期、前漢時代などの時期に位置づけた（彭 1984）。横倉氏らも、越式鼎を一括遺物によって年代づけ、典型的「越式鼎」が春秋後期から漢代まで存続し、古段階の「越式鼎」が春秋後期に収まると考えた（横倉ほか 1990）。つまり、彭氏、横倉氏らの見解によれば、西周～漢代併行という長期間、長江流域に越式鼎すなわち地方型青銅鼎が展開することとなる。

村野氏は、上記の分類に基づいて、共伴遺物を検討したうえで、おおよその年代を明らかにしている。一方で、分布や墓地との関連を説明するにあたっては、殷末周初期～西周中期併行、西周後期～春秋中期頃併行の 2 期区分を行っている。向氏も自身の分類案に新資料を追加し、村野氏同様、西周中期～春秋中期と、春秋中期～戦国時代に大区分し、そ

れを細分した（向 2005、2008）。村野氏、向氏によって、当該地域の青銅鼎の年代はほぼ明らかにされたといってよい。しかしながら、細かい点については一致しないこともある。例えば、向氏の Bb2 類Ⅱ式、村野氏の在地系 B 第Ⅰ型式古相は同様な器物であるものの、向氏は春秋後期併行（向 2008）とし、村野氏は土器を祖形（葉 1988、張 2002）と考えて、西周中期までに遡らせた（村野 2005）。ただし、村野氏が引用する葉氏の見解は、在来土器から青銅鼎への変化を示す点で、難点があるように思われる。あるいは、在地的灰釉陶器が銅器化していない事実（岡村 1986）も考慮する必要がある。

第4節 問題の所在

1、青銅器文化全般に関する問題

以上、長江中流域における青銅器研究の中心は編年的研究にあるものの、社会・制度に対する研究もある程度行われてきた。諸研究の問題点として、まず挙げられるのは、中原との関りについてである。従来では、中原青銅器の周辺地域への拡散、中原青銅器に類似する器物の在地生産の開始というような、中原青銅器文化の動態に連動する部分が主に注目されてきた。従って、長江中流域の社会様相の変化も、単純に中原青銅器文化の影響によるという説明になる場合が多い。

これは青銅器時代の中原中心論、つまり中原からの文化伝播を極めて重視する立場に由来するものと考えられる。確かに、殷周時代の青銅礼器は、世界的に見ても独特の青銅器文化と言え、その周辺地域における同様の青銅器は、中原青銅器文化の影響に関わると考えられる。また、特定の地域の刺激を被ることは、その周辺に位置する社会の一つの特徴とも考えられよう（樋口 1963、Chang1977）。一方で、忘れられがちであるのが、当該地域自体における青銅器文化の展開である。青銅器は、それを受容した社会の発達度および生業基盤の差異によって、異なる社会文化を生じさせる可能性がある（宮本 2009）。したがって、各地の青銅器の型式、様式の変化は、その地域特有の社会展開を示していることが考えられる。本論で把握したいのは、中原に影響下の長江中流域における、こうした独自の展開である。青銅器製作には、金属資源、製作技術の獲得に関わるネットワーク、および洗練、鑄造、施文などの社会分業、そしてある種の専門化も必要となる。また、青銅器の使用についても、情報の共有や分配などのネットワークが想定される。こうしたものは、各地における青銅器そのものの分析によってしか明らかにしえない。しかしながら、長江中流域における青銅器は、多くは土器文化の中で把握されてきたのであって、青銅器自体の分析不足は否めない。このような点と、後に述べるような型式分類上の問題をクリアしたものとして、村野氏の論考が挙げられる（村野 2005）。氏の論考では、地方型青銅鼎およびその出土状況の分析から、地方型青銅器の社会的位置が考察され、長江中流域の社会像が推測された。一方で、青銅鼎以外、特に長江中流域の特色ともいえる青銅楽器を含めた青銅器文化の全体像の検討が課題となっている。また、殷代併行から戦国時代に到る、やや広い時期を対象とすることで、当該地域のより通時的な社会変化が明らかになることも見込まれる。つまり本論では、彝器という中原と共通した青銅器文化を持ちながらも、中原とは区別される長江中流域の諸集団が、どのような経路をたどって楚国、さらには秦という中原を含んだ王朝領域に込みこまれたのかを、主な議論の対象とするものである。

2、分類編年上の問題

上に示したように、本論で対象とするいずれの器種に関しても、既にいくつかの分類案が示されており、中原型青銅器との対比から、おおよその年代が与えられている。しかしながら、特に系統差については異論が存在し、それが各器種の起源というような、極めて

重要な問題と関連しているのである。系統差に異論が存在する大きな理由として、各器物では型式変化が提示されるのであるが、そうした変化が、真に妥当なものであるかどうかを検証したものが少ないことが挙げられる。この点で画期的であるのが、村野氏の研究(2005)であり、こうした方法をより資料を広げて行う必要がある。

もう一つの問題は、各器種を横断した青銅器文化全体の分類、編年が、上述の型式学的問題を踏まえたものとして、行われていないことである。例えば上述のように、村野氏は詳細な編年後、分布の検討のため、西周後期を画期とする2段階区分を提起している。資料数の都合上やむを得ない部分もあり、本論の時期区分も、こうした時期幅を大きく塗り替えるものではない。また、西周後期というのは、青銅器そして社会上大きな変化が見込まれている(角道 2014)。しかしながら、本論の目的とする、長江中流域の在地集団の展開を明らかにする視点としては、やや不足があるように思われる。それは、こうした中原を中心とした時期区分を行うと、当該地域そのものの変動による画期を見落としてしまう可能性があるからである。そして、こうした画期を見出すには、器種を横断して検討し、各系統・型式上の変化を、青銅器文化全体の中で把握することが望ましいのである。

第5節 本論における目的、資料、方法

1、本論の目的

本論の目的は、長江中流域の青銅器を主に型式学的に分析し、その出土状況を考察することによって、長江中流域の青銅器文化の一般性と特殊性、およびその背景を明らかにすることである。

特に青銅器では、形態や文様の技法を重視し、その系譜関係を明らかにする。このことによって、単に青銅器の年代を明らかにするだけでなく、分布を合わせ、各種青銅器の起源と拡散状況を把握したい。当該地域の青銅器文化の変遷では、学史上、外部文化要素の受容、他の地域文化(主に中原青銅器文化)との交流がつとに指摘されてきた。しかしながら、本論の主題となるのは、外部要素を受容する在来集団の動向である。これを把握するには、各種青銅器の技法を中心とする系譜関係が、客観的に明らかにされねばならない。青銅器技術は、ユーラシア草原地帯から中国北方を経て中原地域に至り、独特な青銅器文化を出現させたとされているが(宮本 2020)、こうしたモデル化を、長江中流域において、その特殊性を考慮しつつ行おうというのが、本論である。

また、長江中流域の青銅器文化の一般性を示すにあたって、その社会様相および変化の解明を行いたい。考古学で比較よく参照される社会複雑化のあり方としては、バンド、部族、首長制、国家(Service 1962)ないし平等、ランク、階層化、国家(Fried 1967)のような、新進化主義の枠組みが挙げられる。中原地域への援用例としては、宮本氏のものがある(宮本 2005、2020)。また、本論で議論する、当該地域や中原の青銅器は、社会階層化との関りがつとに指摘されてきた。本論では宮本氏の議論を参照しつつも、青銅器のコントロールという面に焦点を当て、一部の社会復元を行いたい。

2、対象資料

本論が扱う対象資料は、主に長江中流域出土の地方型青銅尊・壺、大型青銅饒、地方型青銅甬鐘、地方型青銅鼎であるが、長江下流域、嶺南地域の資料も部分的には含まれる。これらの青銅器には、中原地域に由来するものや比較できるものも多く含まれており、小型青銅饒をはじめとする中原地域の青銅器も部分的に対象とする。また長江流域は、博物館収蔵品、伝世品などの、出土状況不明な青銅器が多いことでも知られる。これは、当該地域の青銅器の多くが、副葬品としてではなく、単独で埋納されたことにも関わると考え

られる。これらの採集・伝世品は、考古資料としてはやや質が劣るものの、分類や大まかな分布を知るにあたって重要である。本論でも、これらの性質を理解した上で、型式学分析で大いに活用することにしたい一方で、博物館所蔵品や伝世資料は、出土地や状況の詳しい情報を欠くため、分布を検討する場合、出土資料を中心に扱いたい。しかし、上記の資料は具体的な出土場所を明確に記載するものが少なく、さらに行政単位の変更によって地名が変更することがあるため、中国の現在の行政単位の県（郷、鎮、村を含む）の大体の位置を示さざるを得ない。

3、研究方法

以下の第2章から第5章では、青銅器の器種ごとに分類・編年・分布の検討までを行う。第2章では尊・壺、第3章では饕、第4章では甬鐘、第5章では鼎を対象とする。青銅彝器は中原地域で出現したことは確実であり、地方型青銅器の変化によって、当該地域における中原青銅器の拒絶、受容、離脱を、時間軸に沿って復元できると考えられる（角道 2014）。すなわち、中原型青銅器を祖形としつつも、地方型青銅器は次第に中原青銅器とは異なっていくのである。こうした変化を捉えるにあたり、本論では、属性分析手法を用いた型式分類を行う。本手法は、青銅器の各属性を抽出し、それを掛け合わせることによって、型式の単位を認定するものである。これは、型式というものが、恣意的な区分でないことを、客観的に示す作業である。特に、組列内における時間的単位（型式）の変遷を考える場合、その技法や形の変遷をそれぞれ想定し、その相関によって、想定可否を検証することが出来る（田中 1982、横山 1986、岩永 1989）。また、長江中流域青銅器の型式学研究が有効性を持つと考える。なぜなら、中原型青銅器を搬入する際、当該地域の人間集団が生産するならば、諸要素を模倣することがすべて均質ではないからである。編年では、まず各章において、形式組列間の併行関係を求め、共伴例や中原型青銅器に基づいて、年代を決定する。そして、各型式の空間的傾向を示す。上記の型式学検討を通じて、編年の作成に基づき、時期ごとに具体的な青銅器の分布の様相をそれぞれ明らかにし、青銅器文化の展開様相を把握する必要がある。出土資料の情報が不明確という制限が存在するため、分布的手法は大きな地理的空間における分布、すなわち、巨視的位置関係を扱うことにしたい。分布図から密集、散布などの現象を読み取り、型式が共通する青銅器の分布圏を判断する。そして、諸種類の青銅器の分布圏を理解したうえで、いくつかの分布圏を組成する文化圏が認識できる。したがって、幾つかの種類の青銅器を選び、それぞれの分布圏を作成する必要がある。もし何種類の青銅器の分布圏が一致する場合、青銅器文化という解釈としての妥当性が高い



図 2-2 本論で及ぼす中国大陆の行政区画

ことになる。それにより、これらの文化の展開過程、および社会様相をある程度把握できるだろう。

第6章では、これらの各器種の併行関係を明らかにし、長江中流域全体としての期を設定する。そして、出土状況による扱われ方を検討し、各型式の社会的あり方を明らかにし、期を通じた変化を把握する。

さらに第7章では、長江中流域に見られた社会的変化をより一般化し、長江中流域青銅器文化の形成・展開およびその社会の具体像を考察する。さらに、他地域との比較を行いたい。

第2章 殷代における長江中流域の青銅尊・罍

長江中流域における青銅器文化初期を論ずる際、殷後期に併行する時期の青銅尊・罍という大型青銅酒器は重要である。これらの青銅尊・罍は殷代に長江中流域、ないし上、下流域に広域で分布している。青銅尊・罍の形態の変遷に伴い、個々の型式の青銅尊・罍の諸要素の地域色が出現し、斉一化していく。以下では、まず、地方でみられた青銅尊・罍・甗の分類を再検討する。次に、属性相関手法を用い、それぞれの型式の方向性を想定の上で、型式組列を検証していく。長江流域で出土するものには、地層、一括遺物、共伴関係が殆ど見られないので、型式組列を検証する場合、中原型青銅尊・罍の系譜を取り上げ、諸属性の類似性を比較し、交差年代法で検証する。

第1節 青銅尊・罍の型式分類

1、形式の再検討

まず、中原地域の尊・罍、甗の形態によって、形態差を確認したい。中原地域にある圈足器は、先行研究の分類（李 1948、林 1984、朱 1995、2009）を整理すると3種類に分けられる。

形態からみると、口頸部形態は罍が甗に類似し、肩部形態や器高では尊が罍に類似する。これらの圈足器は口頸部（開く/開かない）、肩部（「く」字形の折肩/括弧形の円肩）、器高（高/低）によって、細分できるが、青銅器の自名がない。そのため、分類後、朱氏が集成した『中国古代青銅器』（朱 1995）に基づいて命名する。

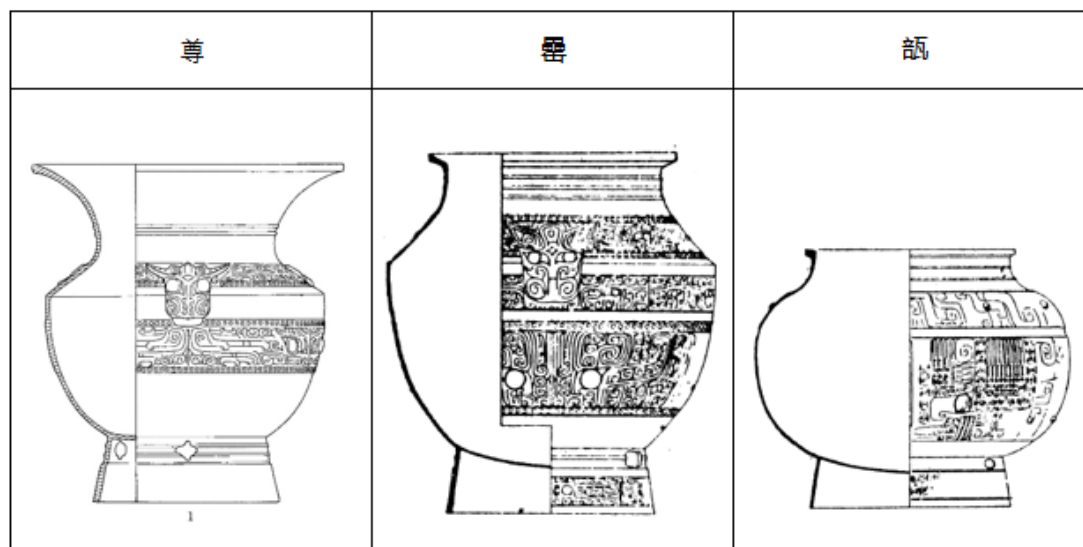


図3-1 中原青銅尊・罍・甗の形態

さて、器高（縦軸）、肩最大径（横軸）の相関表（図3-2）では、中原地域、長江流域出土の尊・罍（器高＞肩最大径）は左側に分布し、甗（器高＜肩最大径）が右側に分布する。つまり、尊・罍の形態は類似しており、おおよそ同様な機能を持つ青銅器と考えられる。林氏の定義では、青銅罍は截頭尊（林 1984）に相当する。ゆえに、尊・罍は共に尊形器であり、各々が細別器種に相当すると考えられる。

図表では若干の例外が存在する。ここで、黒枠の尊、甗に注目したい。円肩を持つ尊、折肩を持つ甗である。先行研究の分類（林 1984、朱 1995）でもこうした器物の帰属は明らかになっておらず、例外的なものと考えられる。一方、点線の円に分布する罍について

は、折肩、口頸部形態は壘に近く、器高が中原地域の壘の器高に相当する。これらは、先行研究の「截頭尊」(林 1984) に合致し、青銅尊のサイズに類似する傾向が見られるため、本論では対象資料としたい。

以上、述べたように、青銅尊・壘の相関性が高く、一括して検討することが可能である。また、青銅甗は類似する圈足要素を持つが、青銅尊・壘とは異なる器種であり、別に論ずるほうが妥当であろう。

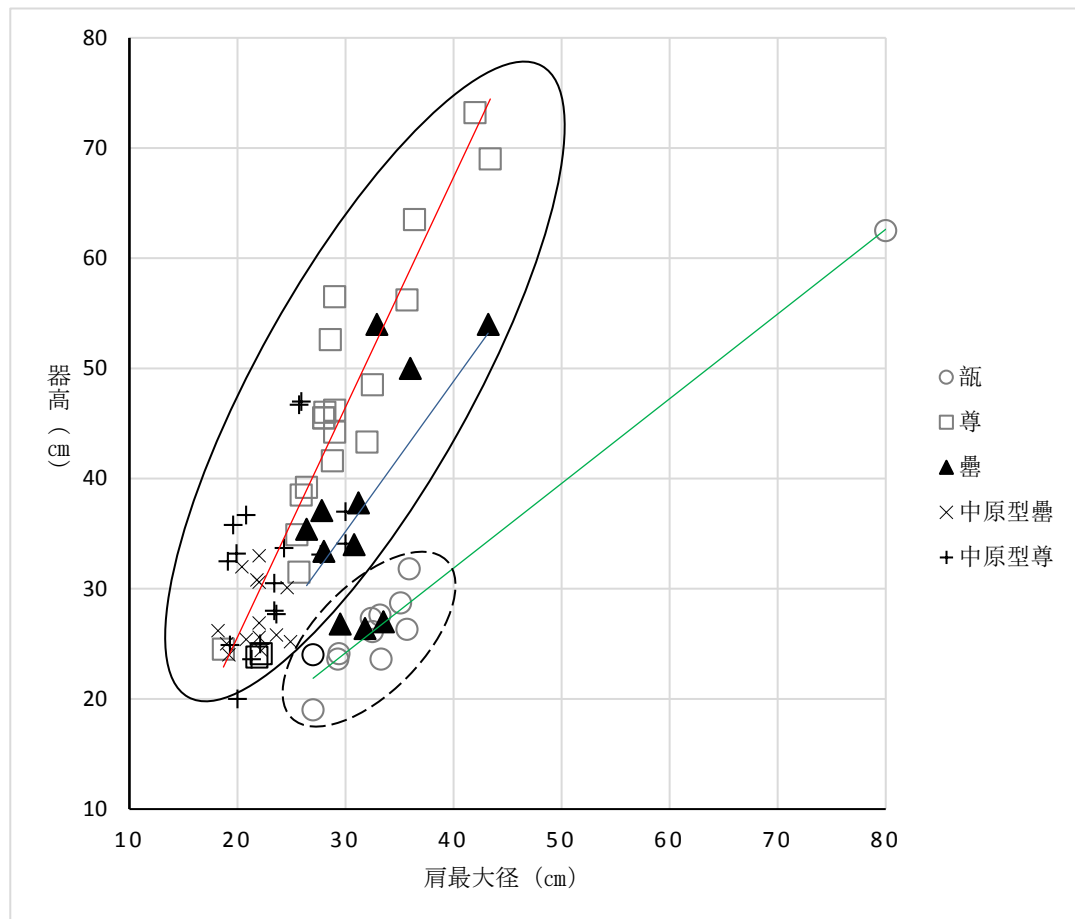


図 3-2 尊形器の器高と肩最大径の相関

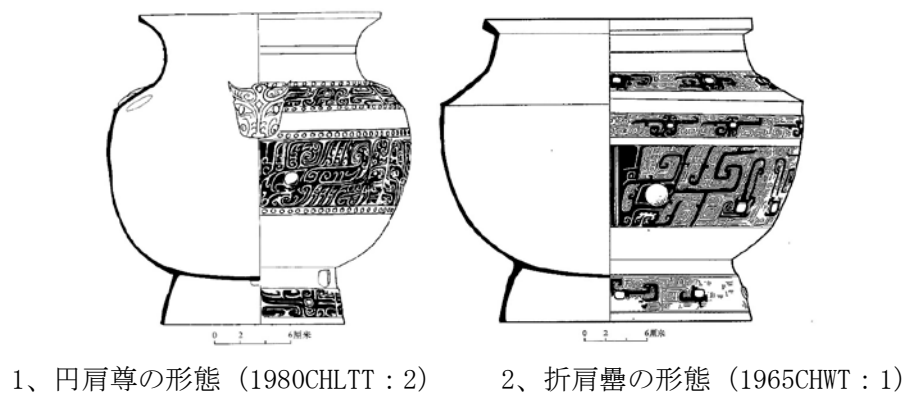


図 3-3 円肩尊、折肩壘の形態

2、属性抽出

難波氏は地方型の尊・壺に胴部に施された饗餮文を詳細に検討している。いわゆる華中型太線饗餮文、華中型浮き彫り饗餮文を中心として、殷墟文化の饗餮文様との併行関係を検討した（難波 1998）。それに基づき、資料を追加するとともに、文様による型式組列を踏まえ、器形、装飾などの諸属性の併行関係を検討する。まずは、青銅尊・壺に関する諸属性を抽出する。

（1）青銅尊の属性抽出

a. 胴部饗餮文様の平面デザインと扉稜

難波氏の文様、扉稜形態の変遷過程にはおおむね賛同できる（難波 1998）。ここで、難波氏の研究を参照しつつ、簡単に説明する。浮き彫り饗餮文は白家荘 C8M2:1 の壺、殷墟 1 期に相当する尊、盤龍城遺跡表採の尊に由来すると考えられる。文様の特征からみると、顔面の凸表現が顕著であり、胴体以下の部分は、平凸表現である。太線饗餮文は殷墟期において、主文と地文が完全に分離した様式の饗餮文である。殷墟文化でこのような文様は殷墟 2 期に出現する（難波 1995）。一方で、太線饗餮文、浮き彫り饗餮文などの胴部に施された文様の併行関係に関しては、検討する余地がある。

本論では、饗餮文のデザインの視点を考慮したい。すなわち、饗餮文が顔面、身体に分けられる。顔面が饗餮文の全体を大きく占めるとともに、胴体の部分が細長方形からやや広いものへの変遷、また、胴体の方向が横向きから縦向きへの変遷を想定する。この変化は器形の細長化と連動しており、扉稜の間の距離が短縮することを要因とする

長江流域の青銅尊の胴部文様平面デザインでも、太線饗餮文、浮き彫り饗餮文とともに、同様の变化方向が見られる。すなわち、顔面が強調されるとともに、胴体が縦向き、施文範囲が細長化となっていくことが想定できる。

また、青銅尊・壺肩部の扉稜は元々「羽根」状扉稜であったものが、「水鳥」状扉稜に変わる。これは殷墟文化の尊・壺と異なる変化である。これは、扁平な「羽根」状から扁平な「水鳥」、そして、立体へという変遷である。胴部、足部の「羽根状」扉稜は羽根形を発達させることが指摘されているが（林 1994、難波 1998）、肩部

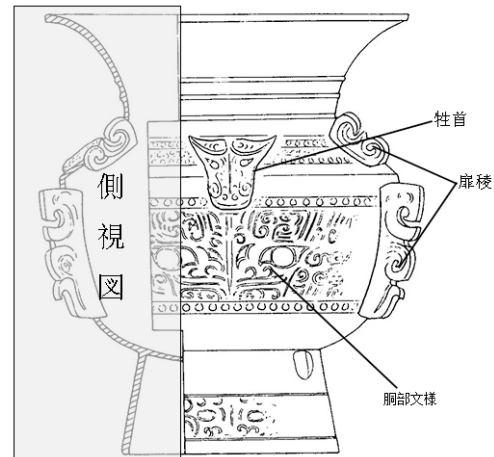


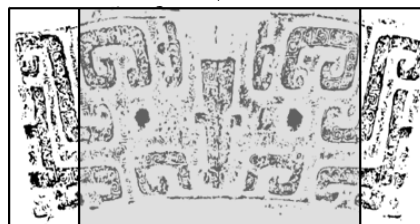
図 3-4 青銅尊の各部位の名称



顔面が小さく、胴体が横向き



顔面がやや大きく、胴体が縦向き



顔面が大きく、胴体が縦向き

図 3-5 胴部デザインの属性変異

の扉稜は在地要素として変化していくと考えられる。

b. 側視形

長江流域の青銅尊の側視形は4種類に区分できる(図3-6)。ア→エの方向で見れば、口部が段々外へ広がり、屈曲の度合いが次第に強まり、肩部の広めが小さくなる。胴部は圓味を保ちつつ、足部の形態は高くなり、下端が下向きで、広がらなくなっていくと想定される。

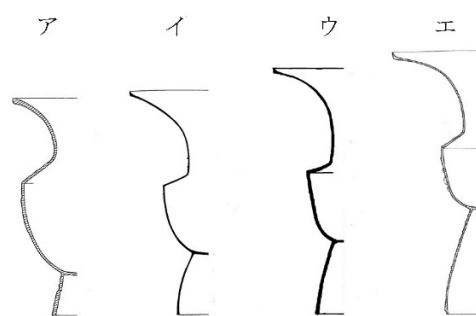


図3-6 側視形の属性変異

c. 肩高比

肩高比とは、「器高/肩部の最大径」の数値である。数値が1.3~1.9の範囲で次第に値が大きくなっていくが、器高の差異によって、数値に不連続がみられる。時期差が想定でき、これと連動して次第に器物が大型化していくようにも見える。

d. 肩部の牲首

牲首の位置は3種類に分けられる。つまり、肩部稜線を越えないもの(上)、稜線を越えて肩部につくもの(中)、稜線の以下縦向き(下)に位置するものである(図3-7)。また、牲首位置の変化に伴い、牲首の角(耳)を注目すれば大型化する。小型「C」字、小型「V」形角(耳)、「C」字、大「C」字角(耳)を経て、「几」字形(「几」)へと変遷する。(図3-7)。

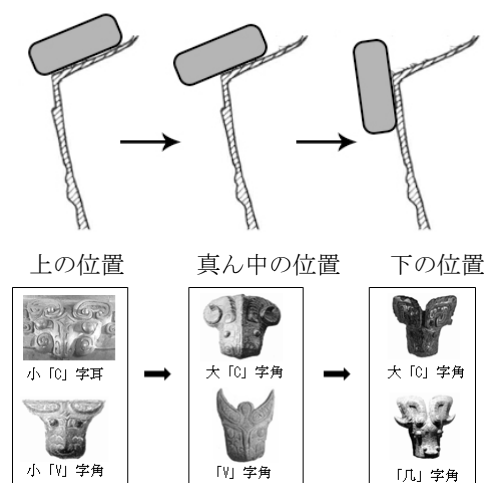


図3-7 肩部の牲首の属性変異

(2) 青銅尊の属性相関による型式設定

青銅尊の属性相関

出土数が少なく、側視図を軸として属性相関を検討する。まず、側視形と肩高比をみよう(図3-8)(括弧内の数字は点数を示す)。側視形アのものが1点のみであり、肩高比1.36である。側視形イの範囲が肩高比1.22~1.58であり、1.38~1.48に集中する。側視形ウは肩高比1.44~1.74であり、1.52~1.62に集中に分布している。側視形エは肩高比1.56~1.94であり、1.69~1.85に集中する。以上より、少なくともアを除き、イ→ウ→エという変遷が認められる。また、側視形アの1.36は側視形イの中位数平均1.42より小さく、ア→イへの変化も認められよう。

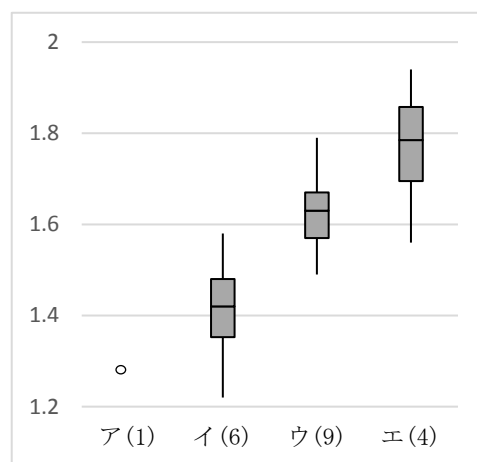


図3-8 側視形の肩高比

次に側視形を軸として、ほかの属性を検討する。尊例1、2(尊例1などの各数字は、表3-1の番

号に対応する)の側視図は「ア」であり、平面デザインの幅が広く、胴体の方向が横である。肩部の牲首の位置が稜線を越えず、耳(角)の形態が小「C」字形であり、肩部の扉稜が扁平状羽根形である。さらに、難波氏の文様分類において一番古い文様である浮き彫り饕餮文1類に対応する。

側視図が「イ」である尊例3~8になると、文様の平面デザイン、肩部の扉稜があまり変わらず、牲首の位置が下に移り、耳(角)形態が小「V」になる。尊例8では胴体の方向が縦となっている。

側視図が「ウ」である尊例9~17では、胴体の方向が縦向きに変化しており、平面デザインの範囲が狭くなる変化が見られる。肩部の扉稜が扁平状水鳥形になり、牲首の耳(角)の形態が大「C」字形となる。これらは難波氏の文様分類における、浮き彫り饕餮文3類、3類扉稜、2類牲首に対応する。

最後に、側視図が「エ」である尊例18~21では、胴体の方向が縦向き、平面デザインの範囲が狭いものしかない。肩部扉稜が立体状、牲首の位置が下に移り、角の形態が大型化し、「几」字形も出現する。

以上のように、諸属性において想定した変化方向はおおむね相関する。

青銅尊の型式設定

以上に基づいて、青銅尊の側視形を軸として、4型式を設定する。

尊1式:平面デザインが幅広、胴体横、側視図がア、牲首の位置が肩部に収まり、角(耳)形態が小「C」字形、肩部の扉稜が扁平状羽根のもの(図3-9-尊1式)。

尊2式:平面デザインが幅広、胴体横、側視図がイ、牲首の位置が肩部に収まるもしくは稜線上、角(耳)形態が小「C」、小「V」、「V」字形、肩部の扉稜が扁平状羽根のもの(図3-9-尊2式)。

尊3式:平面デザインが胴体縦、側視図がウ、牲首が稜線上に位置し、角(耳)形態が「V」、大「C」字形、肩部の扉稜が扁平状水鳥のもの(図3-9-尊3式)。

尊4式:平面デザインが幅狭、胴体縦、側視図がエ、牲首の位置が稜線上もしくはそれ以下、角(耳)形態が「V」字形、「几」字形、肩部の扉稜が立体水鳥のもの(図3-9-尊4式)。

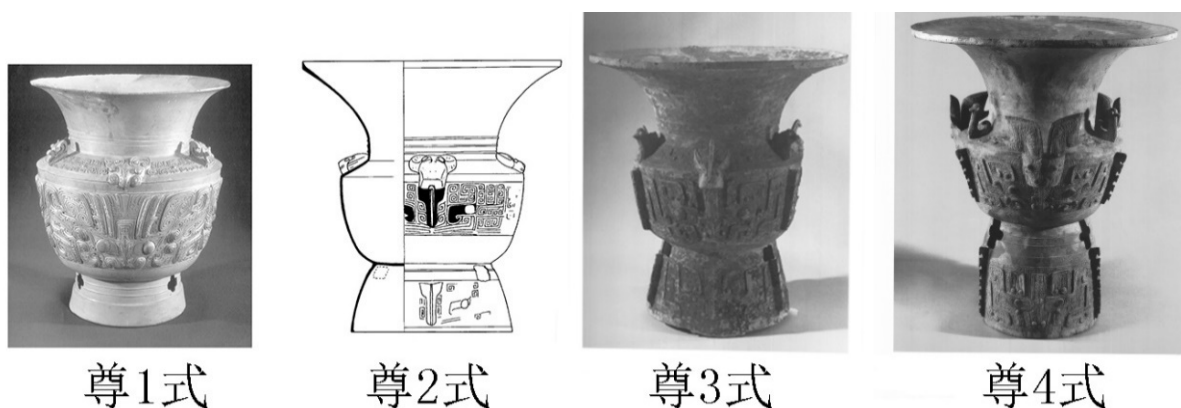


図3-9 長江中流域の青銅尊の型式

尊1式: 安徽阜南饕餮文尊 尊2式: 陝西城固青銅尊
尊3式: 岳陽費家河青銅尊 尊4式: 湖南華容青銅尊

(3) 青銅罍の属性抽出

青銅罍は青銅尊の型式変化と類似する。同様の属性変異（牲首の形態、位置、肩部扉稜）を用いて説明したい。

a. 俯瞰形（図3-10）

器物を俯瞰すれば、青銅罍肩部、胴部に付ける装飾（扉稜、牲首）の数の増加が想定でき、5種に分けられる（図3-11）。あ→えの方向で見れば、二里岡期以来の装飾がないものから牲首が出現し、さらに扉稜もついていく方向への変遷が想定できる。また、牲首、扉稜の数量からみると、3 牲首あるいは扉稜の点による内接三角形、4 牲首あるいは扉稜の点による内接四辺形という、細別分類ができる。

b. 胴部の補助文様および文様配置

二里岡期では、饗餮文の上下に連珠文が配置される。饗餮文を主文様とすると、この連珠文は補助文様と認識されよう。饗餮文の発達に伴い、上下に施された文様が連珠文から、粒表現の文様（目雷文）、そして粒が大きくなる罍文となり、その間に井文を充填するようになる。また、文様の配置とも連動する。すなわち、饗餮文上下の施文幅が広くなり、次いで、上部のみに罍文、井文が交互に配される文様帯となる（図3-12、図3-13）。

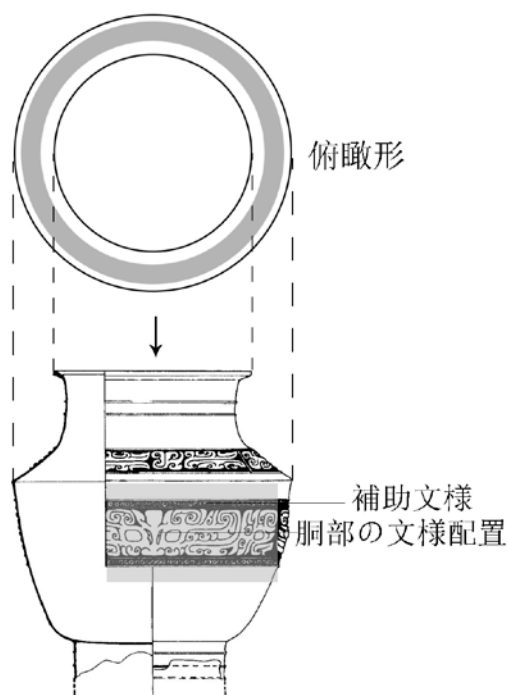


図3-10 青銅罍の俯瞰形、各部位の名称

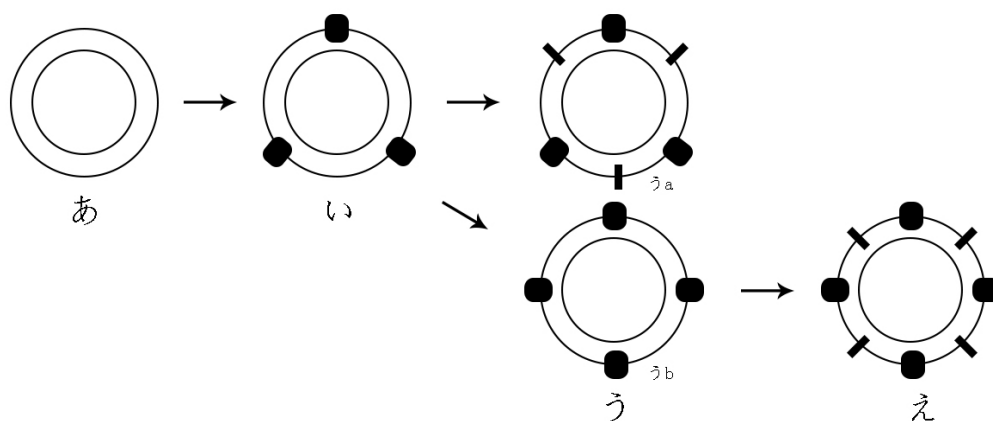


図3-11 俯瞰形の変化方向

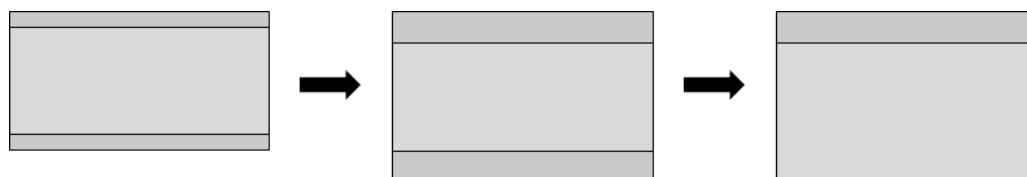


図3-12 胴部文様配置の変化方向

(4) 青銅罍の属性相関および型式設定

青銅罍の属性相関

俯瞰形を軸として、これらの属性相関を検討したい。

まず、俯瞰形「あ」である罍例 1～7（表 3-2 の番号と対応）には、牲首あるいは扉稜がないものである。補助文様では目雷文を有し、文様配置が上部のみに施文する。

俯瞰形「い」は 1 点しかなく、俯瞰形「う」と、牲首の位置、耳（角）の形態、補助文様で一致する。

俯瞰形「え」である罍例 12～17 では、補助文様が罍井文となっており、上部のみ施文する。また、牲首の位置が下に移り、水鳥形の扉稜が出現する。

以上のように、青銅罍の俯瞰形は、ほかの属性の変化方向とおおむね相関する。ただし、罍例 1～7、12～17 が、より相関が明確で、規格を有すると考えられる。一方で罍例 8～11 の相関はやや低く、1～7、12～17 両型式の中間形態と考えざるをえない。

青銅罍の型式設定

以上のように、青銅罍の俯瞰形を軸として、3 型式を設定できる。なお罍 1 式については、補助文様、文様配置の相関により、古相、新相に区分したい。

罍 1 式古相：牲首、扉稜がない、俯瞰形「あ」。補助文様がない、もしくは連珠文であり、二里岡期以来の青銅罍に類似する（図 3-14-罍 1 式古相）。

罍 1 式新相：罍 1 式古相の形態と同じだが、補助文様が目雷文に変化するもの。あるいは「羽根状」扉稜が出現するもの（図 3-14-罍 1 式新相）。

罍 2 式：牲首、扉稜が 3 セットとなる俯瞰形「い」「う」のもの。牲首の位置が稜線上、角（耳）形態が大「C」字形、補助文様が目雷文である（図 3-14-罍 2 式）。

罍 3 式：牲首、扉稜が 4 セットとなる俯瞰形「え」のもの。補助文様が罍井文であり、牲首の位置が稜線上かそれ以下、角（耳）形態が大「C」、「几」字形であり、肩部扉稜が水鳥装飾である（図 3-14-罍 3 式）。

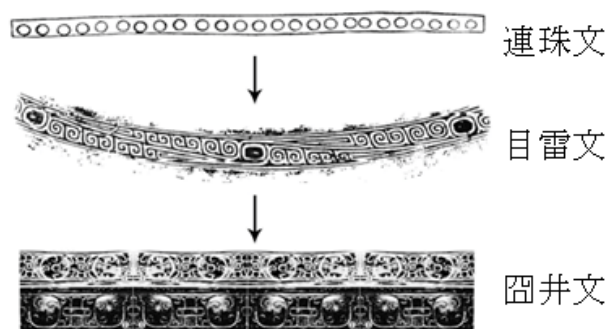


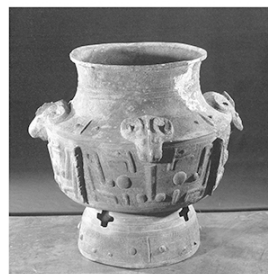
図 3-13 補助文様の変化方向



罍1式古相



罍1式新相



罍2式



罍3式

図 3-14 長江中流域の青銅罍の型式

罍 1 式古相：陝西城固龍頭罍 罍 1 式新相：湖北黄陂魯台鎮罍
罍 2 式：新干大洋洲青銅罍 罍 3 式：湖南岳陽魚魴罍

表3-1 青銅尊の属性相関表

番号	出土遺構名あるいは青銅尊名称	器物番号または所蔵機関	器高(cm)	平面デザイン	側視形	肩高比	牲首位置、形態	肩部扉稜	型式	備考(難波氏の文様形態、扉稜、牲首形態の型式組列)
1	安徽阜南饗簋文尊	2号尊	47	幅広、胴体横	ア	1.36	上、小「C」	扁平、羽根	1式	浮き彫り饗簋文1類、1類扉稜、1類牲首
2	安徽阜南龍虎尊	1号尊	50.5	幅広、胴体横	ア	?	上、小「C」	扁平、羽根	1式	浮き彫り饗簋文1類
3	城固県五郎廟	1974CHWT:1	34.9	幅広、胴体横	イ	1.36	上、小「C」	-	2式	
4	城固県蘇村塔冢	1974CHBSTT:1	39.2	幅広、胴体横	イ	1.48	上、小「C」	-	2式	
5	城固県蘇村塔冢	1974CHBSTT:2	38.5	幅広、胴体横	イ	1.48	上、小「C」	-	2式	
6	三星堆二号坑	K2②:112	31.5	幅広、胴体横	イ	1.22	中、小「V」	-	2式	
7	三星堆一号坑龍虎尊	K1:158、258	43.3	幅広、胴体横	イ	1.35	中、「V」	-	2式	
8	三星堆二号坑	K2②:109	69	幅広、胴体縦	イ	1.58	中、小「V」	扁平、羽根	2式	
9	三星堆二号坑	K2②:79	44.2	幅広、胴体横	ウ	1.52	中、「V」	扁平、水鳥	3式	太線饗簋文、浮き彫り饗簋文2-3類に併行
10	三星堆二号坑	K2②:127	41.6	幅広、胴体縦	ウ	1.44	中、小「C」	扁平、水鳥	3式	
11	江陵八姑台廟興尊	2号尊	46.2	幅広、胴体縦	ウ	1.59	中、「V」	扁平、水鳥	3式	浮き彫り饗簋文3類、3類扉稜、2類牲首 太線饗簋文、浮き彫り饗簋文3類に併行
12	城固県蘇村塔冢	1963CHBSTT:1	46	幅広、胴体縦	ウ	1.63	中、「V」	扁平、水鳥	3式	
13	三星堆二号坑	K2②:129	45.5	幅広、胴体縦	ウ	1.62	中、大「C」	扁平、水鳥	3式	浮き彫り饗簋文3類、3類扉稜、2類牲首 浮き彫り饗簋文3類、3類扉稜、2類牲首 浮き彫り饗簋文3類、3類扉稜、2類牲首
14	秦陽新店尊	不明	48.5	幅狭、胴体縦	ウ	1.49	中、「V」	扁平、水鳥	3式	
15	岳陽費家河尊	湖南省博物館	56.2	幅狭、胴体縦	ウ	1.57	中、「V」	扁平、水鳥	3式	
16	江陵八姑台廟興尊	1号尊	63.5	幅狭、胴体縦	ウ	1.74	中、「V」	扁平、水鳥	3式	
17	鳥山大呂李家灘	重慶市巫山県文物管理所	42.8	幅狭、胴体縦	ウ	1.58	中、大「C」	扁平、水鳥	3式	
18	安徽六安尊	不明	70	幅狭、胴体縦	エ	1.56	中、「V」	立体、水鳥	4式	浮き彫り饗簋文3類、4類扉稜、3類牲首
19	三星堆二号坑	K2②:146	52.6	幅狭、胴体縦	エ	1.83	中、「V」	扁平、水鳥	4式	
20	三星堆二号坑	K2②:151	56.5	幅狭、胴体縦	エ	1.94	中、「V」	扁平、水鳥	4式	
21	華容東山尊	湖南省博物館	73.2	幅狭、胴体縦	エ	1.74	下、「几」	立体、水鳥	4式	

表3-2 青銅壺の属性相関表

番号	出土遺構名あるいは青銅壺名称	器物番号または所蔵機関	器高(cm)	補助文様	文様配置	俯瞰形	牲首位置、形態	肩部扉稜	型式	備考(難波氏の文様形態、扉稜、牲首形態の型式組列)
1	城固龍頭鎮	1981CHLIT:2	37.1	-	-	あ	-	-	1式古相	
2	城固五郎廟a地点	1964CHWaT:1	24	-	上下、狭	あ	-	-	1式古相	
3	城固龍頭鎮	1981CHLIT:1	34	-	上下、広	あ	-	-	1式古相	
4	城固龍頭鎮	1980CHLIT:1	37.8	連珠	上下、狭	あ	-	-	1式古相	
5	湖北黃州下黨嘴	黄冈市博物館	23	目雷	上下、狭	あ	-	-	1式新相	輪廓饗簋文1類に類似
6	安徽嘉山柏岡		27	目雷	上部	あ	-	-	1式新相	
7	湖北黃陂魯台鎮	武漢市博物館	26.4	目雷	上部	あ	-	扁平、羽根	1式新相	
8	三羊首甗	故宮博物院	52	目雷	上部	い	中、大「C」	-	2式	太線饗簋文、浮き彫り饗簋文の2~3類に併行
9	江蘇江寧	南京博物院	28.7	-	-	うa	中、大「C」	扁平、羽根	2式	
10	新干大洋洲	XDM:44	60.5	-	-	うa	中、大「C」	-	2式	
11	三星堆K2	K2②:70	33.4	目雷	上下、広	うb	下、大「C」	-	2式	
12	三星堆K2	K2②:88	35.4	目雷	上下、広	え	下、大「C」	扁平、羽根	3式	4類扉稜 方格乳釘文、殷墟の方格乳釘文3類に類似 浮き彫り饗簋文3類、4類扉稜、3類牲首
13	沙市東岳廟		51.5	罎井	上下、広	え	中、大「C」	-	3式	
14	四羊首甗	上海市博物館	38.8	罎井	上部	え	中、大「C」	扁平、水鳥	3式	
15	岳陽宋灣鮑魚山壺	岳陽市文物管理所	50	罎井	上部	え	下、大「C」	扁平、水鳥	3式	
16	三星堆K2	K2②:159	54	罎井	上部	え	下、「几」	扁平、水鳥	3式	
17	平江涇口鎮		54	罎井	上部	え	下、「几」	立体、水鳥	3式	

表3-3 青銅尊の型式分類の対応表

本論の分類		尊1式		尊2式		尊3式		尊4式	
従来の分類	龍虎文		I 式	II 式					
	施勁松氏の分類 (1997)	獸面文	A 型	CI 式	C II 式	BI 式	BIV 式	B II 式	B III 式
	雲雷文				城固蘇村尊				
難波純子氏の分類 (1998)	太線饕餮文		清淵 I ~ II 式		泉屋 II ~ III 式		三星堆 III 式		
	浮き彫り饕餮文	阜南 I 式		東傳 II 式	案陽・江陵・岳陽 III 式	華容・三星堆 IV 式			
張昌平氏の分類 (2004)		A 型	B 型	C 型	D 型	E 型			

表3-4 青銅壺の型式分類の対応表

本論の分類		壺1式古相		壺1式新相		壺2式		壺3式	
従来の分類	太線饕餮文				江寧 II ~ III 式			三星堆・岳陽 IV 式	
	難波純子氏の分類 (1998)	浮き彫り饕餮文	白家莊 C8M2:1	プリンスストン II ~ III 式	ストックホルム III 式		三星堆 IV 式		
	方格乳釘文				台北故宮 III 式				
張昌平氏の分類 (2004)					B 型		A 型	C 型	

第2節 青銅尊・壺の編年

1、長江流域における一括遺物

長江流域では墓における出土が3例(墓)確認できる。そのほかは、すべて埋納遺構出土品であり、地層、共伴遺物がないか、時期差がある共伴遺物を含む。そこで、諸型式間あるいは、中原地域の青銅尊・壺との併行関係によって、年代を推定する。

中原の墓葬においては、青銅罍、觚、爵のセットが二里岡上層期あるいは殷墟1期に普遍的である。殷墟3期以降、有肩尊は非常に希少で、これは当時出現した觚形尊が、有肩尊に変わって副葬されるためである。また、殷墟1期以降、青銅壺も殆ど見られなくなる(林 1984、朱 1995、岳 2006)。一方で、青銅尊・壺の形態では、中原地域の二里岡期の青銅尊・壺より遅い。したがって、長江流域の尊1式、壺1式新相は殷墟1期頃相当とできよう。

表3-5 地方型青銅尊・壺の墓の一括遺物

長江流域の墓	共伴器物・数量					備考(尊・壺の型式)
黃州下窯嘴商墓	鬲 1	罍 1	觚 1	爵 1	壺 1	壺1式新相/2.6m×1.35m/鄭州M3:7の鬲と類似(二里岡期上層期~殷墟一期)
安徽阜南墓	尊 2	罍 2	觚 2	爵 2		尊1式が2点/河道を改変のため、葬られた副葬品が河の中央に流れた。

なお、新干大洋洲商墓で出土した壺2式であるが、本墓における副葬品の年代幅は大きく、伝世された可能性がある。この壺の形態は北京劉家河商墓の三羊壺と類似し(北京市文物管理处 1977)、文様では、尊4式に類似する華中型太線饕餮文を施し、殷後期の特徴を持つ(林 1994)。また、中原地域において、青銅壺は殷墟2期から減少する。したがって、壺2式は殷墟2期以降に相当する時期に位置づけられるだろう。さらに、新干大洋洲商墓から出土された土器はほぼ殷墟3、4期に併行するので、壺2式は墓の上限年代である殷墟3期とできる。

2、長江流域における青銅尊・壺の併行関係

華中型饕餮文の型分類に基づき、長江流域の青銅尊・壺の併行関係を整理したい(難波 1998)。尊3式の例9は、壺2式の例9と同様の太線饕餮文を施され、併行関係が想定できる。また尊4式の例21は、壺3式の例16と、浮き彫り饕餮文3類、4類扉稜、3類牲首が類似し、併行関係が想定できる。したがって、尊4式と壺3式そして、尊3式と壺2式の年代がほぼ併行すると考えられる。

3、中原型青銅尊・壺との併行関係

林氏の研究に基づき、中原・長江流域の青銅尊・壺の併行関係をみる。中原地域の青銅

尊・罍は、二里岡期から殷墟 3 期にかけて盛行しており、殷墟 3 期以降に極めて少なくなる。青銅尊の形態の変化は肩が狭く、足は太く高くなる（林 1984）。これらの変遷は地方型も同様である。このことから、尊 2、3 式は、中原地域の殷墟 2 期～3 期併行、尊 4 式が中原地域では尊がなくなった殷墟 4 期併行と考えられる。また、殷墟 1 期以降、罍（林氏のいう截頭尊）が徐々になくなり、形態上は、罍 1 式古相は二里岡上層期・白家荘期の青銅罍に対比できる。このことは趙氏によっても指摘されており、趙氏の A I 式罍（本論の罍 1 式古相）が、白家荘 2 号墓の青銅罍と同形とされている（趙 2006）。したがって罍 1 式古相は、二里岡上層期・白家荘期に相当する中原型青銅罍であり、模倣品あるいは搬入品の可能性がある。罍 1 式新相は殷墟 1 期以降に併行し、罍 2、3 式の形態は中原地域で見られず、殷墟 2、3 期以降に併行すると考えられる。

以上は、中原型青銅器の文様に関する先行研究（林 1981、1986、難波 1995）とも矛盾しない。罍例 5（罍 1 式新相）の文様は、殷墟 2 期の文様（輪廓饕餮文 1 類）と類似し、罍例 14（罍 3 式）の文様は、殷墟 3 期後半の文様（雲雷乳釘文 3 類）と類似する。こうした結果は、罍 1 式新相から罍 3 式への変遷方向の正しさを示していよう。

4、時期の設定

以上に基づく、青銅尊・罍の型式変化は 3 時期 4 段階に区分できる。

尊罍Ⅰ期は尊 1 式、尊 2 式、罍 1 式新相を主とし、殷墟 1 期～殷墟 2 期に併行する。中原型である罍 1 式古相の年代下限は殷墟 1 期であることを考えると、罍 1 式新相は殷墟 1 期末～殷墟 2 期に併行する。したがって、罍 1 式新相やほぼ同時の尊 2 式の出現年代を指標として、2 段階に区分できる。

尊罍Ⅱ期は尊 3 式、罍 2 式の出現を基準とし、殷墟 3 期～殷墟 4 期前葉に併行する。中原地域の殷墟 2、3 期の大型青銅尊の形態に類似する。華中型浮き彫り饕餮文が、殷墟の浮き彫り饕餮文に基づき、在地的に発展したものである。

尊罍Ⅲ期は尊 4 式、罍 3 式の出現を指標とする。前段階の尊・罍の形態を踏襲しつつ、さらに大型化した。また、西周時期に位置づける小型有肩尊（林 1984）とは形態差があるため、殷末周初期以前には収まる。一方、尊 4 式、罍 3 式の上限年代が明確な証拠がなく、型式変化によって、尊 3 式、罍 2 式より晚い段階から生まれることを判断せざるを得ない。すなわち、殷墟 4 期～殷末周初期併行とするのが妥当である。

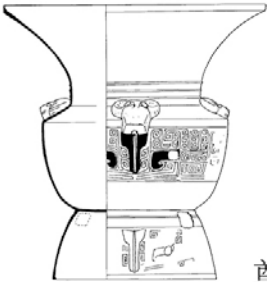
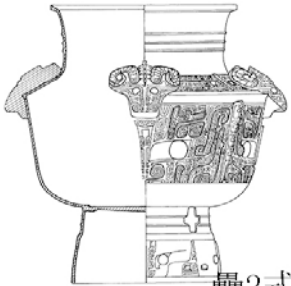
編年		青銅尊	青銅罍
殷墟Ⅰ期 ～ 殷墟Ⅱ期	尊罍Ⅰ—Ⅰ期	 尊1式	
	尊罍Ⅰ—Ⅱ期	 尊2式	 罍1式新相
殷墟Ⅲ期 ～ 殷墟Ⅳ期前葉	尊罍Ⅱ期	 尊3式	 罍2式
殷墟Ⅳ期 ～ 殷末周初期	尊罍Ⅲ期	 尊4式	 罍3式

図 3-15 長江中流域の青銅尊・罍の編年

第3節 殷代における青銅尊・罍の分布状況

時期ごとに各型式の青銅尊・罍の分布を示した。青銅尊・罍は従来の殷文化要素の一部であるため、ここで、中原型青銅尊・罍とともに、分布を検討したい。一方、長江上流域に位置する三星堆祭祀坑の場合、長い間に存続する遺構であり、当該遺構に出土した青銅器が遺構の廃棄時期にずれることがあるが、本節では、前述に設定した青銅尊・罍の型式の併行時期に従い、分布を検討したい。

1、尊罍Ⅰ-1期

中原型青銅尊・罍が殷墟、鄭州商城を中心とする黄河中流域に分布する。中原型である罍Ⅰ式古相は盤龍城遺跡で表採品、城固県内の埋納遺構で数点が見られる。尊Ⅰ式は淮河中流域に分布している。

この段階には、殷文化が広く影響したことが看取される。尊Ⅰ式は淮河流域に出現するものの、長江中流域の中心地域に至らない。したがって、長江中流域における地方型青銅器がない段階といえる。

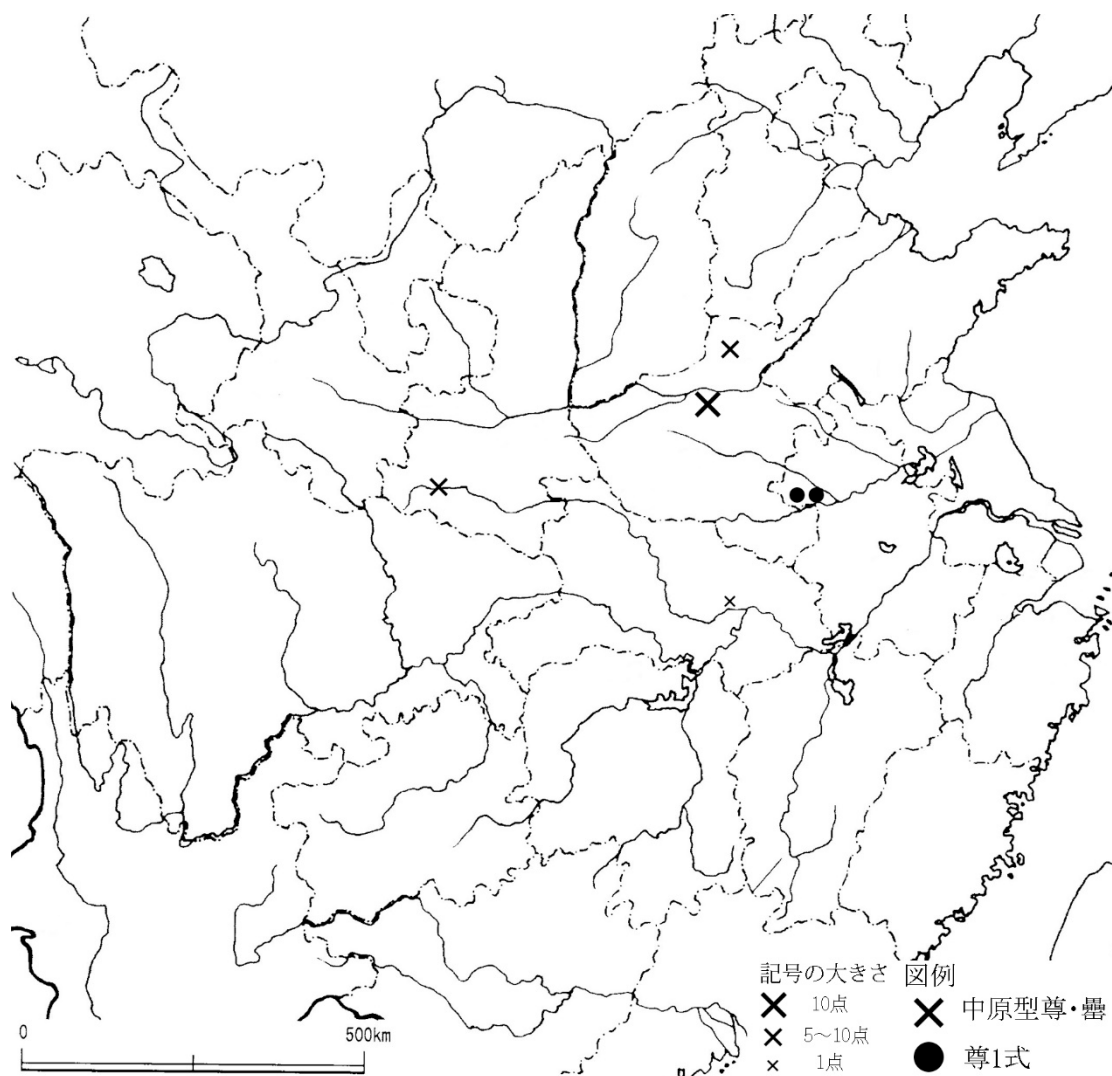


図3-16 尊罍Ⅰ-1期における青銅尊・罍の分布状況

2、尊罍Ⅰ-Ⅱ期

前段階に続き、中原型青銅尊・罍が殷墟を中心とする黄河中流域に分布しており、数量が増える。成都平原にもわずかに見られる¹⁴。一方で、地方型青銅器である尊Ⅱ式が漢水上流域、成都平原に広がっていくが、罍Ⅰ式新相が淮河流域－長江中流域の長江北岸に限られる。つまり、この段階に、地方型青銅尊・罍が長江中流域に出現したのである。文様から考えると、在地生産の可能性があるものの、確定的ではない。

ところで、長江全流域における地方型青銅尊・罍の流通性は高く、分布に東西差が見られる。青銅尊は長江中上流域の西部、青銅罍は長江中下流域の東部に分布している。青銅罍の羽渦文扉稜という地方要素が見られ（林 1994）、殷文化の工房ではなく、地方で生産されたことがわかる。

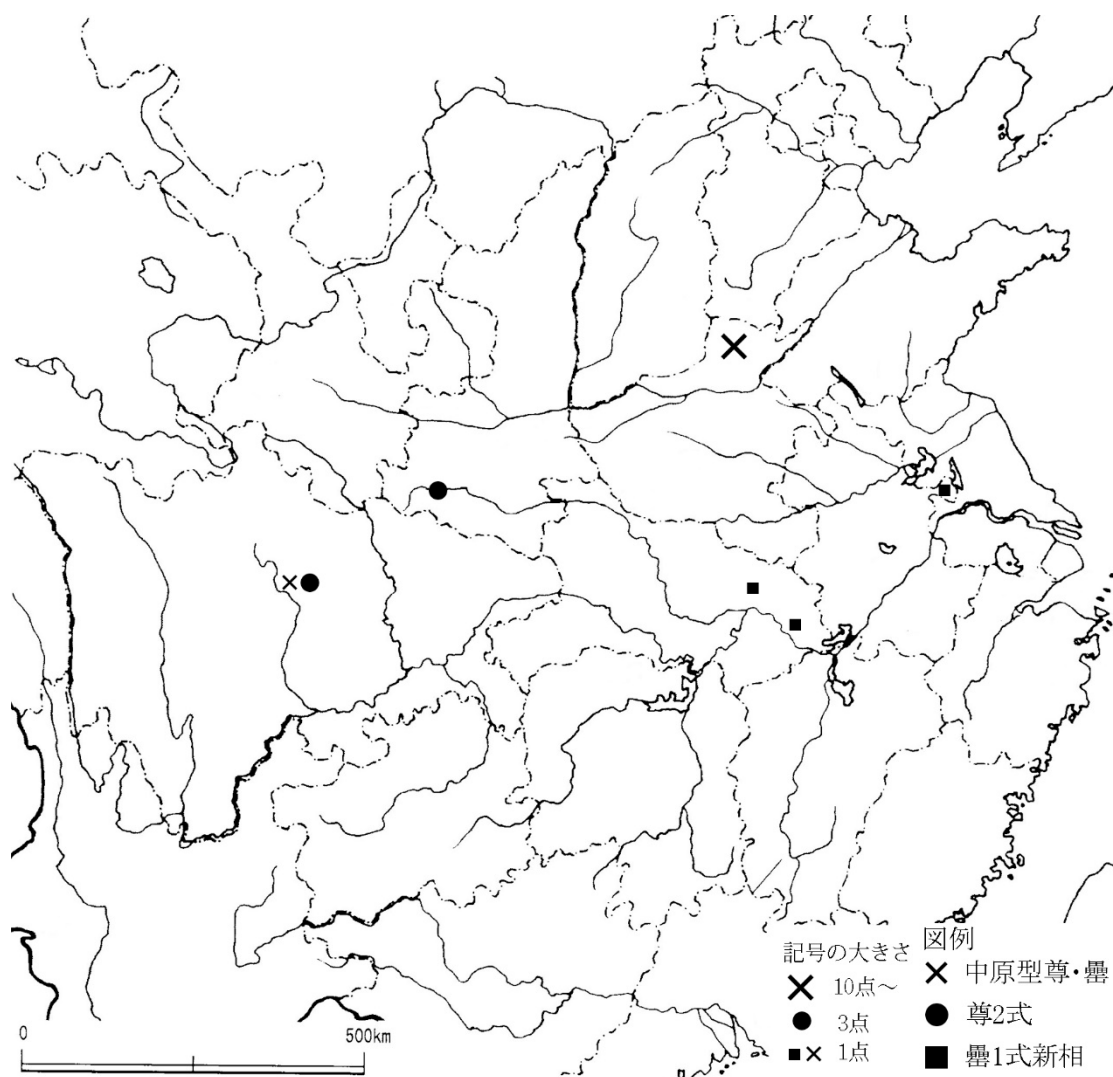


図3-17 尊罍Ⅰ-Ⅱ期における青銅尊・罍の分布状況

¹⁴ 長江上流域の成都平原では三星堆祭祀坑が挙げられる。この遺構の下限年代は、西周前期に相当する（施 2020）。ここでは中原型尊・罍とともに尊Ⅳ式、罍Ⅲ式が併出し、尊罍Ⅱ、Ⅲ期の長期間にわたって存続したと考えられる。

3、尊罍Ⅱ期

長江中流域で出土数が増加する一方、中原型青銅尊・罍は衰退する。尊3式・罍2式は、長江中流域の主流および漢江流域、湘江下流域、贛江流域、長江上流域の成都平原、長江下流域まで分布する。前段階と比較すると、長江南岸、さらに長江中流域支流にまで拡大する。この段階では、「華中型青銅器」（難波 1998）が多く出現している。この広域の青銅尊・罍では、文様、形態などの特徴が一致するので、生産規模の拡大、長江中流域の地域色の初現期と考えられる。

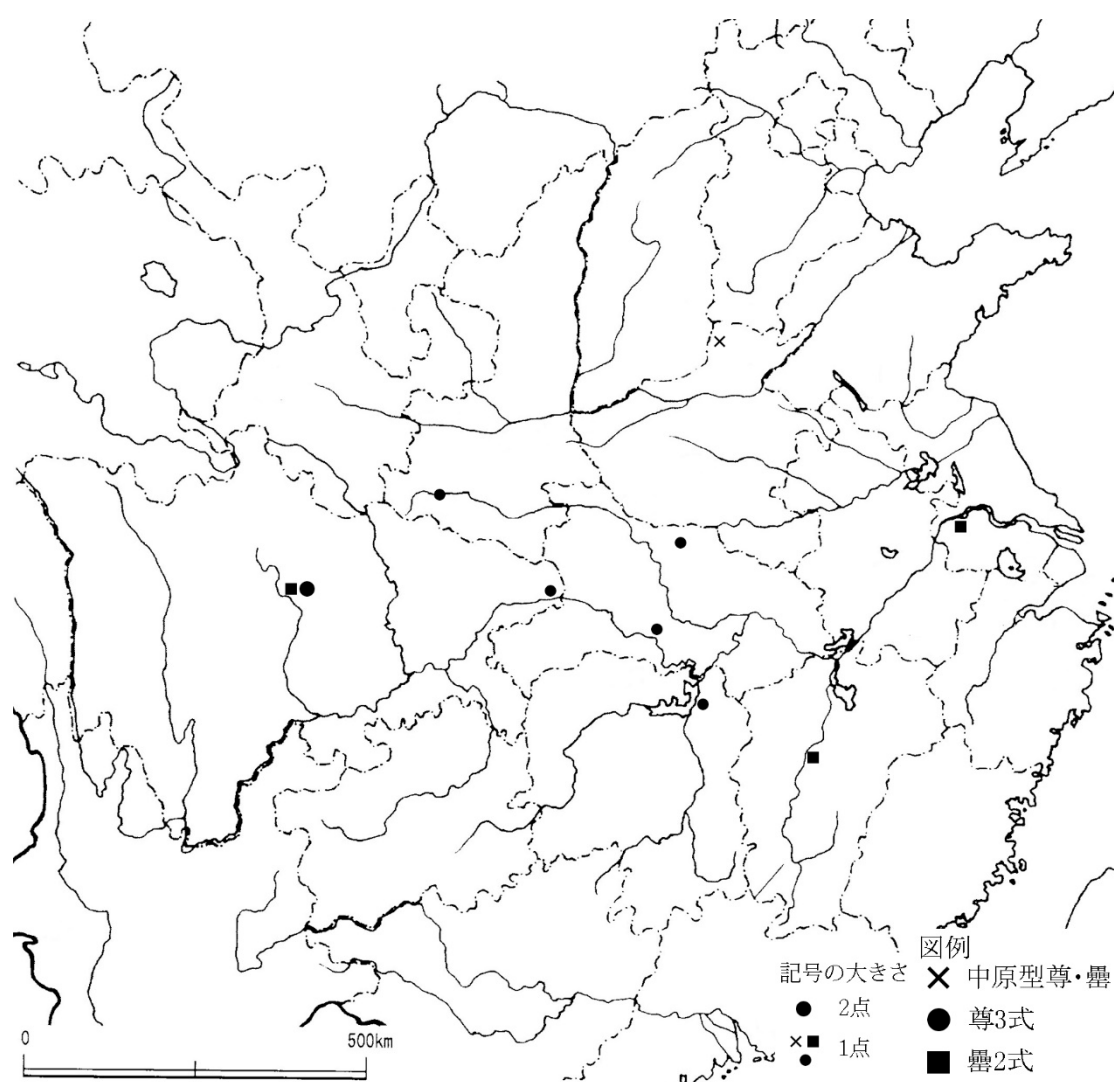


図 3-18 尊罍Ⅱ期における青銅尊・罍の分布状況

4、尊罍Ⅲ期

中原型青銅尊・罍は完全に消失する一方、長江中流域では青銅尊・罍が存続する。前段階より、長江中流域にさらに集中し、成都平原では形態が変わりつつも存続する。前段階よりも数量が減少する傾向があるが、分布上でも洞庭湖を中心に集中しており、地域色が著しくなる。

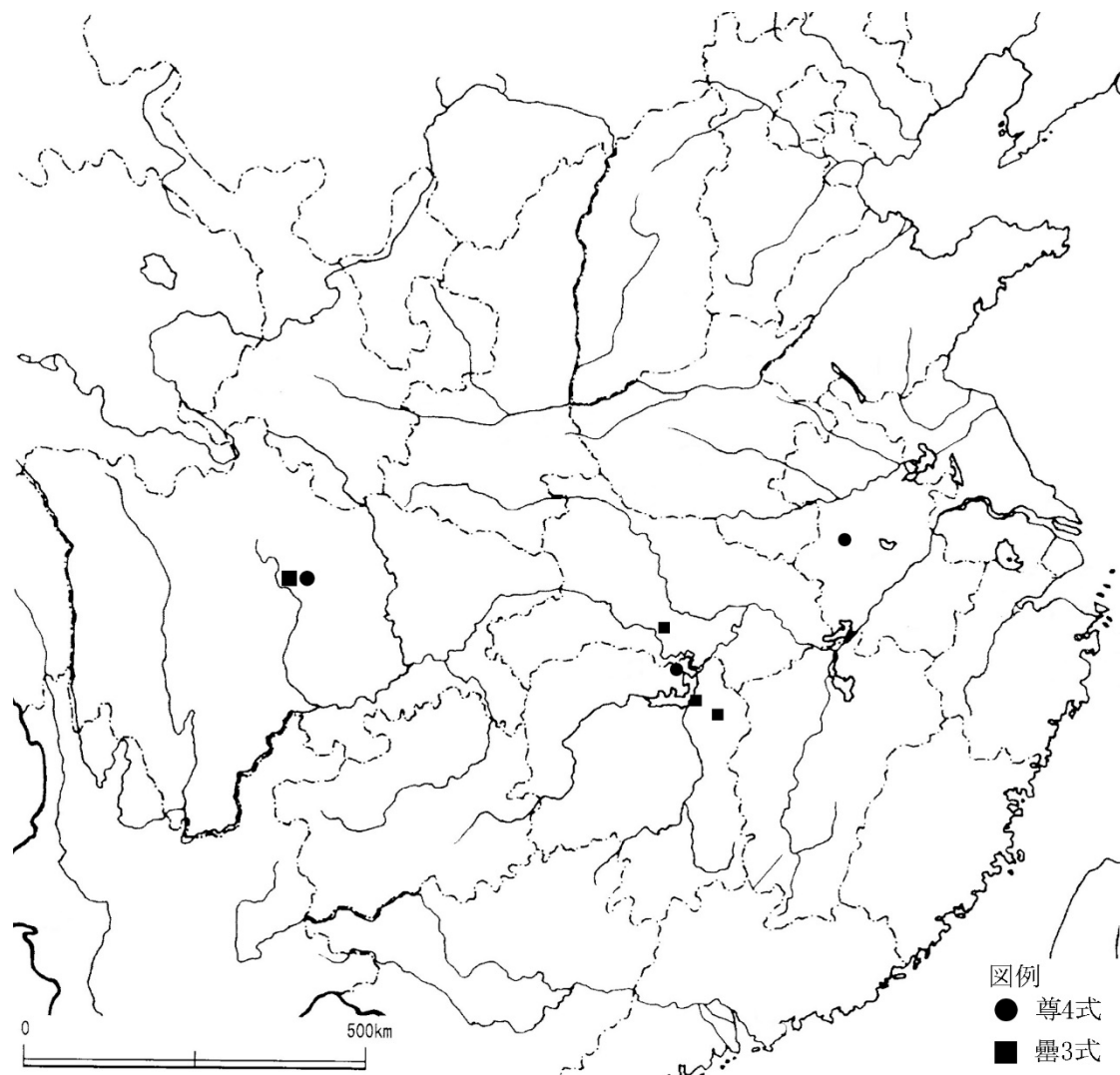


図 3-19 尊罍Ⅲ期における青銅尊・罍の分布状況

第4節 殷代における地方型青銅尊・壺に関する考察

1、中原型青銅尊・壺との比較

まず、器高を比較する（図 3-20）（括弧内の数字は点数を示す）と、地方型の器高は中原型尊・壺と比較すると大きいことがわかる。また、鄭州商城、盤龍城、殷墟遺跡範囲内に見られた中原型尊・壺が比較的まとまった値を示しているのに対し、地方型尊・壺の値は異なる分布にある。鑄造工房にある中原文化の場合、地方型が、一工房で生産されたものとは考えにくい。これは、地方型尊・壺の値は分散傾向にあり、まとまった鑄造工房のある中原型に対して、地方型は分散した工房で生産されたものであろう。次に、第Ⅱ、Ⅲ期の数値（図 3

—21）では、数値の分布から見ると、前段階より、大型化にも関わらず、器高の中位数はほぼ同じである。中位数の前後、およそ同様の高さを看取できる。つまり、大型化の程度が同様に変化し、器高はほぼ同様の範囲で集中して分布しており、ある程度の規格性を持つことが示唆される。この段階から、地方型青銅尊・壺は比較的まとまりを持ちだしたことがわかる。

胴部文様では、中原地域の青銅尊・壺は、二里岡時期には、饕

餮文の上下に連珠文を施す。そこから、補助文様である連珠文を失い、饕餮文のみを施し、夔龍文、鳳鳥文を文様帯として、饕餮文の上に施すようになる。一方で、長江流域の青銅尊は二里岡期以来、胴部に饕餮文のみを施す。青銅壺は饕餮文の上下に施された連珠文が目雷文を経て、上部のみの罍井文へ変化する。ただし、胴部饕餮文様のデザインにおける顔面の強調、分散、そして胴部主文様帯の広がり、は、中原地域と一致する。

頸部文様では、中原地域の青銅尊は凸線文から蕉葉文に変遷する。一方、長江流域の青

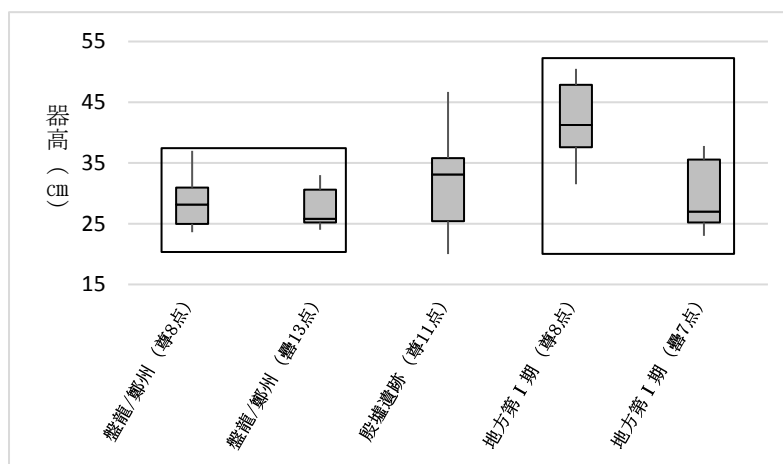


図 3-20 中原地域と長江第Ⅰ期器高の比較

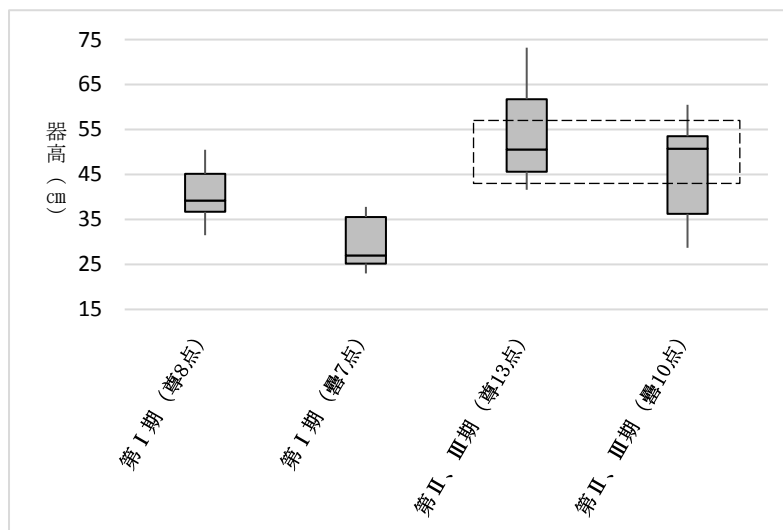


図 3-21 時期ごとに地方型青銅尊・壺の器高

銅尊は二里岡期以来の凸線文を保っている（図 3-22）。



図 3-22 中原型青銅尊の肩部、頸部の文様（左：肩部文様、右：頸部文様）



図 3-23 動物形青銅酒器

図 3-24 中原地域の青銅尊

さらに、肩部の装飾は中原型と異なり、牲首の角が発達し、「水鳥」状扉稜が出現する。尊壘Ⅱ期において、牲首の角の形態が変化し、肩部扉稜が水鳥形となる。尊壘Ⅲ期になると、牲首の角がさらに大きくなり、肩部扉稜が立体化していく。動物意匠は写実化し、牲首の動物種には、羊、水牛、虎が存在する（中川 2013）、これらの意匠は、長江中流域で大量に出土する動物形青銅器と関連するかもしれない（図 3-23）。動物意匠の大型化、および装飾の写実化は、新石器時代以来の長江中流域独特の神話世界を示すものかもしれない（今村 2010、ラブチェフ・セルゲイ 2012）。

地方型青銅尊の形態は、中原型と比較すると、側視形は二里岡期からの丸みを帯びた胴部を残しており、足部は丸みを呈し、広がらない。口頸部も中原地域のラップ状口頸と異なり、垂直化する。中原では殷墟Ⅲ期以降、副葬品としての大型有肩尊がなくなり、西周



図 3-25 中原型と地方型の胴部デザインの比較

時期から小型有肩尊が再び出現する。また觚形尊に交替する。一方、長江中流域においては、大型青銅尊・壘が埋納されつづけ、中原とは異なる祭祀機能という地域色を生んでいく（図3-24）。

さらに、青銅尊・壘の文様技法、鑄造技法を比較する。鄭州商城の青銅尊・壘青銅尊では、胴部の饕餮文の中軸に範線が見られる。殷墟文化の大型青銅尊は牲首の下に文様の合範線を覆い隠すため、扉棱を飾る。これによって、胴部の水平分範の量が増加したと考えられる。つまり、饕餮文の顔面を一体とする施文技法から、一饕餮文の顔面中軸を分割し、2 鑄型を使うようになった（図3-25）。この分範、文様にも関わる（Nickel 2011）。すなわち、範数を増やし、饕餮文を中軸から左右対称に表現するようになったのである。一方で、長江中流域の胴部文様では、牲首の下に合範痕跡はなく、殷墟の饕餮文における対称性の強調とは異なり、一体性を示している。

したがって、長江中流域では、殷墟文化の饕餮文というモチーフは受容したものの、平面デザイン、および中原文化における新たな施文技法を知らず、尊1式以来の施文技法を一貫して用いたのである。また、牲首の接合技法も、一鑄ではなく、後鑄法（鉚接式後鑄法）を用いると考えられている（蘇・李 2017）。これも、中原地域の大型青銅尊とは異なる技術である（図3-26）。

さらに、器壁側視形では、浮き彫り饕餮文の表現の際、中原地域二里岡期の青銅尊は凹凸技法を用いた。すなわち、器壁内面が外面の文様凹凸に従って一定の器壁厚を保つのである。殷墟期になると、器壁内面が平化し、器壁外面のみが凹凸表現になる（内田 2010）。ところが、長江流域の青銅尊・壘は尊1式では二里岡期の凹凸技法が見られるほか（張 2004）、壘3式の足部にも同技法が用いられた（熊 2013）。殷文化では、溶解剤としての鉛の含有量が増加する傾向が見られ（内田・飯塚 2008）、凝固時の温度差が著しくないと推測されている（内田 2010）。したがって、殷墟青銅器の鑄造技術では、二里岡期の技術を基礎に、青銅成分の改変に伴う新たな技術を応用しており、あらゆる技法についての変革が行われた（内田・飯塚 2008）。これに対して、長江中流域のばあい、二里岡期という古い段階の凹凸技法が殷墟IV期まで存続していく。現時点で検証が難しいが、おそらく二つ可能性が存在する。一つはこのような殷墟文化の青銅器技術を習得せず、古い技法が存続した可能性。もう一つは、殷墟青銅器の金属成分との差である。文様の類似性が見られ、鉱物交易のネットワークの立地が異なることによって、後者の可能性が高いのは筆者の考えであるが、いずれにせよ、青銅器生産が殷墟文化と異なっていることがわかるであろう。

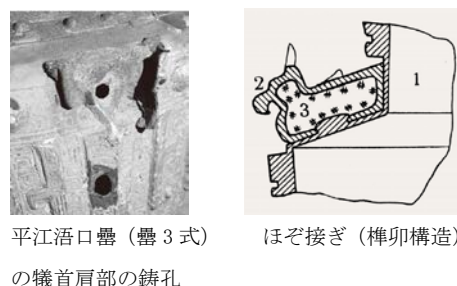


図3-26 牲首の接合技法の比較

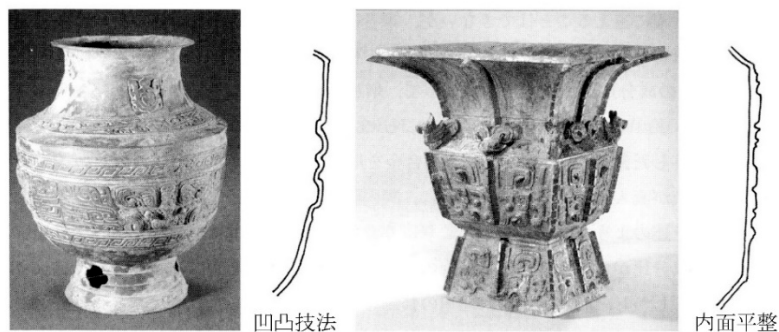


図3-27 器壁による技法差（内田 2010 より転載 加筆）

2、扱われ方からみた地方型青銅尊・罍の地域性

地方型青銅尊・罍の出土遺構は、青銅尊・罍の扱われ方の差異を示している。具体的にいうと、単数青銅器を埋納する遺構、集中埋納である祭祀坑、副葬する墓に分けられる。墓の分布は中原地域、長江中流域の東部に多く、出土した青銅尊・罍の型式は中原型、尊1式、罍1式新相を主とし、罍2式が一点しか見られない。単数埋納は長江中流域、湘江下流域、漢水中上流域に分布しており、尊2式、3式、4式、罍3式を含む。大規模埋納である祭祀坑が三星堆遺跡で知られ、中原型、尊2式、3式、4式、罍3式が共伴している（図3-28）。

副葬青銅器を代表するのは殷文化であるが、こうした副葬習慣が、長江中流域の東部に殷墟Ⅰ～Ⅱ期併行にかけて存在しており、殷墟Ⅲ期に至るまで極めて少なくなる。中原から安徽地域を経て、長江中流域に伝わったと考えられる。三星堆祭祀坑は、長江上流域独特の青銅器文化とされるものの（施 2018、2020）、青銅尊・罍では中原型、地方型が併存しており、在地生産ではなく、搬入品ではないかと考えられる。

一方、単数青銅器を埋納する遺跡は、長江中流域で湖南省の北部、湖北省の南部を中心とする地域に集中し、いわゆる長江中流域の埋納青銅器文化圏とできる。すなわち、長江中流域の中心地域において、殷墟Ⅲ期併行頃に埋納青銅器文化圏が出現し、長江中下流域に広がったと考えられる。この分布は、次段階である西周併行期に出現した湘贛青銅器文化圏（角道 2014）の範囲とある程度に重なっており、その前段階ではないかと考えられる。

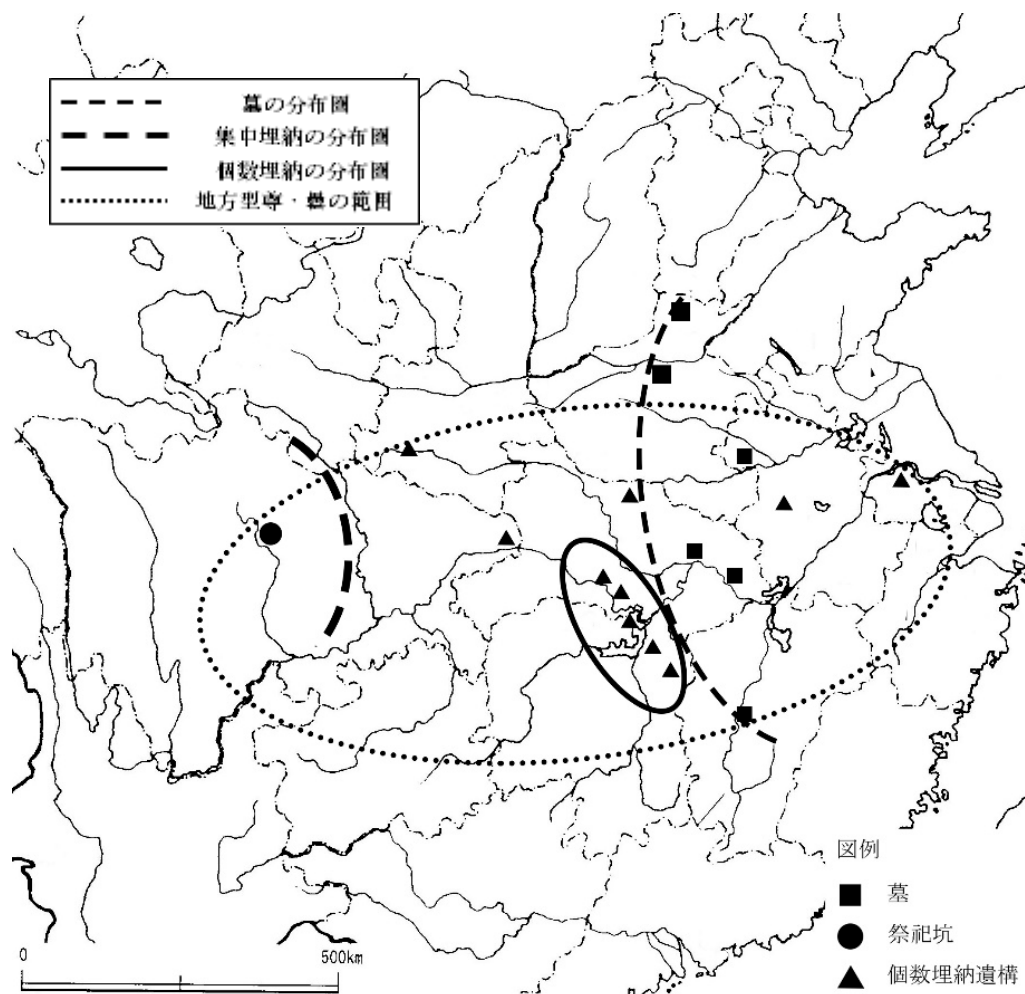


図3-28 青銅尊・罍の扱われ方の地域性

次に出土地点および周辺の遺跡との関連を検討しよう。類似性が高い青銅尊・壺が、異なる地域文化に分布することが指摘されている(王 1996、彭 2005、向 2008)。これらの遺跡では、小型青銅工具、青銅工具類の鋳型、溶錬に関する坩堝などが存在するとされる(張 2004)。

土器が異なる地域文化が同様の青銅尊・壺を消費する現象については、鄭州商城、その周縁に位置する平陸、さらに長江中流域の盤龍城遺跡に至る比較的広範囲で、共通の祭祀形態が存在した可能性があると考えられる(鈴木 2017)。当該地域では青銅器が生活遺跡より離れたところに埋納行為が行われ、青銅器の役割の共通性が想定できよう。この場合、計画的、意図的埋納行為によって、この埋納行為は社会行為の一環として取り込まれる可能性が高い(村野 2005)。また、青銅尊・壺の型式は殷墟文化、盤龍城などの特徴を持ち、古い鋳造技法、新しい施文技法が併存し、複雑な様相を呈する。従って、製作集団も単一文化に属する人間集団ではなく、より複雑であったであろう。おそらく長江中流域で諸集団に連合している組織で生産されたものと考えられる。製作場所は推定しにくい、これらの青銅器製作集団は殷墟要素、二里岡期の文化要素を保ちつつ、青銅器製作を発達させた在地集団であろう。

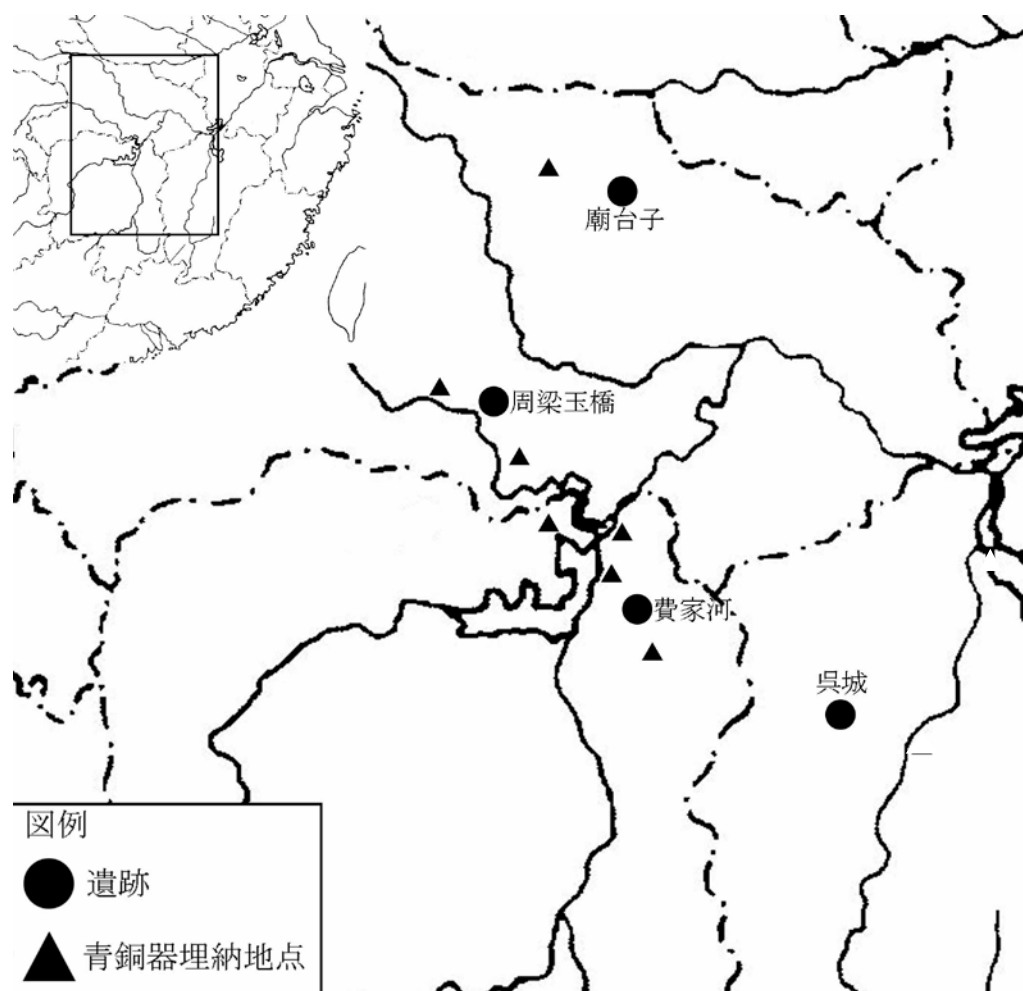


図 3-29 遺跡と出土地点の位置

第5節 小結

尊罍Ⅰ-1期において、殷文化の広がりに伴い、長江流域では青銅器が出現するが、地方型青銅器は見られない。この時期に遡る二里岡文化期の長江中流域では、殷の文化範囲の到達点であり、盤龍城がその拠点であった。尊罍Ⅰ-2期になると、中原地域の中心地は鄭州商城から殷墟に移り、長江中流域では地方型青銅器がわずかに出現した。これは、殷文化の変動とともに、盤龍城という殷文化の拠点が衰退した結果と考えられる。青銅罍1式新相は在地生産であろうが、青銅尊は長江中流域ではなく、安徽省、陝西省の城固由来の可能性が高い。また、殷文化の影響も、青銅尊・罍の形態、文様などに残っており、在地要素は顕著ではない。つまり、殷墟1、2期の段階において、殷文化が次第に収縮する中で、長江流域で地域的生産集団が現れたのであるが、殷文化との関連はまだ強かった。おそらく殷文化勢力が当該地域に残存しており、青銅器の生産組織がそのまま残っていた可能性が高い。しかしながら、各地域で在来文化の人間集団が青銅器鑄造技術を習得したのであって、統合的地方型青銅器文化圏は形成していない。

尊罍Ⅱ期に入ると、地方型青銅尊・罍の数量が増加し、中原地域の青銅尊・罍と異なる、いわゆる華中型青銅器の形態、文様、技法によって、全体として共通性を持つようになる。また、青銅器の埋納も共通現象である。分布範囲は長江全流域へ波及し、長江中流域が中心となる。つまり、土器が異なる地域文化が同様の青銅器を使用し、生活遺跡から離れた場所に埋納が行われた。殷文化の周縁に位置する平陸にもこのような埋納遺跡が見られ、長江中流域に至る比較的広範囲に、共通の祭祀形態が存在した可能性がある（鈴木2017）。こうした背景の下、長江流域で、青銅尊・罍の埋納が盛行し始めるのであろう。

尊罍Ⅲ期でも、長江中流域の洞庭湖を中心とした分布が認められる。ただし、前段階に比較し、分布範囲が小さく、青銅尊・罍の流通性が低下化としている。長江流域において流通性が高く、手に入れやすい青銅尊・罍を、長江中流域の各地域社会が自律的に選び取った結果、在地生産、集団祭祀という展開期に入ったものと考えられる。

以上のように、殷墟3期併行以前に、中原青銅器文化の影響の下、地方型青銅器が出現し、殷墟3期併行（尊罍Ⅱ期）から、長江中流域に、独特青銅器文化が形成されたのである。この青銅器文化は元々の地域社会が、青銅器技術という外部要素を取り込んでおり、在地化したものと考えられる。在地集団は大型青銅尊・罍によって、同様の埋納形態で集団祭祀を行った。殷墟4期併行（尊罍Ⅲ期）以後は、流通性が次第に低下化し、各地域社会が自らのあり方に適応しつつ各要素を選び取るという、自律的受容に変化していったのである。

第3章 殷周時代における青銅鏡の系譜とその展開

長江中流域における青銅器文化の実態を解明するため、前章で提示した埋納青銅器文化圏の形成、長江中流域に見られた埋納青銅器で最も重要な青銅鏡を取り上げ、その具体像について検討したい。分析は第2章同様、型式分類から始め、変化の方向性の想定、型式組列の検証という手順を踏まえて行う。小型青銅鏡は殷墟の墓で出土し、一括遺物による組列検証が可能である。一方で大型青銅鏡の共伴事例は極めて少ない。本章では、想定した属性変異の連続性に基づいて型式を設定し、出土遺構の性格を考慮して年代を与える。さらに段階ごとに分布を示し、青銅鏡の展開過程を論じよう。

第1節 青銅鏡の型式分類

1、用語の説明

第1章で述べたように、青銅鏡については、鏡、鉦、庸、早期甬鐘といった名称が学史上用いられてきたことになるが、本論では便宜上、青銅鏡と呼ぶことにする。

青銅鏡における各部位の名称は定まっていないが、類似した形態の甬鐘における名称を用いる。甬鐘の諸部位に関する名称は『周礼』考工記に、「甬氏為鐘。兩欒謂之鈇、鈇間謂之于、于上謂之鼓、鼓上謂之鉦、鉦上謂之舞、舞上謂之甬、甬上謂之衡。鐘懸謂之旋、旋虫謂之幹。鐘帶謂之篆、篆間謂之枚、枚謂之景。于上謂之遂。」と記載されており、林氏の解釈（林 1984）を参照しつつ（図4-1）、各部位の名称を考えた（図4-2）。

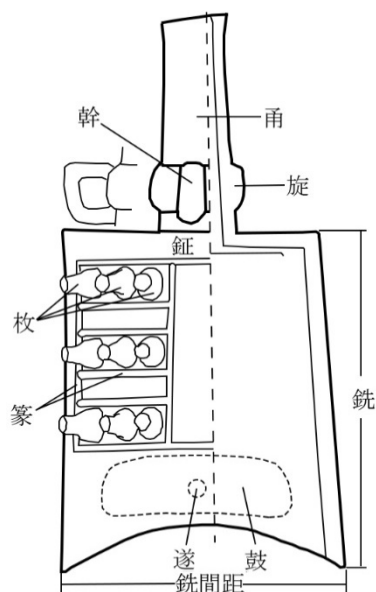


図4-1 甬鐘の各部位の名称

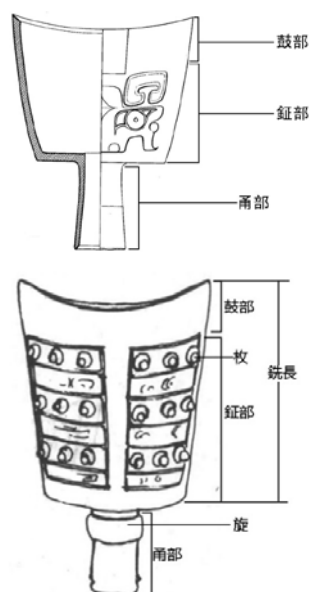


図4-2 青銅鏡の各部位の名称

2、形式設定

まず、器高によって二種類に分ける。図4-3によると、器高は16～20cmや41～45cmにピークが見られ、その間に不連続が看取される。そこで、30cm以下のものを小型青銅鏡、31cm以上のものを大型青銅鏡と呼ぶ。

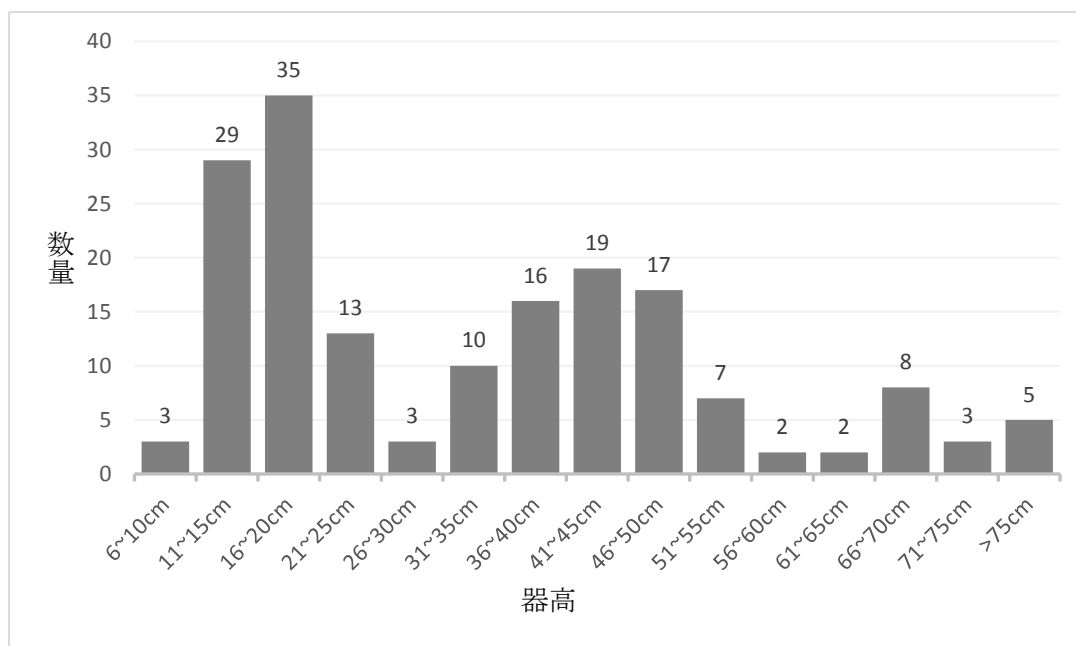


図 4-3 青銅鏡の器高と数量の相関

次に各々を細分しよう。プロポーションにより、小型青銅鏡は、鼓部、鉦部、甬部から構成されるが、鉦部文様が最も顕著な特徴であり、鉦部文様で分類することが妥当であろう。鉦部文様の変化系列は2つあり、凸線文の青銅鏡をA型、獣面文の青銅鏡をB型とする。

大型青銅鏡も小型青銅鏡と同じ要領で、鉦部文様から3系統に区分できる。獣面文を施す青銅鏡をA型、獣面両目が突出する青銅鏡をB型、枚が付く青銅鏡をC型とする。それぞれの系譜の型式変化について以下に記述する。なお以下では、小型（大型）青銅鏡A型式は「小A型」（「大A型」）のように記す。

3、青銅鏡の属性抽出

(1) 小型青銅鏡

A型では、鉦部文様の枠数が1つの二重凸線文（図4-4-あ）から、横並びに2枠の二重凸線文（図4-4-い）への変化が想定できる。甬部では、その断面形が台形（①）から長方形（②）に変化し、口縁形態は弧状（a）から平坦（b）化する。

B型では、鉦部文様における獣面の各パーツが分解していく変化が想定できる。獣面文の目部は、写実的な目（あ）から、瞳を残っている

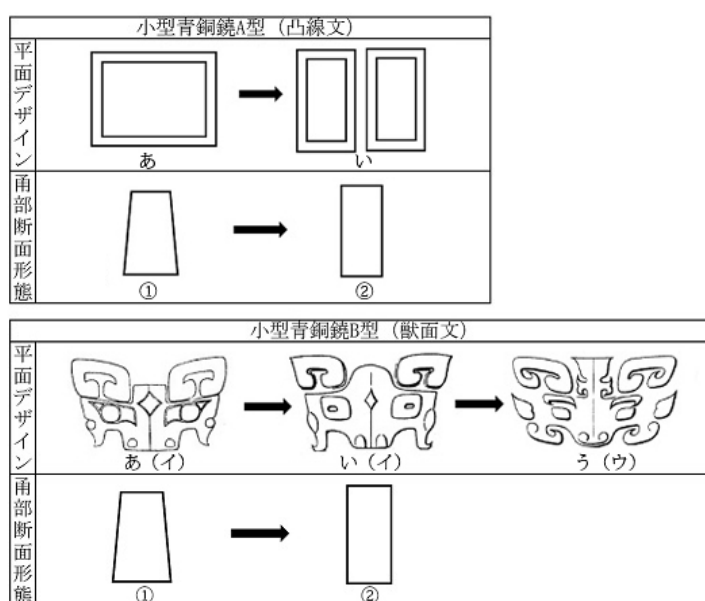


図 4-4 小型青銅鏡の属性変異

もの(い)を経て、瞳を失って全体が突出(う)するようになる。額は、「几」字形¹⁵(ア)から「几」の真ん中に、隆起する四辺形を表現(イ)するようになる。さらに、四辺形の両側が発達し、眉より高くなり、「十」字形(ウ)へと変化する。甬部断面形はA型と同じく、甬部の縦断面形が台形(①)から長方形(②)になる。口縁形態は弧状口縁のみであるが、型式変化の方向が想定できない。

(2) 大型青銅鏡

A型の鉦部文様の技法は、浮き彫りで無地文のものから、高凸地文を有するものへと変化する。また、獣面が徐々に退化し、線條化する。これは殷文化と西周文化における文様表現の差異、すなわち獣面文から幾何文様へという変化と軌を一にするものである。甬部断面形は、旋部の有無、そしてその断面形(長方形(ア)、旋付きの長方形(イ)、旋付きの逆台形(ウ))に変化の流れを想定できる。鉦鼓部の施文範囲は、当初、鉦部および正鼓部に限られる(あ)が、鉦部、鼓部の全域施文(い)へと変化していく。さらに、正鼓部の両側(側鼓部)にも動物文様を添える(う)ようになる。

B型については、勾連雷文を主体とするBa型、連珠文を主体とするBb型、雲雷文を主体とするBc型という3つの系列に区分できる。

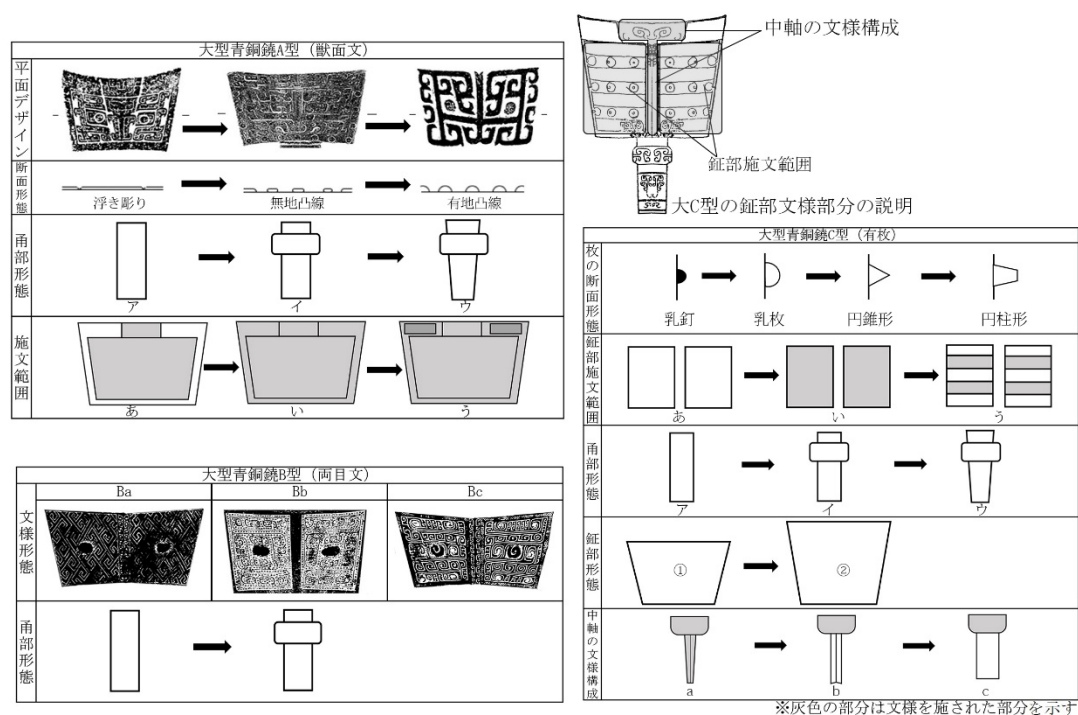


図4-5 大型青銅鏡の属性変異

Ba型は二点しかなく、形態、文様デザインなどがほぼ同じであり、型式変化を想定しにくい。Bb型とBc型では甬部旋の有無により、A型と同様の変化が想定できる。

C型は鉦部に枚を持つもので、枚と関連する属性において変化が想定できる。まず、無枚から乳釘を経た、有枚への変化が学史上指摘されている(高1993、彭1996)。少し細かくみると、断面半円形の乳釘から、肥大化して乳枚になる。さらに、断面三角形の円錐枚、そして円柱枚へと変化する。青銅甬鐘の音楽性に関する研究では、円柱枚が付く青銅甬鐘では、リズムの調整、複合音が可能になるという(華・賈1983、朱鳳2009)。青銅甬鐘と

¹⁵ 小B型の「額」の形態は四辺形が隆起しない実測図が見られなく、写真も見にくい、顕著的隆起によって判断せざるを得ない。さらに、獣目の差異によって、少なくとも3つパターンがあることが想定できる。

同じように、青銅鏡でも音楽的機能改善のため、断面形態が台形の円柱枚へと変化していくと想定される。鉦部文様は無文（あ）から鉦面全体（い）への施文を経て、甬鐘のような篆部が生まれ、そこに施文するようになる（う）。甬部形態は、長方形（ア）から、旋付き長方形（イ）、旋付き逆台形（ウ）へと変化する。また、鉦部形態が短太いもの（①）から細長く（②）なる¹⁶。中軸部では、施文範囲が変化ししていく。最初、正鼓部と同様の雲文を施し（a）、凸線文を経て（b）、甬鐘のような無文（c）になっていく。

4、小型青銅鏡の属性相関および型式設定

（1）小型青銅鏡A型（表4-1）

表1では、1枠「回」字線文を施し、甬部断面形が台形であるものが多い。資料数の少なさは否めないが、2枠「回」字線文、甬部断面形が長方形であるものに変化していくことがわかる。一方で表2は、口縁形態と鉦部文様の相関性の低さを示している。

表3では一定の相関が得られた。すなわち、断面台形で弧状口縁のものから、断面長方形で平状口縁への変化である。断面台形、平状口縁の2点は、中間形態であると考えられる。そこで、以下のように型式を設定する。

小A1式：1枠「回」字線文、弧状口縁、甬部断面形が台形であるもの（図4-6-1）。

小A2式：2枠「回」字線文、平状口縁、甬部断面形が長方形であるもの（図4-6-2）。

（2）小型青銅鏡B型（表4-2）

表5、6では、獣目「あ、い」、額「ア、イ」は甬部断面形が台形のものとの相関、獣目「う」、および額「ウ」は甬部断面形が長方形のものとの相関する。ただし、甬部断面形が台形のものが多い。一方で、表4の獣目と額の相関は比較的良好で、偏りが少ない。そこで、以下の3型式を設定する。

小B1式：額が「几」字形、獣目が眼白をもつ写実な目であり、甬部断面形が台形であるもの（図4-6-3）。

小B2式：額が「几」字形であり、その真ん中に隆起する四辺形が顕著化となり、獣目が瞳しか残らなく、眼白が無くし、甬部断面形が台形であるもの（図4-6-4）。

表4-1 小A型の属性相関

表1

甬部断面形	鉦部文様	
	あ	い
①	16	
②	2	3

表2

口縁形態	鉦部文様	
	あ	い
a	14	
b	4	3

表3

甬部断面形	口縁形態	
	a	b
①	14	2
②		5

表4-2 小B型の属性相関

表4

額の形態	獣目の形態		
	あ	い	う
ア	17	1	
イ	10	23	1
ウ			3

表5

甬部断面形	獣目の形態		
	あ	い	う
①	26	26	
②			3

表6

甬部断面形	額の形態		
	ア	イ	ウ
①	18	34	
②			3

¹⁶ 鉦部では平面形態の変化に注目する。銑間距÷銑長によって平面形を把握した。例えば図4-7-9の場合、29 cm ÷ 27 cm = 1.07 であり、図4-7-12の場合、24 cm ÷ 25.7 cm = 0.93 であり、細長くなる傾向が想定できる。

小 B3 式：額が「十」字形であり、獣目の瞳が失い、円目となっており、甬部断面形が長方形であるもの（図 4-6-5）。

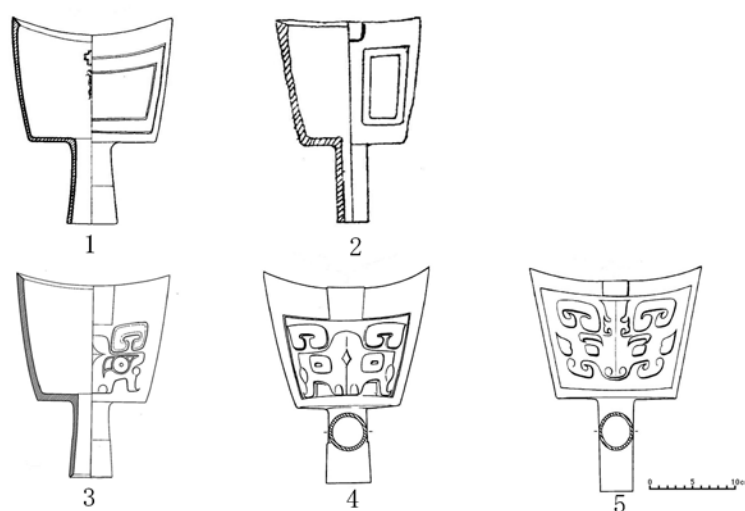


図 4-6 小型青銅鏡の型式

1、小屯 M5（A1 式） 2、大司空村 M51（A2 式） 3、滕州前掌大墓地 M206（B1 式） 4、太清宮長子口墓 M1:145（B2 式） 5、太清宮長子口墓 M1:152（B3 式）

5、大型青銅鏡の属性相関および型式設定

（1）大型青銅鏡 A 型（表 4-3）

表 7 では文様技法と施文範囲は正の相関を示す。表 8 でも、甬部断面形と施文範囲の複雑化はほぼ正の相関を示している。表 9 も同様である。したがって、大 A 型における鉦部の文様技法、範囲、甬部の断面形は、いずれも上記の変化を辿るものと考えられ、3 型式を設定する。

大 A1 式：浮き彫り無地文の鉦部文様、無旋長方形の甬部、施文範囲が狭いもの（図 4-7-1）。

大 A2 式：平凸有地文、旋付き長方形甬部、施文範囲が広く側鼓部に動物文様が無いもの（図 4-7-2）。

大 A3 式：高凸有地文、旋付き逆台形甬部、施文範囲が広く、側鼓部に動物文様があるもの（図 4-7-3）。

表 4-3 大 A 型の属性相関

表 7

施文範囲	文様技法		
	浮き彫り	無地凸線	有地凸線
あ	2		
い		19	
う			5

表 8

甬部断面形	施文範囲		
	あ	い	う
ア	2	1	
イ		14	1
ウ		3	3

表 9

甬部断面形	文様技法		
	浮き彫り	無地凸線	有地凸線
ア	2	1	
イ		14	
ウ		3	4

（2）大型青銅鏡 B 型

大 B 型の鉦部では、両目を突出する獣面文の目が現され、鉦部に充填するように、地文が施される。地文には勾連雷文（Ba 型）、連珠文（Bb 型）、雲雷文（Bc 型）があり、これによって 3 区分する。Ba 型は二点しかなく、形態、文様デザインなどがほぼ同じであり、

型式変化を想定しにくい。Bb 型と Bc 型では甬部断面形によって、A 型と同様の変化が想定できる。そこで、以下のように型式設定を行う。

大 Ba 式：地文が勾連雷文であり、甬部断面形が無旋長方形であるもの（図 4-7-4）。

大 Bb1 式：地文が連珠文であり、甬部断面形が無旋長方形であるもの（図 4-7-5）。

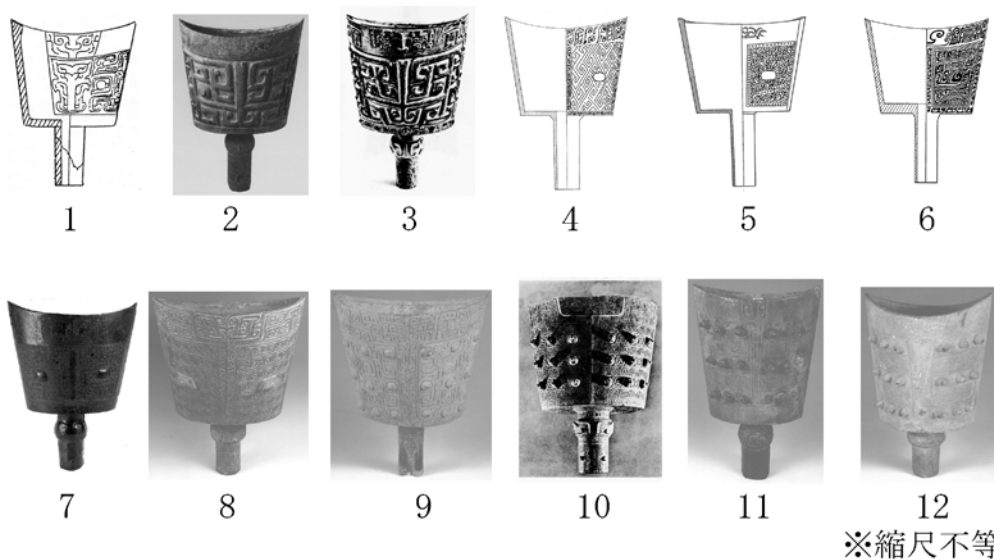
大 Bb2 式：地文が連珠文であり、甬部断面形が有旋長方形であるもの（図 4-7-7）。

大 Bc1 式：地文が雲雷文であり、甬部断面形が無旋長方形、鉦部全体を施文するもの（図 4-7-6）。

大 Bc2 式：地文が雲雷文であり、甬部断面形が有旋長方形、鉦部全体を施文するもの（図

表 4-4 大 C 型の属性相関

表10				
施文範囲	枚の断面形			
	乳釘	乳枚	円錐形	円柱形
あ	2			
い	3	15		
う			19	18
表11				
甬部断面形	枚の断面形			
	乳釘	乳枚	円錐形	円柱形
ア	4	1		
イ	1	13	5	3
ウ		1	9	15
表12				
鉦部平面形	枚の断面形			
	乳釘	乳枚	円錐形	円柱形
短	5	16		
長			19	18
表13				
中軸文様	枚の断面形			
	乳釘	乳枚	円錐形	円柱形
a	4	15		
b			19	
c				18
表14				
甬部断面形	施文範囲			
	あ	い	う	
ア	4			
イ	1	12	8	
ウ		2	24	
表15				
中軸文様	施文範囲			
	あ	い	う	
a	△	18		
b			19	
c			18	
表16				
鉦部平面形	施文範囲			
	あ	い	う	
短	2	18		
長			38	
表17				
鉦部平面形	甬部断面形			
	ア	イ	ウ	
短	5	12	2	
長		8	24	
表18				
中軸文様	甬部断面形			
	ア	イ	ウ	
a	2			
b	3	15	2	
c		8	24	
表19				
鉦部平面形	中軸文様			
	a	b	c	
短	4	15		
長		1	37	



※縮尺不等

図 4-7 大型青銅鐃の型式

- 1、陽新白沙郷（A1 式） 2、寧郷老糧倉師古寨（A2 式） 3、寧郷老糧倉李家湾（A3 式）
 4、新干大洋洲 13923 号（Ba 式） 5、新干大洋洲 13921 号（Bb1 式） 6、新干大洋洲 13922 号（Bc1 式） 7、上海博物館蔵（Bb2 式） 8、寧郷三畝地（Bc2 式） 9、湘郷黃馬塞（C1 式）
 10、長興上草楼（C2 式） 11、湖南博物館蔵（C3 式） 12、資興天鵝山（C4 式）

4-7-8)。

(3) 大型青銅鏡C型(表4-4)

表10～19は、上記の諸属性を相関させたものである。いずれもおおよそ正の相関を示し、特に枚の断面形がより細かい変化を示している。また、甬部断面形によって乳釘、乳枚に分けられ、中軸部の文様構成がさらに、円錐枚、円柱枚に分けられる。そこで、枚の断面形を中心に、以下のように型式設定をする。

大C1式：乳釘を持つ短い鉦体であり、甬部に旋部がなく、断面長方形で、鉦部の施文範囲が全体的に拡散しないもの(図4-7-9)。

大C2式：乳枚を持つ短い鉦体であり、甬部に旋部があり、断面長方形で、中軸の文様範囲が狭く、鉦部の施文範囲が全体的に拡散するもの(図4-7-10)。

大C3式：円錐枚を持つ長い鉦体であり、甬部に旋部があり、断面長方形で、中軸の文様範囲が狭く、鉦部の篆部に施文するもの(図4-7-11)。

大C4式：円柱枚を持つ長い鉦体であり、甬部に旋部があり、断面逆台形であり、中軸の文様範囲が拡大しつつ、鉦部の篆部に施文するもの(図4-7-12)。

表 4-5 大型青銅鏡の型式分類の対応表

本論の分類		小A1式	小A2式	小B1式	小B2式	小B3式	本論で扱わない型式※
従来の分類							
殷・曹淑琴氏の分類 (1989)	無旋	中原Ⅰ型		中原Ⅱ型			
	有旋						中原Ⅲ型
朱鳳瀚氏の分類 (1995)	凹口	○		○			
	平口		○				獣面文鏡
李純一氏の分類 (1998)	短体	I 1a式					I 1b式、I 2式、I 3式
	長体	II 1a式	II 2a式	II 1a式			II 1b式、II 2b式

※殆ど収蔵品、伝世品である。出土品に見られない属性があり、検証が困難である。

○は存在を示す

表 4-6 大型青銅鏡の型式分類の対応表

本論の分類		大A1式		大A2式		大A3式		大Ba式	大Bb1式	大Bb2式	大Be1式	大Be2式	大C1式		大C2式	大C3式		大C4式	
従来の分類																			
殷・曹氏の分類（1989）	湖南型	1式		2式				1式		2式	1式	2式	3式		4式				
	江浙型																		
高至喜氏の分類（1993）		BⅢ式		A型、BⅠ～Ⅱ式			CⅡ式	BV式			CⅢ式	CⅠ式	DⅠ～Ⅱ式	EⅡ式	EⅢ～Ⅳ式		EV式		
施勁松氏の分類（1997）		C型Ⅰ式		CⅡ～Ⅲ式			AⅢ式	AⅠ～Ⅱ式			AⅣ式	AⅤ式	BⅠ式	BⅡ式	甬鐘Ⅰ式				
朱鳳瀚氏の分類（1995）		Ⅰ式					Ⅰ式				Ⅰ式			Ⅱ式		Ⅲ式			
李純一氏の分類（1998）		Ⅰ1a式		Ⅰ2a式				Ⅰ1b式				Ⅰ2b式	Ⅱ1a式	Ⅱ1b式		Ⅱ2式	Ⅲ2式		
彭適凡氏の分類（1998）				A型			BⅢ式	BⅠ式			BⅡ式		C型	DⅠ式	DⅡ式	EⅠ式	EⅡ式	EⅢ式	
向桃初氏の分類（2008）	無枚	AⅠ式	AⅡ式	AⅢ式	BbⅡ式	BbⅢ式		CⅠ式	BaⅠ式	BaⅡ式	CⅠ式	CⅡ式							
	乳釘												Ⅰ式		Ⅱ式				
	有枚														AⅠ～Ⅱ式	BⅠ式	AⅢ式	BⅡ式	
熊建華氏の分類（2013）	無篆		AaⅠ式	AaⅡ式	AbⅡ式	CbⅡa式	BbⅠ式	BaⅠa式	BaⅡ式	BaⅠb式	BbⅡ式	Bc型	Bd型						
	有篆														AⅠ式	AⅡ～Ⅲ式	B型、C型、D型	AⅣ式	
	その他	CaⅠ式																	

第2節 青銅鏡の編年

上述のように、設定した各型式の共伴関係を一括資料に求めるほか、中原青銅器の編年研究も参照する。さらに新干大洋洲商墓の年代も検討する。

1、小型青銅鏡

小A1式は婦好墓で出土したのみならず、高樓莊8号墓、温県小南張墓でも発見された。一括遺物の編年により、婦好墓は殷墟2期後半に相当するが、温県小南張は殷墟3期である（楊錫璋 1985）。また、鄒氏の編年研究では地層の切合関係および土器様式により、小A2式が出土した大司空51号墓は殷墟4期に相当する（鄒衡 1980）。一方、常氏の資料集成では、殷墟以外の遺構である温県小南張を殷墟2期後半に位置づけ、惠民大郭遺跡は殷墟3期、殷墟の大司空51号墓を殷墟3期に位置づける（常 2014）。以上から、小A1式は、殷墟2期に出現し、殷墟3期まで存続したと考えられる。小A2式は、少なくとも殷墟3期から出現する。本論では、鄒氏の墓の編年によって、殷墟4期とするのが妥当であろう。

小B型青銅鏡については、殷墟2期後半の大司空663号墓、郭家莊26号墓で小B1式が発見された（中国社会科学院考古研究所 1998）。また、殷墟3期に属する大司空312号墓、殷墟4期の殷墟西区699号墓にも同型式がある（中国社会科学考古研究所 1979）。一方、小B2式は、殷墟3期に相当する郭家莊160号墓に見られる（楊錫璋 1991、中国社会科学院考古研究所 1998）。

さらに、鹿邑太清宮1号墓では、小B1式、小B2式、小B3式が共伴していた（河南省文物考古研究所 2000）。この他、小B1式、小B2式の共伴関係は知られない。型式変化としては、小B1式、小B2式は小B3式より早く、鹿邑太清宮1号墓の年代である西周初年は小B3式の年代とできよう。一括資料からみると、鹿邑太清宮1号墓の青銅器の製作年代は殷末周初期に遡られる可能性がある（河南省文物考古研究所 2000）。

まとめると、小B1式が殷墟2期に、小B2式が殷墟3期に出現し、小B3式の上限年代が殷末周初期であり、以上の型式変化とも矛盾しない。

2、大型青銅鏡

複数の大型青銅鏡を出土状況した遺構としては以下が挙げられる（表4-7）。湖北陽新遺跡では大A1式、大Bb1式（咸寧博物館 1981）、新干大洋洲商墓では大Ba式、大Bb1式、大Bc1式

（江西省文物考古研究所 1997）、江西永修遺跡では大Bb1式、大C1式（徐長

表4-7 大型青銅鏡の共伴関係

大型青銅鏡の共伴関係	大A型	大B型	大C型
湖北陽新埋納遺構	大A1式	大Bb1式	
江西永修埋納遺構		大Bb1式	大C1式
新干大洋洲商墓		大Ba式、大Bb1式、大Bc1式	
寧鄉老糧倉埋納遺構	大A2式		大C2式

青 2002）、寧鄉老糧倉遺跡で大A2式、大C2式（黃綱正 1997）の共伴が認められる。新干大洋洲商墓以外、すべて埋納遺構である。

上述の共伴関係を考えると、大A1式、大Bb1式、大C1式、大Ba式、大Bb1式がほぼ同時期と認められるが、大A1式、大C1式の共伴関係がない以上、時期差を含んでいる可能性もある。そこで、大Ba式、大Bb1式、大Bc1式が共伴する新干大洋洲商墓の年代を検討したい。

新干大洋洲商墓で見られた硬質土器は、呉城文化第二期の土器に類似し、殷墟 3、4 期に併行する（彭 2005）。また、本墓地の C14 年代は、殷墟 3 期に相当する（江西省文物考古研究所 1997）。本墓に関しては、華中型扉稜を持つ青銅器から、長期使用の可能性が示され、西周中期に至る一方（林 1994）、難波氏が華中型扉稜が長い期間で存続する可能性がある（難波 1998）。また、新干大洋洲商墓の性格は殷末周初期の短期間に大量生産されたものを含み、一気に埋葬する可能性とも考えられている（末房 1998、山本 2013）。したがって、新干大洋洲商墓の年代幅が殷墟 3 期～殷末周初期と考えられ、ここに含まれる大型青銅饒 Ba、Bb1、Bc1 は、少なくとも、殷墟 3 期から生まれ、殷末周初期に新干大洋洲の在地生産ものとともに一気に埋葬することと考えられる。

さらに、中原地域の青銅甬鐘の起源に関する検討からすると、大型青銅饒は青銅甬鐘より早く出現する（林 1981、宮本 2020）。また、西周時代の晋侯蘇編鐘 16 点の中には、干部がなく、篆部、旋部が出現した大型青銅饒、および西周中期の青銅甬鐘が認められる（高 1997）。これらの晋侯蘇編鐘の一つ（高氏の型式設定による A 型 1 式）は、本論の大 C3 式に類似し、大 C3 式の年代を西周前期後半とできる。とすると、型式変化の前後関係から、大 C2 式が西周前期前半、大 C4 式が西周中期とできる。また、大 C2 式との共伴関係がある大 A2 式（寧郷老糧倉遺跡）も西周前期前半に併行する。そして、これに前出する大 A1 式は西周期以前の可能性が高く、また大 Bb1 式とも共伴する（湖北陽新遺跡）ので、殷墟 4 期に位置づけることが妥当であろう。

3、青銅饒の編年

以上をまとめると、青銅饒の各型式は図 4-8 のように変化する。型式の出現に基づいて、殷墟 2 期から西周中期までの全体を四時期 6 段階に区分した。各年代は中原青銅器の相対年代を参考にした。

饒Ⅰ期は小 A1 式、小 B1 式、小 B2 式の発生期であり、殷墟 2、3 期に併行する。

饒Ⅱ期は小 B3 式、小 A2 式および大型青銅饒の出現を指標としている。小型青銅饒と大型青銅饒の年代差から、本期を饒Ⅱ-1 期、Ⅱ-2 期に区分することができる。第Ⅱ-1 期は殷墟 4 期に併行し、第Ⅱ-2 期は新干大洋洲商墓（殷末周初期）に併行すると考えられる。

饒Ⅲ期は小型青銅饒の消滅と大型青銅饒の甬部旋の出現（大 C2、大 A2 式）を基準とする。西周前期前半に併行する。

饒Ⅳ期には時期を判定できる一括遺物がないが、大 C 型に篆部の出現、および青銅甬鐘の出現年代を基準としており、西周前期後半～西周中期併行である。2 段階に分けられ、饒Ⅳ-1 期は大 C3 型に篆部の出現を指標とし、西周前期後半に併行、饒Ⅳ-2 期は、甬鐘と類似する大 C4 型を指標とし、年代下限はおそらく西周中期に併行する。

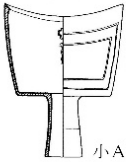
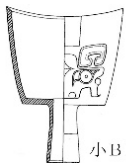
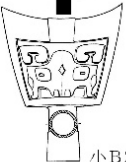
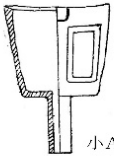
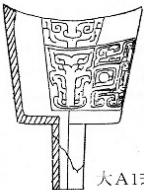
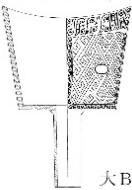
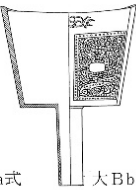
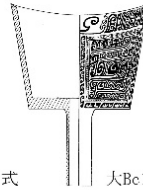
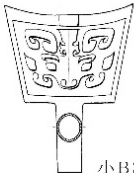
編年		小型青銅鏡		大型青銅鏡				
		A型	B型	A型	Ba型	Bb型	Bc型	C型
殷墟Ⅱ期 ～殷墟Ⅲ期	鏡Ⅰ期	 小A1式	 小B1式					
			 小B2式					
殷墟Ⅳ期 ～殷末周初期	鏡Ⅱ-1期	 小A2式		 大A1式	 大Ba式	 大Bb1式	 大Bc1式	
	鏡Ⅱ-2期		 小B3式				 大C1式	
西周前期前半	鏡Ⅲ期			 大A2式	 大Bb2式	 大Bc2式	 大C2式	
	鏡Ⅳ-1期			 大A3式			 大C3式	
西周前期後半 ～西周中期	鏡Ⅳ-2期						 大C4式	

図 4-8 青銅鏡の編年

第3節 殷周時代における青銅鏡の分布状況

1、鏡Ⅰ期

鏡Ⅰ期には、中原地域において小型青銅鏡が出現する。小A1式、小B1式の数量が圧倒的に多い。この段階では、小型青銅鏡のみが見られ、青銅鏡の初現期である。分布範囲は黄河中下流域で、黄河中流域の殷墟遺跡が中心地である¹⁷。これらの小型青銅鏡が周辺地域へ拡散していくと考えられる。また、近年、安徽省寿县蒼陵城遺跡で小A2式青銅鏡が採集されたが（朱 2019）、安徽省までには広がることがわかるが、長江流域では受容されていない状況を示すものである。

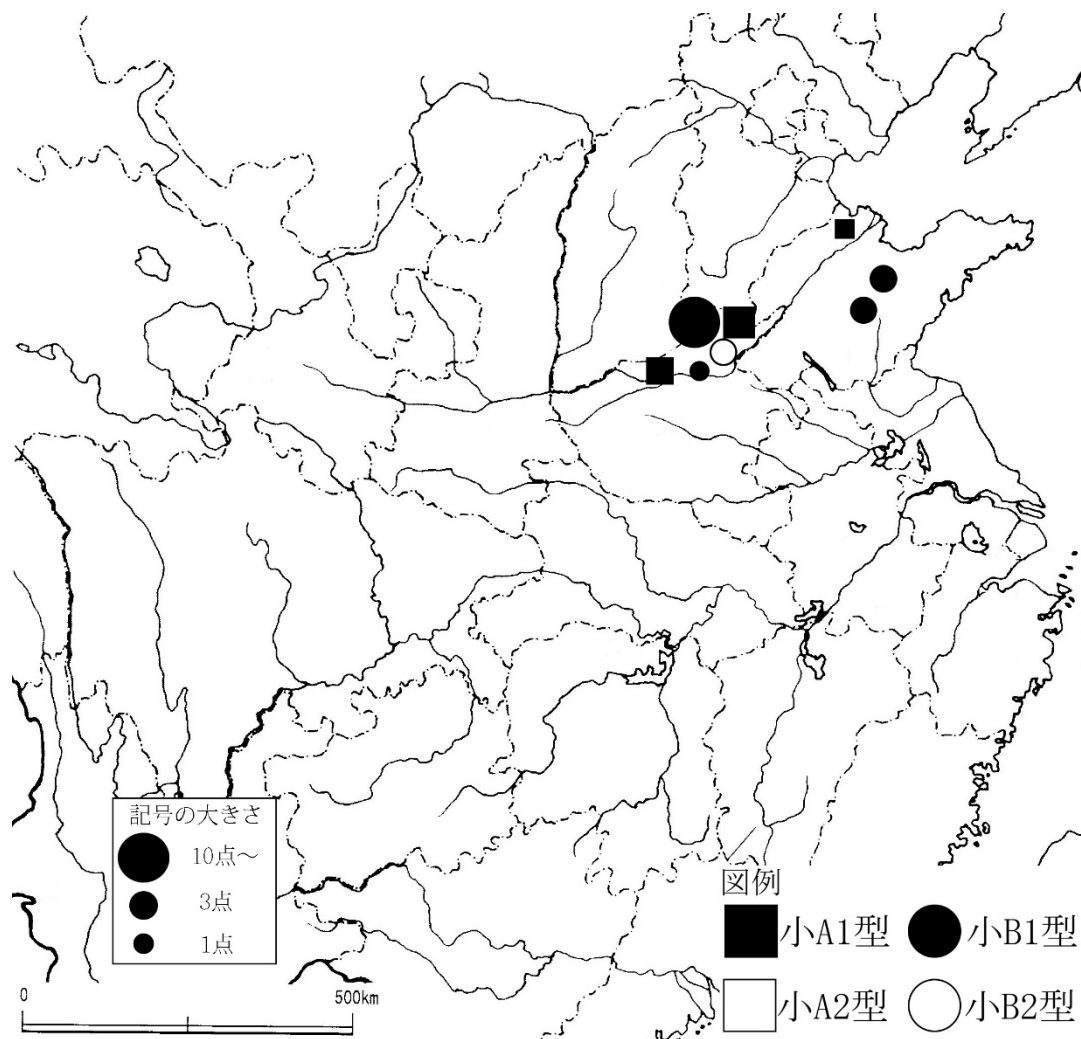


図4-9 鏡Ⅰ期における青銅鏡の分布状況

¹⁷ 図4-9の小さい点のところが遺跡内の採集品である。時期が判断できる遺跡が山東省惠民大郭遺跡であり、殷墟Ⅲ期に相当する（常 2014）。これは、近年、殷墟Ⅲ期に相当する安徽省寿县蒼陵城遺跡の採集品（朱 2019）に類似性が見られ、殷墟以外の地域に拡散していることが明らかにするのではないかと考えられる。

2、饒Ⅱ-1期

黄河流域がおおよそ饒Ⅰ期に類似した状況であるが、数量が減少する傾向にある。山東省に位置する滕州前掌大墓地の M206 の小 B2 式が出土している（中国社会科学院考古学研究所 2005）。一括資料によって、墓の年代が西周前期に相当する（常 2014）が、設定した型式の年代が殷墟 4 期から出現する¹⁸。一方、長江流域では大型青銅饒が出現しており、大型青銅饒の初現期である。長江流域における大型青銅饒は、黄河流域のように副葬されるのではなく、埋納された¹⁹。この段階には、長江中流域で大型青銅饒の殆どの型式が出そろい、数量も多く、分布の中心地が見られないが、長江中流域の東側の数量が比較的に多いものを看取する。長江下流域の大型青銅饒は、長江中流域からの影響と考えられる。

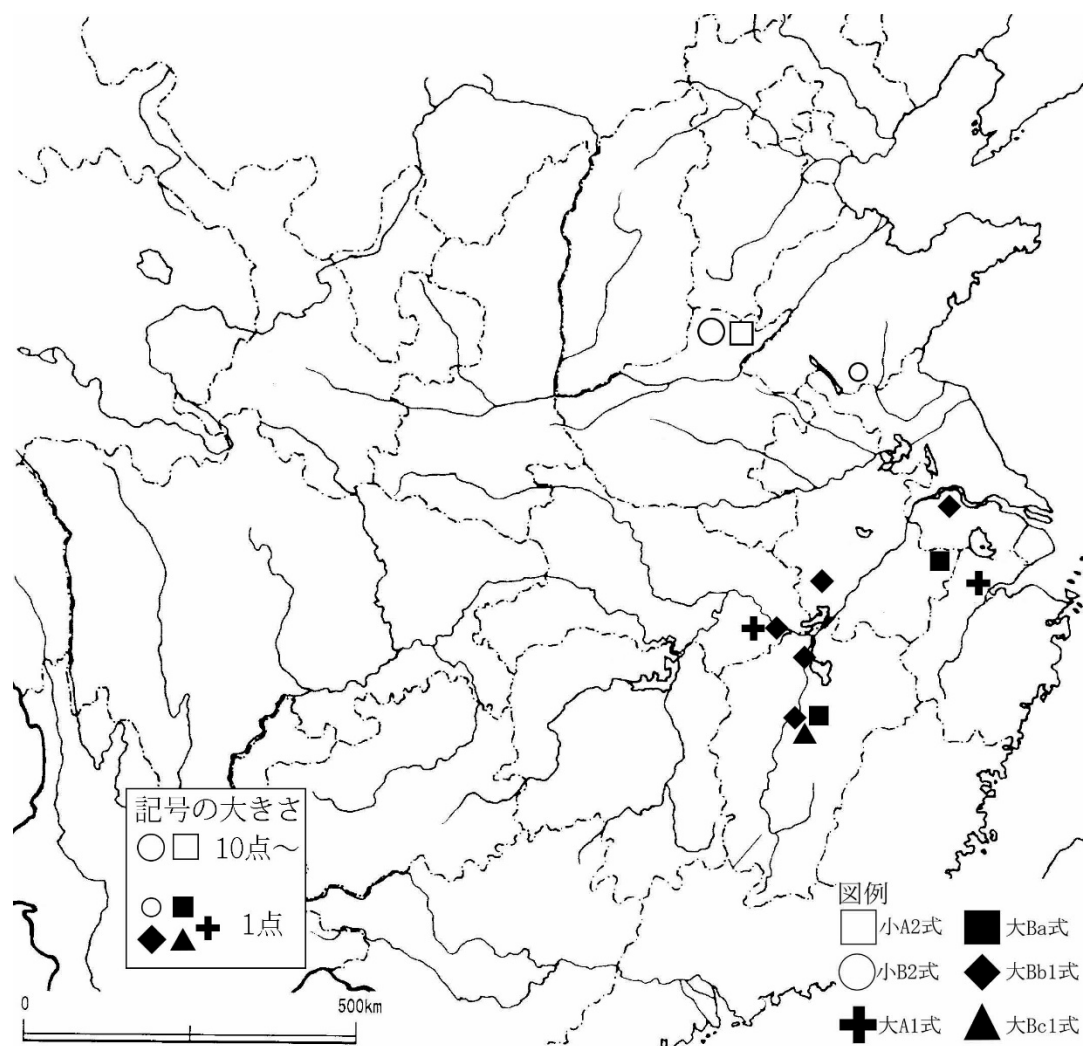


図 4-10 饒Ⅱ-1 期における青銅饒の分布状況

¹⁸ 山東省滕州前掌大墓地の M206 の小 B2 式が出土している（中国社会科学院考古学研究所 2005）。一括資料によって、墓の年代が西周前期に相当する（常 2014）が、墓の年代を判断するのは小型青銅饒を基準とすることではない。

¹⁹ 贛江中流域に位置する新干大洋洲遺跡が墓であるが、祭儀場として墓と見なされ、中原の墓に異なり、在地特徴を看取する（山本 2013）。また、この墓の一括資料の時期差が存在する。

3、鏡Ⅱ-2期

鏡Ⅱ-2期には中原地域で小B3式が出現する²⁰。一方、長江流域では明確な出土資料が少ないものの、型式は前段階からの継続で、分布も長江中流域に集中している。一方で、長江中流域のうち、湘江流域での出現は、大型青銅鏡の分布範囲拡大を示している。

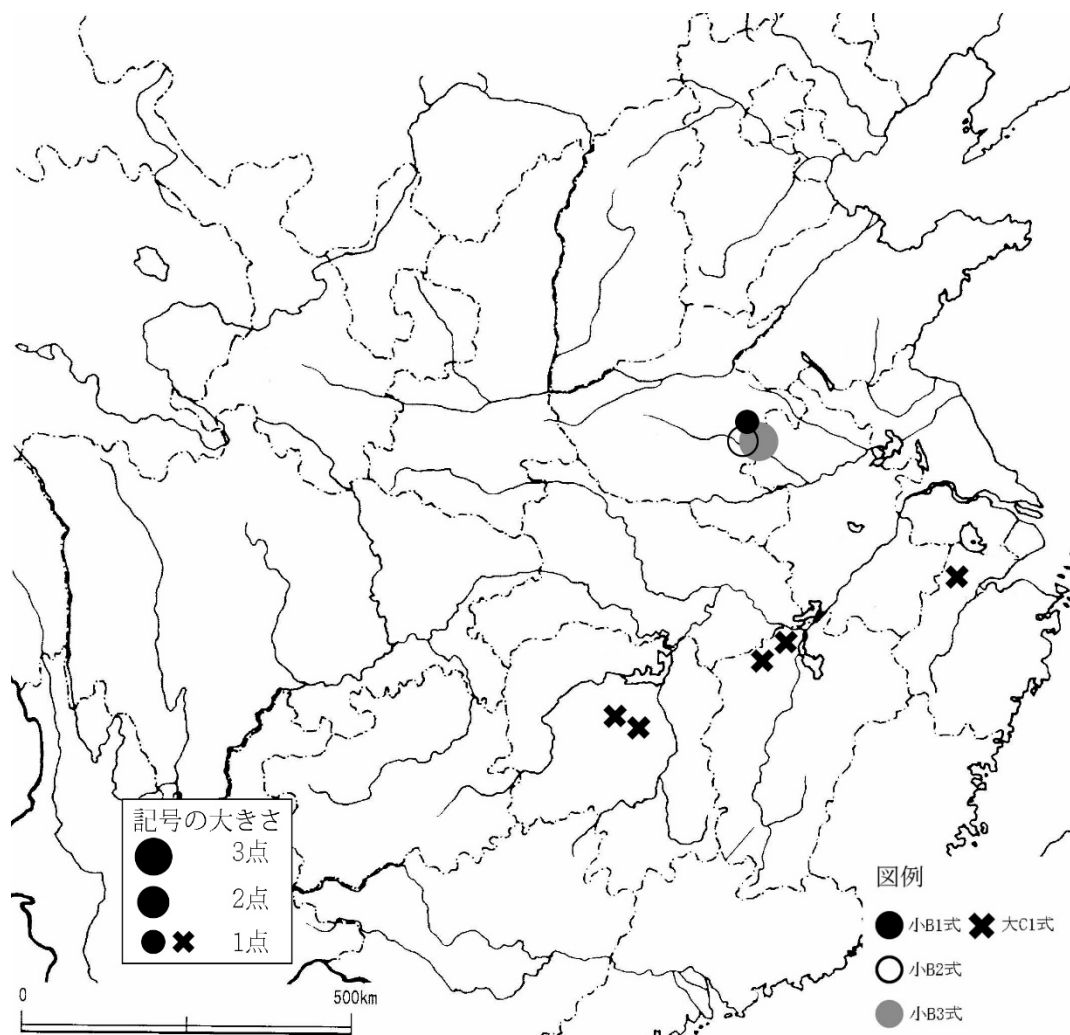


図4-11 鏡Ⅱ-2期における青銅鏡の分布状況

²⁰ 小B3式青銅鏡が河南省鹿邑長子口墓で出土し、小B1式1点、小B2式2点に共伴する。一括資料からみると、殷末周初期～西周前期頃に相当する（河南省文物考古研究所ほか 2000）。前述と同じように、墓年代を判断するのは、小型青銅鏡を基準ではないため、本章で設定した型式の年代に分布をしたい。

4、鏡Ⅲ期

小型青銅鏡は殷墟文化範囲で次第に消えるものの、西周前期後半の墓で僅かに例がある²¹。一方、大型青銅鏡は、長江中流域南岸に位置する湘江中下流域に集中するほか、江西省北西部の贛江流域、さらに長江下流域、福建省という東南地方までに波及している。

この段階は長江中流域における大型青銅鏡の発展期であり、大型青銅鏡を主体とする青銅器文化が形成されたと考えられる。その中で、湘江流域の特に寧郷地区²²が中心を占めていたのである。長江下流域で数点が出現する大A2式、大C2式は、湘江流域から長距離交流を通じて得られたものであろう。

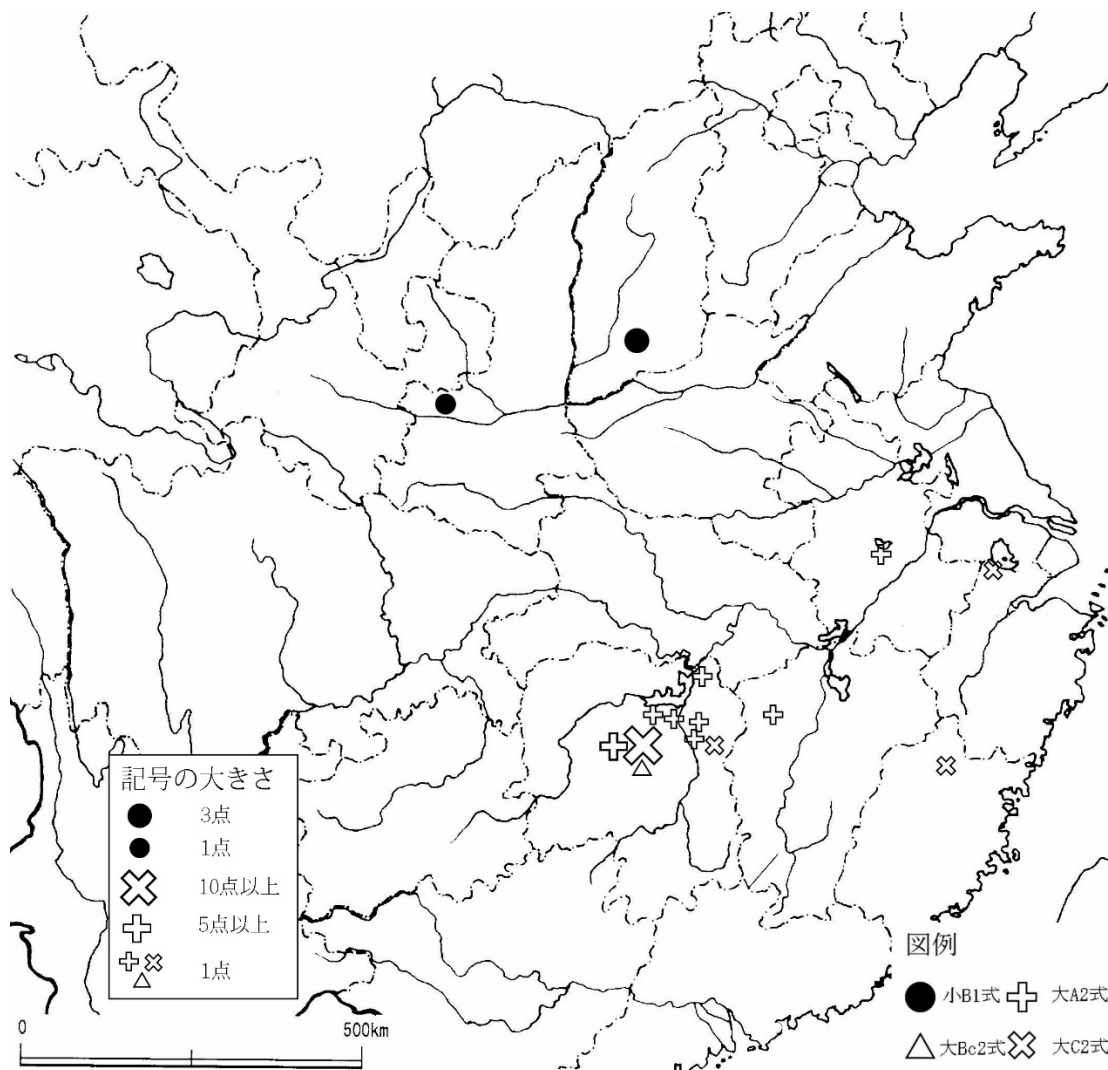


図4-12 鏡Ⅲ期における青銅鏡の分布状況

²¹ 竹園溝7号墓で1点（盧・胡1988）、翼城大河口西周墓1号墓で3点の例があり、甬鐘との共伴関係がある。（山西省考古研究院ほか2020）。しかしながら、竹園溝7号墓のものが小B1式に幹部が追加する例であり、西周時代に幹部がある甬鐘の出現する背景（宮本2020）ではないかと考えられる。

²² 寧郷地区の数量が集中する一方、殆ど出土地点によって、個数埋納である。集中埋納の例（寧郷老糧倉埋納遺構）が大A2式1点と大C2式9点が共伴する（李1997）。青銅鏡の年代差が多くなく、遺構の年代も設定した型式の年代に一致することを考える。

5、鏡IV-1 期

鏡IV-1 期は小型青銅鏡が完全に消失し、大型青銅鏡の分布範囲が南に広がっていく。大A3 式は前段階の中心地である寧郷地区に限られる²³が、大C3 式は江西省西部の贛江流域および湖南省東部、南部の湘江全流域に波及している。さらに、嶺南地域にも数点が見られる。この段階では寧郷地区の優位性が失われるが、大A 型は寧郷地区にしか存在しない。各型式で流通が変化したことが指摘できる。

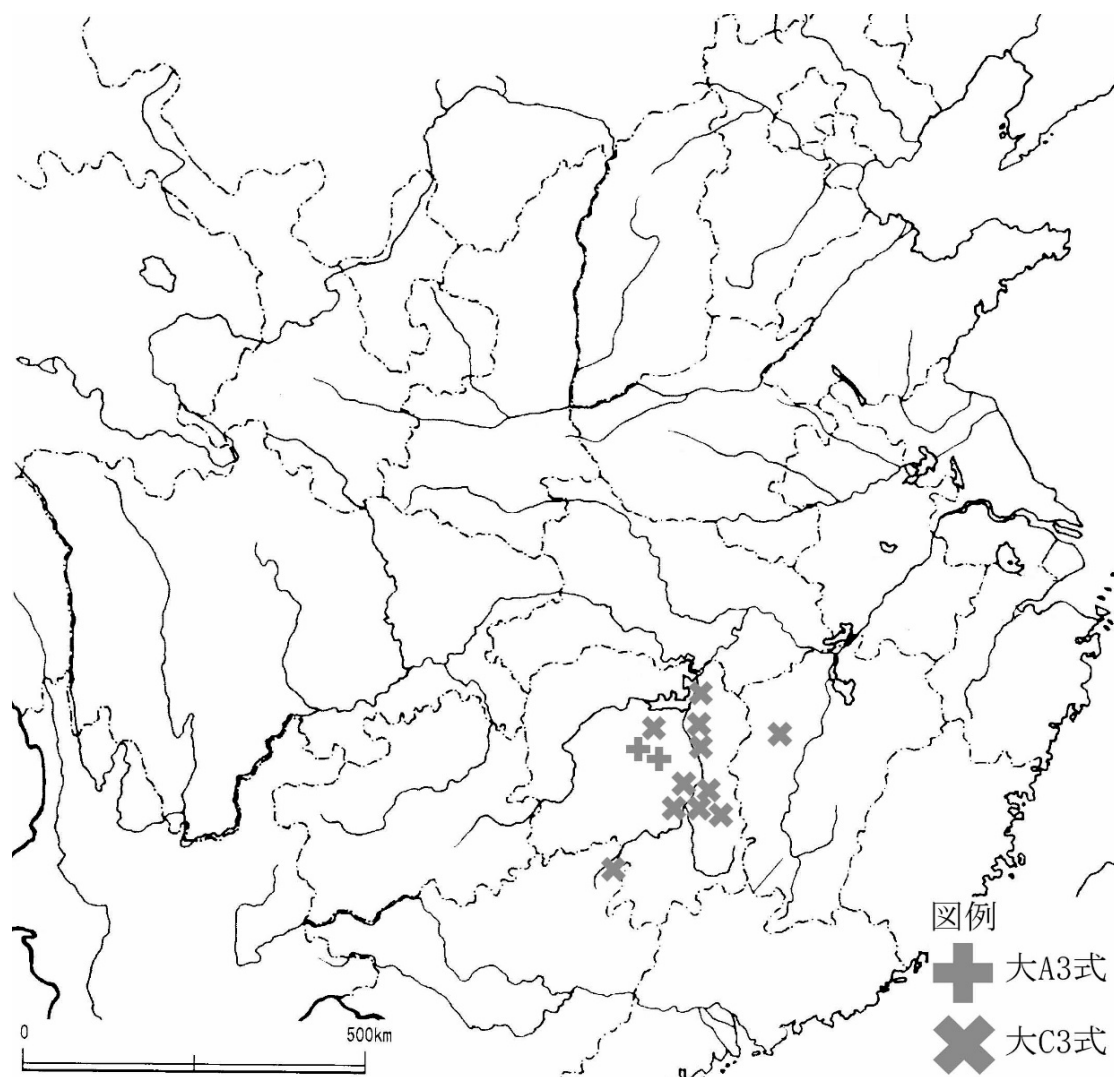


図 4-13 鏡IV-1 期における青銅鏡の分布状況

²³ 寧郷地区の集中埋納の例が見られる。大A3 式が5点であるが、装飾、動物意匠によって、個体差異が存在する。

6、鏡IV-2 期

鏡IV-2 期には大 A 型が消失し、大 C4 式が長江中流域南岸、長江中流域北岸の湖北省の東南部、すなわち江漢平原で数点出土する。また、贛江流域の出土数が増え、湘江流域とほぼ同数になる。この段階には湘江流域および贛江流域が、大型青銅鏡を通じて統合されており、湘贛青銅器文化圏といえよう。

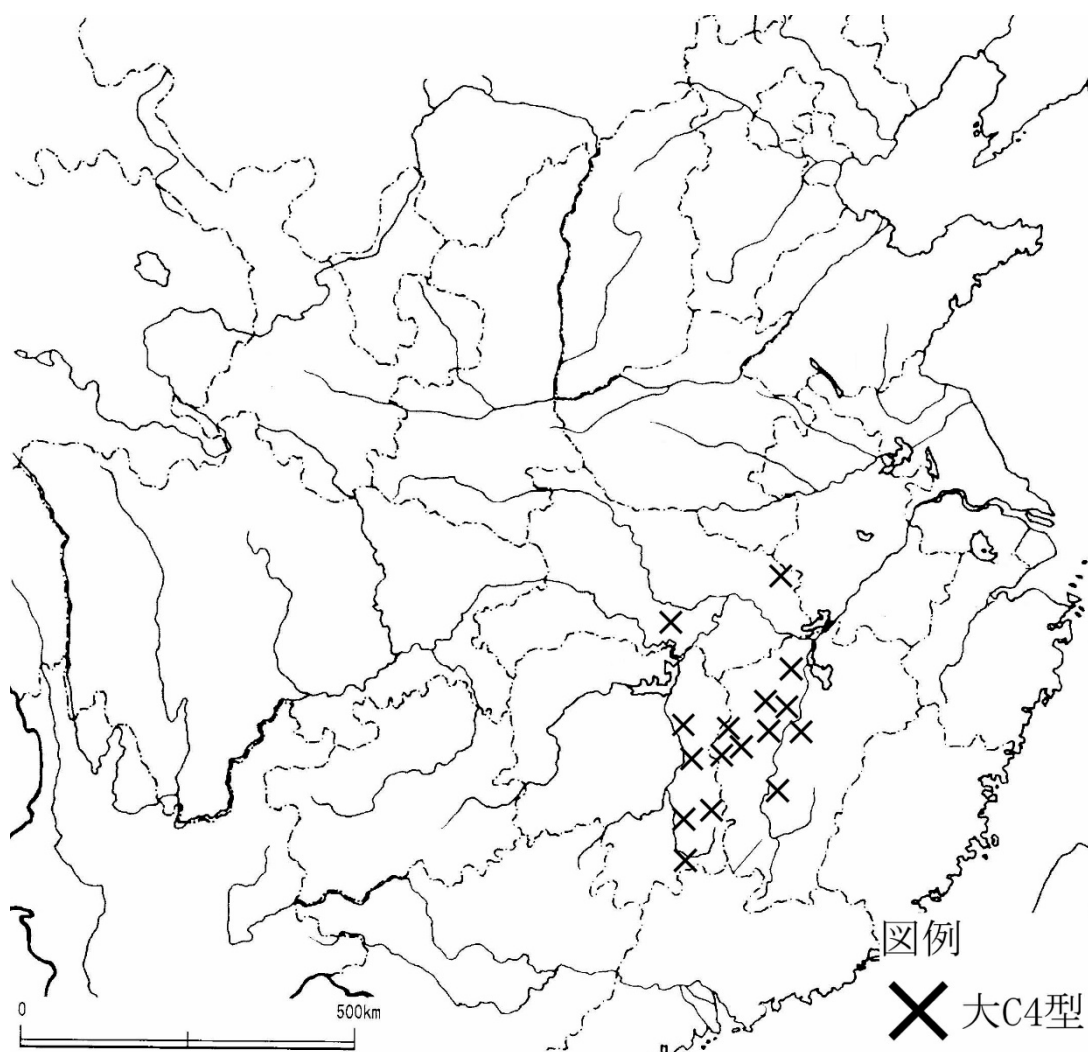


図 4-14 鏡IV-2 期における青銅鏡の分布状況

第4節 殷周時代における青銅饒の系譜とその展開

1、系譜関係からみた大型青銅饒の地域性

小型青銅饒から大型青銅饒が出現し、甬部に旋を持つようになる。二里岡段階における盤龍城遺跡の青銅鼎を、鄭州商城遺跡の青銅鼎と比較した研究から考えても（鈴木 2013）、長江中流域の青銅器は大型化する特徴を持つと言える。また、従来の小型青銅饒は手で持ちながら演奏するのに対し、大型化に伴い、床に置いて鳴らす奏法に変化していったと考えられている（李 1996）。これが、旋部が出現し、甬部形態が大型化した要因である。すなわち、床に置いた際の安定性を考慮した結果であり、旋部が土に落ち込まないようにする機能を持つと推定される。いずれにせよ、長江中流域では、中原地域とは異なる扱い方と、それに基づく形態変化を示している。



図4-15 華中型青銅器の饗饗文様（左：浮き彫り饗饗文、右：太線饗饗文）

次に、大型青銅饒の鉦部文様は、小型青銅饒とは不連続であるが、地元の華中型青銅器の文様を中原地域の小型青銅饒に融合させたことが考えられる。大A1式の鉦部文様のような浮き彫り獣面文は殷墟3期以降の文様と言われており（難波 1995）、これに関しては、中原地域の獣面文から生まれたと考えるのが自然であろう。一方で、大A1式の浮き彫り獣面文には華中型浮き彫り饗饗文（難波 1998）との類似性も見られる。具体的にいえば、大A1式の鉦部文様は、額から口にかけて、「十」字形を呈し、饗饗の胴体部分が短くなり、長江中流域の青銅尊・罍の胴部文様形態との類似性を見出せる。また殷墟4期頃の華中型浮き彫り饗饗文が次第に饗饗の意匠が失い、線條化となっている場合、大A2式、大A3式の鉦部文様に類似性を見出せる。したがって、中原地域から生まれた浮き彫り獣面文の情報を受け入れる際、華中型青銅器の浮き彫り饗饗文を経由した可能性があるだろう。つまり、

大 A 型の鉦部文様は中原由来の要素が在地化、独自に発展していったのである。

また、大 B 型の鉦部表現は区画化しており、小 A2 式と共通する。この点では、大 B 型は小 A2 式から生まれたといえる。一方で、大 B 型の連珠文、勾連雷文、雲雷文は、華中型青銅器の尊・壺の胴部に類似する。例えば、青銅尊・壺の胴部において、太線饕餮文から両目突出の雲雷文へと退化していく現象と対比できる。或いは枳間に、印文陶文化圏によく見られる円圈文を施すことも、在地化現象の一つといえる。つまり大 B 型は、中原地域に存在する小 A 型をもとに、在地的な文様の特徴を合わせながら、大型化したものと判断できる。

大 C1 式の乳釘は、華中型青銅器にある方格乳釘文に由来すると考えられる。青銅尊・壺の胴部の方格乳釘文に基づいて、大 C1 式の鉦部に乳釘が出現したと推測できる。一方、大 Bc1 式青銅鏡の鉦部には、大 C1 式の乳釘に類似するものがある。これは、大 Bc1 式の雲文における凸表現で、枚の祖形と考えられるものであり（彭適 1996）、大 C 型（有枚青銅鏡）の祖形である。つまり大 C1 式は、在地化した大 Bc1 式青銅鏡、および華中型青銅器の文様の両影響を受け入れた可能性がある。大型青銅鏡の分布相を考慮すると、華中地域との交流のみならず、湘江流域、贛江流域の各流域における小地域間交流が想定される。このように、小型青銅鏡の広がりに伴って、旋部が加わり、大型化・細長化していったのが大型青銅鏡であった。中原地域の文化要素や華中型青銅器の影響の下、在地集団によって地方型青銅鏡が製作されたのである。



図 4-16 華中型方格乳釘文

2、殷周時代における青銅鏡の展開

まず鏡Ⅰ期に、小 A1 式と小 B1 式青銅鏡が黄河中下流域の広域で出現する。これは、中原地域の殷文化要素が黄河下流域へ拡散したことを示すと考えられる。この段階には同一型式が分布しているのであって、地域性は薄い。小 B1 式青銅鏡では、青州蘇埠屯 8 号墓、沂源東安墓出土品と、殷墟出土品は獣面文や形態でほぼ同じ、小 A1 式でも山東省惠民大郭遺跡出土品は中原出土品と似ている。両地域の墓や青銅器を考慮すれば、この段階の殷文化の黄河下流域への進出に伴って、小型青銅鏡が広がったと考えられる。

鏡Ⅱ期に入り、長江中流域では、青銅鏡の形態を受容し、それを在地化していく。この結果、大型青銅鏡が派生した。一方、中原と長江中流域における青銅鏡の形態差は大きく、扱われ方も異なっている。特に、埋納という扱われ方、文様は華中型青銅尊・壺に類似しており、華中型青銅器文化との連続性、類似性が認められる。このように、前段階の埋納青銅器文化に基づき、青銅鏡という殷文化要素を受容し、長江中流域の青銅器文化は新たな段階に入ったと言えよう。

鏡Ⅲ期の西周前期頃には、中原地域では青銅鏡が殆ど消滅し、長江中流域が分布の中心地になる。前段階と比較した場合、長江中流域ではさらに在地化が進んでおり、地方型青銅器として存続していく段階であると言える。特に大 A 型、大 B 型は湘江流域に集中し、大型青銅鏡の地域色がさらに強くなっている。この段階では、単数埋納のみならず、青銅鏡がセットで埋納される例が出現する。朱鳳瀚氏は、殷墟墓では、器高が 10:7:6 となる小型青銅鏡のセットが見出せるとしている（朱 2009）。一方で、鏡Ⅲ期の寧郷地区で出土の編鐘（鏡のセット）を見ると、高差比が殷墟墓に比して極めて小さく、西周時期の編鐘

の高差比により近いものである²⁴。さらに同時期には、中原青銅器の組み合わせが窖藏で集中的に埋納される。こうした集中埋納や青銅器饒のセット関係は、西周文化の受容を反映するのであろう。中原における西周文化の窖藏（集中埋納）の性格は、祭祀の場において繰り返し使用するという、西周王朝が望んだ青銅彝器利用のあり方である（角道 2014）。これらは周原、豊鎬という関中平原、すなわち西周王朝の中心地に分布し、西周王朝の強い政治性を反映したものである（角道 2010、2014）。しかし、長江中流域の場合、西周文化の窖藏は異なる機能を持つのかかもしれない。殷後期の地方型青銅尊・壺の個数埋納は地域的格差が見られず、集団間で、所持する青銅器の数量差が僅かであった可能性がある。一方で、大型青銅饒の集中埋納が、湘江流域のみに分布している現象は特異である。これは、従来の集団祭祀が行う在地集団の間に格差が生じ、湘江流域の集団が中心となった可能性を示唆するものと考えられる。一方、贛江流域、さらに中国の東南地方という嶺南地域、福建省、浙江省では個数埋納しか見られない。大型青銅饒の分布圏には、流通のあり方で地域的格差が生じていたのである。

第 IV 期の西周前期後半～西周中期の併行期に入ると、湘江流域を中心に分布する大 A 型、大 B 型青銅饒が見られなくなり、西周文化の青銅甬鐘と関連性が高い大 C4 式を主体として、地域文化が表現されるようになる。大 C4 式青銅饒において青銅甬鐘との類似が高まる背景として考えられるのは、古典文献および青銅器の銘文から知られる、西周中期の「昭王の南征」²⁵である。長江中流域に広がる大 C 型は、西周王朝による長江中流域の在地集団に対する戦略による可能性がある。しかしながら、当該地域に位置する高砂脊遺跡、炭河里西周墓地では、青銅器が極めて多い厚葬墓（AM1、AM5）が出現し（湖南省文物考古研究所ほか 2001、2006）、在地生産の青銅鼎が認められる（施 2002、村野 2005、湖南省文物考古研究所ほか 2006）ものの、同時期の在来文化との関連が予想される大型青銅饒を含まない。また、寧郷地区の集中埋納遺構（李喬生 1997）では、より晚い大 A3 式があり、中原地域に由来する窖藏遺構が存在することが知られる。こうした集中埋納の存続は、階層性が高い特定個人墓の不在を示すのであるが、集中埋納で青銅器を通じて、祭祀を司るリーダーの存在が予想できる。しかし、製作場が見られなく、青銅器の生産に関わる支配、管理の可能性が低い。おそらく従来の青銅器文化に沿い、原料に関するネットワークを通じて、資源を持つ集団の格差が出現し、青銅器製作集団も分散的に行われていたことが推測できる²⁶。とはいえ、西周文化との関係がこの段階に強まったことは確かであり、やがて階層性が出現することになる。

²⁴ 寧郷地区の編饒が 10 点が大 A2 式 1 点、大 C2 式 9 点が出土された（李喬生 1997）。報告書によって、大 C2 式の場合、形式的類似性があり、編列饒と考えられた（李喬生 1997）。器高による高差比は 10:9.6:9.3:9.2:9:8.9:8.7:8.5:7 であり、さらに殷墟墓のものを大型化しており、枚部、旋部が出現し、差異が認められる。

²⁵ 「昭王十六年、伐楚荊、洪漢…」 「昭王十九年…喪六師于漢」（『竹書紀年』）、「昭王南征而不復…」 （『左伝』僖公四年）、「昭王南巡狩不返、卒于江上。」 （『史記』周本紀）。史牆盤の銘文には「弘魯昭王、広批荊楚、唯南狩行」と記載される。

²⁶ 地方型青銅鼎の分析では、原料入手の困難さが関わる可能性が指摘されている（村野 2005）。大型青銅饒の製作は、地方型青銅鼎とは別個であった可能であると筆者は考えるものの、積極的証拠はない。

第5節 小結

こうした青銅饒の変遷は、長江中流域の地方型青銅器文化の展開を反映しており、およそ三段階に分けられる。まず、第一段階（饒Ⅰ期～饒Ⅱ－1期）では殷墟2、3期の小型青銅饒を基礎に、中原青銅器文化が広がっていく。これは、中原青銅器文化の拡大期であり、大型型青銅饒がまだ出現していない段階である。中原から、安徽省における小B型青銅饒などを経て、湖北省の東南部に位置する陽新県に達し、そこで大型青銅饒が出現した。この段階に、長江中流域で大型青銅饒の在地生産が開始された。また、青銅尊、壺と同じく、華中型青銅器の文様との共通性が見られる。やはり、元々集団祭祀を通じて、異なる土器文化に位置する長江中流域が中原および華中型青銅器という外部要素を受容しつつ、大型青銅饒を出現させたのである。さらに、単数埋納という共通のあり方として、集団祭祀が行われた可能性が高い。

第二段階（饒Ⅱ－2期～饒Ⅲ期）では、大型青銅饒が湘江流域・贛江流域を中心に分布し、長江下流域にも出土例が見られる。さらに、湘江流域を中心に、副葬・集中埋納という扱われ方が出現する。これが湘贛青銅器文化圏と捉えられるものである。湘贛青銅器文化の拡大は、中原青銅器文化の転換期、すなわち西周文化の始まりと関連する。具体的にいえば、大型青銅饒が殷後期の小型青銅饒は華中地域を經由し、大型化した青銅饒となり、殷文化の内容を在地化していく。西周時代に入り、大型青銅饒が出土した曾国、鄂国のすぐの南の地域に分布する。この地域の祭祀具となっていた大型青銅饒を周の祭祀に採り入れることが指摘された（宮本 2020）。さらに、西周前半期の社会システムは、王権の祖先祭祀、および土地や人民を媒介とした封建制との二重体制である（宮本 2020）。この背景の下、従来の長江中流域は外部との交流や対抗が行われ、前段階よりさらに統合して文化体として、西周文化との交流が行われた可能性がある。

一方、第三段階（饒Ⅳ期）の西周前期後半以降は、西周文化の青銅甬鐘の出現に伴い、地域色の濃い大A型、大B型が減少し、湘江流域に限られて分布する。また、大C型青銅饒が青銅甬鐘の形態に類似し、広域的に分布圏での共通性が高い。また、大型青銅饒が長江下流域に見られなくなる。さらに、西周前中期に相当する高砂脊遺跡の墓地、炭河里遺跡の銅器墓で地方型青銅鼎を副葬する（湖南省文物考古研究所 2001、2006、村野 2005）。具体的にいえば、異なる土器文化の中で、大C型の流通性によって統合されているのである。これは、「昭王の南征」の対象が湖北省さらに南の地域であり、祭祀を通じて民を治めることができたことが指摘された（宮本 2020）。したがって、西周王朝の青銅器は威信財として、周辺地域に分配する過程の中で、王畿地区で窖藏（集中埋納）、墓という扱われ方を受容し、従来の在地集団の間に青銅器を所有する格差が出現するように、文化圏の拡大が西周文化が青銅器の扱われ方に関わる可能性があり、青銅器の階層性が生まれる潜在力がある。さらに、炭河里遺跡で城壁が見られ（湖南省文物考古研究所 2006）、長江中流域青銅器文化の変化を示唆する。一方、長江下流域の地方型青銅器（尊、卣など）、土墩墓文化の形成（岡村 1986、宮本 1997）に基づき、大型青銅饒は個人的階層性を反映せず、共通の祭祀構造による地域集団のまとまりを示し、集団内の諸種類の青銅器を持つ格差が出現した。青銅器が土墩墓しか見られない場合、階層性を発達させた長江下流域ではその分布圏外となったのである。

第4章 長江中流域の青銅甬鐘の展開

西周時代の長江中流域の青銅器文化は大型青銅饒・甬鐘を主として、青銅樂器の数量が圧倒的に多く、西周王朝の青銅甬鐘にも影響を与えた（林 1981、高 2009、王 2015）。本章では、地方型青銅甬鐘の性格を明らかにしたい。基本的には、前章までと同一手順で分析を行うが、中原型青銅甬鐘の動向（林 1984、長澤 2017、宮本 2020）を参照しながら編年・分布を行う。

第1節 青銅甬鐘の型式分類

1、用語の説明

前章で示したように、青銅甬鐘についても大型青銅饒同様、古典文献²⁷から文様、形態がおおよそ規定されている（林 1981、1984）。ここでは、林氏の定義に基づき、前章の大型青銅饒と同様の用語を用い、各部位の名称とする。もう一つを注目すれば、枚部列の間に篆部というのは、篆部の中間に施文する範囲、その周縁の文様形態が異なる。ここで、宮本氏が指摘された区画線（宮本 2020）の概念を加え、篆部に区分したい。

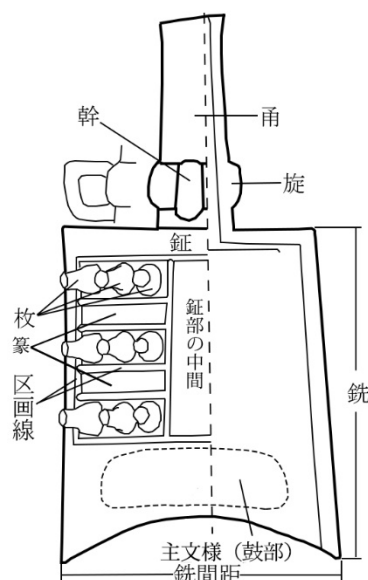


図 5-1 青銅甬鐘の各部位名

2、青銅甬鐘の分類

青銅甬鐘の形態・文様には、大型青銅饒との系譜的連続性が部分的には見られる。主文様は、大型青銅饒から連続変化し、西周中期の甬鐘に影響を与えたと指摘されている（林 1981）。区画線については、円圈文が大型青銅饒から継承された後、鑄型の変遷によって、円圈文→乳釘文→凸線文→沈線文と変化すると考えられた（宮本 2020）。一方で、大型青銅饒では、有枚青銅饒は区画線および篆部文様に関して、陰線、陽線に大きく分けられる（向 2010）。また筆者は、大型青銅饒の C3、C4 式の段階から青銅甬鐘の類似性を指摘した（譚 2020）。そこで、ひとまず、西周文化範囲以外で出土する青銅甬鐘は大型青銅饒から生まれると仮定したい。

また、これらの甬鐘の文様には陰線、陽線が含まれるが、他属性との相関では、陰線の方が比較的新しい属性変異と相関する。しかしながら、両者を発展関係と考える必要は必ずしもない。というのも、陽線を持つ大型青銅饒は鉦部中間が狭く、正鼓部と一体する一方、陰線を持つものは鉦部中間が広く、正鼓部とは分離される。このような差異は時期差とは考えにくい。また殷代では、鑄型に直接刻み込む陽線表現、原型に刻んだ後で鑄型に押す陰線表現という技法差によって、文様の「流派」が認識される場合がある（難波 1995）。これらの研究を参照した場合、凸線と沈線はそれぞれ異なる技術系譜である可能性が高い。そこで本稿でも、長江中流域の青銅甬鐘も区画線の凸線表現（陽線）、沈線表現（陰線）によって、二種類に大別する。以下では、凸線表現の甬鐘を「A 型」、沈線表現の甬鐘を「B 型」と呼ぶ。

²⁷ 「鳧氏為鐘。兩欒謂之銑，銑間謂之干，干上謂之鼓，鼓上謂之鉦，鉦上謂之舞，舞上謂之甬，甬上謂之衡。鐘懸謂之旋，旋虫謂之幹。鐘帶謂之篆，篆間謂之枚，枚謂之景。于上之之遂。」（『周礼』考工記）

3、青銅甬鐘の属性抽出および型式設定

(1) 属性抽出

区画線の文様

A 型（凸線表現）の区画線は、当初、2 本の凸線の上に円圈文が並んでいたが、円圈文を省略する方向という二重細線文、および各円圈の中心が高まって乳釘状になる 2 つの変遷方向が想定できる。そして、乳釘状の区画線は各乳釘が小型化、配列が密となり、最終的には 1 本の太い凸線に変化していくと想定できる。B 型（沈線表現）の区画線は、幅広の沈線が次第に細くなり、2 本の細い沈線となる変化が想定できる²⁸。

区画線の文様

A 型

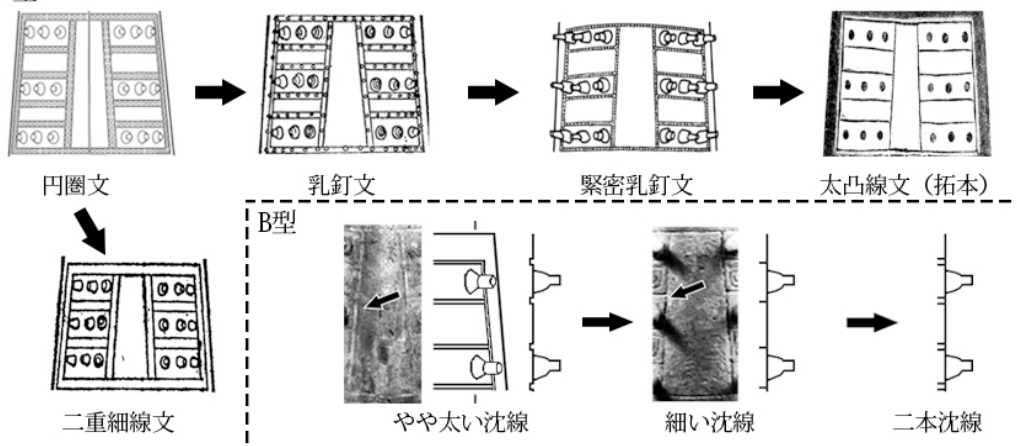


図 5-2 区画線の属性変異（左上：A 型、右下：B 型）

主文様（正鼓部）

主文様は左右対称の 2 部分から成り、中軸上に范線が走るもの（羽文 1、2a²⁹）から、范線がないものへ変化する（羽文 2b、変異羽文 1）。羽文内の渦巻の線が多いもの（羽文 1）から、少ないもの（羽文 2）に変化した。また、各線は凸線（羽文 2a）、沈線（羽文 2b）の別がある。さらに羽文 2a は中軸上の范線をなくし、分離していた羽文が次第に接続する（変異羽文 1a）。一方、羽文 2b では、沈線文の本数が増加し、羽文が接続化する（変異羽文 1b）。さらに、2 本の沈線を用いた、幅広のデザイン（変異羽文 2）へという変化が想定できる。上の変化に加え、羽文四隅の鉤が大型・顕著化することも指摘できる。

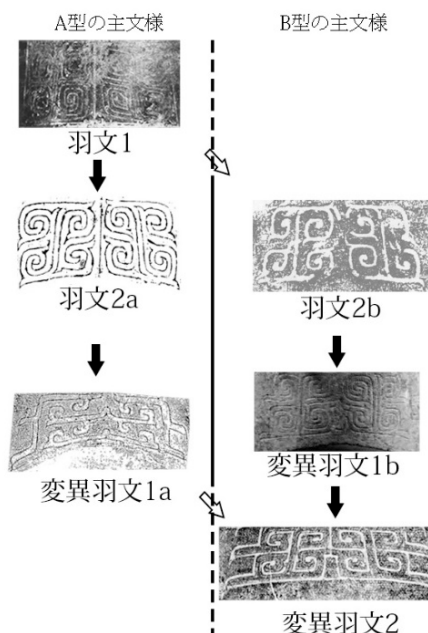


図 5-3 主文様の属性変異

²⁸ 沈線の太さは未計測であるが、鉦体中間両側の区画線の写真（図 5-2-やや太い沈線、図 5-2-細い沈線）を参考に、沈線の凹みによって、太さの差異の存在を判断する。

²⁹ 図 5-3 の羽文 2a については、長江中流域甬鐘の主文様の拓本がなく、報告の写真も不明瞭である。そこで、中原の出土例ではあるが、竹円溝 M7:10 の主文様の拓本（盧・胡 1988）を掲載した。

鉦部形態

鉦体が太短いものから、細長く、銑先端部の角度が先鋭化することが想定される³⁰。

枚部形態

枚の高さ（枚高）のヒストグラムでは、1.5～1.7cm、2.4～2.6cm、3cm 以上という 3 つのピークがあり、三区分できる。また、枚形態の円錐形から円柱形、長円柱形への変化のうち、円錐形から円柱形への変化は、大型青銅鐃と共通する。

篆部デザインおよび篆部文様形態

枚部と篆文様部の対応関係が、大型青銅鐃では対応関係にあったものが、非対応化していく。また、篆部文様では、3 つの分離した雲文が一旦繋がり、再び分離して 2 つの∞形文となり、1 つの∞形文、ヨコ S 形文などの幾何文となる変遷方向が考えられる。これらの変化は必ずしも 1 系列の変化とは捉えられないが、大きくは、雲文から∞形やヨコ S 形文への変化が考えられる。

鉦部中間の文様形態

複雑化および動物意匠化が想定できる。最初は無文であったものが、中央のみ施文されはじめ、その後、凸線の雲文表現が全体に広がる。そして、動物形意匠が現れ、蟬形やその半分の形から、S 字形龍文へ変化していく。

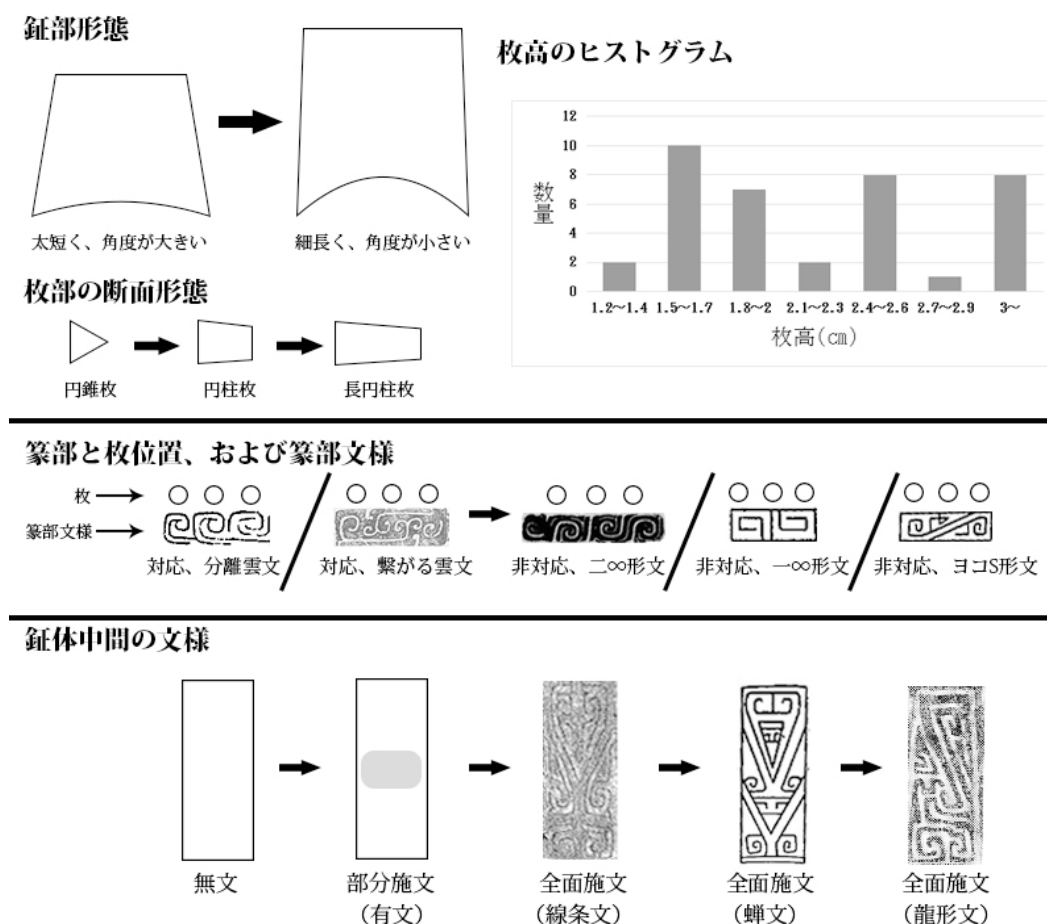


図 5-4 青銅甬鐘の共通する属性の変異

³⁰ 鉦体は銑間距÷銑の長の値によって判断する。

(2) 型式設定

A 型の型式設定 (表 5-1)

まず、資料 1~3 (以下、資料 1, 2...は表 5-1 と対応している) は区画線が円圏文で、他の属性とも相関し、長江流域の A 型甬鐘で最古と考えられる。資料 4、5 では区画線に変化が見られるが、形態上では資料 1~3 と大差ない。資料 6~16 では区画線が乳釘となり、主文様、枚形態は古いが、円柱枚、羽文 2a は比較的新しい。

資料 17~23 は乳釘文区画線を持つが、乳釘の配列が密となる。同時に主文様が変異羽文 1、鉦部形態が細長くなり、篆部デザインが非対応・ヨコ S 字形文様へ変化、枚部形態が徐々に伸び、鉦部の中央部にも文様が見られる。資料 6~16 と比較した場合、想定した各属性の変化方向が一致し、連続性を示している。

資料 24~32 は、想定した各属性変化の最終形態を持っており、長江流域 A 型甬鐘の最も新しいものと考えられる。資料 23 は主文様、および鉦部中間の文様が、資料 17~22 と共通する一方、区画線の文様のみが新しい、過渡的な形態である。以上の変化を基に、主文様を軸に、4 型式に区分し、A1 式については区画線表現の相関によって、A1a 式、A1b 式に分ける。

A1a 式：区画線が円圏文、主文様が羽文 1、篆部が分離する雲雷文、円錐枚に対応するデザイン、鉦部形態が太短いもの (図 5-5-1)。

A1b 式：区画線が二重細線文、主文様が羽文 1、篆部が雲雷文、枚部に対応するデザイン、鉦部形態が太短いもの (図 5-5-2)。

A2 式：区画線が乳釘文、主文様が羽文 2a、篆部が繋がる雲雷文、円柱枚に対応するデザイン、鉦部形態が太短いもの (図 5-5-3)。

A3 式：区画線が密集する乳釘文、主文様が変異羽文 1、篆部がヨコ S 形文、長円柱枚に不对応するデザイン、鉦部形態が細長いもの (図 5-5-4)。

A4 式：区画線が太凸線文、主文様が変異羽文 2、篆部がヨコ S 形文、長円柱枚に不对応するデザイン、鉦部形態が細長いもの (図 5-5-5)。

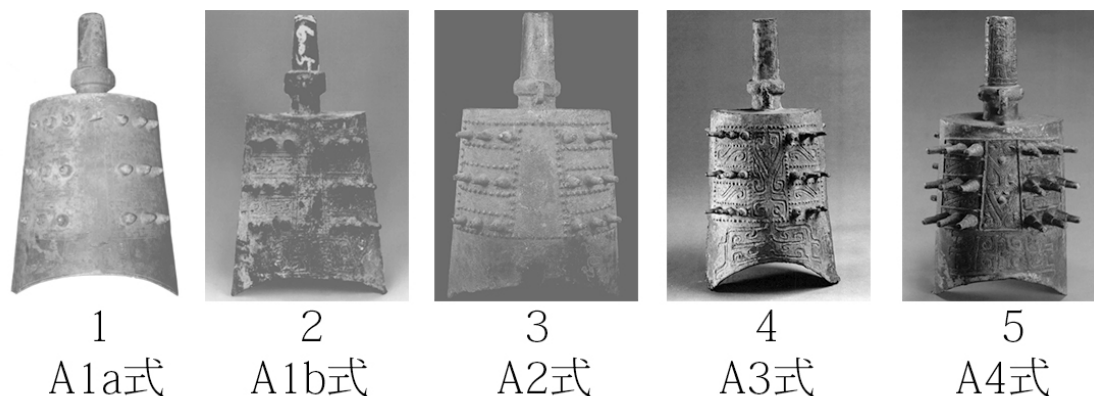


図 5-5 青銅甬鐘 A 型の型式

- 1、A1a 式：寧鄉回龍鋪鐘 2、A1b 式：岳陽西塘鐘 3、A2 式：湘鄉馬龍鐘
4、A3 式：大悟雷家山編鐘 0222 号 5、A4 式：武昌木頭嶺 1 号鐘

B 型の型式設定 (表 5-2)

資料 33~40 (以下、資料 33, 34...は表 5-2 と対応している) は区画線が沈線文、主文様が羽文 2b であり、最も早い一群である。また、鉦部形態、篆部デザインおよび文様、枚形態が次第に変化する。

資料 41～46 は資料 33～40 と比較して、区画線、主文様、鉦部中央部の文様、鉦部形態、および枚部形態が変化している。資料 41 の区画線、資料 42～43 の鉦部中央部の文様は資料 33～40 に近く、資料 44～46 との中間形態とできる。

資料 47～57 では、資料 50 を除き、区画線が二重沈線文、主文様が変異羽文 2 でほぼ一致する。以上をまとめ、主文様および区画線表現の相関を軸とし、3 型式（B1～B3 式）に区分する。

B1 式：区画線が沈線文、主文様が羽文 2b、篆部が雲雷文・枚部と対応、鉦部形態が太短い（図 5-6-1）。

B2 式：区画線がやや細い沈線文、主文様が変異羽文 1b、篆部が∞形文・枚部と非対応、鉦部形態が細長い（図 5-6-2）。

B3 式：区画線が二本沈線文、主文様が変異羽文 2、篆部がヨコ S 形文・枚部と非対応、鉦部形態が細長い（図 5-6-3）。

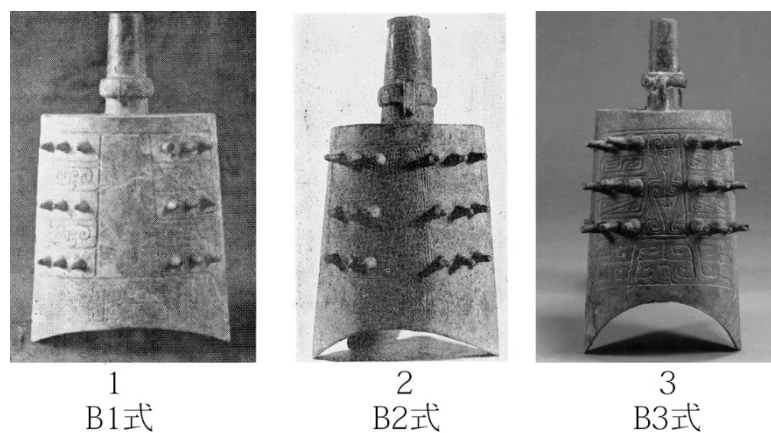


図 5-6 青銅甬鐘 B 型の型式

1、B1 式：湘潭青山橋鐘 2、B2 式：臨武鐘 3、B3 式：武穴鴨兒洲編鐘 9 号

表 5-3 青銅甬鐘の型式分類の対応表

本論の分類	A1a式	A1b式	A2式	A3式	A4式	B1式	B2式	B3式
従来の分類								
李純一氏の分類（1996）	I 1a式			III 1a式	I 1a式		I 1b式	III 1a式 III 2式
施勁松氏の分類（1997）	甬鐘 II 式					甬鐘 II 式		
彭適凡氏の分類（1998）			I 式			III 式		
向桃初氏の分類（2008）	A I 式	A II 式	C 型		A III 式	B I 式	B II 式	
熊建華氏の分類（2013）	A I 式	A III 式	B I 式		C II 式	A II 式	A III 式	

表5-1 A型甬鐘の属性相関

番号	鐘名（器物番号）	出土地または所蔵機関	区画線	主文様	鉦形	枚形	枚高	篆位置・文様	鉦文	型式
1	寧鄉回龍鋪鐘	寧鄉回龍鋪村	円圈文	羽文1	短、大	円錐	1.5	対応、分離雲文	無文	A1a式
2	衡山鐘（40）	衡山縣文管所	円圈文	羽文1	短、大	円錐	1.7	対応、分離雲文	無文	A1a式
3	衡陽長安鐘	衡陽縣長安鄉	円圈文	羽文1	短、大	円錐	2.7	対応、分離雲文	無文	A1a式
4	細線雲文鐘（30784）	湖南省博物館	二重細線文	羽文1	短、大	円錐	1.3	？、？雲文	無文	A1b式
5	岳陽岳西塘鐘（W605）	岳陽市文物管理処	二重細線文	羽文1	短、大	円柱	1.5	？、？雲文	無文	A1b式
6	長豊紫燕崗鐘	長豊縣義井鄉	乳釘文	羽文1?	短、大	円錐	?	対応、？雲文	無文	A2式
7	吉水甬鐘286	吉安市博物館	乳釘文	?	短、大	円錐	?	対応、?	無文	A2式
8	吉水甬鐘287	吉安市博物館	乳釘文	?	短、大	円錐	?	対応、?	無文	A2式
9	浙江蕭山杜家村鐘	浙江省蕭山縣杜家村	乳釘文	羽文1	短、大	円錐	1.8	?	無文	A2式
10	萍鄉彭高鐘14945-1	萍鄉縣彭高公社村	乳釘文	羽文1?	短、大	円柱	2.1	対応、繋がる雲文	無文	A2式
11	太湖界嶺鐘	太湖縣界嶺鎮	乳釘文	羽文2a?	短、大	円錐	?	対応、?	無文	A2式
12	萍鄉彭高鐘14945-2	萍鄉縣彭高公社村	乳釘文	羽文2a	短、大	円柱	2	対応、繋がる雲文	無文	A2式
13	雲雷文鐘（22236）	湖南省博物館	乳釘文	羽文2a?	短、大	円柱?	1.6	?	無文	A2式
14	瀏陽澄潭鐘	瀏陽縣澄潭村	乳釘文	?	短、大	円柱	2	対応	無文	A2式
15	湘潭鐘（22232）	湖南省博物館	乳釘文	?	短、大	円柱	1.6	非、?	無文	A2式
16	湘鄉馬龍鐘	湘鄉市馬龍村	乳釘文	羽文2a	短、大	円柱	2.5	?	?	A2式
17	鐘祥花山編鐘50.1.1	鐘祥縣洋梓區花山水庫	緊密乳釘文	羽文?	長、小	長円柱	?	非、一〇	線条文	A3式
18	大悟雷家山編鐘0219	大悟縣雷店鄉龍潭村	緊密乳釘文	変羽1a	長、小	円柱	1.5	非、ヨコS	線条文	A3式
19	大悟雷家山編鐘0223	大悟縣雷店鄉龍潭村	緊密乳釘文	変羽1a	長、小	円柱	1.2	非、ヨコS	線条文	A3式
20	大悟雷家山編鐘0221	大悟縣雷店鄉龍潭村	緊密乳釘文	変羽1a	長、小	長円柱?	2.5	非、ヨコS	線条文	A3式
21	大悟雷家山編鐘0218	大悟縣雷店鄉龍潭村	緊密乳釘文	変羽1a	長、小	長円柱?	2.5	非、ヨコS	線条文	A3式
22	大悟雷家山編鐘0222	大悟縣雷店鄉龍潭村	緊密乳釘文	変羽1a	長、小	長円柱?	2.5	非、ヨコS	線条文	A3式
23	鐘祥花山編鐘50.1.3	鐘祥縣洋梓區花山水庫	太凸線文	変羽1a	長、小	長円柱?	?	非、一〇	線条文	A3式
24	長枚鐘（25054）	湖南省博物館	太凸線文	変羽2	長、小	長円柱	4.3	非、二〇	蟬文	A4式
25	平江鐘洞鐘	平江縣鐘洞鄉	太凸線文	変羽2	長、小	長円柱	3.7	非、ヨコS	龍形文	A4式
26	武昌木頭嶺編鐘1号	武昌縣湖泗鄉木頭嶺	太凸線文	変羽2	長、小	長円柱	4.1	非、ヨコS	蟬文	A4式
27	武昌木頭嶺編鐘2号	武昌縣湖泗鄉木頭嶺	太凸線文	変羽2	長、小	長円柱	2.4	非、一〇	龍形文	A4式
28	武昌木頭嶺編鐘3号	武昌縣湖泗鄉木頭嶺	太凸線文	変羽2	長、小	長円柱	3	非、ヨコS	龍形文	A4式
29	97沅陵鐘	沅陵縣五強鎮界首村	太凸線文	変羽2	長、小	長円柱	?	非、ヨコS	蟬文	A4式
30	当涂新市甬鐘	当涂縣新市鄉收集	太凸線文	変羽2	長、小	長円柱	?	非、ヨコS	蟬文	A4式
31	通山南城甬鐘	通山縣楠林鎮南城畝	太凸線文	変羽2	長、小	長円柱	9	非、ヨコS	蟬文	A4式
32	鄂州蟬紋鐘（0781）	鄂州市博物館	太凸線文	変羽2	長、小	長円柱	3.3	非、ヨコS	蟬文	A4式
凡例										
鉦形：鉦部形態			変羽：変異羽文			一〇/二〇：1つの〇形文/2つの〇形文				
篆位置・文様：篆部と枚位置および篆部文様			短、大：太短く、角度が大きい			ヨコS：ヨコS形文				
枚形：枚部形態			長、小：細長く、角度が小さい			非：非対応				
鉦文：鉦部中間の文様			※枚高の単位はセンチ（cm）である。			「？」は不明である。				

表5-2 B型甬鐘の属性相関

番号	鐘名（器物番号）	出土地または所蔵機関	区画線	主文様	鉦形	枚形	枚高	篆位置・文様	鉦文	型式
33	雲文鐘（湘：25057）	湖南省博物館	太い沈線	羽文2b	短、大	円錐	1.7	対応、分離雲文	無文	B1式
34	湘鄉坪如鐘	湘鄉縣金石鎮坪如村	太い沈線	羽文2b	短、大	円柱?	2.5	対応、分離雲文	無文	B1式
35	湘潭洪家峭鐘（小）	湘潭縣花石洪家峭西周墓	太い沈線	羽文2b	短、大	円柱	2.5	対応、繋がる雲文	無文	B1式
36	湘潭洪家峭鐘（大）	湘潭縣花石洪家峭西周墓	太い沈線	羽文2b	短、大	円錐	?	対応、繋がる雲文	有文	B1式
37	南昌李家莊甬鐘	江西省博物館	太い沈線	羽文2b	短、大	円柱	2.2	非、二〇	無文	B1式
38	鷹潭甬鐘	江西省博物館	太い沈線	羽文2b	短、大	円柱	1.8	非、一〇	無文	B1式
39	湘潭小圪鐘	湘潭縣青山橋鄉	太い沈線	羽文2b	短、大	円柱?	2	対応、繋がる雲文	無文	B1式
40	雲文鐘（湘：22238）	湖南省博物館	太い沈線	羽文2b	短、大	円柱	?	非、二〇	無文	B1式
41	大悟雷家山編鐘0220	大悟縣雷店鄉龍潭村	太い沈線?	変羽1b?	長、小	円柱	2	?	無文	B2式
42	双峰大街鐘	双峰縣鎮石公社	細い沈線	変羽1b	長、小	円柱	1.7	非、二〇	無文	B2式
43	鐘祥花山編鐘5:1920	鐘祥縣洋梓區花山水庫	細い沈線	変羽1b	長、小	円柱	?	非、二〇	無文	B2式
44	通山下泉鐘	通山縣下泉村	細い沈線	?	長、小	円柱	1.6	非、一〇	有文	B2式
45	鐘祥花山編鐘59.1.2	鐘祥縣洋梓區花山水庫	細い沈線	変羽1b	長、小	円柱	?	非、一〇	線条文	B2式
46	臨武鐘	湖南省郴州市臨武縣	細い沈線	変羽1b	長、小	長円柱	3.3	非、二〇	線条文	B2式
47	浙江江山編鐘1	浙江省江山市須江鎮	二本沈線	変羽2	長、小	長円柱	2.6	非、?	線条文	B3式
48	浙江江山編鐘2	浙江省江山市須江鎮	二本沈線	変羽2	長、小	長円柱	2	非、?	線条文	B3式
49	浙江江山編鐘3	浙江省江山市須江鎮	二本沈線	変羽2	長、小	円柱	1.7	非、一〇	線条文	B3式
50	広東博羅1号鐘	広東省博羅縣��頭鄉	細い沈線?	変羽2	長、小	長円柱	3.5	非、二〇	蟬文	B3式
51	繁昌湯家山甬鐘	安徽省繁昌縣湯家山	二本沈線	?	長、小	長円柱	?	非、ヨコS	龍形文	B3式
52	武穴鴨兒洲編鐘6号	湖北省武穴市鴨兒洲	二本沈線	変羽2	長、小	長円柱	?	非、ヨコS	蟬文	B3式
53	武穴鴨兒洲編鐘8号	湖北省武穴市鴨兒洲	二本沈線	変羽2	長、小	長円柱	?	非、ヨコS	蟬文	B3式
54	武穴鴨兒洲編鐘9号	湖北省武穴市鴨兒洲	二本沈線	変羽2	長、小	長円柱	?	非、ヨコS	蟬文	B3式
55	武穴鴨兒洲編鐘10号	湖北省武穴市鴨兒洲	二本沈線	変羽2	長、小	長円柱	?	非、ヨコS	蟬文	B3式
56	広西恭城	恭城縣加会公社	二本沈線	変羽2	長、小	長円柱	?	非、ヨコS	蟬文	B3式
57	通城鉄柱山鐘	通城縣銀城區鉄柱山	二本沈線	変羽2	長、小	長円柱	4.3	非、ヨコS	蟬文	B3式
凡例										
鉦形：鉦部形態			変羽：変異羽文			一〇/二〇：1つの〇形文/2つの〇形文				
篆位置・文様：篆部と枚位置および篆部文様			短、大：太短く、角度が大きい			ヨコS：ヨコS形文				
枚形：枚部形態			長、小：細長く、角度が小さい			非：非対応				
鉦文：鉦部中間の文様			※枚高の単位はセンチ（cm）である。			「？」は不明である。				

第2節 青銅甬鐘の編年

長江中流域の青銅甬鐘について、採集品では層位関係、共伴遺物は不明であるが、全57点のうち50点は出土地が判明している。中原地域における窖藏遺構では、一括性の問題が指摘されており（宮本2020）、長江中流域でも、埋納遺構で出土する遺物は一括性が低いと考えざるを得ない。そのため、上記諸型式が中原で発見された事例、さらには他の中原青銅甬鐘の編年（長澤2017、宮本2020）との対比から、併行関係を決めたい。また、中原における出土例の年代については、先行研究の編年案（林1984、角道2010、宮本2020）を参照する。

A1a式、A2式は随州葉家山111号墓（西周前期後半）で共伴し（湖北省文物考古研究所ほか2020）、A2式は翼城大河口1017号墓（西周前期後半）で3点出土した（山西省考古研究所ほか2018）。中原では、宝鶏竹園溝7号墓、茹家荘1号墓（西周中期前半）では、A1b式、A2式の共伴がある（盧・胡1988）。なお、竹園溝13号墓（盧・胡1988）、翼城大河口1号墓（山西省考古研究院ほか2020）の小型青銅鐃には幹部があり、A1a式は大型青銅鐃に幹部を追加する形で、少なくとも西周前期後半併行頃に出現したと考えられる。

A3式は、中原地域において知られないが、区画線の形態が類似する甬鐘が一例ある（羅1980）。本例は主文様の分類によって、長澤の第四段階に位置づけられ（長澤2017）、鉦部中間に蟬文が施される。長澤氏の第四段階はおおよそ西周後期～春秋前期に併行する。また、中原地域の場合、羽文2a、羽文2bという主文様は、長澤氏の第二、三段階に位置づけられる甬鐘に現れ、西周中期～西周後期に併行する。しかし、長江中流域のA3式では、蟬がまだ出現しておらず、変異羽文1aを持つならば、中原地域の例より早い可能性がある。おそらく西周後期前半と想定できる。

B1式の区画線は天馬曲村の7092号墓で1点が出土した（北京大学考古学系商周組ほか2000）。本墓は青銅鼎の編年から、西周中期後半に位置付けられている（角道2010）。また、B式と同じ沈線表現である有枚青銅鐃が西周中期から出現する（向2010）ことを考えても、B1式は西周中期後半併行とできる。

長江中流域に位置する湖北省大悟埋納遺構では、巨石の下のほぼ同じ層位に、4個の大型甬鐘が十字形で並び、各内部に小型甬鐘を納めていた（熊・劉1980）。これらの型式構成は、A3式5点、B2式1点である。B1式が西周中期後半併行ならば、A3式、B2式はこれより晚いと考えられ、西周後期併行に位置づけられよう。

B3式の鉦部形態、篆部デザインおよび篆部文様は北趙93号墓（西周後期後半）の甬鐘（北京大学考古学系ほか1995）と類似する。また、B3式の主文様はA4式と共通し、A4式も西周後期後半以降であろう。一方で、春秋中後期の甬鐘（朱・呂1994；李1996）と比較すると、甬部、主文様、形態などでかなり異なるため、春秋前期には収まると考えられる。

以上のように、長江中流域の甬鐘は3期4段階に分けられる。

鐘Ⅰ期はA1a、A1b、A2、B1式を主とし、西周前期後半～西周中期に相当する。型式変化からみると、2段階に分けられる。

鐘Ⅱ期はA3、B2式を主とし、西周後期前半に相当する。

鐘Ⅲ期はA4、B3式を主とし、西周後期後半～春秋前期に相当する。

編年		凸線表現甬鐘（A型）	沈線表現甬鐘（B型）
西周前期後半～西周中期後半	鐘Ⅰ—1期	 A1a式	
	鐘Ⅰ—2期	 A1b式  A2式	 B1式
西周後期前半～春秋前期	鐘Ⅱ期	 A3式	 B2式
	鐘Ⅲ期	 A4式	 B3式

図 5-7 青銅甬鐘の編年

A1a 式：寧鄉回龍鋪鐘 A1b 式：岳陽西塘鐘 A2 式：湘鄉馬龍鐘
A3 式：大悟雷家山編鐘 0222 号 A4 式：武昌木頭嶺 1 号鐘 B1 式：湘潭青山橋鐘
B2 式：鐘祥花山編鐘 5：1920 号 B3 式：武穴鴨兒洲編鐘 9 号

第3節 各時期における青銅甬鐘の分布状況

以下の分布および考察の一部では、中原との差異を明確にするため、中原出土の甬鐘も対象に含めている。主に主文様に羽文を持つ中原型甬鐘を用い、その分布状況は、先行研究で集成した資料に記載された出土地を参考に行っている（長澤 2017、宮本 2020）。

1、鐘Ⅰ－Ⅰ期

鐘Ⅰ－Ⅰ期（A1a式）では、数点のみが湘江流域のみに分布する。中原型甬鐘が数多く、随県葉家山 111 号墓³¹を除き、窖藏遺構で出土する。本期は、長江中流域に青銅甬鐘が出現する段階である。この段階（西周前期）の中原地域で宝鶏竹園溝 13 号墓（盧・胡 1988）、翼城大河口 1 号墓（山西省考古研究院 2020）の中で、甬部に吊してひもで幹部が付く小型青銅鐃が出現した。この幹部が大型青銅鐃では見られず、中原由来の属性である（宮本 2020）。一方、正鼓部文様、および全体の形態は長江中流域の有枚青銅鐃に関連性があり、西周中期まで存続している。このように、幹部が出現した後、大型青銅鐃の生産が続き、中原型青銅甬鐘が長江中流域に流通している可能性が高い。おそらく西周王朝の王畿地域で生産されたものが各地域に搬入されたと考えられる。地域色はまだ見られないことを看取る。

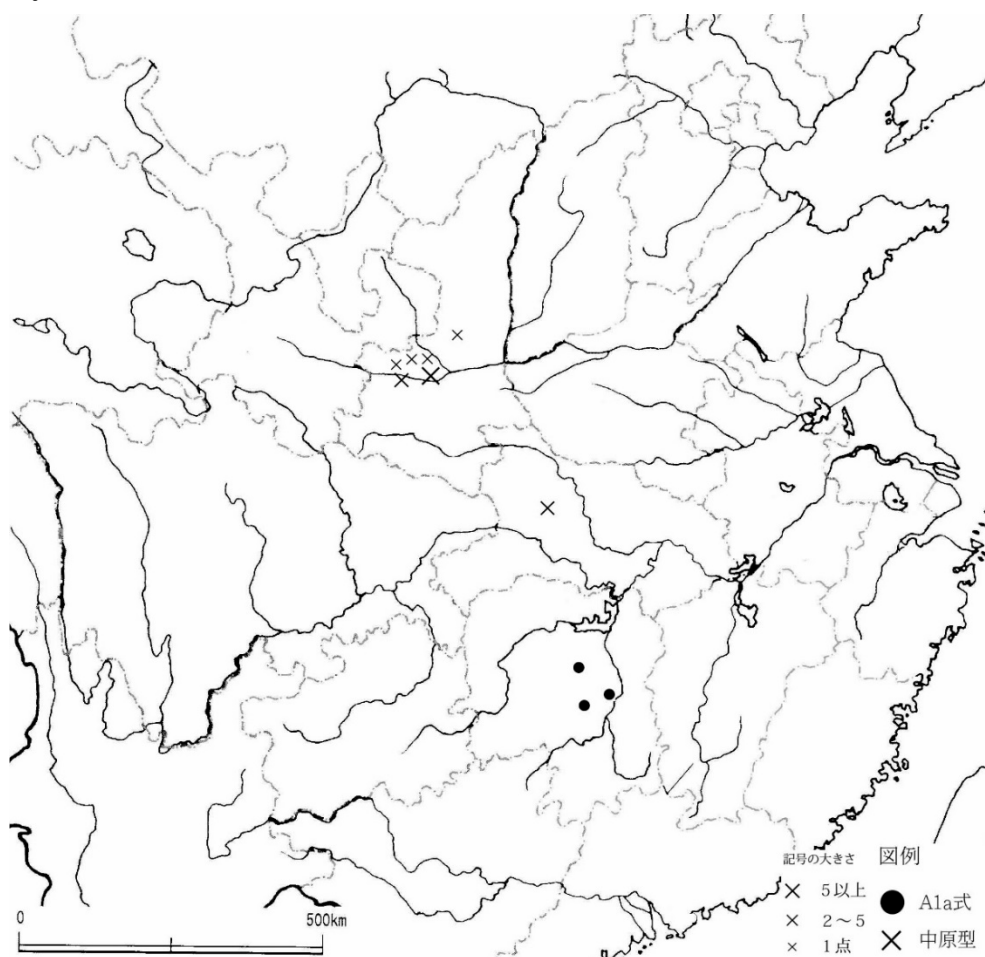


図5-8 鐘Ⅰ－Ⅰ期における青銅甬鐘の分布状況

³¹ 葉家山 111 号墓が集中している中原地域に離れるところに、すなわち湖北省に位置する。また、墓の年代は西周前期後半であるが、A2 式という乳釘文青銅甬鐘に併行する。

2、鐘Ⅰ－Ⅱ期

鐘Ⅰ－Ⅱ期（B1、A1b、A2式）では、数量が増加し、江西省の贛江流域へ拡散している。この分布現象は西周前期後半～西周中期に併行する饒Ⅳ期の分布範囲に近い。おそらく饒Ⅳ期を継承しつつ、鐘へと転換した段階であり、西周文化の影響が考えられる。中原地域では、王畿地区窖藏での発見の他、周辺の諸侯国で副葬が見られる。一方、湘江流域、贛江流域では埋納遺構のみである。本期に、長江中流域の甬鐘は中原文化拡散の背景の下、発達し広がったと考えられる。また、湘江、贛江各流域に型式差は見られない。

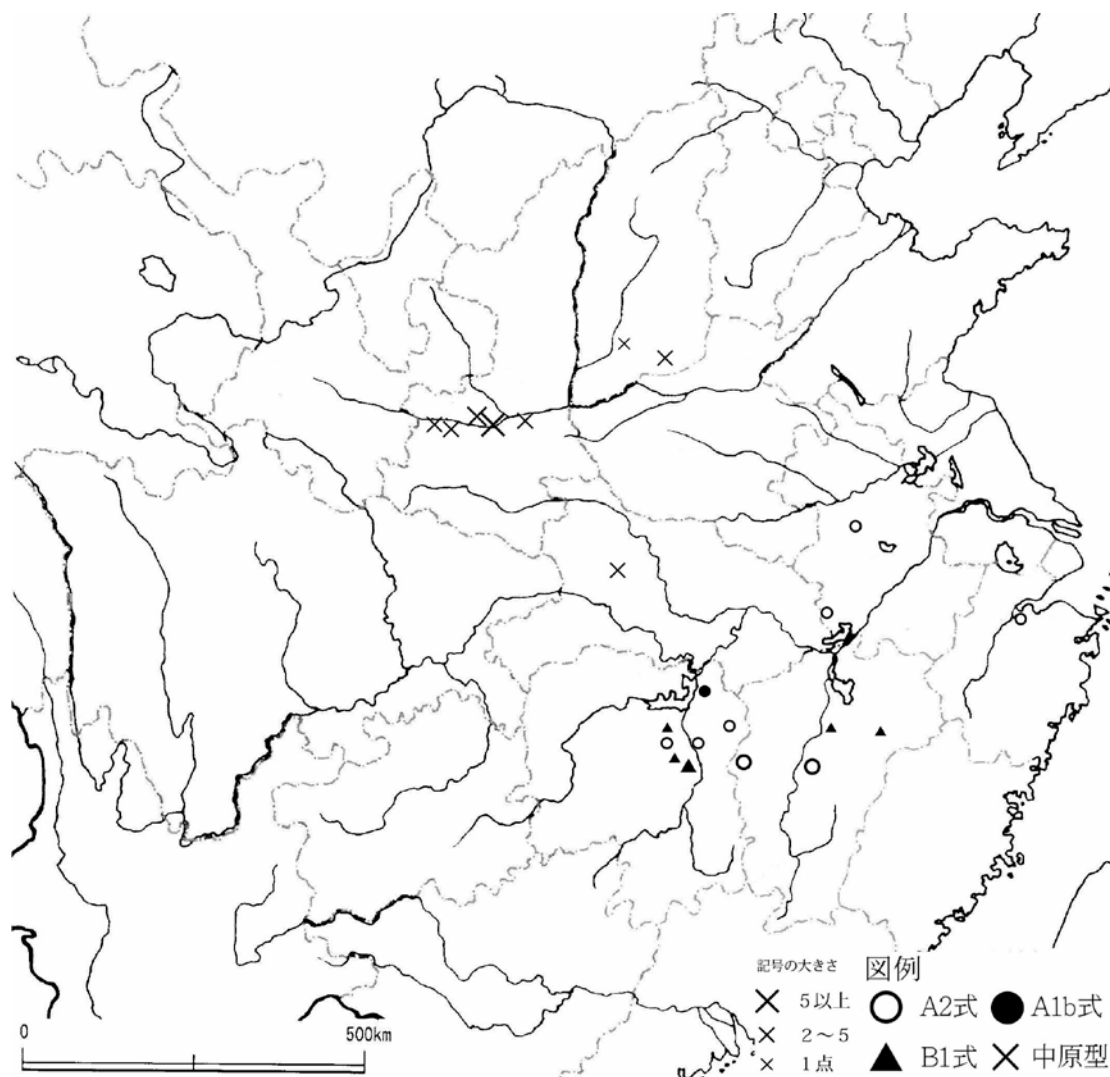


図5-9 鐘Ⅰ－Ⅱ期における青銅甬鐘の分布状況

3、鐘Ⅱ期

鐘Ⅱ期（B2、A3 式）では数量が減少するが、単独埋納に加えセットでの埋納が始まる。湖北省北部における漢水中流域³²、湖南省南部、湘江上流域に分布する。A3 式は長江中流域北部に集中し、B2 式はさらに南進する。この段階の中原では、中原型甬鐘に龍文、鳳文という動物意匠が施されるようになり、長江中流域の甬鐘とは異なる地域色を帯びるようになる。一方、この段階の中原型甬鐘（西周後期）では、主文様に動物意匠が出現、羽文の系譜も異なり、音楽性が高い編鐘となっている（長澤 2017、宮本 2020）。これらの中原型甬鐘は、大型青銅饒の系譜とは異なり、以下では分布の検討から除外したい。

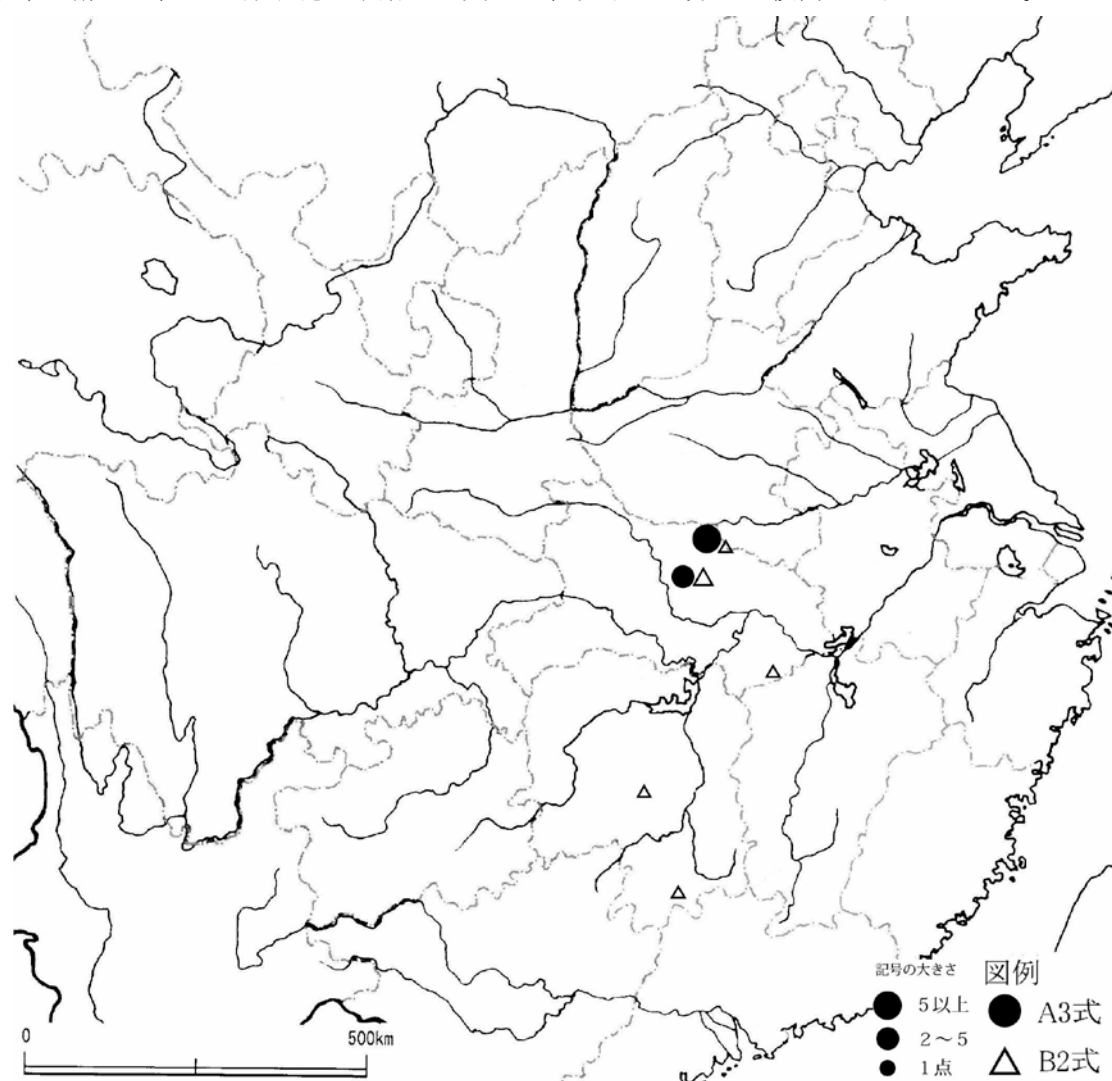


図 5-10 鐘Ⅱ期における青銅甬鐘の分布状況

³² ここでは、2つの集中埋納がある。鐘祥県花山埋納遺構は甬鐘7点を含み、西周後期に相当する。大悟県雷家山埋納遺構は鐘5点、鼎1点、武器/工具類の数点を含み、西周後期に相当する。

4、鐘Ⅲ期

鐘Ⅲ期（B3、A4 式）になると、湘江、贛江流域には殆ど見られなくなる。B3 式は嶺南地域、長江下流域に分布し、A4 式は長江主流の中流域（江漢平原）に分布するという地域差が看取される。この段階では、セットでの埋納が殆どである。中原では編鐘として出土する一方で、長江中流域が単数埋納、あるいは大規模な集中埋納である³³。

注目すべきは、第Ⅰ期以降の分布差である。第Ⅰ期では、湘江、贛江各流域に分布の中心があったのに対し、それが鐘Ⅱ期以降では、長江中流域などに変化していくことである。いずれも、中原との比較においては、長江中流域の地域性と言えるものの、その「地域性」の内容は大きく異なっていた可能性が伺えよう。

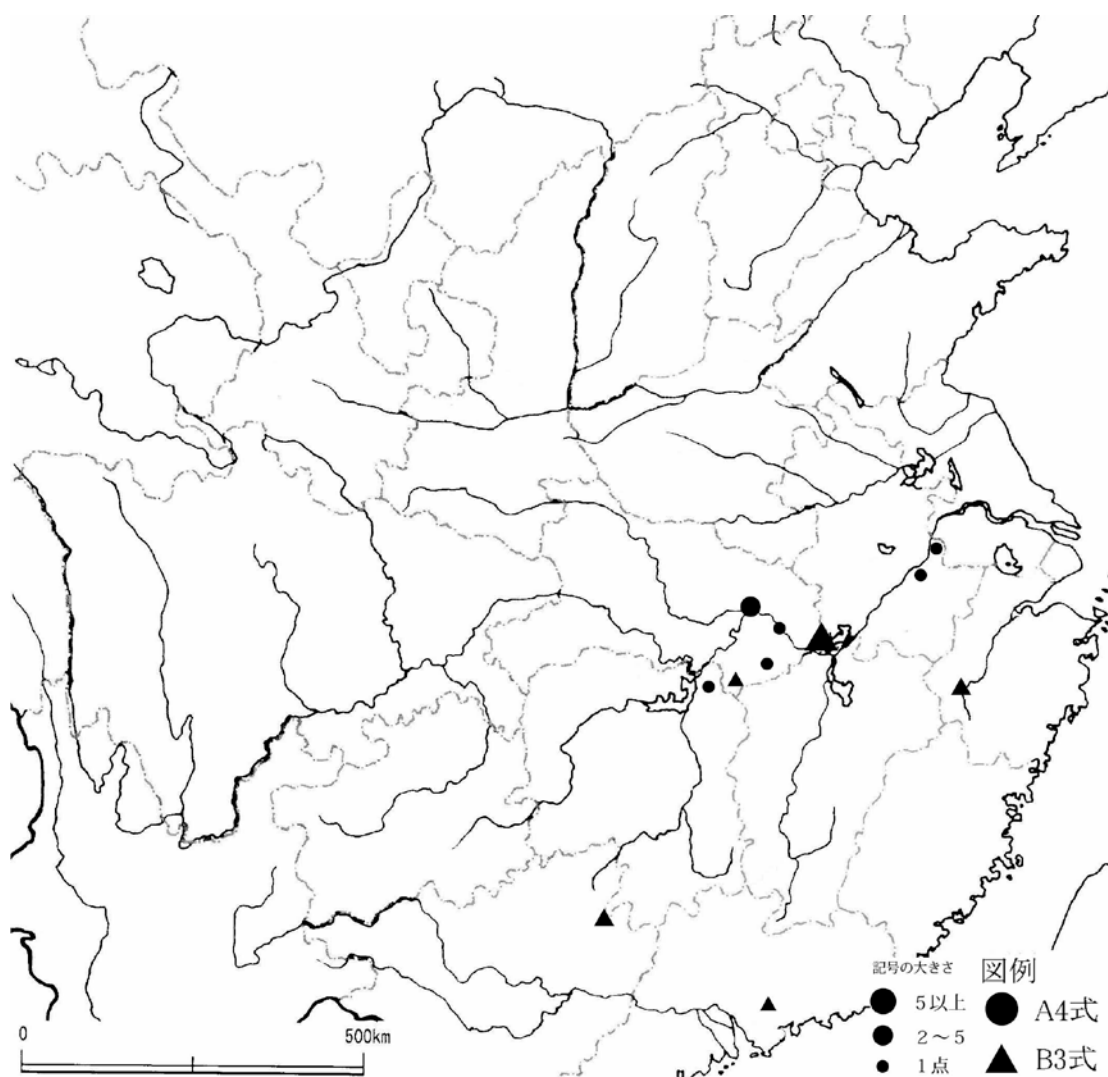


図 5-11 鐘Ⅲ期における青銅甬鐘の分布状況

³³ 集中埋納の場合、本論で扱わない青銅甬鐘が存在するが、湖北省武穴市の場合、川の中で出土する状況（湖北省博物館 1984）が、一括として出土することが判断しにくい。また、浙江省江山県の場合、出土状況も判断しにくい（柴 1995）。

第4節 長江中流域の青銅甬鐘の考察

1、鐘Ⅰ期および、地方型甬鐘の起源

鐘Ⅰ期の長江中下流域の甬鐘に関して、中原地域のものとの法量（器高×重量）を比較してみよう（図5-12～14）。

まず図5-12において、中原二重細線文鐘とA1b式の器高は20～30cmであり、小型青銅鐃の器高の範囲に収まる一方で、中原円圈文鐘とA1a式はおおよそ40～65cmで大型青銅鐃の範囲である（朱1995、李1996）。このように、大きさから言うと、中原および長江中下流域の2型式はほぼ対応し、なおかつ青銅鐃の大小にも対応しているのである。従って、筆者としては、A1a式とA1b式は同様な発生過程を持つものと推定したい。すなわち、大小の青銅鐃から、幹部を加え、中原で中原型甬鐘（中原円圈文鐘・中原二重細線文鐘）が発生し、それらを経て、長江中下流域のA1a式、A1b式が生じたと考えるのである。

中原型甬鐘は当初、「同規格2点+別規格1点」、「同規格2点+別規格2点」というセット関係があり、厳密な同規格3点のセット関係ではないことも知られている（王2015）。中原では、乳釘文甬鐘が出現した第Ⅰ-2期になってはじめて、殷代の副葬制度を継承し、3点同規格のセットになる（図5-13）。一方で、これらの中原型甬鐘に基づいた、長江中流域のA1a式、A1b式、A2式甬鐘は、セットでなく、単独埋納であり、40cm以上のものが多い。これは鐘Ⅰ期の長江中流域において自律的に選択された結果ではないかと考えられる。

こうしたセット関係のくずれは、B1式においても看取される。図5-14は、中原沈線文甬鐘とそれに基づくB1式の法量を比較したものであるが、前者ではサイズの3区分が明確である一方、長江中流域B1式では大まかには2区分しか確認できない。ここでも、中原からの搬入品を基にした在地の変容が伺える。確かに、中原型甬鐘の系譜では、区画線における凸線から沈線への発展が指摘されている（宮本2020）。しかしながら、長江中流域において、沈線文区画線を施す大型青銅鐃が存在することを考えると（向2010）、第Ⅰ-2期において、中原青銅甬鐘を受容する一方、沈線文区画線を持つ大型青銅鐃の影響の下、在地で生産されたものがB1式であろう。

つまり、第Ⅰ期では、在来大型青銅鐃から直接に甬鐘が生じたのではなく、2種の中原型甬鐘からA1a式、A1b式がそれぞれ生じ、B1式についても、中原で形成した甬鐘の幹部と在来の沈線文区画線を持つ大型青銅鐃が融合する形で発生したと考えられるのである。

2、中原青銅甬鐘との比較

中原型甬鐘の文様では、正鼓部にL字龍文、顧首鳥文（図5-15）という動物意匠が見られる（宮本2020）。側鼓部の鳥文（図5-16上）は、これは二音演奏のための叩き部位を指すものである（馬1981、朱・呂1994）。さらに西周中後期においては、鉦部、鼓部の空白部分に銘文を施すことがある（図5-16下）。

地方型甬鐘は正鼓部に羽文が次第に発展した。側鼓部には中原地域に類似

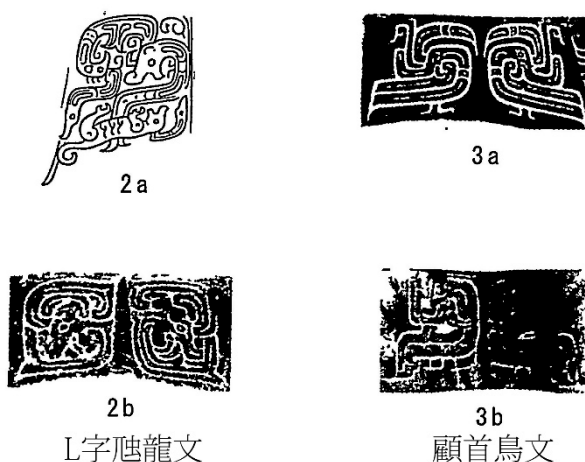


図5-15 中原型甬鐘の動物意匠（宮本2020より 転載 左：L字龍文、右：顧首鳥文）

する鳥文が B1、B2、A3 式では出現したが、変異羽文の出現に伴って A4、B3 式では鳥文が見られなくなる。鉦部には銘文はなく、文様を施文する。一方で、複数凸線の羽文 1 から、羽文 2a、羽文 2b へという変遷は中原地域と一致する。つまり、中原型甬鐘からは動物意匠、銘文を收容せず、正鼓部には地域的自律性が反映されている。本来的に音楽記号であった側鼓部鳥文の消滅は、際立った音楽性を有することとなった中原型編鐘とはかなり異なる変化である。総じて、地方型青銅甬鐘では、西周文化の影響は徐々に衰退し、地域色が出現することが伺える。

さらに、鉦体高×枚高を比較すると（図 5-17）、中原型甬鐘では鉦体高と枚高がほぼ正相関を示し、規範性が示唆される。一方、地方型甬鐘は鐘Ⅰ期、Ⅱ期では正の相関を示すが、鐘Ⅲ期からは中原地域と異なる分布範囲を示している。枚部は、音の安定および残響時間など音楽的機能に関わるのである（華・賈 1983、朱 1995）、長江中流域の甬鐘は鐘Ⅲ期から、中原地域と同様の楽器として機能しなくなった可能性がある。地方型甬鐘では、口部内面に調音による人工痕跡も見られないことも、音楽的機能の消失を物語るものである。

纏めると、西周時代における中原型甬鐘は和音を求めて編鐘になっていく（長澤 2017）一方で、地方型甬鐘では音楽的機能が発達せず、在来の大型青銅鐃段階から続く、在地的祭祀機能が継続していると考えられる。しかしながら大型青銅鐃と異なる、単独でない複数の埋納への変化は、中原地域の影響である可能性がある。

3、長江中流域青銅甬鐘の展開

鐘Ⅰ-1 期では、中原型甬鐘 A1a 式が搬入され、湘江流域のみに分布し、単独で埋納される。つまり、青銅甬鐘を自律的に選択、消費する段階である。これは、大型青銅鐃 A3 式が湘江流域に独占され、中原文化の一定的な関係を持つことであろう。

鐘Ⅰ-2 期頃から、中原地域の諸侯国の墓では 3 点セットの甬鐘が副葬品として出現した。一方、地方型甬鐘は前段階と同じく単独で埋納された。形態上は中原型甬鐘との類似性が高いものの、B1 式と中原型の法量比較（図 5-16）では、西周前期～西周中期頃の長江中流域において、模倣品を生産していた状況（施 2002、村野 2005）と類似したものが看取される。中原型甬鐘が搬入されつつも、在地の大型青銅鐃の形態に基づいた、地域色のある甬鐘が出現したのである。さらに、同時期の大型青銅鐃（Ⅳ期）とは、明らかな分布差が存在する（図 5-18）。在地生産が認められる B1 式甬鐘が、主に湘江流域に広がる一方、甬鐘に類似する C3 式鐃、沈線文区画線を持つ C4 式鐃が湘江流域を越えて、湘贛青銅器文化圏という広い範囲に分布している。このように、B1 式甬鐘は湘江流域の在地集団が中原との一定の関係を持ちつつも、在地文化を継承したことを示している。さらに、

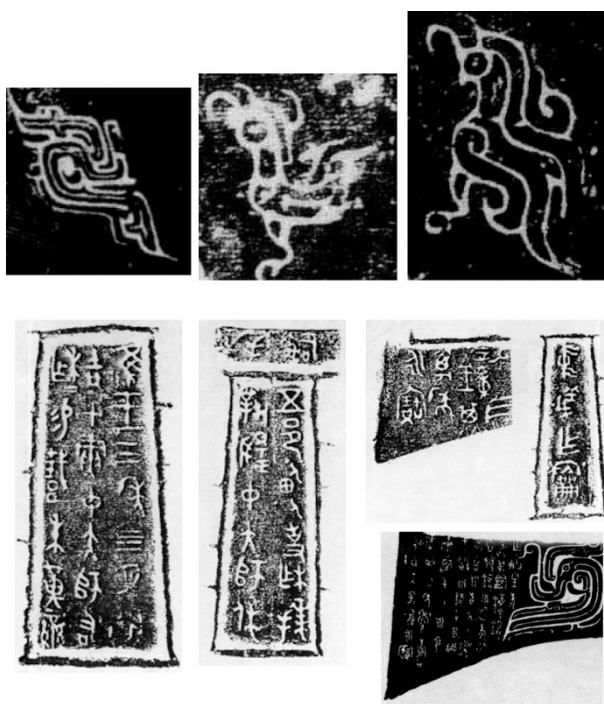


図 5-16 中原型甬鐘側鼓部の鳥記号および銘文の拓本（上：側鼓部の記号、下：銘文の拓本）

同時期に青銅鼎の在地生産が始まる事実（第5章）も、湘江流域の在地集団が西周文化要素を取り込んだことを示していよう。一方で、中原との関連性が低い湘江流域以外の地域は、大型青銅饒によって集団祭祀を継続させていった。

鐘Ⅱ期になると、これまで分布の中心であった範囲での数量が減少する傾向が見られる。さらに、異なる系統であるA型、B型甬鐘について分布差が出現する。B2式は湘江流域、

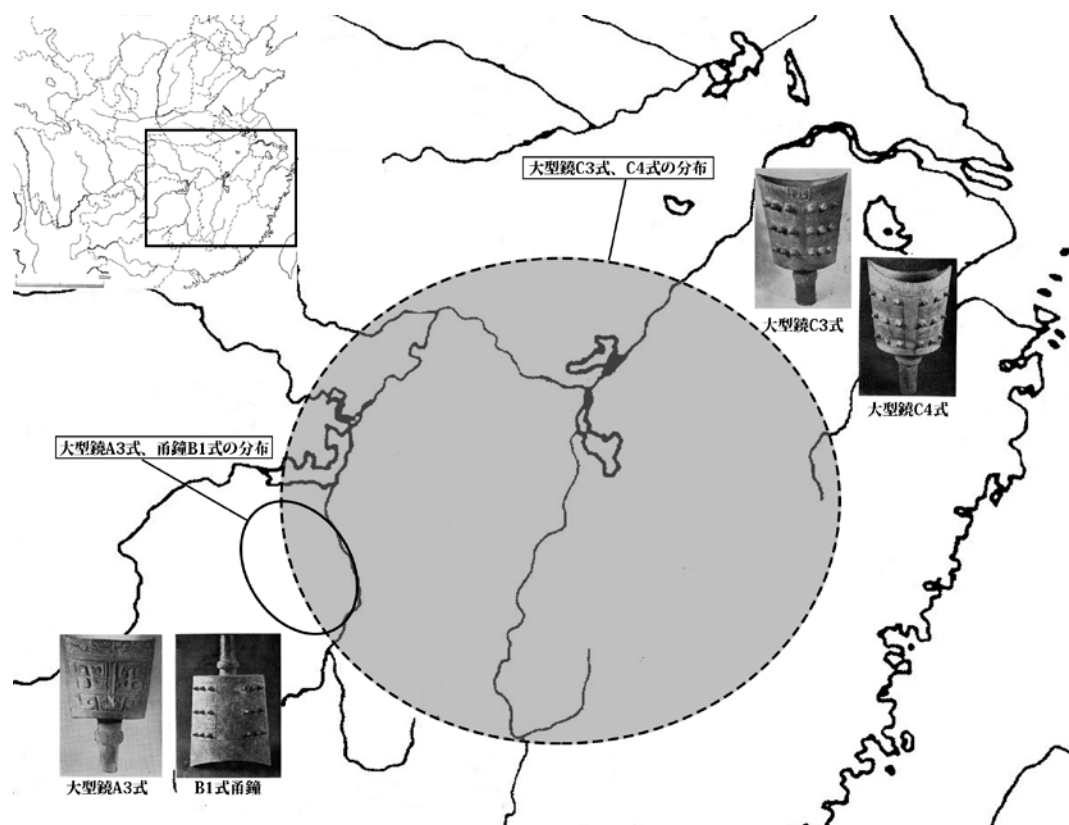


図5-18 饒Ⅳ期と鐘Ⅰ-Ⅱ期の分布差

長江中流域に、一方でA3式は湖北省北部にまとまっている。また、A3式特有の区画線を持つ緊密乳釘文甬鐘が中原地域に存在する（羅1980）。つまり、地方型青銅甬鐘の中でも、A型とB型の流通の差がこの段階から明瞭となっているのである。長江中流域において、西周中期からの大型青銅饒の消失に伴い（向2008）、地方型青銅鼎を副葬品として利用するようになる（向2005、村野2005）という地域性の変容と、この現象が軌を一にすることは興味深い。つまりこの分布差が、従来の湘贛青銅器文化がこの段階に内的変容を起こしたことを示唆するものと考えたい。また、A3式が湖北省北部にまとまる背景としては、西周時代のこの地が曾、随、鄂国などの諸侯国という西周文化の範囲にあたることが挙げられる。さらに、西周前期併行の湖北省江陵万城遺跡では、同一製作工房の中で、王朝系青銅器、地方型青銅器を生産することが認められる（陳2019）。これは、この段階における西周文化と湘贛青銅器文化の相互的な影響関係を示すものと思われる。

鐘Ⅲ期には湘江、贛江流域を中心とする地域の分布がなくなり、中原型甬鐘との形式的差異がさらに顕著化する。また地方型甬鐘（B3式）の分布域が長江中流域支流から、長江下流域、嶺南地域へ広がることが認められる。この場合、西周後期の西周文化が衰退するとともに、中原青銅器文化の「礼制変革」の背景の下、和音を求める音楽機能の強化に基づき、中原地域の編鐘と異なる展開が考えられる。一方、湘江流域を中心とする長江中流域の場合、青銅鼎の製作が発達し、副葬品になっている。すなわち、湘江流域で従来の祭

祀的機能の意味を失われ、威信財の機能が生まれる可能性がある。さらに長江下流域で華東青銅器文化（角道 2014）、すなわち土墩墓文化（岡村 1986、宮本 1997）が勃興しており、当該地域を統合している共同体社会の中で、地方型青銅器の階層性が生まれる可能性に関連する。したがって、長江中流域青銅器文化で、地方型青銅器の機能の改変に伴い、社会身分を反映しえる青銅鼎が必要に基づき、長江中流域における地方型甬鐘が次第に消失していく要因であろう。

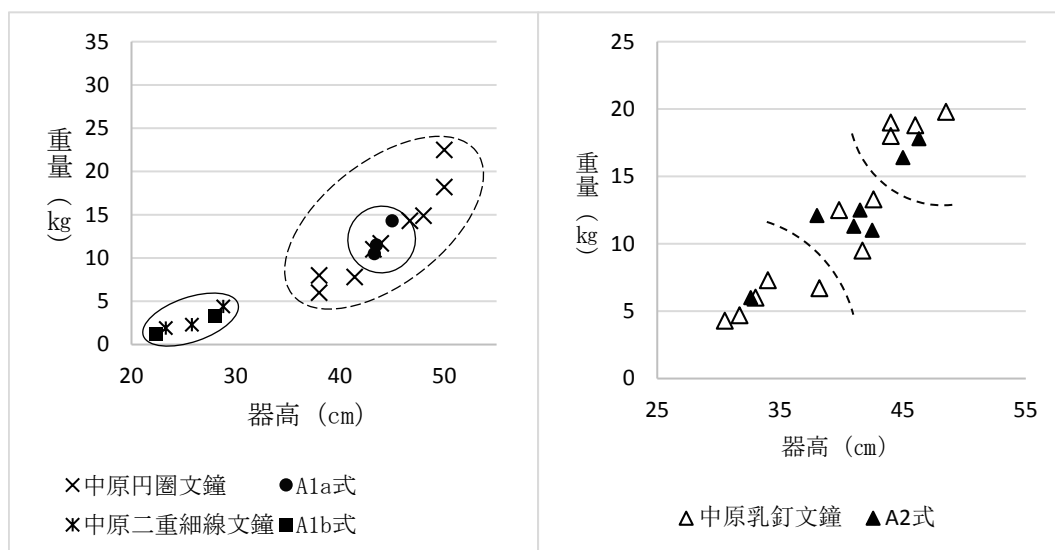


図 5-12 A1 式甬鐘—器高と重量の相関

図 5-13 A2 式甬鐘—器高と重量の相関

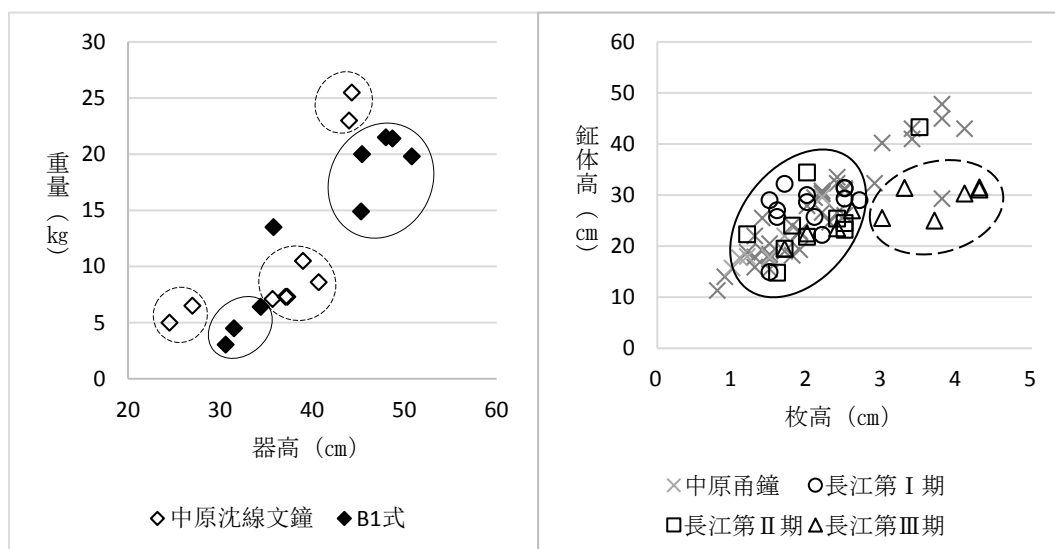


図 5-14 B1 式甬鐘—器高と重量の相関

図 5-17 中原型と地方型甬鐘形態の相関

第5節 小結

鐘Ⅰ-1期に相当する時期には、西周王朝成立の下、殷周文化の青銅樂器の流通が広がったことが文献から伺える³⁴。文献記載に示される交流以外に、南北交流を示す晋侯蘇鐘のような事例もある。高至喜氏は晋侯蘇編鐘の一部について、A型（区画線が円圈文を施し、幹部が付かないもの）（高1997）としたが、これは本論のA1a式より型式学的に遡るものである。高氏は、これを西周前期頃、長江以南の地域で生産、搬入されたものとしている（高1997、1999）。こうした搬入品と、中原地域の小型青銅鐃が融合し、青銅甬鐘が生まれた（宮本2020）。A1a式は主に湘江流域のみに分布するが、これは同時期の大A3式鐃（Ⅳ期）の分布と重なっている。長江中流域の青銅器文化は、中原で発生した青銅甬鐘を受け入れたものの、単独埋納のような在来的あり方は保持された。すなわち、この段階では長江中流域に位置する湘江流域が、鉱物資源獲得を目的とする西周と関係を持ち、その結果、中原型甬鐘がここに流通していると考えられる。また、鐘Ⅰ-2期（西周中期頃）でも、「昭王の南征」³⁵はじめ、中原からの強い影響を受けつつ、中原型甬鐘に類似した甬鐘を出現した。この現象について、大型青銅鐃Ⅳ期に相当する時期から考えよう。具体的にいえば、西周王朝は長江中流域に対して、政治的意図が行われた。すなわち、長江中流域の人々を従えるために、この地域の祭祀具となっていた大型鐃を周の祭祀に採り入れることにより、祭祀を通じて民を治めることができた指摘された（宮本2020）。一方、長江中流域の青銅器文化は祭祀を通じて各集団が結びつき、統合によって生じる矛盾を解消するために、西周文化の甬鐘に類似性が高いものを生産し始める。しかしながら、それらは機能的には従来の大型青銅鐃と同様であり、在地での埋納による消費が続きながら、在地的自律性を保っていることを示している。このように、長江中流域で、西周王朝との接触が頻繁である湘江流域の在地集団が、当初の地方型青銅器文化から変化していった。これは、弥生時代中期後半に、銅鐃が他地域に先駆けて発見される北部九州内において、中心と周辺を形成する様相（辻田2019）に対比できる。

鐘Ⅱ期以降、長江中流域の青銅器文化の地域性が変容する。これは、湘江流域の青銅鼎の動態（村野2005）、また南方地域における越式鼎の展開過程（横倉ほか1990、向2005）と関連する。村野氏によれば、この段階に在地の階層性が強化され（村野2005）、青銅器の種類・機能が変わっていくという。こうした背景の下、鐘Ⅱ期には、青銅甬鐘を埋納青銅器として用いる従来の長江中流域青銅器文化のあり方が終焉を迎えたと考えられる。さらに、鐘Ⅲ期は、西周後期～春秋前期という中原青銅器文化の転換期に相当し、曾国などの諸侯国が湖北省北部に展開する。一方で、湘江流域の社会は再び等質化する（村野2005）。鐘Ⅲ期の長江中流域内において、従来とは異なる周辺地域で、在地的祭祀機能を継続させた地方型甬鐘が発達する背景には、こうした社会的要因があった可能性があろう。

本章では、地方型甬鐘を研究対象として、長江中流域における地方型青銅器文化の展開、および変容状況を提示した。長江中流域では、中原型甬鐘の型式に基づいて、西周中期頃から在地生産が行われ、地方型青銅甬鐘が生まれる。そして、地方型甬鐘の展開は、長江中流域青銅器文化全体に見られる社会変動と連動した可能性があることが判明した。当該地域の青銅器文化全体を解明するため、次に地方型青銅鼎を検討しよう。

³⁴ 「紂愈淫乱不止。微子数諫不聽、乃与大師、少師謀、遂去。……殷之大師、少師乃持其祭樂器奔周。」（『史記・殷本紀』）、「居二年，聞紂昏乱暴虐滋甚，殺王子比干，囚箕子。太師疵、少師疆抱其樂器而奔周。」（『史記』周本紀）、「封諸侯，班賜宗彝，作分殷之器物。」（『史記』周本紀）

³⁵ 注25に参照

第5章 殷周時代における長江中流域の青銅鼎の展開

中原青銅器文化にとって青銅鼎は、最も重要な青銅器の一つである。中原青銅器文化の拡大とともに、地方でも青銅鼎が受容されていった。前章までの青銅鏡・甬鐘の分析では、その動態が、先学で指摘されてきた地方型青銅鼎あるいは典型的越式鼎の出現・動向に繋がる可能性を指摘した。そこで本章では、殷後期～春秋時代にかけて地方型青銅器文化に見られた青銅鼎を対象資料として、その系譜関係と展開を明らかにしていく。まず村野正景氏の研究（村野 2005）を参考にし、地方型青銅鼎を抽出、型式設定を行う。その後、一括遺物、共伴関係、中原青銅器との併行関係によって編年し、分布を検討する。

第1節 青銅鼎の型式分類

1、形式分類

先行研究では、胴部形態、胴部の深さ、および足部形態によって大別され（林 1984、1986）、文様のバリエーションによる細分が行われている（角道 2010）。中原青銅鼎との比較のため、長江中流域についても胴部、足部による分類を行う。

（1）胴部形態

最大径の位置、口縁から底部にかけての側視形によって、以下の6種類に分けられる。

浅い円腹：口縁部が少し突出する、浅鉢形の胴部。胴部最大径は頸部近くに位置する。側視形では、頸部から底部にかけての径の差が顕著でない。浅い円腹 a、浅い円腹 b の2バリエーションが存在する。

深い円腹：口縁部が少し突出する、側視形がやや膨らむもの。底部が丸底である深鉢形である。胴部が器高全体の半分を占める。

外反垂腹：頸部がくびれ、口縁部が外反する。胴部最大径が底部に近くに位置し、側視形が垂腹であるもの。

釜形円腹：口縁部が外反し、屈曲形態が「く」字形を呈する。胴部最大径が頸部と底部の中間に位置する。側視形は釜に類似する。口縁が外反するか、口唇部が肥大化し盤状を呈するかによって2バリエーションが存在する。この釜形円腹は中原地域では見られず、盤状口縁は春秋時代における越式鼎の特徴と言われる（横倉ほか 1990、吉開 1999）。

（2）足部形態

側視形、断面形によって、以下の6種類に分けられる。

錐柱足：先端は平らであるが、上下両端の径に差が見られる。側視形は台形に類似し、断面は円形である。上端部に文様を施すものが多く、中原型として捉えられる。

柱足：先端が平らで、上下両端の径に殆ど差がないもの。中原型として捉えられる。

くびれ柱足：やや細い柱足でくびれを持つもの。上下両端の径差は顕著でない。断面は半円形である。中原地域では太い柱足が知られ、細いものは地方型と考えられる。

蹄形柱足：上端の膨らみが顕著で、下端部が獣蹄化するもの。断面は円形である。獣蹄形足の原始的形態で、西周後期によく見られる（角道 2014）、中原型である。

獣蹄形足：上端が膨らみ、動物意匠化が進んだ本格的獣蹄である。断面が鋭い多辺形をなす。楚式青銅器として捉えられる。

外反足：「越式鼎」にみられる（横倉ほか 1990）、明確に外反する足部。先学（村野 2005、向 2008）を参照すると、床に接触する端部の形態によって2区分できる。1つは、床に一点で接する端部を持つ、側視形が刀子のような外反尖足で、もう1つは、より細く、下端部が屈曲して床に接する外反細足である。いずれの断面も殆どが半円形である。

(3) 属性の相関と形式設定

以上、(1)(2)の形態を組み合わせ(表 6-1)で、下記のような12種のバリエーションを見出すことが出来る。

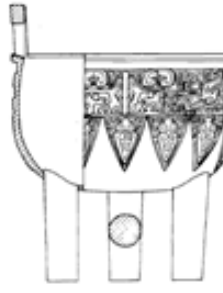
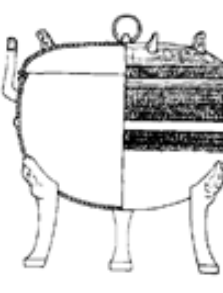
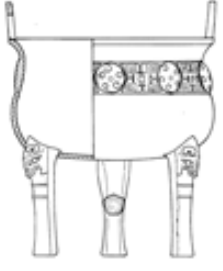
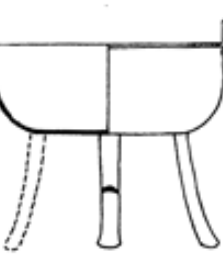
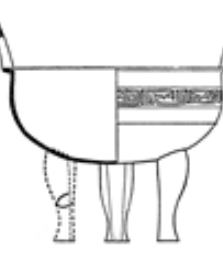
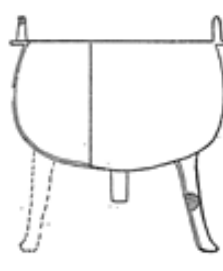
		
①深い円腹×錐柱足	②深い円腹×柱足	③深い円腹×獸蹄形足
		
④浅い円腹a×くびれ柱足	⑤浅い円腹a×外反尖足	⑥浅い円腹a×外反細足
		
⑦外反垂腹×くびれ柱足	⑧釜形円腹a×くびれ柱足	⑨釜形円腹b×外反細足
		
⑩浅い円腹b×外反細足	⑪浅い円腹a×蹄形柱足	⑫深い円腹×外反細足

図 6-1 青銅鼎の形態

- ①深い円腹×錐柱足
- ②深い円腹×柱足
- ③深い円腹×獸蹄形足
- ④浅い円腹 a×くびれ柱足
- ⑤浅い円腹 a×外反尖足
- ⑥浅い円腹 a×外反細足
- ⑦外反垂腹×くびれ柱足
- ⑧釜形円腹 a×くびれ柱足
- ⑨釜形円腹 b×外反細足
- ⑩浅い円腹 b×外反細足
- ⑪浅い円腹 a×蹄形柱足
- ⑫深い円腹×外反細足

表 6-1 青銅鼎の胴部形態と足部形態の相関

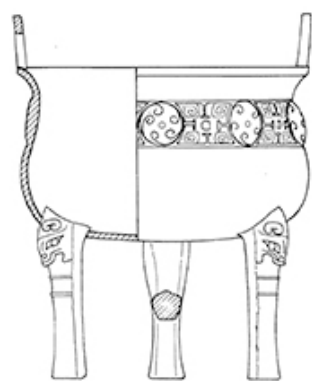
足形 形態	胴部形態					
	深円	浅円a	浅円b	外垂	釜円a	釜円b
錐柱	4					
円柱	7					
く柱		1		15	3	
蹄柱		11				
獸蹄	10					
尖足		9				
細足	6	13	26			6

これらを殷周時代の青銅鼎に比較すると、①、②は殷後期～西周時代の柱足鼎、③は楚式鼎、⑪は西周後期～春秋前期の蹄足鼎にそれぞれ対応できる（林 1984、1986、劉 1995、袁 2015）。また先学によれば、⑤、⑥、⑨が越式鼎の古段階、⑩、⑫が典型的無文外反足越式鼎（横倉ほか 1990）、④、⑦、⑧が越式鼎の祖型または始原形とされている（村野 2005、向 2005）。一方で、文様からすると、⑪の一部が越式鼎の古段階とされ（横倉ほか 1990）、長江下流域の⑪については S 形龍文、S 形雲文、連続夔文を持ち、地方型文様の系列とされている（岡村 1986）。また、⑤、⑦の胴部文様には罔井文、櫛文、曲折文、格子文などが見られるが、罔井文は地方型青銅器の特徴で（林 1981）、連続夔文、櫛文、曲折文、格子文などの幾何文は印文陶文化圏の文様（彭 1987）との関連が想定できる。そこで、①、②、③を殷周時代の中原型あるいは楚式青銅鼎の搬入品と考え、これらを除いたものに関して以下のように型式設定を行う。⑨については、Dd 型とすることも可能であるが、口縁部から胴部まで、Da～Dc 式とはかなり異なるものであり、E 型としておく。

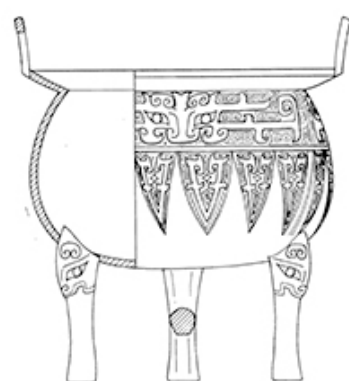
- Aa 型：（上記④）足部がくびれ柱足であり、胴部形態が浅い円腹 a である。
- Ab 型：（上記⑦）足部がくびれ柱足であり、胴部形態が外反垂腹である。
- Ac 型：（上記⑧）足部がくびれ柱足であり、胴部形態が釜形円腹 a である。
- B 型：（上記⑪）足部が蹄形柱足であり、胴部形態が浅い円腹 a である。
- C 型：（上記⑤）足部が外反尖足であり、胴部形態が浅い円腹 a である。
- Da 型：（上記⑥）足部が外反細足であり、胴部形態が浅い円腹 a である。
- Db 型：（上記⑩）足部が外反細足であり、胴部形態が浅い円腹 b である。
- Dc 型：（上記⑫）足部が外反細足であり、胴部形態が深い円腹である。
- E 型：（上記⑨）足部が外反細足であり、胴部形態が釜形円腹 b である。



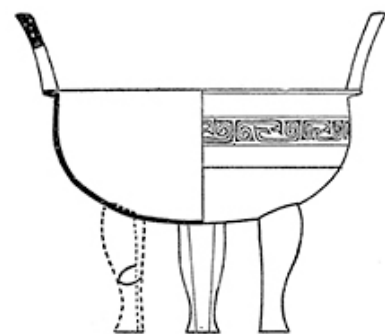
Aa型



Ab型



Ac型



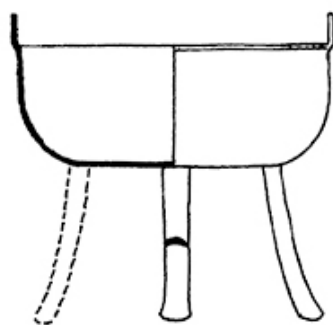
B型



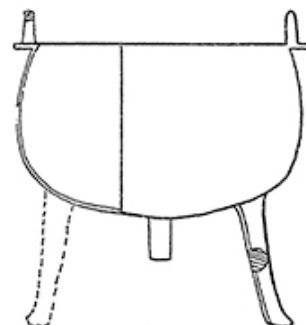
C型



Da型



Db型



Dc型



E型

図 6-2 地方型青銅鼎の形式

2、地方型青銅鼎の型式設定

(1) Aa 型の型式設定

Aa 型は高砂脊墓地 1 号墓で 3 点があるが、1 点 (AM1:4³⁶) しか掲載していない。型式区分は不可能である。共伴する中原型 (AM1:18) と比較すれば、胴部が浅く、足部がくびれた柱足である点が異なるが、胴部文様が獣面文と蟬文の配置で、形態も一致する。従って、中原型の形態に基づいた、模倣品と考えられる。先学による型式学検討 (施 2002、村野 2005) のほか、AM1:4 では、底部範線が三角形を呈し、これは長江流域の越式鼎によく見られる製作痕跡である (譚 1997)。したがって、Aa 型の形態は中原型に近いと言えるが、長江流域における製作技術による在地生産であることがわかる。

(2) Ab 型の型式設定

属性抽出

a. 足部断面形・文様

足部では、くびれた柱足に獣面文を施すものから、獣面がくずれ、文様を失う変化が想定できる。また、断面形が当初は実芯の円形または多角形であるが、その内側に窪みが生じ、半円形に近くなる。そして、窪みが深化し樋状になっていく。

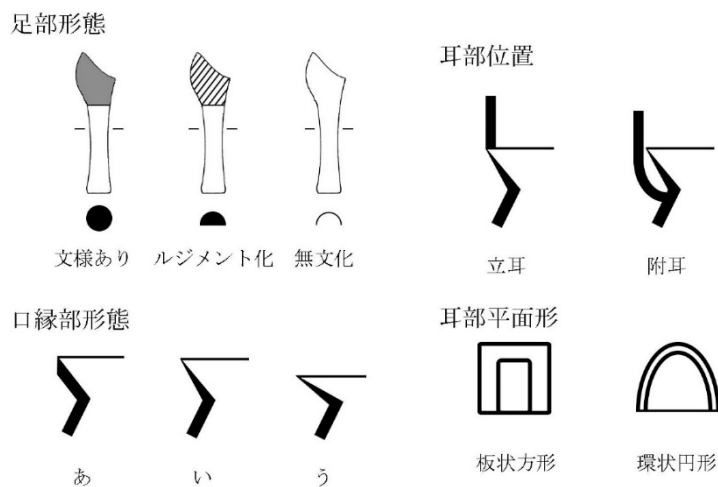


図 6-3 地方型青銅鼎 Ab 型の属性変異

b. 胴部深高比・文様

腹深度合では、深い胴部から浅い胴部へと変

化することが想定される。これは、深高比によって示され、値が徐々に小さくなる。

また胴部文様のモチーフが変化する。当初、中原青銅鼎の獣面文と蟬文の組み合わせを参考に、在地の主文様 (囧文および井文) が蟬文とともに表現される。その後、在地化し、蟬文を失い、在地文様のみが残る。さらに囧文、井文を交互に配した文様帯のうち、井文が意匠化し、西周時期の中原地域でよく見られる夔龍、龍形などの動物文様が出現する。その後、文様帯の増加、主文様の単純化が見られ、龍形意匠を「ヨコ S」で表現し、櫛文、曲折文などの補助文様が出現する。

胴部文様

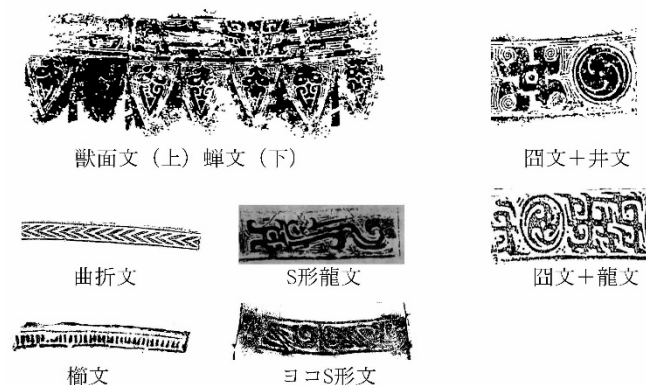


図 6-4 地方型青銅鼎 Ab 型の胴部文様

³⁶ 中国の発掘報告では遺構の名称は、ピンインに基づいたアルファベットの略称が使用される。例えば、「M」は墓 (「墓葬 (muzang) 」) を示す。本論の記載においても本略称を使用する。

c. 口縁部形態

口唇部が平らで、口縁部から胴部までが一定の厚さのもの（あ）から、口唇部が鋭くなり、先端に向かって細くなるもの（い）を経て、頸部屈曲が顕著になり、さらに、口縁部の外反程度が一層に曲がるとともに、角度が大きくなり、やや水平方向へ伸ばしていくと考えられる（う）。

d. 耳部位置・平面形

渾鑄（一鑄）で口縁上に付く立耳から、分鑄で頸部上に付く附耳への変化、また耳部自身も、厚い板状から、薄く環状の耳への変化が想定できる。また口縁に直立するかのから、外反するようになる。

表 6-2 地方型青銅鼎 Ab 型の属性相関

番号	鼎名称（番号）	法量			口縁部	足部		胴部文様	耳部	
		器高	腹深	深高比		断面	文様		平面形	断面形
1	高砂脊AM1:6	14.5	7.2	0.5	あ	多边形	○	獣+蟬	立耳	板状
2	高砂脊AM1:3	13.8	6.4	0.46	あ	多边形	○	囧井+蟬	立耳	板状
3	高砂脊AM1:2	13.8	6.5	0.47	あ	多边形	○	囧井	立耳	板状
4	株洲白関越人墓M:1	15.5	7.4	0.48	い	半円	×	S形龍	立耳	板状
5	湘潭小托窖藏鼎J:10	16.6	7.8	0.47	い	円形	△	囧龍	立耳	板状
6	醴陵北郷黄達嘴鼎	19	7.4	0.39	い	半円	△	囧龍	立耳	板状
7	屯溪M3:11	-	-	-	い	中空	△	囧龍	立耳	板状
8	长沙金井墓地1	22.2	10.4	0.47	い	半円?	?	囧龍+曲	立耳	板状
9	長沙県福臨区3	14.6	7	0.47	う	?	?	雲+?	附耳	環状
10	資興旧市M276:6	19.2	7.3	0.38	う	中空	×	囧龍+曲	立耳	板状
11	長沙県路口1	18.4	8.2	0.44	う	?	△	ヨコS形	立耳	?
12	湘潭小托窖藏鼎J:11	25.7	10.5	0.41	う	中空	×	ヨコS形	立耳	環状
13	資興旧市M351:1	17.5	6.1	0.34	う?	中空	×	櫛+雲+曲	立耳	?
14	湘潭小托窖藏鼎J:12	18.8	7.3	0.39	う	中空	×	?	立耳	環状
15	长沙金井墓地2	17.3	6.3	0.36	う	中空	×	ヨコS形	附耳	環状

属性の相関（表 6-2、図 6-5）

まず、口縁部と深高比を見よう。口縁部「あ」は、深高比 0.46~0.5 にまとまるが、口縁部「い」は、深高比の数値の 0.39 がやや小さくなる傾向と想定できる。さらに、口縁部「う」は、深高比 0.37~0.45 になり、顕著に小さくなる。すなわち、口縁部が「あ」→「い」→「う」の変化に伴い、浅腹化するといえる（表 6-5）。また、足部断面形の中空化、足部文様の無文化も、口縁部に相関する。さらに、胴部文様のモチーフ獣面文+蟬文→龍文→幾何文という方向、そして補助文様である櫛文、曲折文の出現も上記諸属性と相関している（表 6-2）。また、

附耳は二例しか見られないが、口縁部がすべて「う」であり、これも他と矛盾しない。耳部形態の板状から環状への変化も口縁部「あ」、「い」→「う」へ方向と一致する。これらに基づき、口縁部を軸として、以下のように型式設定する。

Ab1 式：胴部がやや深く、口縁部「あ」のもの。断面多边形の有文柱足であり、胴部文様に蟬文を施すもの。

Ab2 式：胴部がやや深く、口縁部「い」のもの。獣面退化文様の柱足、胴部文様に龍文を施すものが多い。

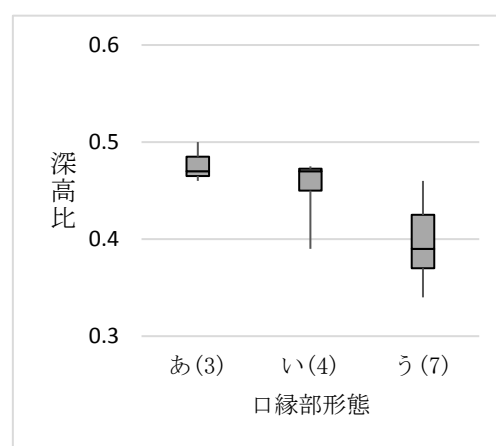


図 6-5 深高比×口縁部の相関

Ab3 式：胴部が浅く、口縁部「う」のもの。無文柱足で、胴部文様に幾何文、補助文様を施すものが多い。

(3) Ac 型の型式設定

Ac 型の既存資料は 10 点あるが、報告されたもの 4 点しかない。数量的検証が難しいが、各器物を見ていこう。

高砂脊出土鼎 (AM1:7)：口縁部上に立耳が付き、口唇が方形で、口縁が外反する。Ab 型の口縁部「あ」に類似する。胴部形態は円腹で、獣面文帯の下に、連続する蟬文を施す。足部はくびれ柱足であり、上端部に獣面文を施す。

寧郷黄材栗山収集鼎：上記高砂脊鼎の形態におおよそ類似する。と見られる。一方で、胴部文様が無く、くびれ柱足の上端部には退化した獣面が付く。

湖南博物館蔵鼎・広東対面山 M59:1 鼎：胴部文様が無いことは、栗山収集鼎同様であるが、くびれ柱足の上端部が獣面文も無くし、くびれ柱足の形態のみ保っている。広東対面山 M59:1 鼎のみ足部がやや外反し、全体的に平たく、他との差異が大きい。

こうした変異は、Ab 型足部や胴部文様の変化方向と同様と考えれば理解しやすい。つまり、足部では獣面文の退化、胴部文様では蟬文が最初くると考えられる。検証は難しいが、足部の形態差によって、3 型式を設定することが可能であろう (図 6-6)。

Ac1 式：高砂脊 AM1:7 鼎

Ac2 式：寧郷黄材栗山収集鼎、湖南博物館蔵鼎

Ac3 式：広東対面山 M59:1 鼎

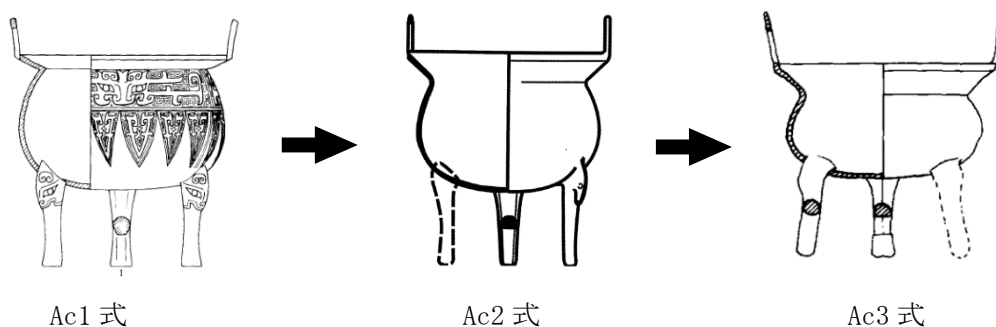


図 6-6 地方型青銅鼎 Ac 型の型式変化

(4) B 型の型式設定

属性抽出

図 6-7 は、口径 (横軸) と胴深 (縦軸) の相関を示したものであるが、2 つの不連続 (大・中・小) があり、これは時期差である可能性がある。また、耳部形態が、板状方形から丸気味の半円形へ変化することが想定できる。胴部文様に関しては、S 形雲文、連続夔文、重環文などのバリエーションがあるものの、文様では変化が想定しにくい。ただし、胴部主文様の複雑性、有無についていえば、主文様の簡素化が考えられる。

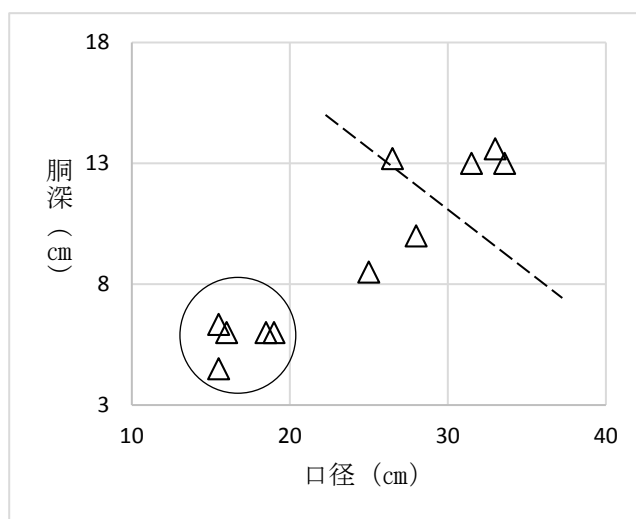


図 6-7 地方型青銅鼎 B 型胴部のサイズ

属性の相関

表 6-3 では、器物サイズの小型化に伴って、耳部が小型化、耳部平面形が板状方形から丸気味の半円形と変化する様相が読み取れる。また、胴部文様は一定のサイズに集中する傾向を示す。「S」形雲文、重環文は大型、中型に、連続夔文は中型、小型、無文は小型に集中する。以上から、サイズ差を軸として 3 型式を設定する。

B1 式：大型で、耳部は大きい方形、胴部に S 形雲文、重環文を施すもの。

B2 式：中型で、耳部は大きい方形、胴部に重環文、連続夔文を施すもの。

B3 式：小型で、耳部は小さい半円形、胴部の文様がないもの。

表 6-3 地方型青銅鼎 B 型の属性相関

番号	鼎名称	法量		耳部		胴部	
		器高	口径	平面形	断面形	補文	主文
1	江蘇溧水白馬	40	31.5	方形	外反	凸線	S形雲文
2	丹阳司徒煉瓦場1	33	33	方形	外反	凸線	S形雲文
3	安徽肥西金牛墓	31.8	33.6	方形	外反	凸線	重環文
4	湘潭古塘橋1	26	28	方形	外反	凸線	?
5	衡阳赤石M315	23	26.5	方形	外反	凸線	重環文
6	丹阳司徒煉瓦場5	23	27.6	方形	垂直	凸線	×
7	衡南胡家港1	20.5	25	方形	垂直	凸線	連続夔文
8	衡南胡家港2	16	18.5	?	?	凸線	連続夔文
9	湘潭古塘橋3a	16	19	半円形	垂直	凸線	×
10	湘潭古塘橋3b	13.5	15.5	半円形	垂直	凸線	×
11	衡南胡家港3	12.5	16	半円形	垂直	凸線	×
12	广西恭城	12.5	15.5	半円形	垂直	×	×

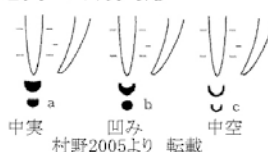
(5) C 型の型式設定

属性抽出

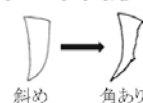
a. 足部形態

足部断面形は Ab 型と同様な変遷過程が見られる。すなわち、内側の青銅用量が減少し、中実足から次第に中空になっていくものである。湘江流域における在地系 B 鼎の足部でも同様の指摘がなされており（村野 2005）、本論でもこれを用いる。一方で、平面形によって、緩やかな外反足と、角ばる外反足を細分できる可能性がある。

足部の断面形



足部の平面形



胴部文様



図 6-8 地方型青銅鼎 C 型の属性変異

b. 胴部文様

まず、最も顕著な変化として、主文様が夔龍文から簡略化（瞳の退化）することが挙げられる（村野 2005）。他では、補助文様が連続点文から変化し、文様帯が広がり、

表 6-4 地方型青銅鼎 C 型の属性相関

番号	鼎名称	法量	足部形態			胴部	
		器高	断面形	平面形		補文	主文
1	屯溪1:81	13.4	中実	細	×	×	有瞳龍文
2	屯溪1:80	12.2	中実	細	×	連続点	有瞳龍文
3	上海博物館蔵		中実	細	×	曲+節	有瞳龍文
4	長沙金井墓2	13.8	凹み	太	×	曲+節	変形龍
5	長沙金井墓4	13.6	凹み	太	×	曲+曲	雲文
8	長沙県路口2	12.8	中空	太	○	曲+節	罍+変形龍
6	寧鄉坦塘2号		中空	太	○	曲+節	雲文
7	長沙福臨区2	12.4	中空	太	○	曲+節	雲文
9	長沙福臨区1	10.6	中空	太	○	×	格子

印文陶文化の文様（曲折文・櫛文など）を施すようになることが想定できる。これは、補助文様の増加と捉えられ、最終的には夔龍文が消失し、印文陶文化の文様のみとなる。

属性の相関（表 6-4）

足部形態と胴部文様との相関をみると、断面半円形が胴部有瞳夔龍文と、断面が内側に凹む、あるいは中空のものが、変形夔龍文など単純化したものと相関する。これらは、補助文様の発達（櫛文、曲折文の出現）ともおおむね相関する。これらを基に、足部形態を軸として、型式を設定する。

C1 式：足部断面が半円形のもの。足部は緩やかな曲線を描く。補助文様が連続点文、主文様には有瞳龍文を施す。

C2 式：足部断面形が凹み、足部が緩やかな曲線を描く。補助文様には曲折文が出現する。

C3 式：足部が中空で、屈曲外反する。主文様が幾何文になり、補助文様は曲折文と櫛文である。

（6）Da 型の型式設定

属性抽出

a. 形状

口径／器高の散布図を作成すると、3 群（口径／器高＝1.5 以上、1.0～1.1、1.0 以下）が認められ、それぞれが回帰線を形成する。青銅鼎の形状について、横長方形（1.5 以上）→やや正方形（1.0～1.1）→縦長方形（1.0 以下）という変化方向が想定できる（図 6-9）。

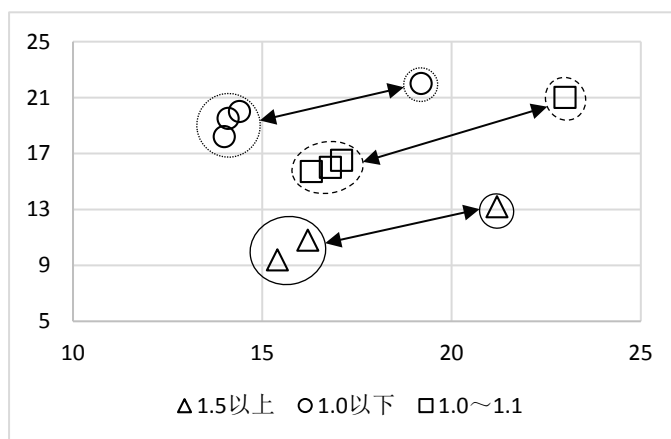


図 6-9 Da 型の口径×器高との相関

b. 足部

足部には中実、中空の 2 種がある。また、側視形が緩やかな曲線で外反するもの（Ⅰ形）と、下端部で屈曲するもの（Ⅱ形）が存在する。中実Ⅰ形→中空Ⅰ形→中空Ⅱ形という方向性が想定できる。

c. 胴部形態・文様

胴部形態では、下半部の拡張、直腹化が想定される。胴部文様では、文様自体の連続的変化は考えにくい、文様の複雑化、すなわち、無文→一本凸線文/変体雷文→波浪文という方向を想定したい。

耳部形態・文様・装飾

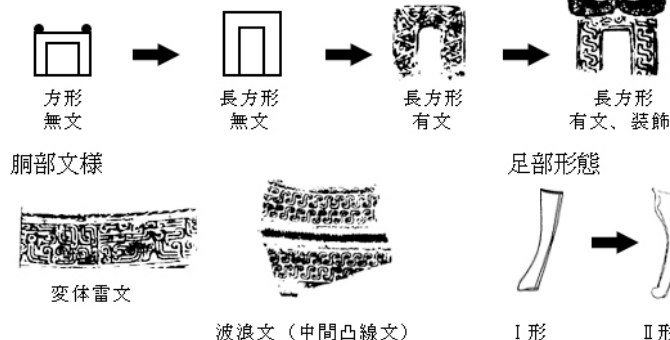


図 6-10 地方型青銅鼎 Da 型の属性変異

d. 耳部形態・文様・装飾

耳部の形態は、正方形から長方形へ、口縁への付き方は、垂直から外反へ、文様は装飾の大型化が想定される（図 6-10）。

属性の相関（表 6-5）

足部形態と形状に関しては、中実Ⅰ形／横長方形、中空Ⅰ形／横長方形、あるいは正方形、中空Ⅱ形／縦長方形という対応関係が見られる。つまり、器高が高まるに伴い、足部形態が中実Ⅰ形→中空Ⅰ形→中空Ⅱ形と変化したのである。

この変化には耳部も対応しており、方形・無文・垂直→方形・有文・垂直→長方形・有文・外反という、想定したものと矛盾しない。以上から、形状を軸として型式を設定する（図 6-11）。

表 6-5 地方型青銅鼎 Da 型の属性相関

番号	鼎名称	法量		形状	足部形態		胴部		耳部		
		口径	器高		断面形	側視形	形態	文様	形態	装飾	文様
1	丹徒煙墩山墓1	15.4	9.4	横長	中実	I	円腹	×	方形	あり	×
2	丹徒煙墩山墓2	16.2	10.8	横長	中実	I	円腹	×	方形	あり	×
3	丹徒煙墩山墓3			横長	中実	I	円腹	×	方形	あり	×
5	安徽龍岡M2:1	21.2	13.2	横長	中空	I	円腹	△	方形	×	×
4	茶陵鼎			横長	中空	I	円腹	×	方形	×	×
6	湘潭古塘橋墓2	23	21	正方	中空	I	円腹	○	方形	×	×
7	猛虎頭山M1	16.3	15.7	正方	中空	I	円腹	△	方形	×	○
8	桃江腰子畚M033:1	16.8	16	正方	中空	I	円腹	×	方形	×	?
9	桃江腰子畚M025:1	17.1	16.5	正方	中空	I	円腹	×	方形	牛角	○
11	湘鄉何家湾M1:4	19.2	22	縦長	中空	I	直腹	△	長方形	牛角	○
12	桃江腰子畚M078:1	14.4	20	縦長	中空	Ⅱ	直腹	○	長方形	?	○
13	桃江腰子畚M029:1	14	18.2	縦長	中空	Ⅱ	直腹	○	長方形	牛角	?
14	桃江腰子畚M032:1	14.1	19.5	縦長	中空	Ⅱ	直腹	○	長方形	牛角	○

Da1 式古相：形状横長方形であり、中実Ⅰ形足部、無文方形耳の装飾が小さいもの。

Da1 式新相：形状横長方形であり、中空Ⅰ形足部、無文方形耳を持つもの。

Da2 式：形状正方形であり、中空Ⅰ形足部、有文方形耳が外反するもの。

Da3 式：形状縦長方形であり、中空Ⅱ形足部、外反する有文長方形耳に牛角を飾るもの。

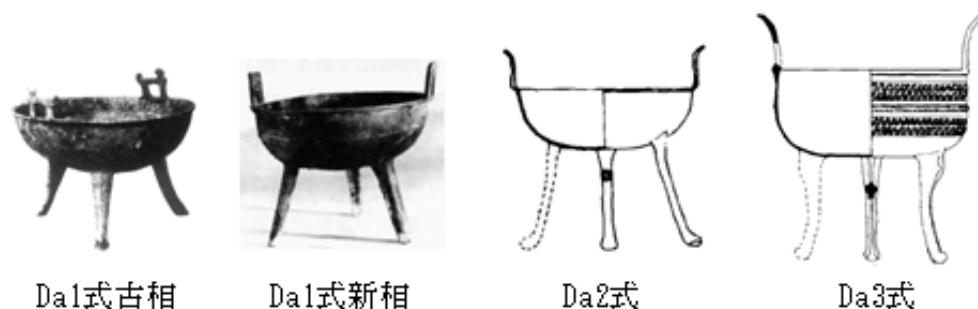


図 6-11 地方型青銅鼎 Da 型の型式変化

(7) Db 型の型式設定

属性抽出

a. 口縁・胴部形態

口縁が外反するものから、次第に内傾する変化、胴部最大径が下半へ下がり、直腹から垂腹への変化が想定される。

b. 耳部の位置・サイズ

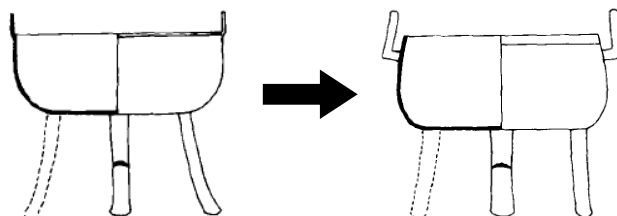
耳部位置が口縁上に付くものから、頸部に付くものへの変化、大型化が考えられる。

属性相関

口縁が内傾するものは、垂腹の胴部や大型付耳に限られる。一方で、浅鉢直腹の胴部は小型立耳に対応する。上述の属性変化はおおむね認められたといえよう（図 6-12）。

Db1 式：口縁から底部にかけてそのまま立ち上がる直腹であり、小型立耳のもの。

Db2 式：口縁がすばまる垂腹であり、大型附耳のもの。



Db1 式 Db2 式
図 6-12 地方型青銅鼎 Db 型の型式変化

(8) Dc 型の型式設定

6 点すべてが深い円腹、無文、外反細足であり、一型式とする。横倉氏ら（1990）の A 類 I 式に対応する。

(9) E 型の型式設定

E 型の報告資料は 6 点ある。数量的検証は難しいが、上記の諸形式で示した変化のうち、特に足部に注目すると、およそその変遷が掴める。各出土例を見ていきたい。

まず、以上で示した足部の変遷を鑑みると、足部中実のものとして、衡南胡家港墓Ⅳ式鼎が知られる。耳部形態が大型方形で、盤状口縁、釜形胴部に凸線を施す。また類似するものとして、高安太陽墟墓の盂形鼎が挙げられる。

足部稜線が顕在化し、断面三角形であるのが、賀県龍中岩洞墓のⅢ式鼎、断面半円形であるのが羅定背夫山 M1：16、賓陽韋坡戦国墓 M1：14 である。四会鳥旦山墓 M1：1 は、足部が残らず難しいが、頸部の表現や、半円形耳部という点では、賓陽韋坡戦国墓 M1：14 に類似する。以上より、少なくとも 2 型式が認められる（図 6-13）。

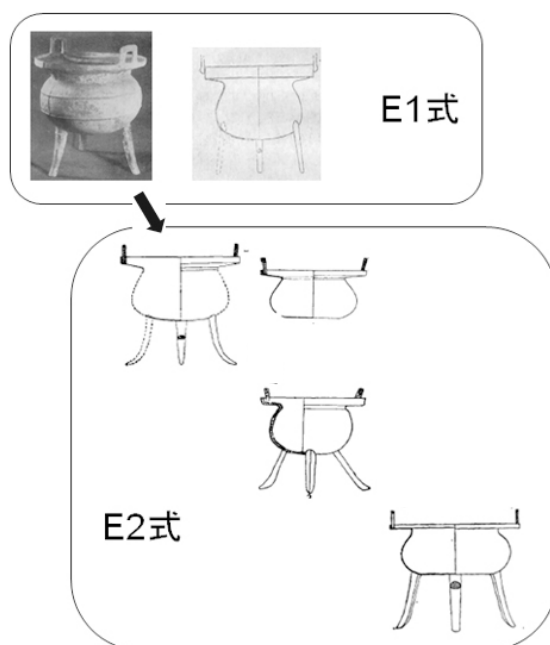


図 6-13 地方型青銅鼎 E 型の型式変化

E1 式：足部中実で断面円形であるもの。盤状口縁がやや斜めになり、方形立耳を持つ。衡南胡家港墓のⅣ式鼎、高安太陽墟墓の盂形鼎が該当する。

E2 式：足部断面が半円形、あるいは三角形であるもの。盤状口縁が平坦化し、小型の半円形附耳を持つ。四会鳥旦山墓 M1：1、賀県龍中岩洞墓のⅢ式鼎、羅定背夫山 M1：16、賓陽韋坡戦国墓 M1：14 が該当する。

表6-6 青銅鼎の型式分類の対応表

本論の分類	Aa式	Ab1式	Ab2式	Ab3式		Ac1式	Ac2式	Ac3式	B1式	B2式	B3式			
従来の分類														
村野氏の分類（2005）	AⅠ式	AⅡ式	AⅢ式	AⅣ式		AⅡ式				AⅤ式？				
向桃初氏の分類（2005）		AⅠ式	AⅡ式	AⅢ式	AⅣ式	CⅠ式	CⅡ式	CⅢ式			BbⅠⅠ式	BbⅠⅡ式		
本論の分類	C1式	C2式	C3式	Da1式古相	Da1式新相		Da2式	Da3式	Db1式	Db2式	Dc式	E1式	E2式	
従来の分類														
彭浩氏の分類（1984）	AⅠ式				AⅡ式		AⅢ式			BⅠ式	AⅣ式	DⅠ式	DⅡ式	
横倉氏ほかの分類（1990）										CⅠ式	AⅠ式	BO式	BⅠ式	
村野氏の分類（2005）	BⅠ式新相	BⅡ式		BⅠ式古相	BⅢ式			在地系C						
向桃初氏の分類（2005）	BaⅠ式	BaⅡ式	BaⅢ式	Bb2Ⅱ式	BcⅠⅠ式	Bc2Ⅰ式	BcⅠⅢ式	Bb2Ⅲ式	Bc2Ⅰ式	DⅠ式	Bc2Ⅱ式	EaⅠ式	EaⅡ式	EaⅢ式
備考		浅腹無文外反足鼎												
		有文外反足鼎												

第2節 地方型青銅鼎の編年

地方型青銅鼎の時期幅は、西周～戦国期併行である（彭 1984、横倉ほか 1990、向 2008）。出土状況は殆どが墓であるが、伝世の可能性を考慮する必要がある。ここでは、諸遺跡から出土した青銅器を中心とする編年研究の成果を参照し、墓の営造年代を各型式の下限年代としたい。

高砂脊遺跡 AM1 の一括資料は、Aa 式、Ab1、Ac1 式が共存していたことを示している。報告書によれば、西周中期前段が与えられる（湖南省文物考古研究所ほか 2001）が、中原型青銅鼎、および Aa 型、Ab1、Ac1 式が殷後期の青銅鼎に対比でき、青銅器の一部の年代は殷末周初期までに遡る（施 2002）。AM1：18 の中原型青銅鼎は「酉」銘文を持ち、その浮き彫り獣面文は殷墟小屯 M5：758 に類似する。また、AM5：53 中原型青銅鼎の囧文と井文を交互に配した文様帯は、殷墟小屯 M821：11 と似ている（施 2002）。Aa 型では、口縁部は中原型に類似するが、胴部文様が AM1：18 に近く、小屯 M5：758 よりも簡略化されている。これらは、中原型が在地的に改変されたものといえよう。なお、先行研究の編年によると、AM1：18 鼎（中原型青銅鼎）は殷末周初期併行とされ（施 2002）、搬入品もしくは模倣品で、墓の営造年代（西周中期併行）に埋置された（湖南省文物考古研究所ほか 2001）。また、村野氏は、高砂脊遺跡 AM1 の青銅鼎について、胴部文様および胴部側視形との対比から、中原型（華北生産型）→Aa 型（第Ⅰ型式）→Ab1 式（第Ⅱ型式）という製作順序を示したが（村野 2005）、これも本章の分類と矛盾しない。以上より、Aa 型の上限年代は西周前期頃に相当し、Ab1 式が西周中期併行であろう。また、Ac1 式との共伴関係によって、さらに段階区分できる可能性があるものの、全体としては西周前期～西周中期に併行する年代が与えられる。

Ab2 式は安徽屯溪 3 号墓から、C1 式は屯溪 1 号墓から出土した。これらの墓の年代については、共伴する中原型青銅器の年代が西周中期頃であるため、墓の営造年代が西周中期以降と考えられている（張 1998）

が、さらに下げて西周後期～春秋前期頃とする見解もある（岡村 1986、西江 1987、角道 2014）。角道氏の研究によれば、本墓の Ab2 式は西周後期の型式の模倣とされる（角道 2014）。このように、屯溪墓の営造年代は春秋前期に相当するものの、青銅器の一部は西周後期に遡る年代を示している。また、株洲白関越人墓も Ab2 式青銅鼎を出土し、共伴する戈、鉞、矛は西周後期に相当する（雷 1999）。C1 式に関して岡村氏は、

その文様が西周中期後半よりも後出であり、西周後期に併行すると考えた（岡村 1986）。したがって、Ab2、C1 式の年代を西周後期～春秋前期併行とすることができる。

Ab3 式としては、資興旧市 M276 出土品が挙げられる。共伴する青銅剣は西周後期に比定でき、この墓の営造年代は春秋前期と考えられる（湖南博物館 1982、西江 1987）。

B1 式は、中原型と比較すると、洛陽中州路 M2415 出土鼎（春秋前期併行）に類似する（中国社会科学院考古研究所 1959）。文様には、重環文、龍文、窃曲文が施され、これら

表 6-7 桃江腰子畚墓地の編年（向 2008）の対応

向氏の編年		鼎番号	本稿型式	
			Da型	Db型
一期	春秋中期	桃江腰子畚M098：1		1式
二期	春秋後期前半	桃江腰子畚M060：1		1式
		桃江腰子畚M033：1	2式	
		桃江腰子畚M025：1	2式	
		桃江腰子畚M029：1	3式	
三期	春秋後期～戦国前期	桃江腰子畚M079：1		1式
		桃江腰子畚M078：1	3式	
		桃江腰子畚M032：1	3式	
		桃江腰子畚M095：2		2式
		桃江腰子畚M108：1		2式
		桃江腰子畚M019：1		2式

は西周青銅器の影響を引き継ぐものとされる（岡村 1986）。これらから、B1 式は西周後期～春秋前期に併行すると考えられる。

Da1 式古相が 3 点出土した丹徒煙墩山墓陪葬坑は、丹徒煙墩山墓と同じく西周中期に併行すると考えられている（岡村 1986）。しかしながら、これは上限年代であって、共伴する中原型青銅器はないものの、西周後期併行に下る可能性も考えられる。さらに、本型式を出土した磨盤墩、母子墩（春秋前期併行）の地方型青銅器は、上述の安徽屯溪 1 号墓に類似し、これらの 3 墓は同一年代と考えられる。そして、煙墩山陪葬坑の Da1 式古相もほぼ同時期に属する遺物と考えられており（角道 2014）本陪葬坑も西周後期～春秋前期に相当すると考えられる（馬 1987、周亜 1997、鄭 2007、角道 2014）。Da1 式新相が安徽青陽縣龍岡 M2、湘潭縣古塘橋墓で、Da2 式が桃江腰子畚 M033、M026 で、Da3 式が桃江腰子畚 M029、M032 で出土している。龍岡 M2 の出土状況は良好であり、春秋中期に相当する土器と共伴し、墓の年代と考えられる（青陽縣文物管理所 1998）。湘潭縣古塘橋墓の Da1 式新相の文様は、洛陽中州路墓出土の獸蹄形足鼎（春秋前期）に類似する（中国科学院考古研究所 1959）。Da1 式新相と中原鼎との差を考慮すれば、やはり春秋中期頃併行とするのが妥当であろう（西江 1987、横倉ほか 1990）。桃江腰子畚墓地は三期に分けられている（向 2008）。これに基づく、M033、M025、M029 の時期が向氏の第二期、M078、M032 が第三期であり、本章の Da2、Da3 式の方角と矛盾しない（表 6-7）。

Db 型も桃江腰子畚墓地 M098、M060、M025、M079 で見られ、Db2 式が M019、M108、M095 に伴う（益陽市文物管理处 2003）。M019、M108、M095 は第三期、M098、M060、M025、M079 が第一期～第三期に位置づけられている（向 2008）。これに基づく、Db1 式が第一期から長期間存続し、Db2 式が第三期から出現すると考えられる。なお、Db2 式のさらに型式変化したものが有蓋越式鼎であり、長沙楚墓、包山楚墓、江陵雨台山楚墓などで出土する。これらの墓には楚墓系遺物が共存し、戦国中期～戦国後期に併行するとされる（間瀬 1986）。こうした現象を考慮すると、Db2 式青銅鼎が長期間存続し、楚文化の影響受けつつ変化していったことがわかる。以上より、Db1 式を春秋中期～春秋後期前半、Db2 式を春秋後期後半～戦国前期とできよう。Dc 式については、広東四会鳥旦山戦国墓、羅定背夫山戦国墓で E2 式との共伴関係が見られる。報告書によれば、両墓の年代は春秋後期～戦国前期に併行する（広東省博物館 1975、1986）。また、王家山、江蘇六合程橋東周墓の出土例は、共伴する紐鐘、青銅剣、戈戟の形態が寿县蔡侯墓、信陽楚墓のものに類似し、春秋末期と考えられる（南京博物院 1965）。

以上の検討により、青銅鼎について I～IV 期の編年が可能である。

鼎Ⅰ期は、Aa 型、Ab1 式、Ac1 式を主として、殷末周初期～西周中期に併行する。

鼎Ⅱ期は、B 型、C 型、Da1 式古相の出現を基準とし、西周後期～春秋前期に併行する。

鼎Ⅲ期は、A 型の消失、Db 型、E 型の出現を基準とし、春秋中期～春秋後期前半に併行する。

鼎Ⅳ期は、Dc 式の出現、B 型、C 型の消失を基準とし、春秋後期後半～戦国前期に併行する。

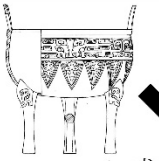
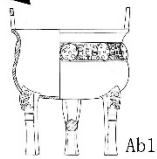
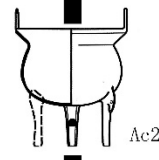
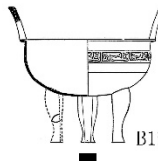
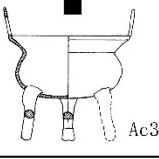
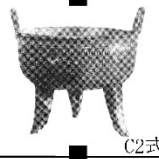
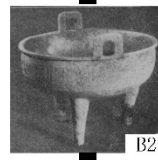
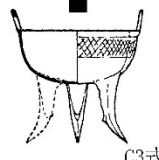
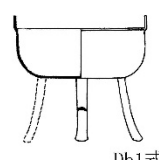
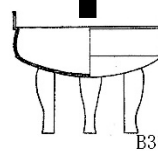
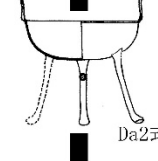
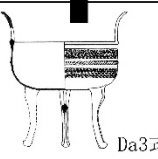
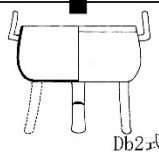
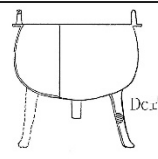
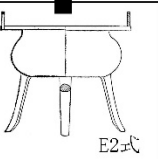
編年		Aa型	Ab型	Ac型	B型	C型	Da型	Db型	Dc型	E型
西周前期～西周中期	鼎Ⅰ期	 Aa式	 Ab1式	 Ac1式						
			 Ab2式	 Ac2式	 B1式	 C1式	 Da1式 古相			
西周後期～春秋前期	鼎Ⅱ期		 Ab3式	 Ac3式		 C2式				
					 B2式	 C3式	 Da1式 新相	 Db1式		 E1式
春秋中期～春秋後期前半	鼎Ⅲ期				 B3式		 Da2式			
春秋後期後半	鼎Ⅳ期						 Da3式	 Db2式	 Dc1式	 E2式

図 6-14 地方型青銅鼎の編年

第3節 各時期における青銅鼎の分布状況

以上の諸型式の分布を各期で検討する。長江中、下流域における中原型青銅鼎、および楚式青銅器についても、先行研究の編年を参照しつつ（林 1984、1986、岡村 1986、劉 1995、角道 2010、袁・張 2015）分布図に示す。

1、鼎Ⅰ期

鼎Ⅰ期では、地方型青銅鼎の数量が少なく、Aa 式、Ab1 式、Ac1 式のみ存在し、中原型青銅鼎を共伴する墓が湘江流域に存在する³⁷（湖南省文物考古研究所ほか 2001）。一方、中原型青銅鼎の分布からみると、長江中下流域まで広がっている。

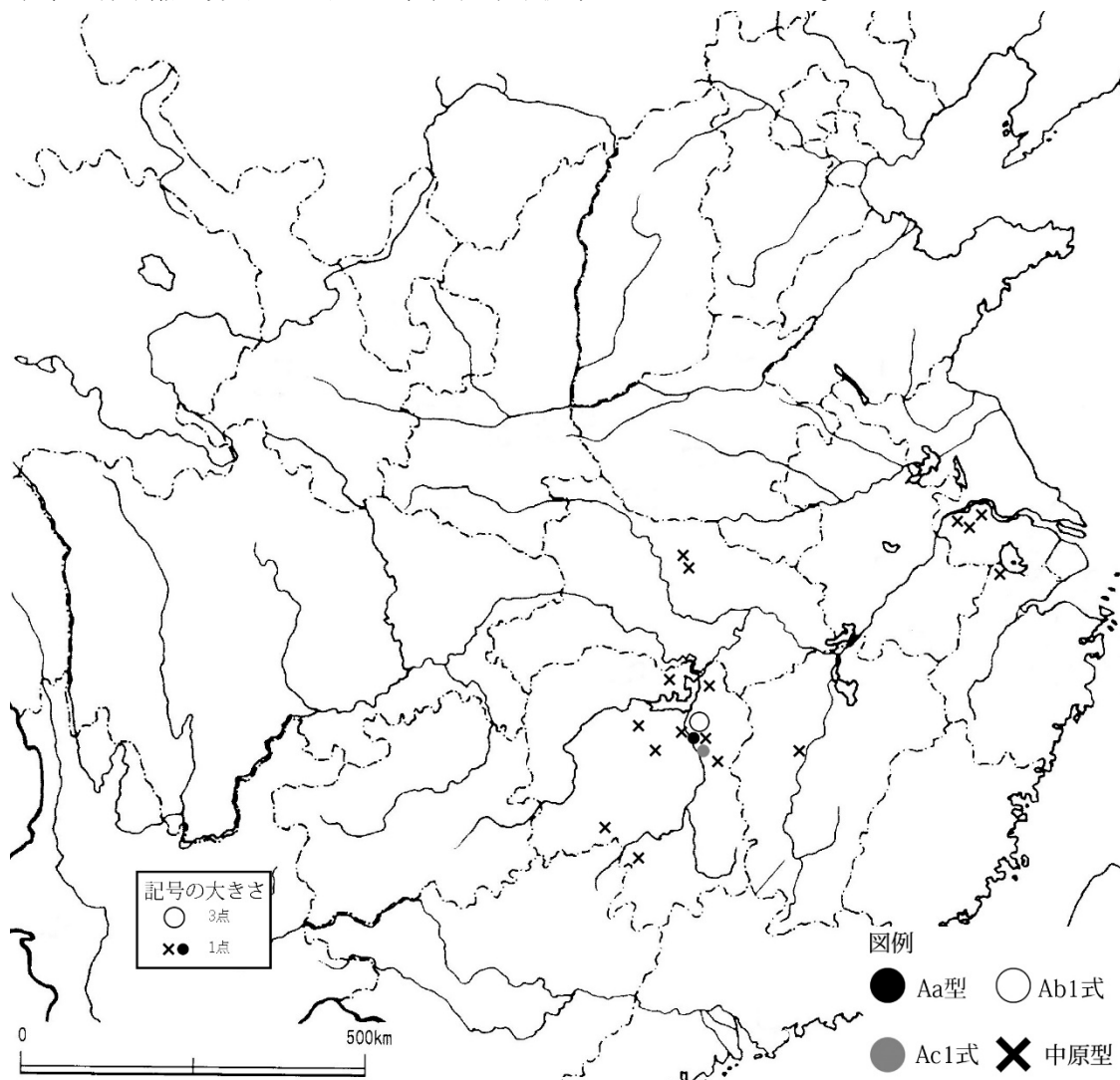


図6-15 鼎Ⅰ期における地方型青銅鼎の分布状況

³⁷ Aa 式、Ab1 式、Ac1 式合計 7 点が同じ墓で出土している（湖南省文物考古研究所ほか 2001）。墓の年代は西周中期頃であるが、中原型に模倣する Aa 式が殷末周初期に遡られる（施 2002）。

2、鼎Ⅱ期

Ab2 式、Ab3 式、Ac2 式の段階である。A 類³⁸が周辺地域へ拡散し、C1 式、Da1 式が長江下流域に出現、土墩墓の分布範囲に重なる。これは、C 類、D 類青銅鼎が本来的に長江中流域の地方型青銅鼎ではないことを示すと同時に、長江中・下流域がそれぞれ異なる様相であることも窺える。また、長江中流域では殆ど中原型がなくなる一方、長江下流域では一貫して中原型の存在が認められる。こうした点からも、中原型と関連性が高い B1 式が長江下流域に広がるのは自然である。中原型の新しい文様、器形が、当該地域の青銅器製作に反映されたのであろう（岡村 1986）。

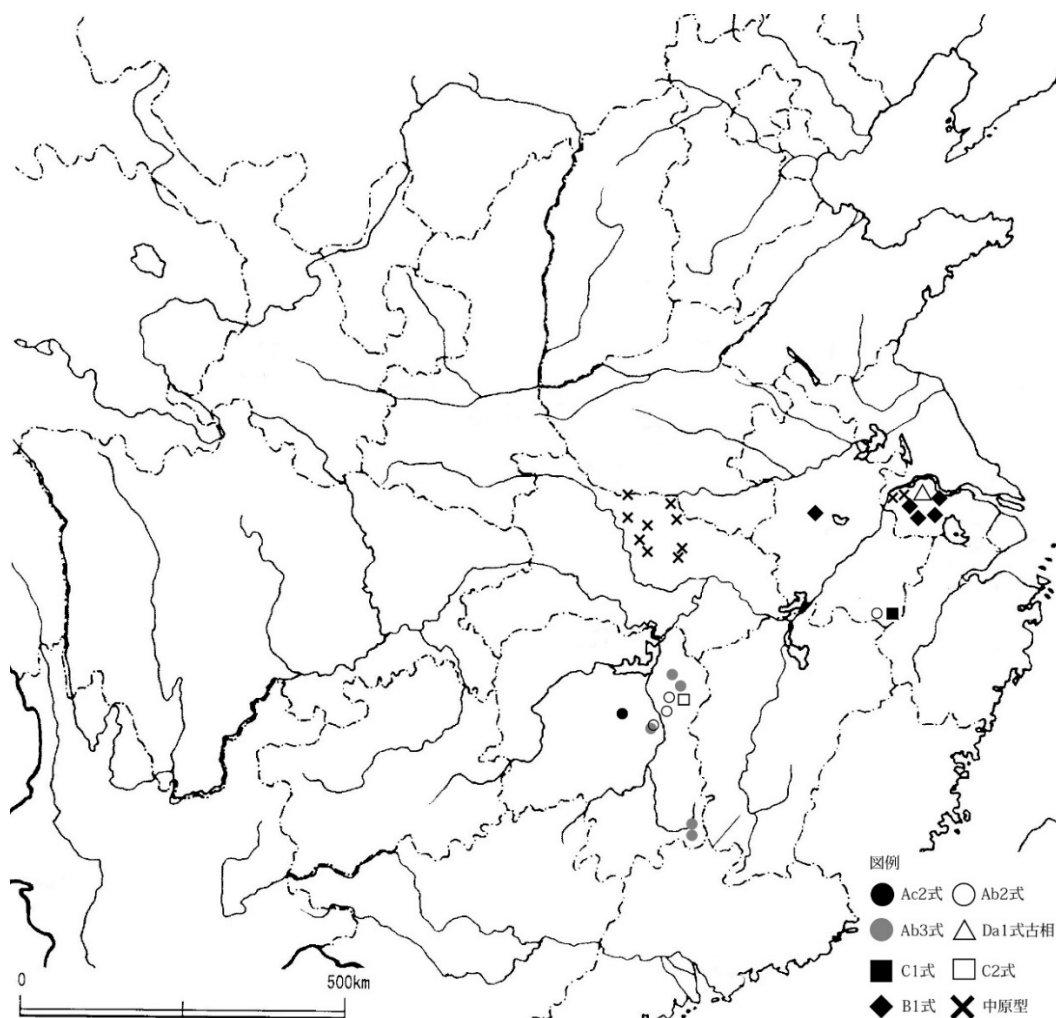


図 6-16 鼎Ⅱ期における地方型青銅鼎の分布状況

³⁸ A 類青銅鼎は、副葬を除き、集中埋納の例が見られる。湘潭青山橋集中埋納で、Ab2 式 1 点、Ab3 式 2 点という地方型青銅鼎があり、西周前期～中期に相当する中原型青銅爵、尊など青銅器を共伴する（袁 1982）。

3、鼎Ⅲ期

鼎Ⅲ期では従来のA類青銅鼎が消滅し、E型が長江中流域に出現する。前段階に長江下流域で発生したB類、C類、D類といった型式が増加する一方、長江下流域の青銅鼎自体が少なくなり、殆ど見られない。楚式鼎³⁹が長江中流域の北岸に集中しており、発達することがわかるが、長江流域の南岸が希少であり、湘江流域に入らない段階と考えられる⁴⁰。

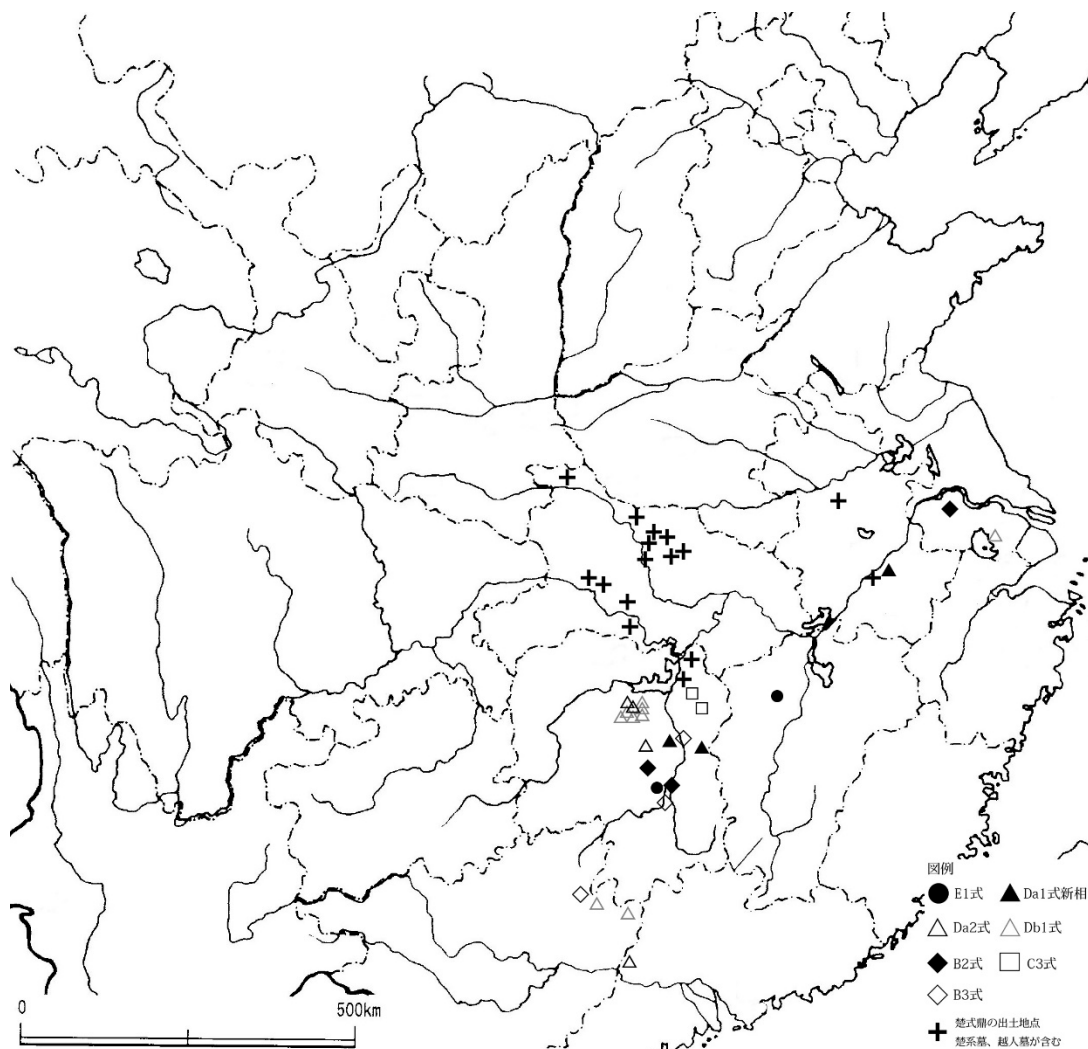


図 6-17 鼎Ⅲ期における地方型青銅鼎の分布状況

³⁹ 楚式鼎は中原型青銅鼎を取り上げ、楚という諸侯国の地域性を帯びた鼎である。すなわち、周という中原社会に基づく青銅器文化から製作した鼎である。

⁴⁰ この段階の湘江流域の墓で時期差がある複数の青銅鼎が出土する例が見られるが、墓年代の時期幅が鼎の時期幅に相当し、一括遺物として扱う。

4、鼎Ⅳ期

鼎Ⅳ期では、長江中流域、長江下流域、嶺南地域によって異なる様相を呈する。長江中流域ではD類のDa3式、Db2式、嶺南地域ではE2式、Dc式⁴¹が主に分布し、長江下流域ではDc式しか見られない。長江中流域では地域色が持続されるが、分布範囲が収縮傾向にある。楚式鼎はさらに発達しており、前段階より、長江中流域にさらに南進する分布が見られる。

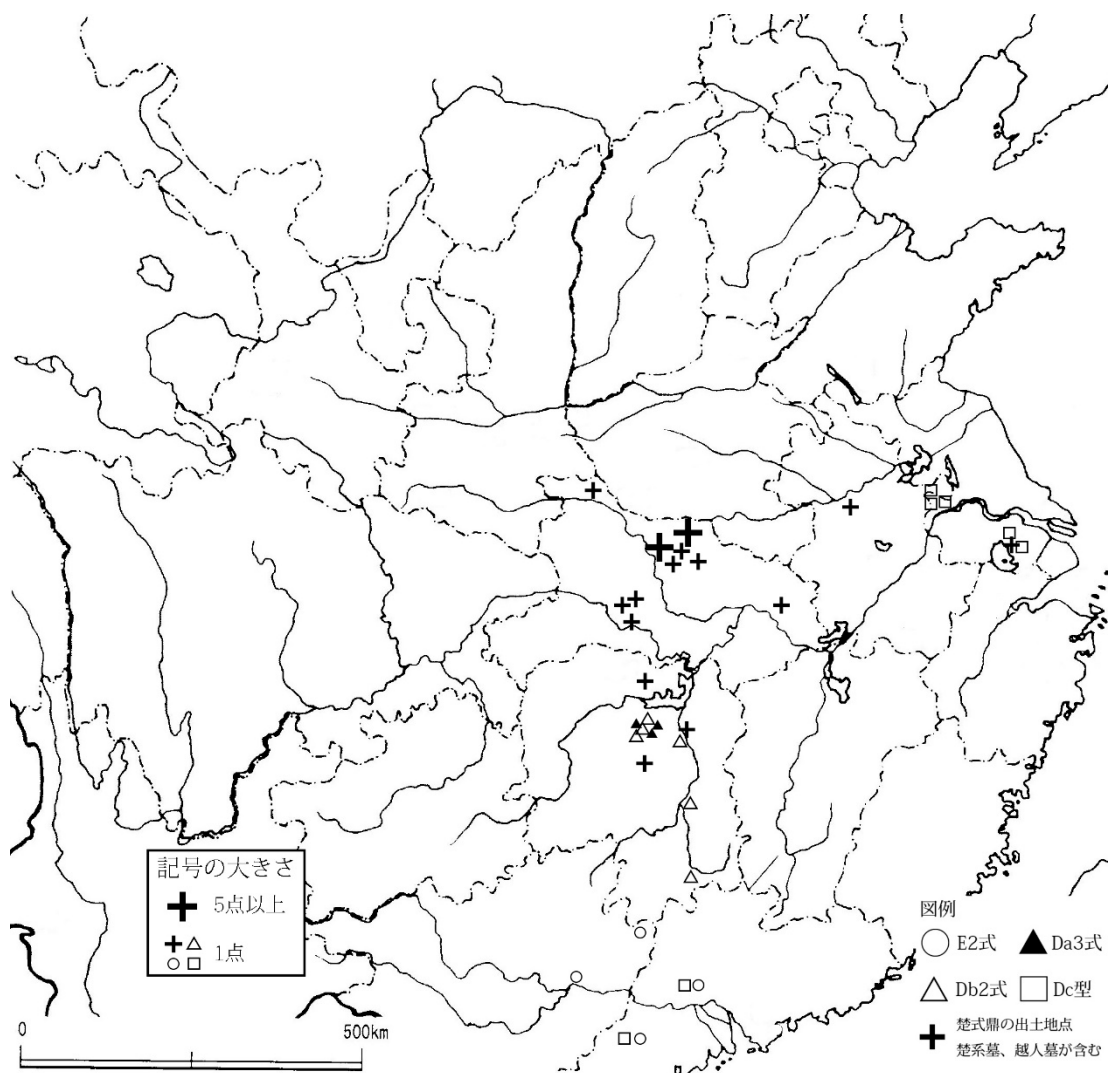


図 6-18 鼎Ⅳ期における地方型青銅鼎の分布状況

⁴¹ 嶺南地域で鼎を副葬する墓は一括資料からみると、戦国中後期に相当する墓があるが、共伴する器物の時期差が存在し、本論で設定した型式の年代を与えたい。

第4節 殷周時代における長江中流域の青銅鼎の展開

1、地方型青銅鼎の地域性と変遷

長江中流域出土青銅器は中原型、融合型、地方型に分けられることが一般的である（熊 1986、高 1992、何 1996、王 1992、向 2008）。本章では、融合型、地方型を以下のように定義する。

融合型：中原青銅器の型式に類似するが、在地的属性を持つもの。

地方型：中原青銅器の型式とは全く異なるもの。

これらを念頭におき、各型式の系譜を検討したい。

(1) A 型

先学において A 型に関しては、中原型→在地系 A の第 I 型式（Aa 式）→在地系 A の第 II 型式（Ab1 式）、同様に Ac1 式も在地製品と考えられた（村野 2005）。或いは、中原型→Aa 式、中原型→Ab1 式、中原型→Ac1 式とする考えもある（施 2002）。本章の検討によると、A 型のくびれ柱足は、殷墟文化の鼎から受容したものと考えられる。殷墟郭家荘 160 号墓鼎の足部が候補として挙げられるが、A 型のくびれ柱足より太い。また、Aa 式、Ab1 式、Ac1 式の文様配置は獣面文+蟬文であり、殷墟期の鼎の文様配置に類似する（施 2002）。一方、Ab1 式の主文様帯では、地域色が強い囧井文（林 1981）が出現し、文様が在地化している。

次いで Ab2 式では、西周文化に類似する龍文が見られるものの、モチーフを改変している。すなわち、Ab1 式の囧文+井文が、囧文+龍文となっているのである。西周後期中原型の模倣品とされる屯溪 M3:11

出土鼎（角道 2014）も、こうした西周文化の影響であろう。さらに Ab3 式には、印文陶文化圏よく見られた櫛文、曲折文を施し、地域色が強調されている（図 6-19）。

以上に基つくと以下のような過程が導かれる。搬入された殷墟文化の青銅鼎に基づき、殷文化に近い型式 Aa 型がまず出現した。その後、在地化を通じて、囧文+井文を施す Ab1 式、在地土器の釜形胴部を持つ Ac1 式が生まれた。すなわち、Aa 型が模倣品であり、Ab1 式、Ac1 式が融合型青銅鼎である。続く Ab2 式は、西周文化の影響が見られ、さらに Ab3

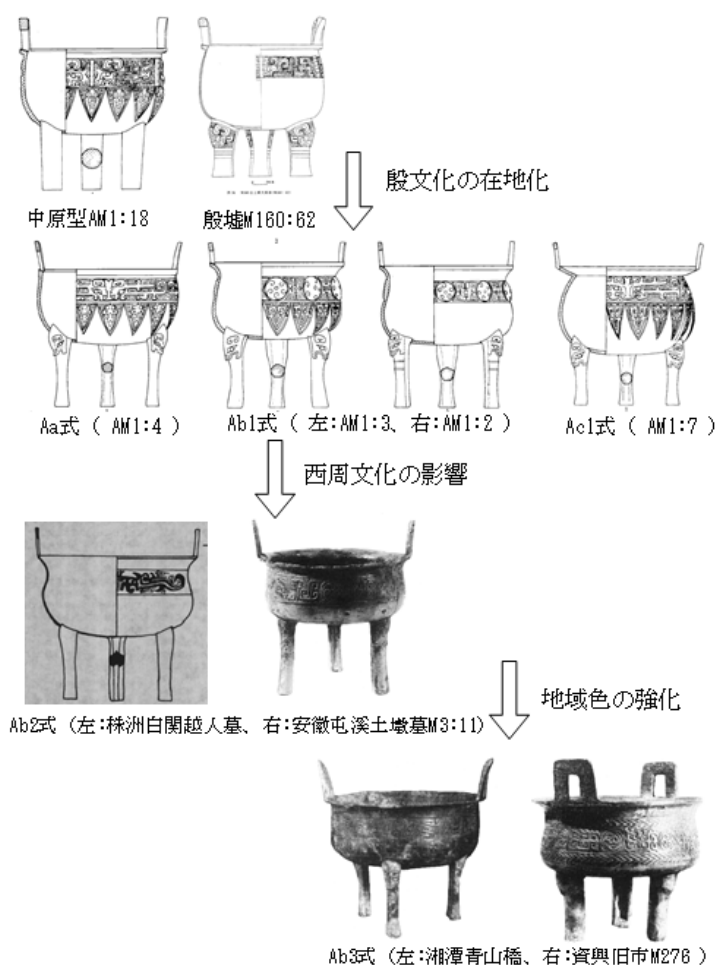


図 6-19 地方型青銅鼎 A 類の在地化

式、Ac2 式で当該地域独特の型式に定型化したといえるであろう。

中原型の広がり

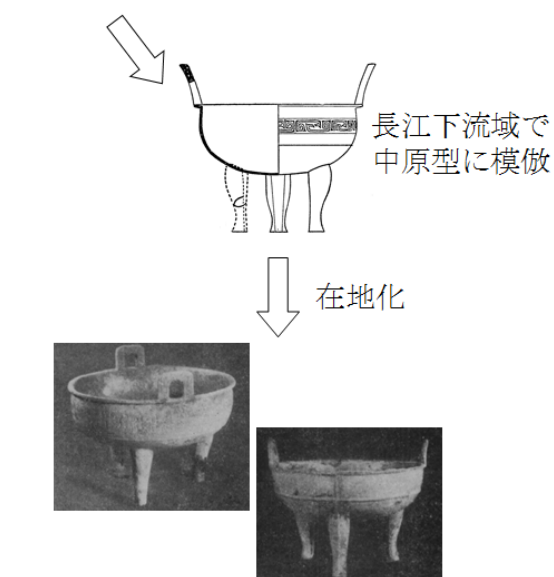


図 6-20 地方型青銅鼎 B 型の在地化

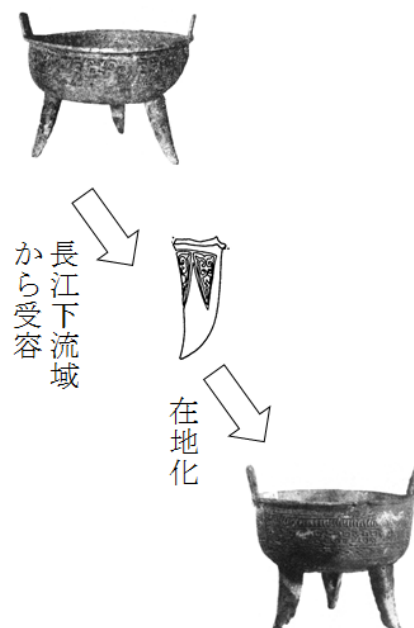


図 6-21 地方型青銅鼎 C 型の在地化

(2) B 型

B1 式は角道氏による西周後期後段の丁 a 類(角道 2010)、林氏の一〇型、一一型(林 1984)に類似し、西周後期～春秋前期にかけての中原型から生まれたと考えられる。長江下流域では、諸侯国の青銅鼎を模倣しつつ、地域色を持つ文様を施し、B1 式の在地生産が行われた。長江中流域では B1 式が殆ど見られず、続く B2 式、B3 式が多い。B2 式、B3 式の形態は小型化、文様は簡単化する。これらの型式は、中原型の影響ではなく、長江下流域との交流によってもたらされた B 型が在地化したものである(図 6-20)。

(3) C 型・D 型

C 型、Da 型、Db 型、Dc 式は外反足であり、いわゆる「越式鼎」と関連がある(横倉ほか 1990)。こうした外反足の出現は、在地土器の形態に関連するという見解が一般的である

(葉 1988、村野 2005)。長江下流域の土墩墓文化圏において、B1 式蹄形足部と C1 式の外反足を融合し、地方型青銅鼎 Da1 式が出現したのである。ここに長江下流域に越式鼎を特

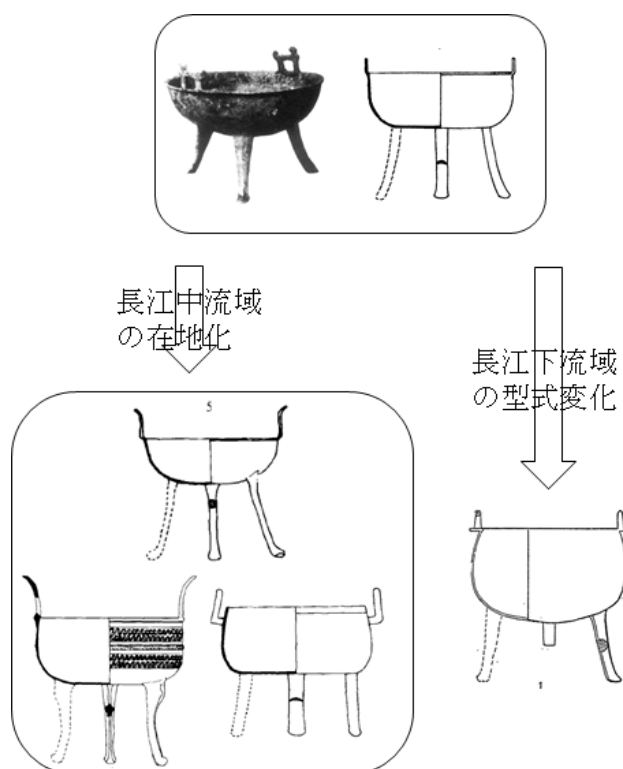


図 6-22 地方型青銅鼎 D 類の在地化

徴とする青銅器文化が認められたことになる（角道 2014）。具体的にいえば、まず、寧郷炭河里遺跡で出土した残足部が挙げられる。その平面形態は刀子のような形であり、春秋期の越式鼎足にも認められる（湖南省考古文物研究所 2006）。これは、本章で設定した型式 C2 式の足部に比較すれば、平面形の類似性を見出せる一方、外側の上端部に文様を施文し、A 類のくびれ柱足の文様配置に類似すると言える。このように、安徽省の屯溪土墩墓の C1 式から長江中流域に達し、在地化している過程を示しており、C2 式が C1 式に基づき、在地化したものと捉えられよう（図 6-21）。

次、Da 型、Db 型の場合、すべて外反細足である。Da1 式古相は元々長江下流域に位置する華東青銅器文化圏の丹徒煙墩山土墩墓の陪葬坑で出土した。華東青銅器文化から生まれた Da1 式古相を継承し、Da1 新相になっている。しかし、Da1 式新相が長江中下流域で散布し、数量も極めて少ない場合、詳細に検討することが難しいであろう。一方、Da 型青銅鼎の系譜を考慮すれば、Da2 式が主に長江中流域に分布しており、Da1 式新相に基づき、在地生産が考えられる。さらに、長江下流域で呉越文化に展開したが、Da1 式新相が見られなく、それより晚い段階で出現した Dc 式の胴部形態は文様がなく、深い円腹であり、およそ胴部形態の変遷を示している。このように、胴部が浅い形態を維持し、凸線文が出現する Da1 式新相も長江中流域で生産する可能性があり、地域間の関係を示しているものではないかと考えられる。さらに、Da 型、Db 型の分布からみると、長江下流域、安徽省を経て、長江中流域に達するルートが見られる。この外反細足は元々長江下流域の文化要素が想定でき、長江中流域の在地化しており、Da1 式新相、Db1 式が出現し、それぞれ型式的展開と考えられる。Dc 式は長江中流域に見られなく、長江下流域、嶺南地域に分布しており、長江中流域に受容していないものであろう。これは、長江下流域の外反細足を持つ Da1 式から在地的变化を通じて、Dc 式が出現してきたことと考えられる（図 6-22）。

（4）E 型

E 類の胴部形態は Ac2 式に類似し、足部形態は外反細足類である。さらに、長江中流域に位置する寧郷炭河里遺跡で、釜形胴部鼎の土器があり、在地的土器と考えられる（湖南省文物考古所 2006）。分布では、鼎Ⅱ期に生まれた外反細足の形態が長江中流域へ広がり、鼎Ⅲ期に定着する。したがって、地方型青銅鼎 E 型は、長江中流域にあった Ac 型と、Da1 式の外反細足が融合したものと言えよう。

以上、長江中流域の地方型青銅鼎は、殷末周初から戦国前期まで存続するが、それは殷墟期の青銅鼎を受容し、西周中期以降、西周文化や長江下流域の影響も受けながら在地化した過程と言える（図 6-23）。

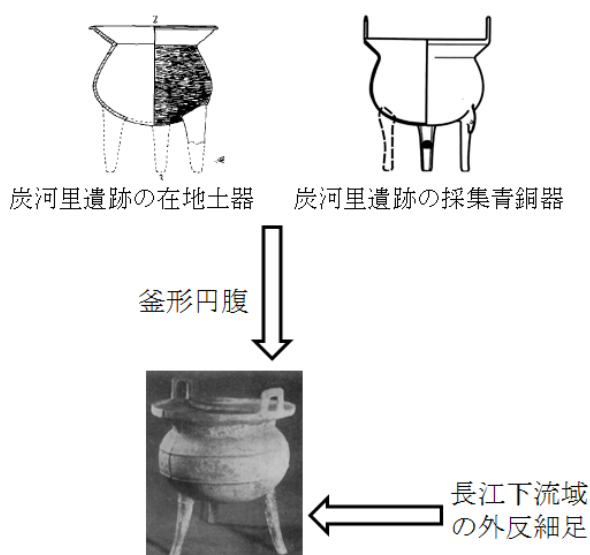


図 6-23 地方型青銅鼎 E 型の在地化

2、長江中流域の青銅鼎の展開

(1) 鼎Ⅰ期（西周前期～西周中期）

中原青銅器文化の青銅鼎に関連する Aa 型、Ab1 式、Ac1 式が長江中流域で在地生産され始める。その後、西周文化の青銅鼎が搬入され、その影響を受けつつさらに在地化しており、青銅鼎生産の自律性が示唆される。一方、長江下流域では、地域特徴をもつ文様を施す觚形尊、青銅卣、青銅簋が中心に生産され、中原型青銅器と共存する（岡村 1986）。この段階から、青銅鼎の扱われ方も一層に中原青銅器文化のあり方を受容することも言える。具体的にいえば、地方型青銅鼎は従来の単数埋納ではなく、副葬品、中原地域の祭祀機能を持つ窖藏に出土例が見られる。

(2) 鼎Ⅱ期（西周後期～春秋前期）

中原型に近い蹄形柱足を持つ B 型が、長江下流域で在地生産される。同時に、外反足を持つ C 類、D 類も下流域で出現し、これらは外反足無文鼎という典型的「越式鼎」の最初段階である。また、長江中流域、下流域という地域色が見られる。長江中流域では、くびれ柱足である A 類が定型化しつつ、長江下流域に広がった。一方で、長江下流域の地方型青銅鼎は長江中流域に至らないが、両地域の接触は想定できる。当該期は、地域ごとに地方型青銅器文化が定着し、互いに影響した段階である。

(3) 鼎Ⅲ期（春秋中期～春秋後期前半）

A 類が消滅し、長江下流域の外反足を持つ型式が長江中流域に伝わり在地化する。長江下流域の中流域への強い影響が見込まれる。また、嶺南地域までその影響は広がった。しかしながら、長江中流域の自律性も認められる。長江下流域では、青銅鼎そのものは消えていくが、在地文様を施した青銅匱などの器種は製作され続け（岡村 1986）、土墩墓の伝統も存続する（宮本 1997）。この時期の長江下流域は呉越の勃興期に該当する。呉・越において、階層性を反映する越式鼎が発達し、長江中流域に影響を与えたのであるが、この背景としては呉楚間の戦争が挙げられる⁴²。

(4) 鼎Ⅳ期（春秋後期後半～戦国前期）

長江中流域の地域性が Da3 式、Db2 式として看取される。また、長江中下流域の要素を融合した E1 式の変化形である E2 式が嶺南地域のみに分布し、Dc 式が長江下流域、嶺南地域に分布する。一方、Db2 式に類似するもの、また後進する形態は戦国中後期の江陵雨台山楚墓、長沙楚墓で出土例が見られる。本期では、楚墓、楚系遺物がさらに湘江中流域に浸透し、楚の進出は文献資料でも伺える⁴³。長江中流域の青銅器文化が衰退する一方、Db2 式やそれに後出する形態の青銅鼎が楚墓に出現していく。これは、楚の領土拡張により、従来の自律性が高い首長制社会が瓦解していくことを意味していよう。一方、従来の湘江・嶺南系青銅器である扁茎式銅劍（西江 1987）が広域に分布し、さらに南に位置する嶺南地域では、青銅鼎の地域色が生まれ、在地生産の伝統が続いていくと考えられる。

⁴²「王寿梦二年……呉伐楚。十六年、楚共王伐呉、至衡山。」「王諸樊元年，……秋、呉伐楚、楚敗我師。」「王僚二年、公子光伐楚、敗而亡王舟。光惧、襲楚、復得王舟而還。」「九年，呉王闔廬請伍子胥、孫武……楚兵大敗，走。于是呉王遂縱兵追之。……昭王与鄖公奔随。而呉兵遂入郢。」「三年，呉王闔廬与子胥、伯嚭将兵伐楚……迎而擊之，大敗楚軍于豫章，取楚之居巢而還。」「（『史記』『呉太伯世家]）、「西破強楚、入郢、北威齊晋、顯名諸侯、孫子与有力焉。」「（『史記』『孫子呉起列伝]）

⁴³「楚悼王素聞起賢、至則相楚。……于是南平百越、北并陳蔡、却三晋、西伐秦。」「（『史記』『孫子呉起列伝]）

第5節 小結

上記の青銅鼎の展開過程は、長江中流域の青銅器文化が外部要素を主体的に受容した結果と考えられる。鼎Ⅰ期の殷末周初期には、殷・西周文化の転換期の背景の下、殷文化の青銅鼎が長江中流域に伝わった。これは、殷人が南方（湘江流域）へ移動によるとされている（施 2002）が、程なくして在地生産が開始された。また、西周前期～中期頃には、中原型の影響を受けつつも湘江流域では在地生産の連続性が認められる。

西周後期～春秋前期（鼎Ⅱ期併行）は、西周王権の衰退、中原青銅器文化の変革期である。中原では「用鼎制度」の確立、各諸侯国の祭祀体系が形成され（角道 2014、楊 2019、宮本 2020）、それは多分に政治的な意味を持ち、その中核を担うのが青銅器であった。一方で、長江中下流域では、地域ごとに地方型青銅器文化が定着していったのであるが、その広がりの意味については、次章での検討を要する。

鼎Ⅲ期の春秋中期になって、長江下流域の文化要素が広がり、長江中流域に強い影響を与えた。当該期には呉、越という諸侯国が勃興した。越式鼎が、楚式鼎より早い段階に、長江中流域へ浸透する背景とも関連しよう。

鼎Ⅳ期（春秋後期後半～戦国前期頃）には、従来の青銅器文化の展開様相が各地で大きく異なっていることが窺える。湘江流域に一部の地域色が存続する一方、嶺南地域に差異が顕在化していく。湘江流域では、楚文化が推移的初期国家の成立に伴って（宮本 2020）、領域を拡張する背景の下、湘江流域における楚系青銅器の存在や、当該地域の地域色希薄化は、これを背景としていよう。しかしながら、湘江・嶺南系青銅器が存続し、湘江流域は青銅鼎における独自性も維持している。これは、楚国の社会システムの下位部分は族的な団結や再生産を示しており、旧来的な社会システムが採用されている（宮本 2020）ことと関連するのであろう。

さらに戦国中期以降、長江中流域では、本論の Db2 式鼎の変化形（間瀬 1986、袁・張 2015）が楚系青銅器に共伴する事例が多くなり、南楚文化という地域性として捉える考えが存在する（高 1995）。こうした事象は、楚国の領域が拡大するとともに、長江中流域の在地要素が楚国の祭祀体制に編入されていったことを示している。こうして、長江中流域青銅器文化は終末を迎えることになったのである。

第6章 地方型青銅器の出土状況とその考察

本章では、長江中流域の青銅器文化全体の変遷を示し、その出土状況を検討することにより、青銅器と社会との関りを考える。村野氏（2005）の研究では、地方型青銅器の扱われ方から、当該地域の社会像および社会変遷が考察されている。これを参照しつつ、第1節で設定した時期と段階の変遷に沿って、青銅器の埋納・副葬から当該地域の社会変化について検討してみたい。

第1節 青銅葬器の各型式の相互関係および時期設定

第2章～第5章に示した、各地方型青銅器の編年および時期区分を統合する。器種間の併行関係を厳密に追うことは難しいが、各章で示した分期と中原の年代から考えると、表7-1のような5期区分が可能である。

第Ⅰ期：青銅尊、壺、大型青銅饒が出現する。殷末周初期併行までに収る。

第Ⅱ期：青銅尊、壺が消滅、地方型青銅甬鐘、青銅鼎が出現する。西周前期～中期併行。

第Ⅲ期：大型青銅饒が消滅。青銅鼎の大部分の型式が出現。西周後期～春秋前期併行。

第Ⅳ期：地方型青銅甬鐘が消滅。春秋中期～後期前半併行。

第Ⅴ期：地方型青銅鼎が衰退し、楚系青銅器と共伴。春秋後期後半～戦国前期併行。

表7-1 地方型青銅器の編年

六経 期	中 山 文 化 期	酒器		楽器				容器									
		殷末 周初	西周 前期	西周 中期	西周 後期	春秋 前期	春秋 中期	春秋 後期	戰国 前期	戰国 中期	戰国 後期	戰国 末期	戰国 末期	戰国 末期	戰国 末期	戰国 末期	戰国 末期
第Ⅰ期	殷末 周初	尊Ⅱ期 3式 2式	尊Ⅲ期 4式 3式	饒Ⅱ期 A1式	饒Ⅲ期 Ba式 Bb1式 Bc1式	饒Ⅳ期 C1式	鐘Ⅰ期 A1a式 A1b式 A2式 B1式	鼎Ⅰ期 Aa式 Ab1式 Ac1式									
第Ⅱ期	西周 前期			饒Ⅲ期 A2式	饒Ⅳ期 Bb2式 Bc2式 C2式	饒Ⅴ期 C3式	鐘Ⅱ期 A3式 A4式 B2式 B3式	鼎Ⅱ期 Ab2式 Ac2式 B1式 C1式									
第Ⅲ期	西周 後期							鼎Ⅲ期 Ab3式 Ac3式 B2式 C2式									
第Ⅳ期	春秋 前期							鼎Ⅳ期 B2式 B3式 C3式 Da1式 Da2式 Db1式 E1式									
第Ⅴ期	春秋 後期							鼎Ⅴ期 Da3式 Db2式 Dc式 E2式									

第2節 長江中流域の青銅彝器の扱われ方の検討

1、埋納青銅器の検討

(1) 単数埋納

単数埋納で出土した青銅彝器は青銅尊、壺、大型青銅饒、青銅甬鐘が殆どである。青銅鼎の場合、地方型は見られない。単数埋納は主に第Ⅰ、Ⅱ期に存在し、第Ⅲ期に残存する。遺跡よりも離れた地点で埋納する。埋納の坑が復元できないが、模式図のように（図7-1）、青銅尊・壺の場合は、口縁部が上に向き、床に垂直することを示している。大型青銅饒の場合は、足部（甬部）を下に、口部を上に向けて埋納され、その意図や計画性が窺える。第Ⅱ、Ⅲ期の青銅甬鐘の出土状況は明確ではないが、日常生活の場とは離れたところに埋納という点では他と共通し、在地的祭祀に関わる機能を持っていた可能性が高い（村野 2005）。

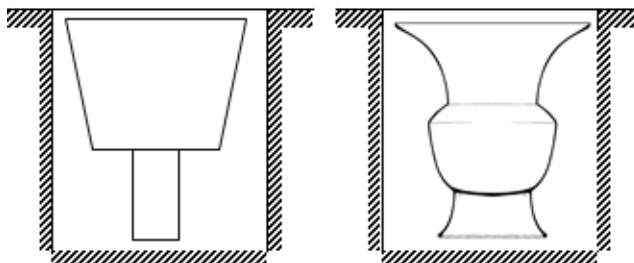
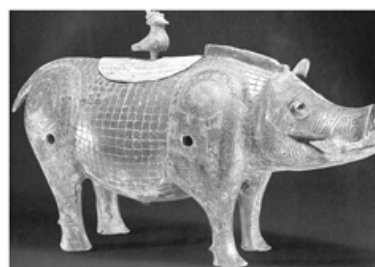


図7-1 単数埋納の模式図

こうした単数埋納は、階層性を示す要素とは結び付かないことから、既に述べたように（本章第2節2）、長江中流域に広く分布する共通の祭祀形態を示している可能性が高い。青銅器は特定の個人や集団に属せず、一定程度の広がりを持つ諸集団を、等質的にまとめる機能を持っていたと考えられる。このことに関連して、同時期の中原青銅器文化を代表する青銅鼎が、この時期に受容されない背景として以下が想起できる。それは祭祀活動の違いである。殷は祖先祭祀とそれに伴う飲食儀礼を通じて、階層秩序



虎食人卣（伝湖南安化出土）



豕尊（湖南湘潭船形山出土）



牛尊（湖南衡陽出土）



象尊（湖南醴陵獅形山出土）

図7-2 長江中流域における単数埋納の動物形青銅器

維持に青銅器を使用した（宮本 2005）。長江中流域ではそうした飲食儀礼が、祭祀として採用されることはなかった。殷の祭祀では大型家畜の利用が顕著で、家畜の大量消費を可能にするような大規模畜産が行われるようになったことが知られる（岡村 2005）。一方で、長江中流域の場合、日常生活の場より離れた山、川の近くに青銅器が埋納されており、自然神祭祀が想定されている（高 1993、李 1996、方 2005）。また、当該地域の肉消費では、シカのような野生動物が高い比率を占めており、シカ優位型の狩猟採集経済であったと考えられる（岡村 2005）。狩猟採集社会を維持していたとするならば、人と動物の関係は極

めて密接であったと考えられる（金関 1986）。青銅尊・壺の牲首が牛、羊、虎などの動物意匠が存在し（中川 2013）、大型青銅鏡の側鼓部に動物意匠の文様、装飾が存在する。さらに、大型青銅尊・壺、大型青銅鏡以外、長江中流域において、殷周時代の並行期の動物形青銅彝器を単数埋納として利用することがよく見られる。これらの動物形青銅彝器が在地生産であるのかという問題が残っているが、青銅器を消費することの共通性が想定できる。これらの動物意匠は、長江中流域で大量に出土する動物形の青銅器との関連性があり得る。この現象について、新石器時代以来の長江中流域独特の神話世界を表し、その地域の特徴を保っていると考えられる（今村 2010、ラプチェフ・セルゲイ 2012）。これこそ、家畜利用が多くない長江中流域では、祭祀活動において、家畜の消費や飲食儀礼を伴う青銅鼎をそれほど重要視しなかった可能性があり、青銅器を受容する時、自律性が高い側面ではないかと考えられる。

（2）集中埋納パターン 1

第Ⅱ期から第Ⅲ期にかけて、集中埋納という扱われ方が出現し、大型青銅鏡、青銅甬鐘を中心として、青銅鼎が僅かである。集中埋納の例が少ないが、二つパターンがある（図 7-3）。

パターン 1：地方型青銅器のみで、少数の器種を埋納

パターン 2：中原型とともに、多種な青銅器を埋納

まず、パターン 1 について考える。本パターンの明確な例は湖南省寧郷県老糧倉師古寨山頂（5 点大型青銅鏡）、寧郷県老糧倉師古寨西北坡（10 点大型青銅鏡）、湖北省鐘祥県花山水庫（5 点青銅甬鐘）

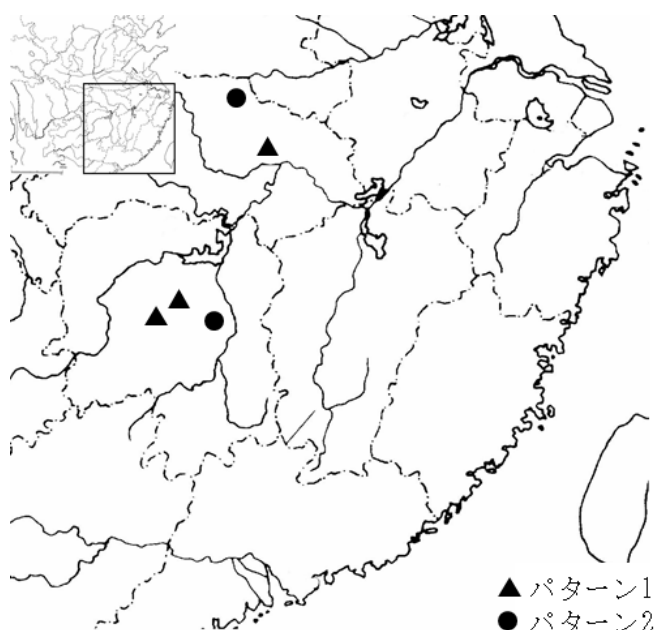


図 7-3 長江中流域における集中埋納の分布

パターン 2 の明確な例は湖南省湘潭青山橋（中原型数点、3 点地方型鼎）、湖北省大悟県豊店郷雷家山南坡（1 点中原型鼎、7 点青銅甬鐘）

集中埋納の分布からみると、湘江流域で青銅器の数点が比較的に多く、集中埋納の中心地と考えられる。また、パターン 1 の大型青銅鏡の集中埋納の出土状況は口が上、甬が下であり、単数埋納の大型青銅鏡に類似する。あるいは、上層に 1 点、下層に数点の設置方式もある。青銅器生産の拡大に伴い、地方型青銅器を持つ集団間に青銅器所持量で差が出てきた可能性があるだろう。

しかしながら、集中埋納遺構は個数埋納と比べて極めて少なく、当該地域での主要な出土状況とはいえない。湖南省の寧郷老糧倉師古寨の埋納遺構 2 基に注目すると、1 基では大型青銅鏡が口を上にした状態で、上層に 1 つ、下層に 4 つ縦に並んでいた（図 7-4）。口を上にした意図的な埋納は、青銅尊・壺、大型青銅鏡の単数埋納と共通する。もう一基は、上層に 1 つ、下層に 3 つ横に並んでいた。3 つ並びという点は、中原における小型青銅鏡、中原型青銅甬鐘の 3 点セットを想起させる。次に、音楽的検討を行いたい。『中国音楽文物大系』の音高測定の数値に基づき、低音から高音の順に数値化する（図 7-5）⁴⁴。西

⁴⁴ 音高の「a¹」を 0 とし、音の高さが一全音が高くなる（ドーレ）場合が 1 をたすことにする。昇音（#）、

周後期の「中義」編鐘、「柞」編鐘⁴⁵（陝西省博物館ほか 1963、陝西省考古研究所ほか 1980）の音高からみると、低音から高音にかけて均等に得られ、音階が構成できる。一方、青銅鐃の場合、小型青銅鐃は高音、大型青銅鐃が低音しか得られず、音階を構成できない。また、中原地域の甬鐘の音高は小型青銅鐃に相関し、長江中流域の甬鐘は大型青銅鐃の音高と相関する。これらを組み合わせれば、西周後期の編鐘の音高分布に類似性を見出せる。また、長江中流域の甬鐘の音高は高くなる傾向があり、おそらく中原地域の甬鐘の影響を受容した結果であろう。

正鼓部および側鼓部より 2 音が得られる青銅甬鐘（馬 1981）を検討し、音程⁴⁶を考えたい。大型青銅編鐘の場合、音程が短 2 度、長 2 度に正規分布する一方、編鐘では、完全 1 度、短 3 度、長 3 度に分布し、さらに小型青銅鐃の分布に重なる。音楽理論に基づく、ある音の 2 度がその音に対して不協和音程である（鞍掛ほか 2001）。したがって、協和音程である完全 1 度、短 3 度、長 3 度に分布する大型青銅鐃の音程が区分できる（図 7-6）。このように、編鐘が和音を求めていることが想定できる。一方で旋律に関しては、大型青銅鐃では、小型青銅鐃、編鐘とは全く異なるものが想定できる。したがって、大型青銅鐃では和音が求められた可能性は低いことが疑われない。従って、大型青銅鐃は打楽器として利用された可能性が高い。まず、枚の出現は音の安定および残響時間など音楽的機能に関わる（華・賈 1983、朱 1995）。また、従来の小型青銅鐃は手で持ちながら演奏するのに対し、大型化に伴い、床に置いて鳴らす演奏方式に変化していったと考えられている（李 1996）。これが、甬部に旋部が出現し、形態が大型化した要因である。すなわち、床に置いた際の安定性を考慮した結果であり、旋部が土に落ち込まないようにする機能を持つと推定される。こうした打楽器は、祭祀活動と関連していた可能性がある。祭祀活動における音声への意識は既に指摘されており（方 2006）、音声の強弱や音律のリズムを刻むなどの機能が想定される。湖北省崇陽県出土の獣面文銅鼓（鄂 1977）は、大型青銅鐃との関連は不明であるものの、殷後期併

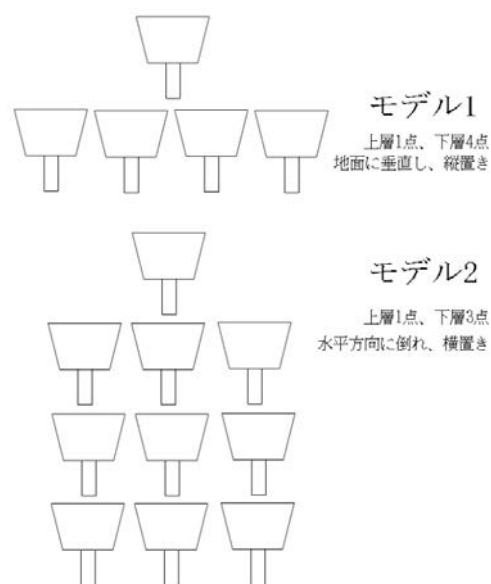


図 7-4 集中埋納パターン 1 の模式図

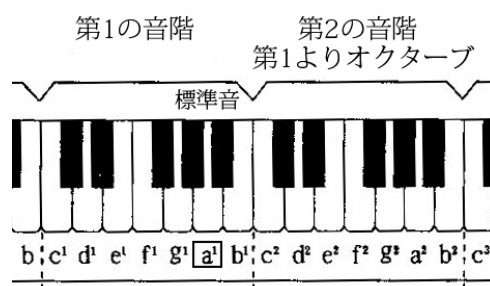


図 7-5 音階記号の数値化

降音^(b) 記号という半音の長さ（ミーファ）であり、0.5 の距離に計算する（例えば、 n = 音高、 n より一全音高い音 $= n+1$ 、 n より一半音高い音 $= n+0.5$ を設定する。 n より低い音の場合、引き算にする。）。測定音高が『基本楽理教程』（晏・童 2001）に対応する。

⁴⁵ 「中義」、「柞」は青銅甬鐘の銘文であり、一つセットを看取できる。

⁴⁶ 音程とは旋律や和声において、ある音と、それとは高さが異なる別音との差を指す（ジャン・ル・ロン・ダランベール 2012）。音程の名称は『音楽の基礎—音楽理解はじめの一步』に基づき（鞍掛ほか 2001）、数値化する。例えば、差が 0 の場合、完全 1 度に対応、差が 0.5 の場合、短 2 度、差が 1 の場合、長 2 度に対応する。

行の長江中流域における、組み合わせではない青銅樂器の他の例として挙げられよう。また、春秋時代以降、曾侯乙墓の有柄鼓（杜 1983）、嶺南地域、西南地域で青銅鼓を再び出現する。殷後期～西周時期の間に、長江中流域において、組み合わせではない青銅器の個体を樂器として、音樂的機能性を持つことがおかしくないであろう。

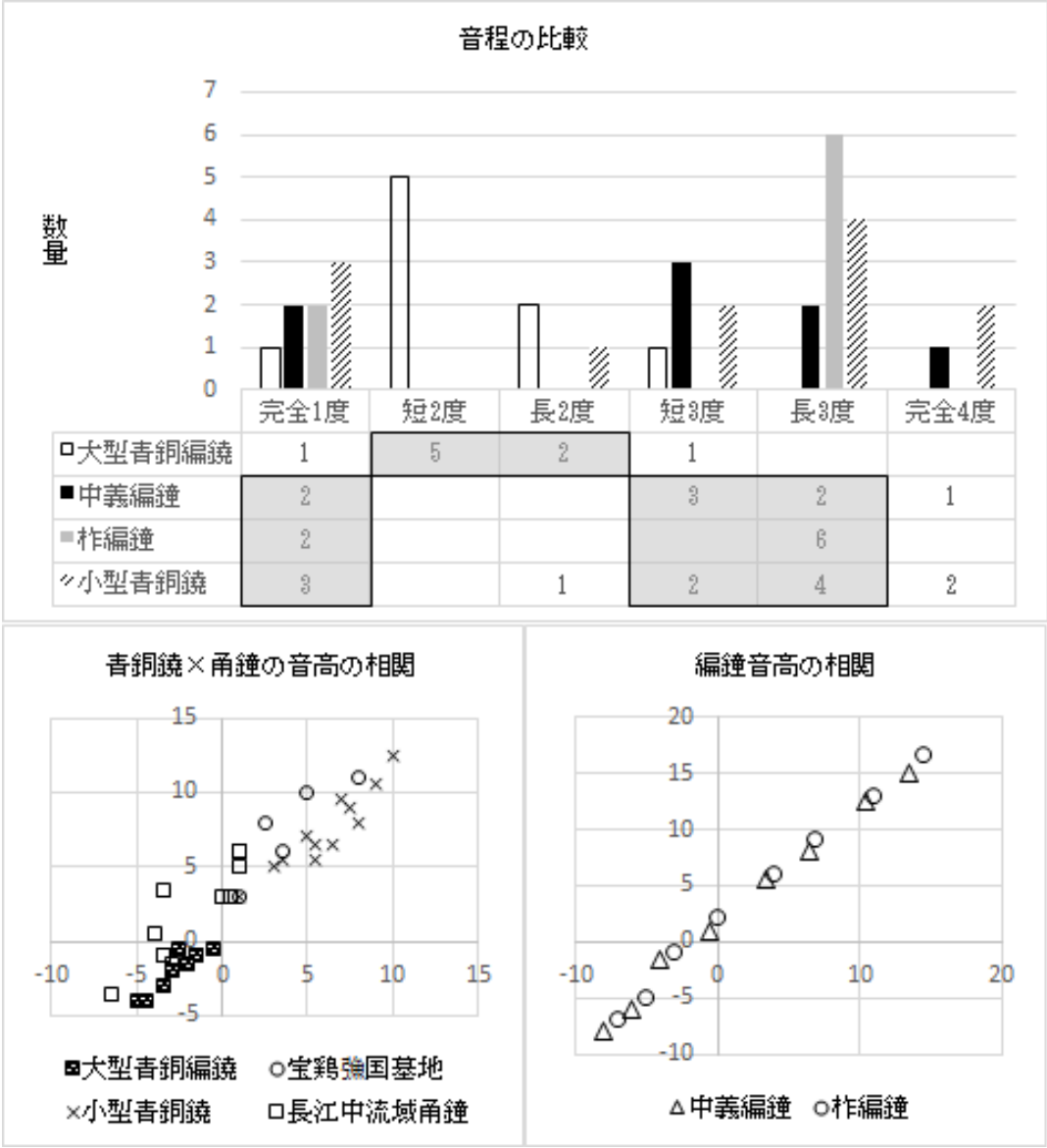


図 7-6 音樂機能の比較

(3) 集中埋納パターン2

一方、パターン2の場合、中原地域の西周文化の窖藏に類似性が見られ、在地的特徴を持つ。具体的にいえば、中原型青銅器に共伴し、青銅器の型式が多様であり、土器、石器などほかの遺物を共伴しない。また、サイズが小さいものが大きいものに置くこと、中原型青銅器の年代は西周中期以前に遡られ、地方型青銅器の年代が西周後期に相当し、年代差がある青銅器を一気に埋納することも中原地域の窖藏に類似する。さらに、山の斜面で集中に埋納し、青銅武器、工具も含んでいることが在地的特徴であろう。さらに、大型青銅鏡を集中に埋納するパターン1の年代は西周中期に相当する。パターン1に比較すれば、このような集中埋

納は、中原地域の窖藏のように、階層上位の集団のものである可能性がある。すなわち、西周王畿地区における政治的意図を持つ窖藏のあり方を受容し、地方で祭祀を司るリーダーが首長へと変化した可能性が高い。また、中原型青銅器の存在は、外部との交流を継続していることを示すのであって、交流に継続して携わる個人あるいは集団が、交流に関わる権力・権威を掌握していた可能性が示唆されている(村野 2005)。また、湘潭青山橋、大悟雷家山の場合、多く種類の青銅器が横置きされ、時期差がある中原

型青銅器に共伴する。また、入れ子状にする設置法も、西周時代の窖藏遺構に類似し、年代も西周後期併行に位置づけられる。

こうしてみると、青銅尊、壺から大型青銅鏡までの埋納は、殷の影響を受けつつも基本的には在地的に展開した祭祀行為であると考えられる。一方で、こうした埋納と一線を画すのが、西周後期の埋納遺構であり、中原の影響の再来を考えることが出来る。



図7-7 湘潭青山橋集中埋納の青銅器

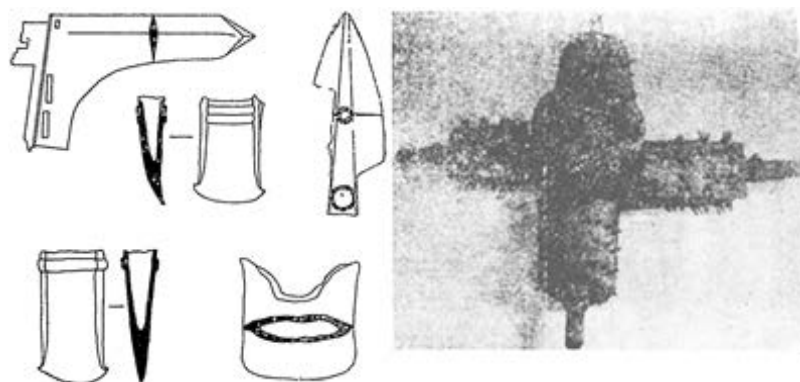


図7-8 大悟雷家山集中埋納の青銅器

3、副葬青銅器の検討

第Ⅱ期の高砂脊遺跡の墓地、炭河里遺跡の西周銅器墓、第Ⅲ期の資興旧市春秋墓地、第Ⅳ、Ⅴ期の衡陽赤石古墓群、桃江腰子侖墓地、郴州高山背東周墓地、湘潭古塘橋春秋墓、衡南胡家港春秋墓、湘鄉五里橋1号墓、何家灣1号墓について検討する。これらは、複数墓で構成される集団墓と、その周辺に遺構がなく、単独に存在する特定個人墓に分けられる（図7-9）。

(1) 集団墓

湖南望城高砂脊遺跡(第Ⅱ期)について、中原型青銅器+他の青銅器、青銅武器+土器、土器のみという副葬品組成の差異が提示されている(村野2005)。本論でもこれを参考に、青銅器・青銅容器の有無を基準として、青銅器なし、青銅武器/工具のみ、青銅容器ありという副葬品組成の差異に区分しよう。青銅容器がある墓は、AM1、AM5、青銅武器のみの墓はAM12で、この3基を除く他では青銅器が出土していない。高砂脊AM1、AM5は長方形墓であり、規模が大きく、青銅器の数量が極めて多い。これらは、中原型青銅器と共に、意図的に破壊後、副葬された。一方で、青銅武器1点を持つAM12

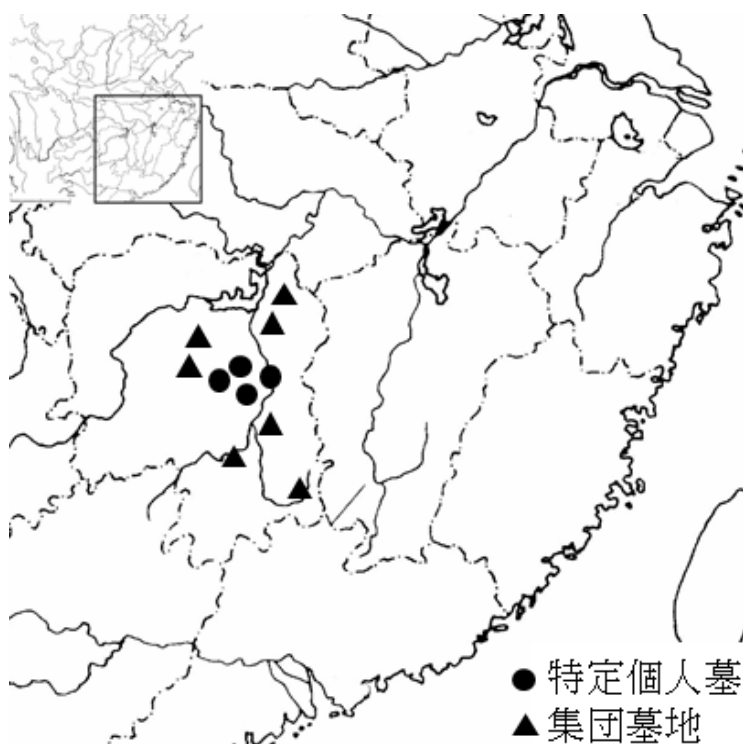


図7-9 長江中流域における墓の分布

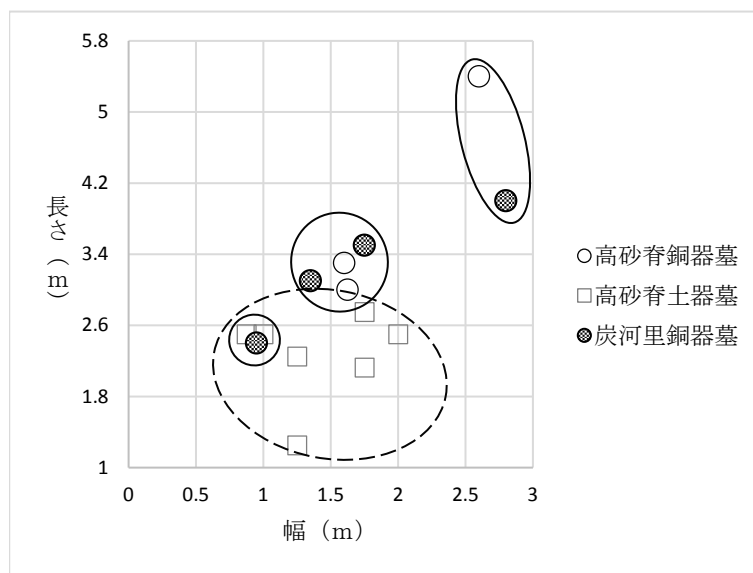


図7-10 寧郷炭河里西周銅器墓と高砂脊墓地の相関

の規模は、AM1、AM5より小さく、他の青銅器のない墓と同様である。村野氏はAM1、AM5の特異性を考え、当該地域のリーダーと想定した(村野2005)。寧郷炭河里遺跡(第Ⅱ期)では西周銅器墓7基が発見された。ここでも青銅器を破壊する行為が行われている。また

本遺跡 M4、M2 の規模は高砂脊 AM1 に相当する。高砂脊の青銅容器墓が二層台を持つ点は、炭河里とは異なるものの、両遺跡の青銅器墓は共通点が多い（図 7-11～12）。同時期の長江中流域では、上記のような集中埋納も出現しているが、これらの集中埋納は大型青銅鏡によって構成されており、在地生産の青銅鼎に加えて中原型青銅器を破壊して納める墓葬とは異なる。仮に、炭河里、高砂脊青銅器墓の墓主が、祭祀活動を司る在地的リーダーが階層性を強めたものとすれば、在来の祭器である大型青銅鏡を副葬するのが自然であろう。とすると、在来というよりも、外来もしくは、外部との繋がりが濃厚な集団のリーダーが、中原型青銅器と共に埋葬されたと考えられる。他では、高砂脊 AM5 で、青銅製の車

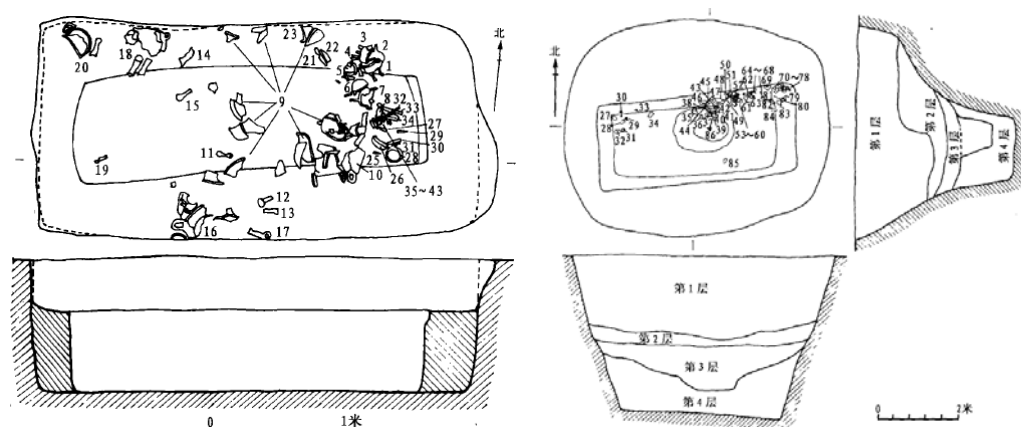


図 7-11 高砂脊墓地の青銅器を副葬する墓（左：AM1、右：AM5）

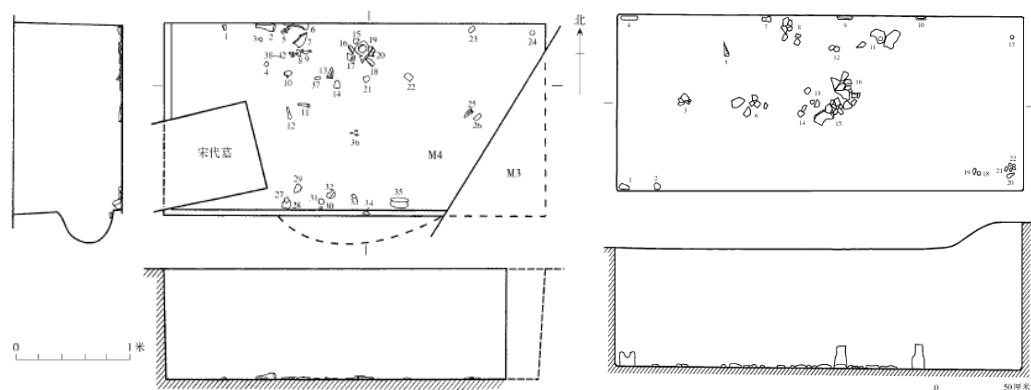


図 7-12 炭河里西周銅器墓の青銅器を副葬する墓（左：M4、右：M8）

表 7-2 高砂脊遺跡、炭河里遺跡の銅器墓の比較

墓番号	墓の規模			青銅器組成						土器	備考
	形態	長さ	幅	地方型鼎	中原型鼎	その他容器	武器	工具	その他		
高砂脊AM5	長方形	5.4	2.6	×	○	○	○	○	○	×	青銅製車馬具を含む
炭河里M10	長方形	4	2.8		○	○					新屋湾「簋」方鼎の足部に類似する。
炭河里M4	長方形	3.5	1.75	Ab2式足、Ac型口縁		○			○	○	青銅器の数量が多い。Ac型口縁が西周後期に下る可能性がある。
高砂脊AM1	長方形	3.3	1.6	Aa式、Ab1式、Ac1式	○	○	○	○	○	○	地方型7点
炭河里M8	長方形	3.1	1.35	?	?	○		○	○	○	青銅器の数量が多い。文様が中原型の口縁部に近いであろう。
高砂脊AM12	長方形	3	1.6	×	×	×	1	×	×	○	武器が1点
炭河里M2	長方形	2.4	0.95	Ab1式足、C型足							外反尖足であり、C1、C2の間である。
炭河里M1	長方形										青銅器あり
炭河里M7	長方形										青銅器あり
炭河里M9	長方形							○			

馬具を副葬し、高砂脊 AM1 の中原型青銅鼎は、「酉」銘文を持つ。この銘文と同じ字体ではあるが、異なる字形の例として、殷墟徐家橋 23 号墓の「己酉」鼎、「己酉」簋（安陽文物工作隊 1993）、毛家咀遺跡採集の「酉」爵（張 1962）、または毛家咀遺跡に近い新屋青銅器窖藏の方鼎（呉 1997）が挙げられる。字体が同じで字形が異なる銘文を、異なる器種に施銘する現象は、一つの下書きによる、複数の施銘者の存在を示すと考えられている（鈴木 2017）。従って、高砂脊 AM1 の青銅鼎は毛家咀遺跡の集団との関りを示している可能性がある。これは、高砂脊遺跡で毛家咀遺跡に関連する土器が出土している現象とも合致する。高砂脊遺跡は、外来要素と在来文化の融合的性格を持つ遺跡なのである（湖南省文物考古研究所ほか 2001）。青銅器の共同的埋納から、厚葬墓への副葬という変化は、確かに当該地域での内的変化、すなわち階層化の進展を示している。

しかしながら、こうした墓は、中原あるいは毛家咀遺跡に由来する集団が長江中流域に達し、そのリーダーが一部の在地要素を取り込みつ

つ形成されたものなのである。こうした、埋納青銅器と一線を画す青銅器副葬墓は、弥生

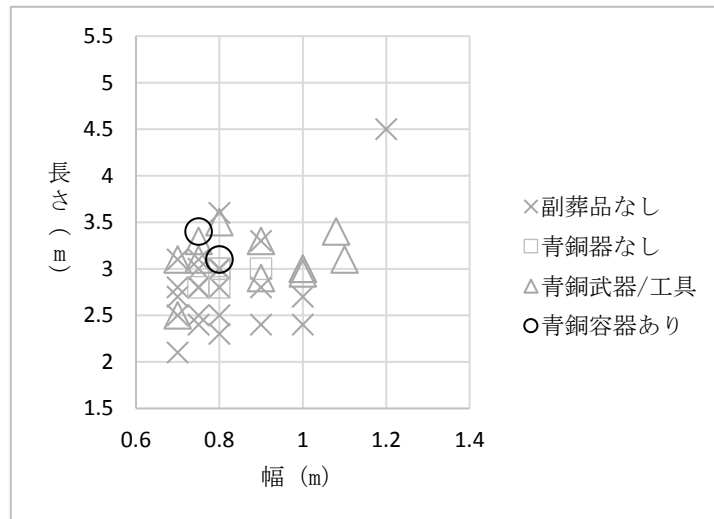


図 7-13 資興旧市春秋墓地の相関

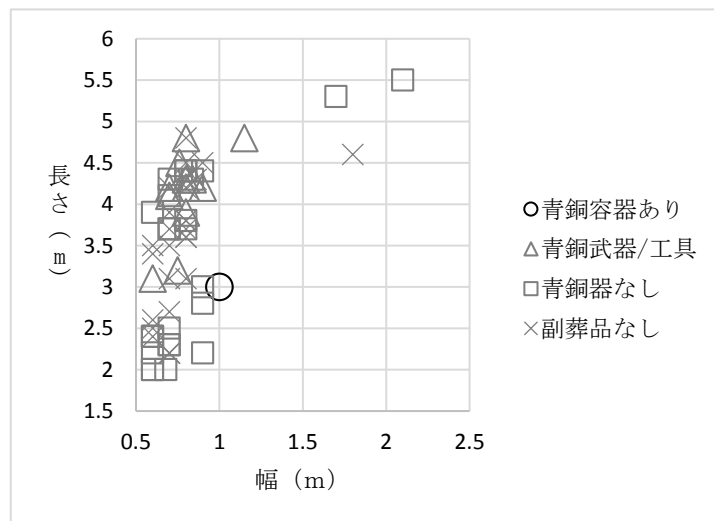


図 7-14 衡陽赤石古墓群の相関

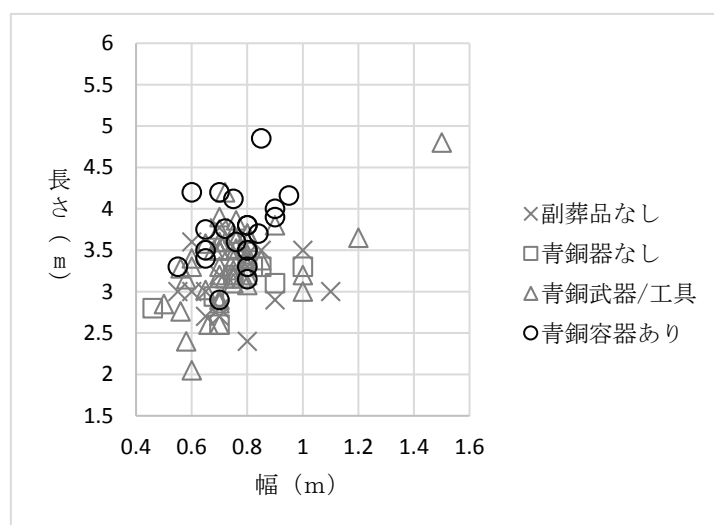


図 7-15 桃江腰子倫墓地の相関

時代から古墳時代への転換における現象と対比できるかもしれない。古墳の副葬品として、銅鐸や銅鉾などの青銅器が用いられずに埋納され、新たな祭器が作り出されていったことは（吉田 2014）、在来および外来の青銅器が複雑に絡みつつ、階層化していった長江中流域を検討する上でも大いに参考になろう。

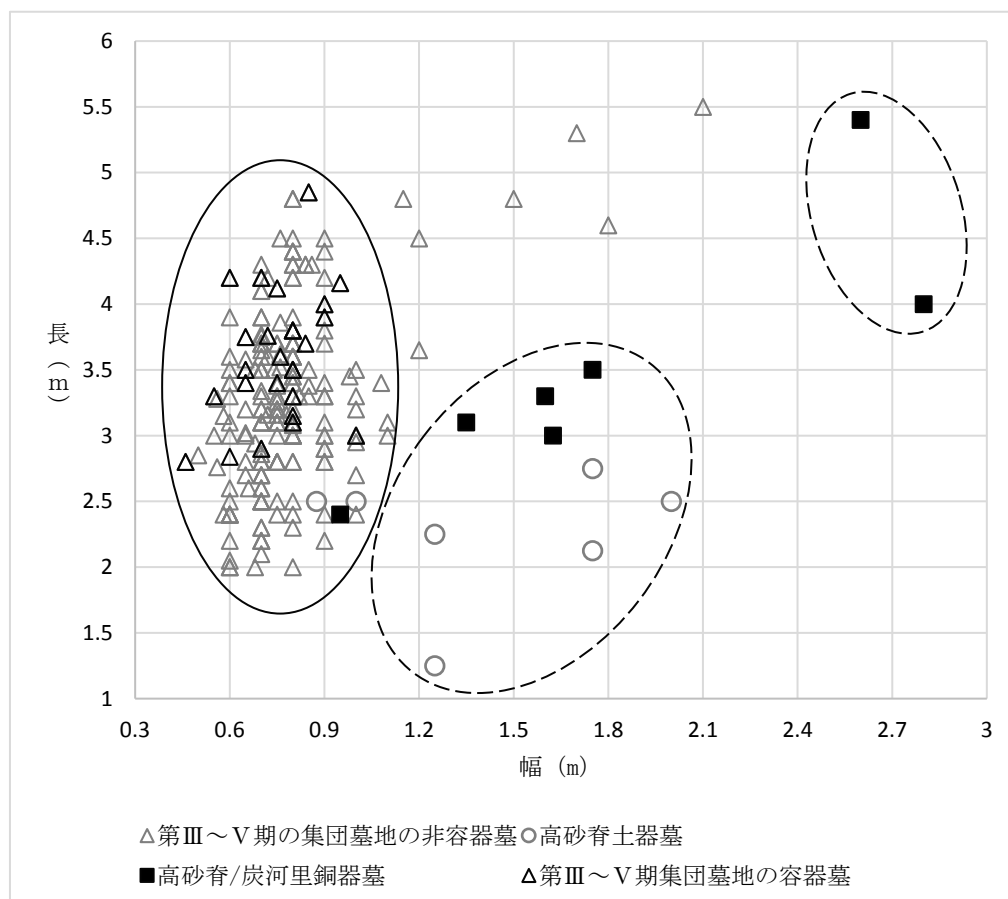


図 7-16 長江中流域における集団墓地規模の比較

表 7-3 集団墓地の青銅器の出土率

本論の 段階	集団墓地	墓の合 計数	青銅容 器墓	青銅武器 (工具) 墓	容器の 占有率	武器の 占有率	中原に並行する時期
第Ⅲ期	資興旧市春秋墓地	57	2	12	3.5%	21.1%	西周後期～春秋前期
第Ⅳ期	衡陽赤石春秋墓地	66	1	11	1.5%	16.7%	春秋中期頃
第Ⅴ期	郴州高山背墓地	5	1	2	20.0%	40.0%	春秋後期頃
	桃江腰子畲墓地	114	21	65	18.4%	57.0%	春秋後期～戦国前期

次に第Ⅲ期以降の、資興旧市春秋墓地、衡陽赤石古墓群、桃江腰子畲墓地を検討したい。まず、第Ⅲ期以降の集団墓地の墓規模の分布は、第Ⅱ期に位置する高砂脊墓地、炭河里西周銅器墓の分布はかなり異なるが見られる（図 7-13～16）。一方、第Ⅲ期～第Ⅴ期の集団墓地の中で、青銅容器を副葬する墓が青銅容器を副葬しない墓の規模が少し大きい類似性が認められる。また、第Ⅲ期以降の墓地には、墓制、青銅器の型式、出土状況の一致が認められ、長江中流域の湘江流域にある種のネットワークが形成されたことが窺える。第Ⅲ期～第Ⅳ期では、資興旧市、衡陽赤石春秋墓地では地方型青銅鼎が極めて少なく、青銅武器/工具を副葬する墓は一定程度存在する（表 7-3）。これは、墓規模の差というより、

青銅器という貴重品を存在するほうが社会身分の相関性を導かれる可能性が高い。さらに、次項に述べる特定個人墓の在り方とは対照的であり、特定の個人や集団が青銅鼎に対するコントロールを強め、集団墓の成員が鼎の流通から徐々に排除されていったと考えられる。

一方で、第V期の桃江腰子侖墓地では、青

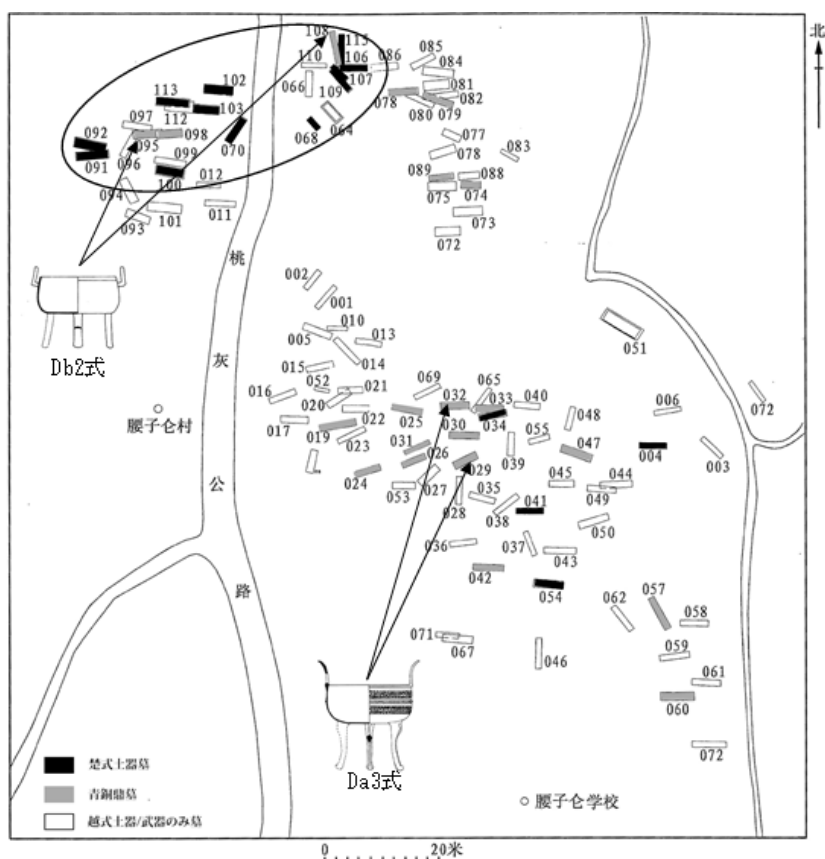


図 7-17 桃江腰子侖墓地の青銅鼎の分布

銅容器、青銅武器を持つ墓が増えており、青銅鼎自体も増加する。これは前段階と一見矛盾するような現象であるが、本墓地が多くの楚系遺物を含むことを考えると、楚による影響と考えられる。桃江腰子侖墓地の分布を検討すれば（図 7-17）、楚式鬲を副葬する墓は主に西北部に分布する。一方、越系遺物を副葬する墓は主に東側に分布している。さらに、地方型青銅鼎を副葬する墓から見れば、Db2 式は楚系遺物を存在する墓の範囲に分布するが、Da3 式の多くは、越系遺物を存在する墓の範囲に分布する。青銅鼎の型式からみると、Db2 式およびその後続（間瀬 1986、袁・張 2015）は、江陵雨台山、長沙楚墓、包山楚墓で、出土例が見られるが、Da3 式は楚の墓地に見られない。つまり、青銅鼎 Db2 式が楚と関連している可能性が高い一方で、青銅鼎 Da3 式は従来の在地的型式から発展したものと考えられる。これは、第V期になって、地方型青銅器の一部が楚文化に編入される一方、在地的伝統が存続した結果といえよう。なお、越式鼎は漢代前期まで存続する（横倉ほか 1990、向 2005）。この集団墓では、青銅器を副葬する墓が半数以上を越え、武器、工具類もかなり多い。これらの武器、工具類に関しては在地性が認められる。また、墓の形態は狭長形墓であり、楚の墓制ではない。従って、この段階以降は楚の影響は、当該地域に入りながら、間接的支配によるものであったと考えられる。従来の青銅器の流通が残存し、武器・工具類の副葬も、楚由来の祭祀体系から外れるものである。

(2) 特定個人墓

長江中流域において、第Ⅳ期から特定個人墓が出現している。これらの特定個人墓は生活遺跡や集団墓地より離れたところに位置し、分布でもこれに先行する埋納遺構と共通する。特に第Ⅲ期の集中埋納は、青銅鼎の型式でも第Ⅳ期の特定個人墓と類似している。第Ⅱ期における、高砂脊や炭河里の厚葬墓は、特定個人墓に類似しているが、外来的要素を濃厚に残すものであって、在地的に成長したものではない。むしろ、特定個人墓は在地の第Ⅲ期の集中

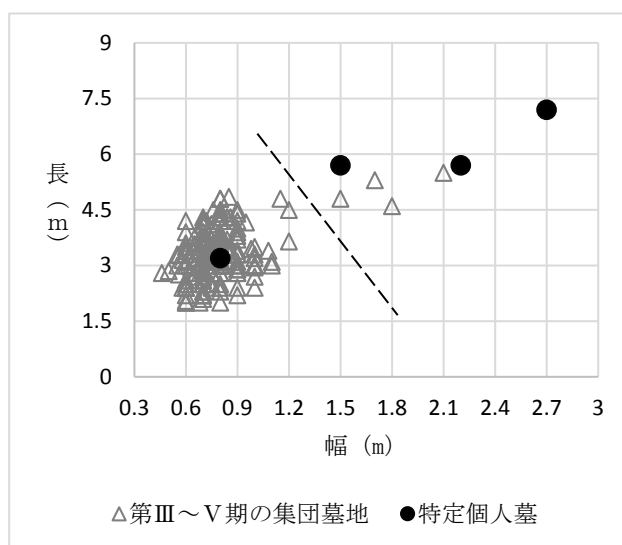


図 7-18 特定個人墓と集団墓地規模の比較

埋納が転化したものである可能性が高い。第Ⅱ期において、平等指向であった集団祭祀を司るリーダーが、自己の階層表示手段として、青銅鼎を含んだ集中埋納を形成し、やはり祭祀機能が次第に消失し、ついには社会身分を示し、階層化になっており、特定個人墓に副葬する形態を採るようになったと考えるのである。こうした特定個人墓と上記の集団墓地の墓壇面積を比較したのが図 7-18 である。さらに、図 7-19 の副葬品の数量が多く、特定個人墓と集団墓の差は明らかであり、階層差が認められる。

また、第Ⅳ期から第Ⅴ期にかけて、壁龕が追加され、地方型青銅鼎の比重が減少するに伴い、楚系遺物が共伴するようになる。何家湾 1 号墓では、春秋後期後半の湖北省に位置する楚墓に見られる形態の獣蹄足有蓋附耳楚式鼎や青銅敦が、また五里橋 1 号墓には、動物文壺、玉佩など春秋末期の楚系遺物が存在する。楚文化が次第に当該地域に進入し、在地集団が楚文化要素を取り込みつつも、従来の伝統を維持した様相が窺える（横倉ほか 1990）。例えば、越式鼎の系統は、漢代に至るまで継続して製作されており（向 2005）、青銅器生産の伝統が保持されたことがわかる。

以上のように、特定個人墓は、第Ⅳ期において当該地域における階層化が進んだ結果であるとみなすことができる。長江中流域では、特に青銅鼎の掌握が、階層秩序上重要であった。青銅鼎は集団墓では希少であり、特定個人墓から配布されたものと考えられる。こうして、本来的には共同祭祀のリーダーであった特定個人やその近親者が、青銅器のコントロールにより、階層的秩序を一層強化したのである。

第Ⅴ期になると、特定個人墓の中で、楚系遺物が地方型青銅器と共伴する現象が見られる。この背景としては、まず墓主が A: 楚人、あるいは B: 在地首長という可能性がある。さらに、支配関係を考慮すれば、A は楚の官僚が当該地域に来て、直接的支配を行ったことが考えられる。B については、楚が青銅器の分配を通じて、在地首長を介した間接的支配を行う、という 2 つの可能性が存在する。この可能性を絞るため、典型的な楚墓を比較する。まず、第Ⅴ期の特定個人墓である湘郷何家湾 1 号墓の一括資料（図 7-20）では、子口鼎、敦、缶という春秋後期に出現した楚の礼器組み合わせ（袁 2015）とともに、越式鼎が出土している。この子口鼎、敦、缶という組み合わせは、楚の低階層墓によく見られ、新興の貴族階層が楚の階層秩序に編入された結果とみなされている（袁 2015）。しかし、楚の青銅礼器の組み合わせにおける匱、盤などの水器、酒器がなく、越式鼎が加わっ

ている。また、湘郷五里橋 1 号墓でも、楚系青銅器（袁 2015）に加え、越式鼎、青銅武器、工具類、砥石という在地特徴を反映する副葬品を持っている。両墓では、在地文化をある程度配慮したが、このような楚系青銅器は当該地域の集団墓に見られない。これは、楚の同化政策の一端が伺える。

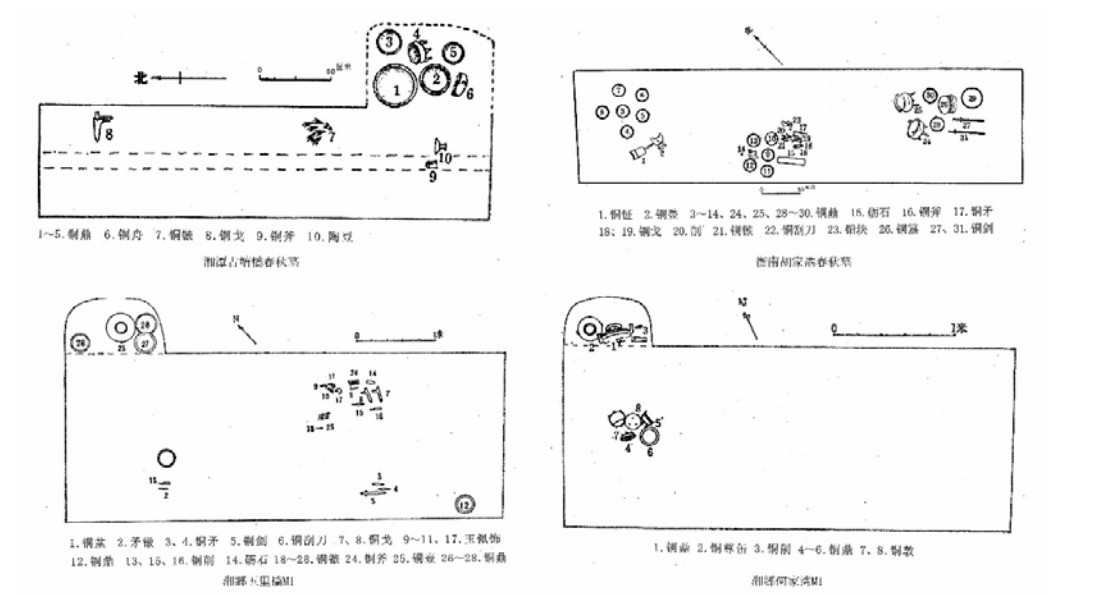


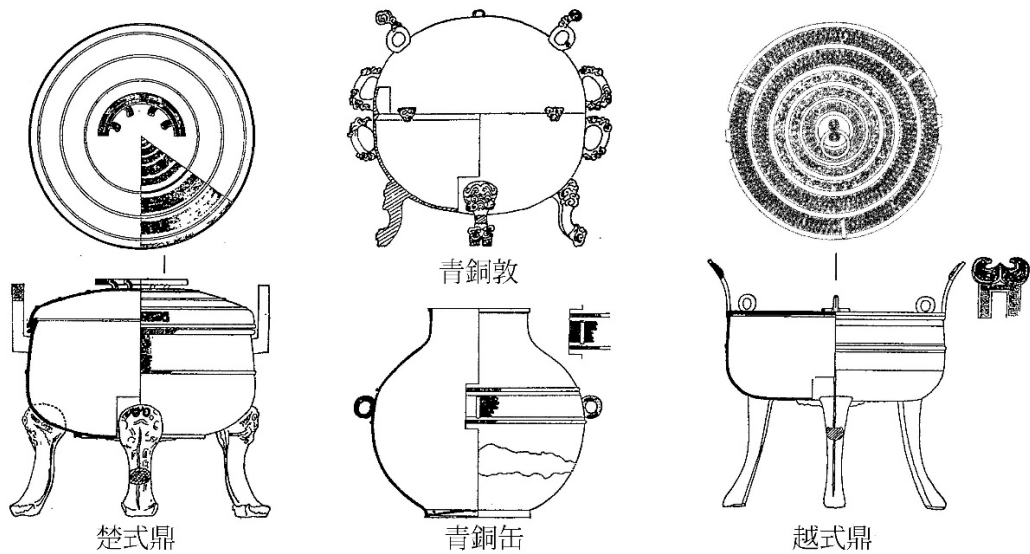
図 7-19 特定個人墓（左上：湘潭古塘橋春秋墓、右上：衡南胡家港春秋墓、左下：湘郷五里橋 1 号墓、右下：湘郷何家湾 1 号墓）

表 7-4 特定個人墓の青銅器の出土率

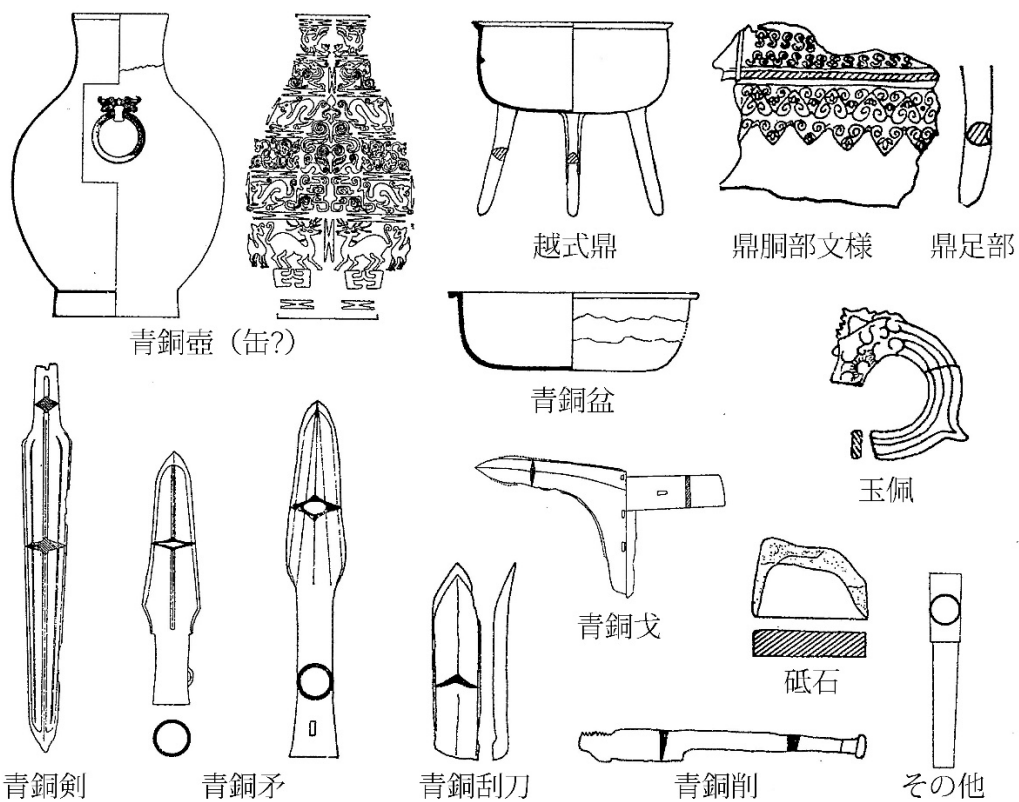
個人墓	面積	副葬数量			地方型鼎 の数量*	青銅器の 占有率	地方型青銅 鼎の比重	時期区分
		青銅器 合計数	非青銅器 合計数	青銅葬器 合計数				
衡南胡家港墓	8.55	40	2	20	17	95%	85%	第Ⅳ期
湘潭古塘橋墓※	2.58	15	1	6	5	94%	83%	
五里橋1号墓※	10	23	5	6	4	82%	67%	第Ⅴ期
何家湾1号墓※	5.25	8	0	7	3	100%	43%	
※ 壁龕がある墓								
* 掲載された報告あるいは墓平面図より地方型青銅鼎の最大限の数量を示す（青銅鼎の一部は地方型ではない可能性が存在する。報告者によれば、お主に地方型を看取する。）								

以上をまとめると、楚の支配域が拡大し、広い領土を維持するため、新興貴族階層が発生し、従来の長江中流域の在地首長に交渉したことが考えられる。そして、楚は直接支配を原則としていたが、状況に合わせ、間接支配を導入した。したがって、こうした長江中流域を、自らの体系の中に組み込んでいくことになり、B の解釈が妥当であろう。また、第Ⅴ期には青銅器が増加するが、それらは楚を通じたものであろう。さらに楚という領域国家⁴⁷は秦帝国に併合され、ここに長江中流域は新たな歴史的段階に入るのである。

⁴⁷ 領域国家とは、威信財システムが周辺地域を取り込みながら拡大し、安定的な帝国の形成に至るとい
うモデルの一段階である（Friedman・Rowlands 1977）。東アジアの場合、領域国家として東周代（＝春
秋戦国時代）以降が挙げられており、秦・漢代が帝国として位置づけられる（辻田 2007）。



何家湾 1 号墓の一括遺物



五里橋 1 号墓の一括遺物

図 7-20 第 V 期の特定個人墓の一括遺物

第3節 小結

以上みてきたように、地方型青銅器の器種・型式変化は、扱われ方の変化に関連している。まず、青銅尊・壘、大型青銅饒 A、大型青銅饒 B→大型青銅饒 C、青銅甬鐘→青銅甬鐘、青銅鼎 A、青銅鼎 C→青銅鼎 B、青銅鼎 Da、Db、青銅鼎 E という変化は、酒器・楽器（饒）→楽器（饒・甬鐘）のみ→楽器（甬鐘）・食器→食器のみ、という変化に対応する。そしてこれらの変化が、青銅器の扱われ方、つまり埋納から副葬への変化に対応している。

第Ⅰ期（殷墟3期～殷末周初期）では、個数埋納が殆どであり、階層が発達せず、集団祭祀が行われる。また大型青銅饒、青銅尊・壘、動物型青銅器などの事例を考慮すると、集団祭祀の内容は多様であるが、個数埋納のような共通性も見られる。

第Ⅱ期（西周前期～中期）に入ると、個数埋納の範囲がさらに拡大する一方、集中埋納、厚葬墓が点的に湘江流域で出現する。集中埋納では、地方型青銅器しか見られない一方、厚葬墓では、中原型青銅容器のほか、外来の青銅車馬具、青銅武器が存在する。集中埋納が在地的成長を示す一方、厚葬墓は中原の影響により出現したと考えられる。青銅武器、車馬具から考えて、中原文化の武装集団、成周の殷八師、宗周の西六師という直属軍団の遠征の結果である可能性もあろう。つまり、西周王朝が武装植民地型の封建制を通じて、政治的影響力を拡大し（渡辺 2019）、長江中流域への外征が行われたのである（宮本 2020）。このように、長江中流域の湘江流域では、戦争を含めた交流を通じて、西周文化の青銅器の形態（鼎、鐘）、扱われ方（集中埋納、副葬）を模倣する契機があった。

第Ⅲ期（西周後期～春秋前期）における長江中流域では、西周王畿地区の窖藏に類似する集中埋納が発展し、集団墓地における副葬青銅器が出現する。このような副葬青銅器は、王畿における族邑への青銅器配布現象とも対比できる可能性がある。ただし、長江中流域が従来の文化基盤が中原地域と異なり、さらに諸小地域にもこうした階層化進展には程度差がある。したがって、発達的に階層化している段階ではないと考えられる。

第Ⅳ期（春秋中期～後期前半）における特定個人墓の出現によって、長江中流域社会がさらに階層化したことが判かる。特定個人墓は、B 型、Da 型、Db 型、E 型青銅鼎、扁茎式銅劍（西江 1987）などを通じて、集団墓地に結びつけられ、地域的まとまりを形成している。こうした特定個人墓は、集団墓地とは空間的に隔絶し、墓の規模、副葬品の数量でも、階層格差がさらに顕著化しており、一層の社会の複雑化を反映しているものと考えられる。

第Ⅴ期（春秋後期後半～戦国前期）に入ると、湖北から湘江へと拡大した楚文化が、短時間のうちに南部へと広がった（西江 1987）。これに対応する現象が、Da3 式、Db2 式青銅鼎、および西江氏が指摘した扁茎式銅劍（西江 1987）が楚系青銅器とともに特定個人墓にみられることである。また、集団墓地でも楚式鬲（桃江腰子侖墓地）、墓制（資興旧市戦国墓の一部）（西江 1987）など楚の要素が併存する。このように、長江中流域青銅器文化は楚の体系に編入されていき、やがて地方型青銅器文化は終焉を迎えていくのである。

第7章 長江中流域青銅器文化の形成と展開

博士論文の目的は、地方型青銅彝器の視点から長江中流域における青銅器文化の形成、および展開過程を考察することである。この目的を遂げるため、具体的な検討の課題としてあげられるのは、まず、第2章～第5章に示した諸器物の編年を統合し、中原との地域間関係に基づき、展開様相を明らかにする。次に、第6章の検討に合わせて、長江中流域青銅器文化・社会の展開を提示したい。

第1節 青銅器の変化傾向の概観

長江中流域の青銅彝器は、中原地域から搬入する中原系、在地生産である在来系に分けられる。また、その出土状況によって埋納青銅器、副葬青銅器にも区分できる。さらに、埋納の場合、ほかの青銅器との共伴の有無によって、集中埋納、単数埋納に分けられ、本論では、青銅彝器3点以上を含むものを集中埋納と呼ぶことにする。

出土状況では、単数埋納の場合、青銅尊・壺、大型青銅鏡の割合が高い。青銅甬鐘の場合が半数であり、青銅鼎は非常に少ない。複数埋納の場合、大型青銅鏡をはじめ、青銅甬鐘が約半分の割合を占める。副葬は、青銅鼎が圧倒的に多く、青銅尊・壺、大型青銅鏡、青銅甬鐘は殆どない。青銅鼎はより新しい器種であることから、基本的に埋納から副葬への変化が読み取れる。さらに、段階ごとのセリエーションにも、単数埋納/複数埋納→副葬品への変化を示している。したがって、青銅器の出土状況からみると、その機能は埋納として祭祀具から副葬品へと変化している。

長江中流域の青銅彝器が中原地域から搬入する中原系、在地生産を通じて在来系に分けられる。その出土状況によって、埋納青銅器、副葬青銅器にも区分できる。さらに、埋納の場合、ほかの器物との共伴の有無によって、集中埋納、個数埋納に分けられる。

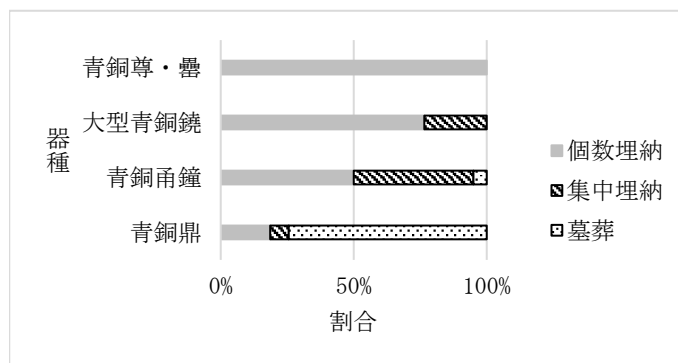


図8-1 器種と扱われ方の関係

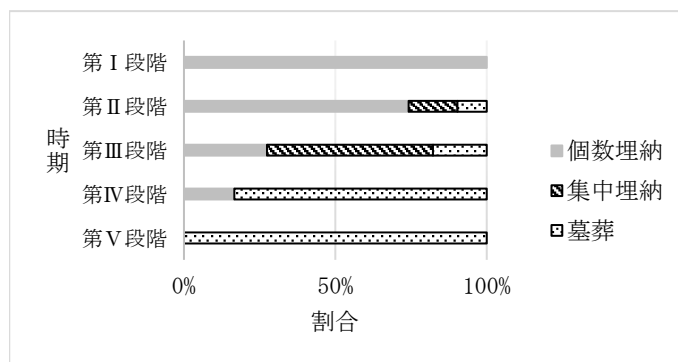


図8-2 時期ごとの扱われ方のセリエーション

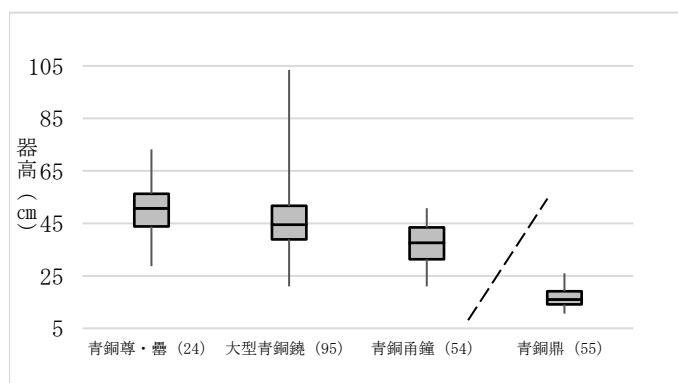


図8-3 地方型青銅器サイズの比較

同時に青銅器のサイズも変化する。出土状況が埋納である場合、サイズが比較的に大きく、副葬の場合は、器種に関わらず小型化する。このように、埋納青銅器—大型、副葬青銅器—小型という相関性がある。さらに、青銅鼎 B2 式、B3 式、C3 式、Da2 式、Da3 式、Db1 式、Db2 式、E1 式の底部が火焼いた痕跡が残っており、青銅鼎の実用的機能が高まった可能性がある。また、青銅尊・壘、大型青銅饒、青銅甬鐘と青銅鼎のサイズ上の不連続が顕著である。したがって、長江中流域の地方型青銅器を概観したが、長江中流域の青銅器は形態を問わず、埋納品、副葬品に分けられ、個数埋納から、集中埋納を経て、副葬への変化と認められる。また、扱われ方がサイズの相関が見られる。集団に共有する可能性を持つ埋納品が大型化する一方、個人に帰属する副葬品が小さくなることがわかる。こうした変化は、長江中流域の社会的変化を示唆する

第 2 節 長江中流域青銅器文化の展開様相

1、第 I 期の様相（図 8-4）

第 I 期（殷墟 3 期～殷末周初期併行）には、青銅尊 3 式、4 式、壘 2 式、3 式、大型青銅饒 A1 式、Ba 式、Bb1 式、Bc1 式、C1 式が該当する。長江上流域では、三星堆遺跡で祭祀坑がある。長江中下流域の場合、青銅尊が単数埋納で、大型青銅饒、青銅壘は単数埋納、墓出土の両方が存在する。三星堆遺跡のみが祭祀坑であり、長江上流域の独特な青銅器文化といえる（岡村 1998、施 2018）。また、江西新干大洋洲商墓も孤立した例である。ここでは、青銅壘 2 式、大型青銅饒 Ba 式、Bb1 式、Bc1 式が併存する。この墓は長江中流域の贛江流域に位置し、呉城文化や牛城文化との関係が示唆されている（李 2020）。あるいは、扁足鼎から、地方型の一連の系列とする見解もある（山本 2013）。ここに見られる大型青銅饒や青銅壘は単数埋納の地域から流入したものと考えるのが自然であろう。また、青銅尊・壘、大型青銅饒の分布差は殷文化の青銅器に関わる情報を取り込む在地集団および、伝達ルート of 東西差を示している可能性がある。青銅尊・壘は、陝西省南部の城固県、洋県という西側を経由し、漢水に沿い、長江中流域に到達する。大型青銅饒は、安徽省を経由し、東側に伝播してきた。安徽省寿県蒼陵城遺跡で採集された小型青銅饒（朱 2019）は、このルートによる可能性が高い。さらに、黄河流域の小型青銅饒を受容する地域が、長江下流域（東側）に多く、西側では次第に甬鐘に変化していくことも、東西差の傍証になる。

青銅尊・壘は大型青銅饒と分布は異なるものの、いずれも単数埋納かつ大型青銅器である。青銅尊・壘は長江中流域の洞庭湖を中心として、湖南北部、湖北南部に分布し長江全流域に見られる。一方、大型青銅饒が江西北部にまとまり、長江上流域に見られない。さて、このような大型化した青銅器は、二里岡上層期の鄭州商城、盤龍城遺跡、そして山西省平陸県の大原青銅鼎（衛 1992）においても看取される。二里岡上層期以来、二里岡文化およびそこから長江中流域に至る広範囲に、共通の祭祀形態が存在した可能性があり（鈴木 2017）、その祭祀具として消費されたのが、当該地域の埋納青銅器であろう。つまり、地方型青銅器としての青銅尊・壘、青銅饒は殷文化の影響が強いものの、文様、装飾などの特徴から華中型青銅器と判断でき（難波 1998）、当該地域での在地生産と消費が行われた可能性が高い。こうした中原を中心とした青銅器の拡散は、二里岡インパクトという爆発的拡大現象（浅原 1985）の一環として捉えられよう。殷が盤龍城という拠点を築いて長江中流域に到達し、鉱物資源を直接に手に入れていた可能性もある。この背景の下、盤龍城では非鄭州系青銅器の生産が行われた（鈴木 2013）。さらに、二里岡インパクトの後の殷墟期に入ると、殷文化の周縁に位置する安徽省、陝西省の城固県、洋県地区でも在地生産が始まった。これは、資源獲得を目的とした殷と、長江中流域との交流が継続

しており、中原の影響が次第に弱まりつつ、自律性が顕在化していく。

この後、中原地域においては、殷墟文化で青銅器製作技術が革新され、数量も飛躍的に増加した。この青銅器、そして墓地、甲骨卜辞に基づく社会秩序によって、地域統合の再構築が行われた（宮本 2005）が、この段階の秩序や統合は、青銅器という物質文化を必須条件とするものであり、銅鉱石の入手のため、交易のネットワークの形成（宮本 2005）が進められた。銅鉱石産地である長江中流域は、こうした条件の下、殷文化の青銅器製作技術を受容した可能性が高い。また、殷墟 2 期後半から大型青銅尊が消滅し、觚形尊、および小型青銅饒が出現するが（林 1984、宮本 2020）、これ洞庭湖を中心に分布する華中型青銅器、贛江流域の新干大洋洲商墓の出現と同段階である（宮本 2005）。すなわち、殷が青銅資源を得るために、長江中流域の諸文化と接触し、殷文化では既に時代遅れとなっていた大型青銅尊、青銅壘やその技術が、いわばその見返りとして長江中流域に供与された



図 8-4 第 I 期の様相

のである。

殷末周初期に至るまで、殷墟文化の他地域への影響は次第に縮小するが、殷墟そのものは祭儀都市化し、社会階層化を顕在化させる方向に向かっていく（宮本 2005）。青銅饒の受容を考えると、長江中流域と殷墟を中心とする中原地域の間で、交流が完全に断絶していたわけではない。しかしながら、青銅饒を、従来の青銅尊・壘同様に大型化させる点、そしてそれらを副葬しない点で、この時期の長江中流域は、中原地域との関係性よりも、在地的な伝統を一層発展させる方向に向かっていていると言える。つまり、殷が階層性を顕在

化させる方向で青銅器を用いていたのとは異なるあり方が、長江中流域において想定できるわけである。階層化が未発達である点を考慮すれば、長江中流域の青銅器は、むしろ複数の土器文化を含むような、一定の範囲での共同性を示唆する祭祀具であった可能性がある。同様の青銅器のあり方は、銅鐸や銅鉦を含む弥生時代（石橋 2011）、および前 2 千年紀のユーラシア草原地帯の青銅器文化にも看取され（松本 2018）、大型化する現象も共通している。時期や生業・社会基盤は全く異なるものの、比較の対象としては興味深い。

2、第Ⅱ期の様相（図 8-5）

第Ⅱ期（西周前期～西周中期併行）は青銅尊・壺が次第になくなり、大型青銅饒 A2 式、A3 式、Bc2 式、C2 式、C3 式、C4 式、青銅甬鐘 A1a 式、A2 式、A1b 式、B1 式、青銅鼎 Aa 式、Ab1 式、Ac1 式を含む。また、中原型青銅甬鐘、青銅鼎の搬入品もよく見られる。

これらの青銅器の分布範囲は長江中流域に限られ、湘江流域から贛江流域にかけて、前

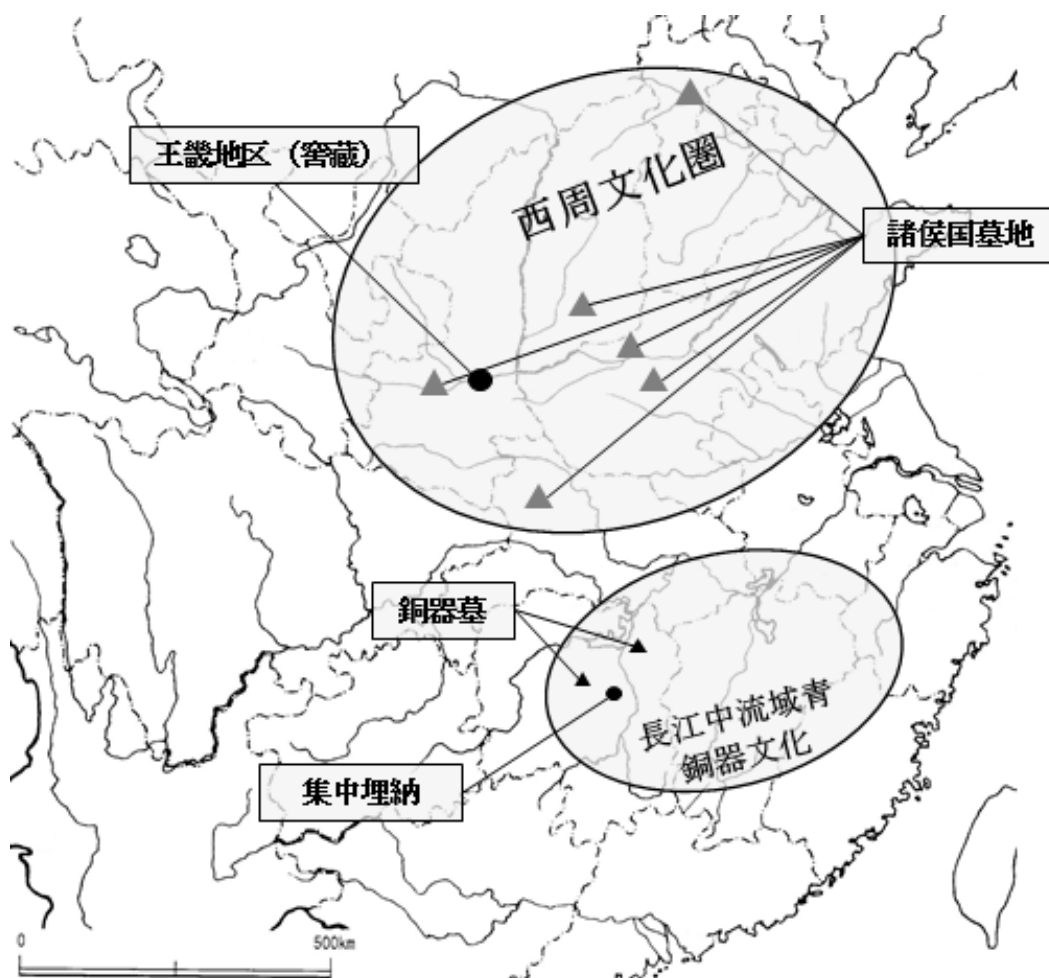


図 8-5 第Ⅱ期の様相

段階より少し南に拡大していく。出土状況では、中原型青銅甬鐘が単数埋納、中原型青銅鼎は単数埋納、副葬という両方があるが、大型青銅饒 A2、A3、C2 式は個数あるいは集中埋納、大型青銅饒 C3、C4 式、青銅甬鐘 A1a 式、A2 式、A1b 式は単数埋納に限られる。また、青銅甬鐘 B1 式は単数埋納、墓の両方が存在し、青銅鼎 Aa 式、Ab1 式、Ac1 式は墓からしか見つからない。墓の副葬例としては、望城県高砂脊墓地 AM1（青銅鼎 Aa 式、Ab1 式、Ac1 式）、寧郷県炭河里遺跡西周銅器墓（地方型青銅鼎 A 類、C 類足部）、湘潭県洪家峭西周墓（青銅甬鐘 B1 式）がある。他の出土遺跡は殆どが単数埋納であり、寧郷老糧倉

周辺の陳家湾、月山鋪、三畝地、北峰灘などの他、江漢平原、湘江流域、贛江流域、長江下流域にも広がっている。従って、被葬者個人や、その帰属する限られた血縁集団に青銅器を帰属させることが、少数ではあるものの出現していることがわかる。

この段階の長江中流域では、中原型、地方型の併存が目立つ。つまり、中原青銅器文化との相互の交流の中で、中原型青銅器を模倣するとともに、新たな地方型青銅器を作り出している状況が窺われる。これに関しては、中原の動向が関わっていると考えられる。まずは、中原では同祖同族の支配原理を体現する新たな青銅器として、中原型青銅甬鐘のような器物が生み出されていったが（宮本 2020）、下記のような南征によって、そうした甬鐘が長江中流域の在地社会にも流入していったことが考えられる。

当該段階では、長江中流域に向けての昭王の南征などによって、西周王朝の統治域が拡大するが、それには資源獲得という目的があった（佐藤 2016、宮本 2020）。上記の少数の青銅器副葬墓からは、こうした中原由来の集団との関連が窺える。例えば、炭河里遺跡では、当該地域では数少ない城址が発見され、在地文化と中原文化要素双方が見られる。かつ、炭河里墓地、高砂脊墓地では青銅器の破砕行為という在地にはなかった要素が認められ、かつ在地的な大型青銅鏡を埋葬しない。さらに、近年の科学分析によって、高砂脊と寧郷地区は、青銅器の原料が異なるという見解もある（黎ほか 2019）。従って、在地集団の首長がそのまま成長したというよりも、中原に由来する、あるいは中原との資源交易になる集団が突発的に出現したものと考えられる。しかしながら、こうした副葬青銅器は限られた点的存在であり、従来の埋納青銅器に対する影響はそれほど大きくない。例えば、地方型青銅鼎が副葬品として存在するものの、これらが長江中流域の各地に配布されるような現象は起きていない。長江中流域内においては、中原文化に強い関連性がある湘江流域では、A1a 式甬鐘、B1 式甬鐘が分布するが、他地域では、従来から続く大型青銅鏡を中原由来の青銅甬鐘の形態に近づけつつも、在地生産・埋納していた。湘江流域では、在来の集団祭祀が残ったのである。こうした様相が大きく変わるのが、第Ⅲ段階である。

3、第Ⅲ期の様相（図 8-6）

第Ⅲ期（西周後期～春秋前期）には大型青銅鏡が消滅し、地方型青銅甬鐘 A3 式、A4 式、B2 式、B3 式、地方型青銅鼎 Ab2 式、Ab3 式、Ac2 式、C2 式が分布している。長江中流域では、集中埋納が湘潭青山橋、鐘祥花山、大悟雷家山で、墓の副葬例が資興旧市集団墓、長沙金井墓地という集団墓で見られる。

集中埋納では、湘潭青山橋では、地方型青銅鼎 Ab2 式、Ab3 式と、中原型青銅器（爵、觶、觚形尊）との共伴関係が見られる。中原型青銅器は殷後期～西周前期に相当する（袁 1982）。地方青銅鼎の形態は器深が浅く、くびれ柱足で、頸部にヨコ S 形、凹文＋夔龍文を飾る。西周後期以降に併行し、春秋前期に下るであろう。大悟雷家山では、地方型青銅甬鐘 A3 式の組み合わせと、殷後期～西周前期の中原型青銅鼎（林 1984）との共伴が見られる。こうした集中埋納は、前段階の大型青銅鏡のそれとは異なり、時期差を持つ地方型、中原型が一度に埋納されている。

湘潭青山橋の埋納、資興旧市春秋墓地は社会状況を知る良好な資料である。資興旧市春秋墓は階層化の進展を示している。副葬品なし、青銅器の副葬がない、青銅武器・工具という小型青銅器のみを副葬する、青銅容器を副葬するという 4 類に区分でき、これがおおよそ墓壇面積と対応しているからである（図 7-13）。つまり青銅器の副葬が、社会的地位の指標となっていたのである。青銅器の器種は鼎と甬鐘であり、地方型ではあるものの、西周的な階層秩序の模倣と考えられる。西周後期の礼制改革以来、列鼎制度が成立し、青銅鼎による階層に関わる厳格な規範が生じた。長江中流域では、中原のような宗族を基本にした体系ではなく、在地の威信財という形での利用が考えられる。この種の鼎は湘潭青

山橋にも存在しており、埋納と墓地の繋がりがこの段階から明確になったといえる。旧来の、共同性を示す大型青銅饒が廃れ、階層性を示す鼎や甬鐘が埋納されているという事実は、こうした階層秩序が第Ⅱ期のような点的なものにとどまらず、長江中流域の諸集団にも受け入れられつつあったことを示している。また、湘江上流域に位置する資興旧市春秋墓地の青銅鼎、青銅武器は、湘江下流域の金井墓地の出土品と類似し、湘江流域全体に秩序が広がっていた可能性もある。総じて、従来の集団指向性から、特定個人・集団への指向が高まり、青銅器に威信財的機能が出現したのである。それに伴って、埋納の青銅器文化は終焉を迎えた。

同時に、中原型青銅器を伝世する事例が長江中流域のみならず、長江下流域に位置する土墩墓文化圏の丹徒煙墩山墓、母子墩墓地、安徽屯溪墓 1 号墓、3 号墓などに見られる。

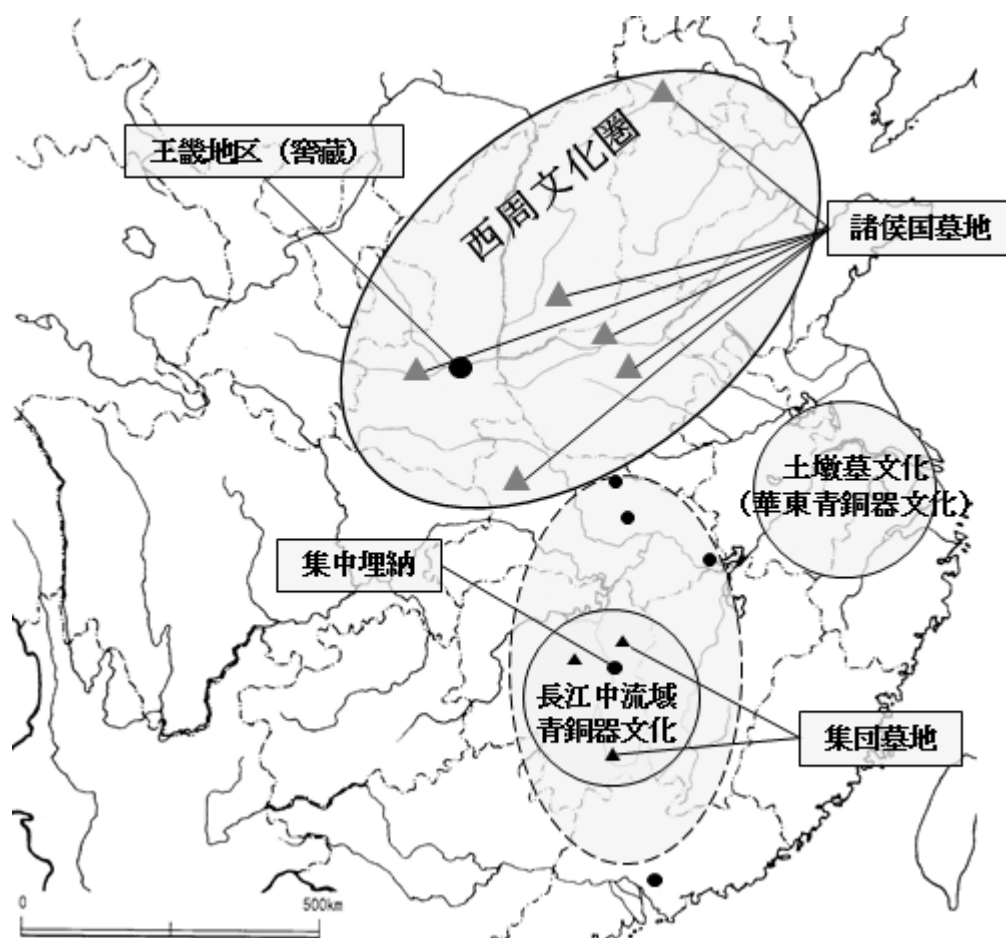


図 8-6 第Ⅲ期の様相

西周前期頃の中原型青銅器が、西周後期以降の地方型青銅器と共伴しているのである。長江下流域に関しては、中原型青銅器および地方型を主体とした青銅器副葬は特定個人墓とされ（宮本 1997）、この特定個人あるいは集団が、外部の情報及び物を管理・掌握していた可能性が推測された（村野 2005）。長江中流域に関しては、こうした特定個人墓はまだ出現していないが、上記の集中埋納がこれにあたる可能性もあろう。共同的祭祀の要素が徐々に、階層秩序の表示具へと転換していったのである。

つまり、諸部族単位を統合するリーダーが湘江流域で出現し、ランク社会に達した⁴⁸

⁴⁸ Morton H. Fried 氏が提唱した概念。階層化社会より早く位置づけられる、社会分化の段階（Fried 1967）。

のであるが、そのきっかけとして、外部（西周・長江下流域）由来の器物や情報の独占化を考えたい。ところで、中原地域では新石器時代以来、階層化が進展しており、前2千年紀の青銅器生産開始直後から、青銅器と階層性は密接に結びついていた。一方で、長江中流域では、青銅器と階層性の関連は当初は密なものではなかったが、第Ⅲ期に両者の関りが濃くなるのである。こうした流れは、中原地域よりむしろ弥生時代の武器形青銅祭器、銅鐸（寺沢 2000、吉田 2014）から、古墳時代の銅鏡副葬（辻田 2019）への変化と対比させることができよう。

4、第Ⅳ期の様相（図8-7）

第Ⅳ期（春秋中期～春秋後期前半）は地方型銅甬鐘が消失、地方型青銅鼎 B2 式、B3 式、C3 式、Da1 式新相、Da2 式、Db1 式、E1 式が分布する。C3 式の出土状況が不明である以外は、すべて墓からの副葬品である。青銅容器を出土する墓として、湘潭古塘橋春秋墓、衡

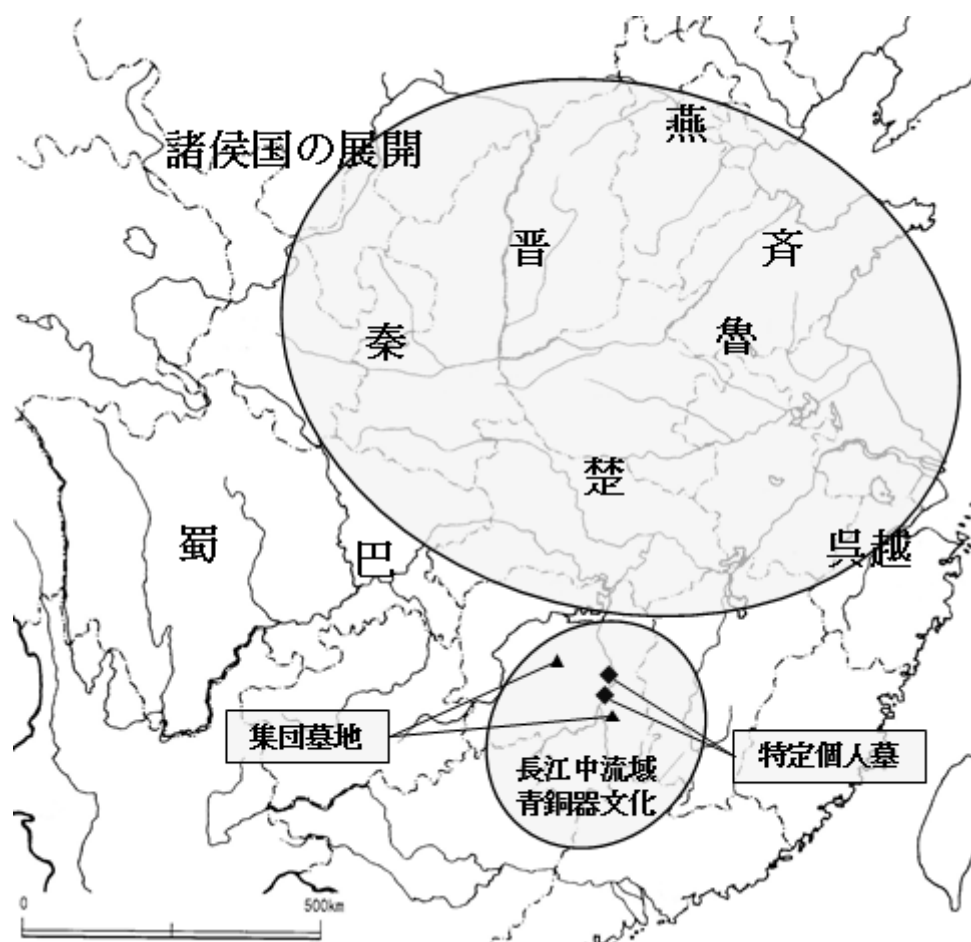


図8-7 第Ⅳ期の様相

南胡家港春秋墓という特定個人墓がこの段階に出現するが、衡陽赤石古墓群、桃江腰子畚墓地のような集団墓も存在する。特定個人墓の場合、集落、集団墓地から離れて位置し、外部からの青銅器も併存し、前段階の集中埋納と類似するので、両者の関連性が窺える。大規模な副葬への変化は、個人への指向の高まりを示すものと考えられる。

一方、集団墓である衡陽赤石古墓群、桃江腰子畚墓地の一部は、前段階の資興旧市春秋墓地に比して、青銅器と墓壙面積の相関がやや不明瞭である。これは、当該地域の墓形が狭長形を取ることや、開口部の面積が切り合いにより不明であることとも関連している。しかしながら注目できるのは、集団墓における青銅鼎の少なさであり、特定個人墓の隔絶

が明瞭である。また、青銅武器、青銅工具、砥石の副葬が見られるが、これらは、鼎や楽器などの祭祀具と一線を画す、実用具である。すなわち、本段階には、祭祀体系を示すものは殆どが特定個人墓に独占され、下位層の体系からの排除が見込まれる。特定個人墓の墓主やそれに関わる特定集団が、青銅器、特に青銅鼎のコントロールを一層強めたものと考えられる。ここにおいて、長江中流域の社会は等質性を殆ど失い、首長制社会に達したと言えるかもしれない。

5、第Ⅴ期の様相（図8-8）

第Ⅴ期（春秋後期後半～戦国前期）は地方型青銅鼎の分布範囲が収縮し、長江中流域ではDa3式、Db2式が存在する。青銅鼎が副葬されるのは、特定個人墓の湘郷何家湾1号墓、湘郷五里橋1号墓、集団墓の郴州東周墓、桃江腰子侖墓地である。郴州東周墓M5の地方

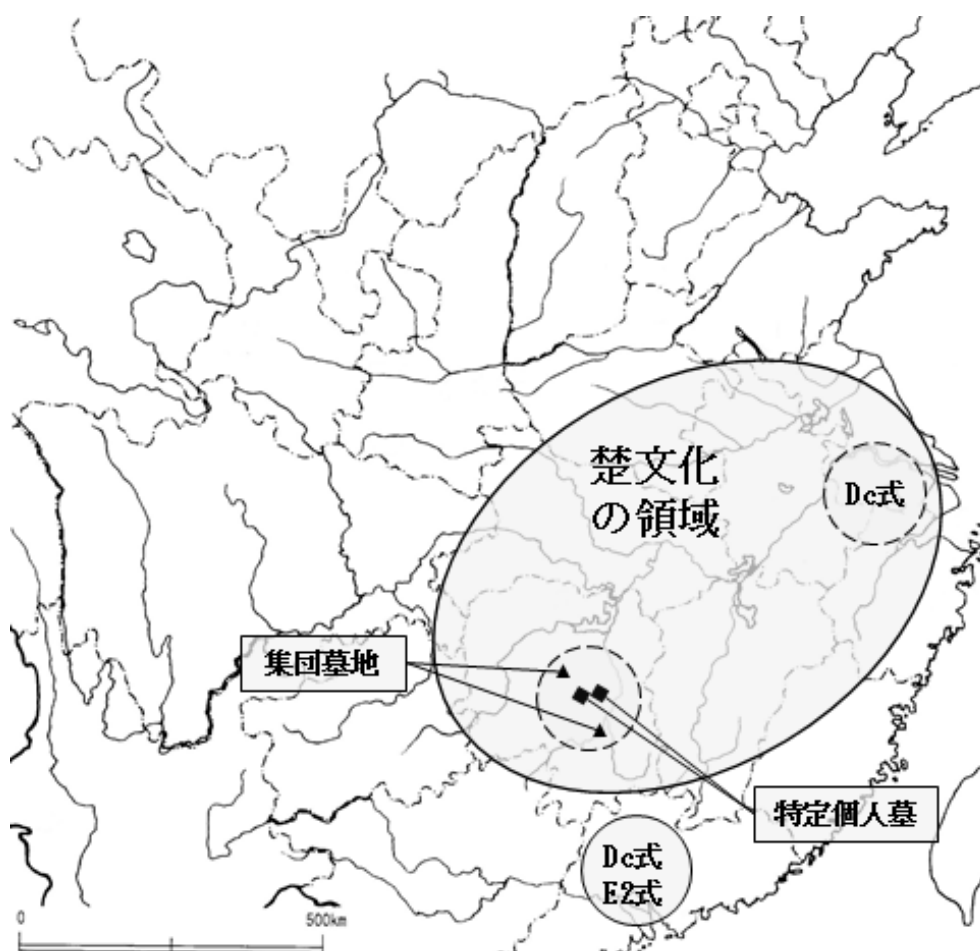


図8-8 第Ⅴ期の様相

型青銅鼎は、桃江腰子侖墓地の出土品に類似し、Db2式青銅鼎しか持たない。青銅鼎が集団墓で僅かしか見られないことは、春秋前期以来の集団墓の状況に類似する。

桃江腰子侖墓地は第Ⅴ段階まで存続するが、楚式鬲を副葬する墓が増加していく。これらの楚式鬲を副葬する墓は、地方型青銅鼎を伴わず、楚文化の湖南省地域への広がり捉えられた（益陽市博物館 2003）。一方で、湘郷五里橋1号墓、湘郷何家湾1号墓では、地方型青銅器と楚式遺物との共伴がある。これらの特定個人墓は前段階に続くものであり、湘郷五里橋1号墓、何家湾1号墓は、第Ⅳ段階の湘潭古塘橋春秋墓に相当する、在地首長墓と捉えられる。

集団墓、特定個人墓ともに、楚文化要素を取り込むが、これは、楚文化の南漸に関わる。春秋末期～戦国前期には、楚墓系文化が湘江流域へ拡大し、それに反して地方型青銅器の分布が嶺南地方に南下していく。長江中流域では、楚墓系、湘江・嶺南系という2系統の青銅器が併存している（西江 1987）。この背景としては、楚国の領域拡大に伴って、従来の長江中流域に位置する諸集団が楚国に服属したことが考えられる⁴⁹。とはいえ、青銅鼎のような在地伝統は許容されている。

第Ⅴ期に続く戦国中後期において、長沙楚墓、長沙樹木嶺戦国越人墓出土の Db2 式に後続する越式鼎は、江陵雨台山楚墓、包山楚墓などの湖北省を中心とする楚墓出土の越式鼎に類似する。これらの越式鼎は、長江中流域の Db2 式鼎と楚式鼎の融合形態であろう（袁・張 2015）。このように、楚の領域内で新しく領土化された地域における威信財として、Db2 式鼎は楚の政治秩序に編入されていったのである。

第3節 長江中流域青銅器文化の形成・展開とその社会

第2節に示したように、長江中流域における青銅器文化は、中原型および華中型青銅器の影響下に成立した。しかし、成立直後から在地生産が始まり、他地域の影響を受けつつも、自律的展開を示すことになる。本論を締めくくるにあたり、当該期における長江中流域の社会変化とその特質を、サービス氏の『未開の社会組織』の一般進化の社会のあり方（Service 1971）に比定し、中原および中国他の周辺地域社会との比較も行いながら概観したい。

長江流域で本格的に青銅器生産が開始されるのは、二里岡期に併行する段階である。しかしながら、盤龍城によって示されるように、中原の集団が鉱物資源を目的とした拠点を築いたことを背景としている。つまり、中原側が直接的に鉱物資源を獲得していた段階であり、在地集団が独自の青銅器を多く製作し、広域に流布させることは難しかった。

殷墟期になると、殷の直接的影響は縮小し、ネットワークによる銅・鉛石交易が行われるようになった（宮本 2005、黎 2020）。ここにおいて、第Ⅰ期（殷墟3期～西周中期併行）の大型青銅器は、本格的に在地生産・消費されるようになったと考えられる。青銅器の製作には、鉱石の採集から、合金・温度の調整、鑄型形成など、様々な高度な技術が要求される。そして、そうした各技術を組み合わせ、材料を集め、各集団の役割を調整し、かつ知識を長期にわたって保持しなければならない。このような状態が、長江中流域においてどのように発生したのかは、本論では論ずることは出来なかったが、新石器時代の製陶・玉器加工、ならびに盤龍城遺跡で、非鄭州系青銅器の大型化という在地生産（鈴木 2013）の伝統が継承された可能性がある。そして、こうした青銅器は、長江中流域で洞庭湖を中心として、湖南北部、湖北南部、江西北部にまとめられ、長江下流域へ拡散しつつあった。つまり、上述の技術体系が、一定程度の集団間で共有されていたことになる。こうしてみると、外見上は、長江中流域の青銅器文化は、殷のそれに類似するかのようである。しかしながら、本論で論じてきたように、これらの青銅器は、日常の生活遺跡から離れたところに、大型青銅尊・壺、大型青銅饒の諸型式が単独で埋納されたのであって、なおかつ当該期には社会の階層化が本地域では認められていない。このことこそが、本地域と中原（殷）を大きく分けるものである。中原では、殷そしてそれを遡る二里岡、二里頭期に祭祀具（彝器）が青銅で製作されたが、それは同時に身分秩序を示すものとして多く使用された（宮本 2005）。一方で、長江中流域では、こうした青銅器は集団秩序の調整という機能は同じ

⁴⁹ 「楚悼王素聞起賢、至則相楚。……於是南平百越、北并陳蔡、卻三晋、西伐秦。」（『史記』孫子吳起列伝）

であるものの、それは共同・平等性を示すものとして利用され、部族社会の段階と考えられる。前章で述べたように、このような在り方は弥生時代の銅鐸や銅鉦と比較できる（吉田 2014）。また、大型品を指向するという面でも、両者は共通するものである。あるいは、ユーラシア草原地帯におけるセイマ・トルビノ青銅器群もそうした性質を持つものである（松本 2018）。従って、長江中流域の青銅器文化は、中原以外の東ユーラシア諸地域の青銅器時代のある段階と、内容的には類似性を持っていることになる。先学では、殷との関係性や集団の流入に注目が集まり、確かに青銅器技術は、一段階遅れたものが殷から持ち込まれたのであろう。また、階層化という面では、中原の「周辺」という位置づけも可能かもしれない。しかしながら、諸技術を受け入れた長江中流域の諸集団は、他地域において青銅器時代として評価可能な段階に、確かに達していたことが知られるのである。

中原の集団が、資源等を求めて長江流域に拠点を作ることは、先述の盤龍城によって知られている。西周期以降は、昭王による長江中流域への進出が知られている（佐藤 2016）。一方で、この段階の長江流域には既に在地の青銅器文化が育っており、西周による直接的な鉱物採取よりも、在地集団を何らかの形で介した形で資源入手が見込まれる。こうした中で形成されたのが、第Ⅱ期（西周前期～中期併行）の青銅器厚葬墓であり、中原など長江中流域以外の集団を中心として形成された可能性がある。特に炭河里遺跡は、当該流域では稀な城址が発見され、様々な外来要素を含んでいる点で特異である。さらに、こうした青銅器墓が中原型青銅器を含みつつ、在地的な大型青銅鏡は持たない点も、外部由来を考えさせる。さらに、青銅鏡・甬鐘の分布差によって、湘江流域の在地集団のみが A1a 式甬鐘を持つ。甬鐘への転換について、西周文化と一定の関係を持つ一方、その他の地域では、前段階に引き続き諸集団の共同性を指向していた埋納伝統が維持された。このように、長江中流域内の一部で、リーダーを抱く階層構造を持つ集団が分散的に出現したのである。中原の事例からも分かるように、階層化が一定程度進展した社会の上層部にとって、青銅器は、原材料あるいは製品、生産組織をコントロール可能な面で、社会関係を掌握していくための、極めて便利な道具であった。青銅器のこのような側面を、長江中流域の在来集団が次の段階に利用するようになる背景として、第Ⅱ期の青銅器墓の影響があるのかもしれない。

第Ⅲ期（西周後期～春秋前期併行）には大型青銅鏡が廃れて、地方型青銅甬鐘や鼎が青銅器の中心を占めている。これは、当該地域における極めて大きな変化と言える。鼎・甬鐘という器種は、西周後期の礼制改革による列鼎制度という「礼」、編鐘という「楽」をはじめとする秩序（角道 2014、楊 2019、宮本 2020）の影響であるといえる。西周の影響が、分散的拠点のみならず、在来集団全体に及んだのがこの時期なのである。西周後期には諸侯の勢力が目立ち始め、長江中流域に礼制の情報をもたらしたのは、各諸侯であったのかもしれない。同時に注目できるのが、集団墓における階層化の進展であり、青銅器を基にした階層秩序の形成が窺える。同時期には、青銅甬鐘や鼎を含む集中埋納が存在し、青銅器への支配を強めたリーダーによるものと筆者は考えた。比較的安定した数量の青銅器がコントロールされていたものと考えられる。そして、この支配をさらに強化したものが、第Ⅳ期（春秋中期～後期前半）の特定個人墓である。なお、同時期の長江下流域における土墩墓文化圏でも、中原型青銅器および地方型を主体とした青銅器を副葬する特定個人墓が見られ（宮本 1997）、長江中流域よりも若干早い出現といえる。そして、長江中流域でも第Ⅳ段階に、隔絶した特定個人墓、集団墓における青銅容器/武器（工具類）の有無といった、階層指標が明確化する。いわば、首長制社会を基盤として階層化がさらに発達し、ピラミッド型の秩序が体系化されたのである。

ところで、第Ⅱ期から始まる変化のきっかけは、外部由来の拠点的青銅器墓や、西周に

由来する青銅甬鐘や鼎とその体系であった。本論で示してきた、長江中流域の在来集団の動向では、確かに内的階層化プロセスが迫れるわけであるが、鐃・甬鐘から鼎への変化などは唐突であり、その起爆剤としては、外部のかなりの影響を考慮しないわけにはいかない。こうしたあり方は、銅鐃・武器形祭器が破碎、埋納され、それに替わるように銅鏡を副葬するようになる弥生～古墳時代への変化（辻田 2019）と対比できるように思われる。列島の当該時代の変化も、北部九州から近畿へという対外窓口の転換が関与しているらしい。こうしてみると、影響力の強い地域との交渉の在り方で、社会変化が進んでいく点では、列島も長江中流域も類似するといえるのかもしれない。一方でこうした、階層指標としての青銅器をあまり発達させなかったのが、ユーラシア草原地帯であり、実用利器としての性格を強めていったのである（松本 2018）。

さらに第Ⅴ期である春秋後期後半～戦国前期には、地方型青銅鼎の展開に伴い、特定個人墓、集団墓地のいずれにおいても楚文化要素の受容が認められる。これは楚文化が湖北方面から湘江地区へと拡大しつつ（西江 1987）、ひいては楚国の支配拡大と捉えられる。一方で、地方型青銅鼎の伝統が弱まりつつも保持され、楚国による文化伝統の許容が窺われる。つまり、長江中流域の第Ⅳ期のピラミッド型の階層構造が、楚国におけるより大きな秩序下に組み込まれたと考えるのである。これに関しては、楚の新興勢力あるいは新貴族（袁 2015）の上昇志向によって、権力機構の再編にみられる族的な団結や再生産を示しており、旧来の社会システムが採用されていたこと（宮本 2020）に対して、長江中流域に対する間接的支配が行われた可能性が高い。楚国から流れ込む青銅礼器は、従来の越式鼎とともに、伝統の支配層に融合する。さらに武器等を副葬する新たな価値づけが生み出された。やがて楚は秦に併合され、ここに地方型青銅器文化は終焉を迎える。

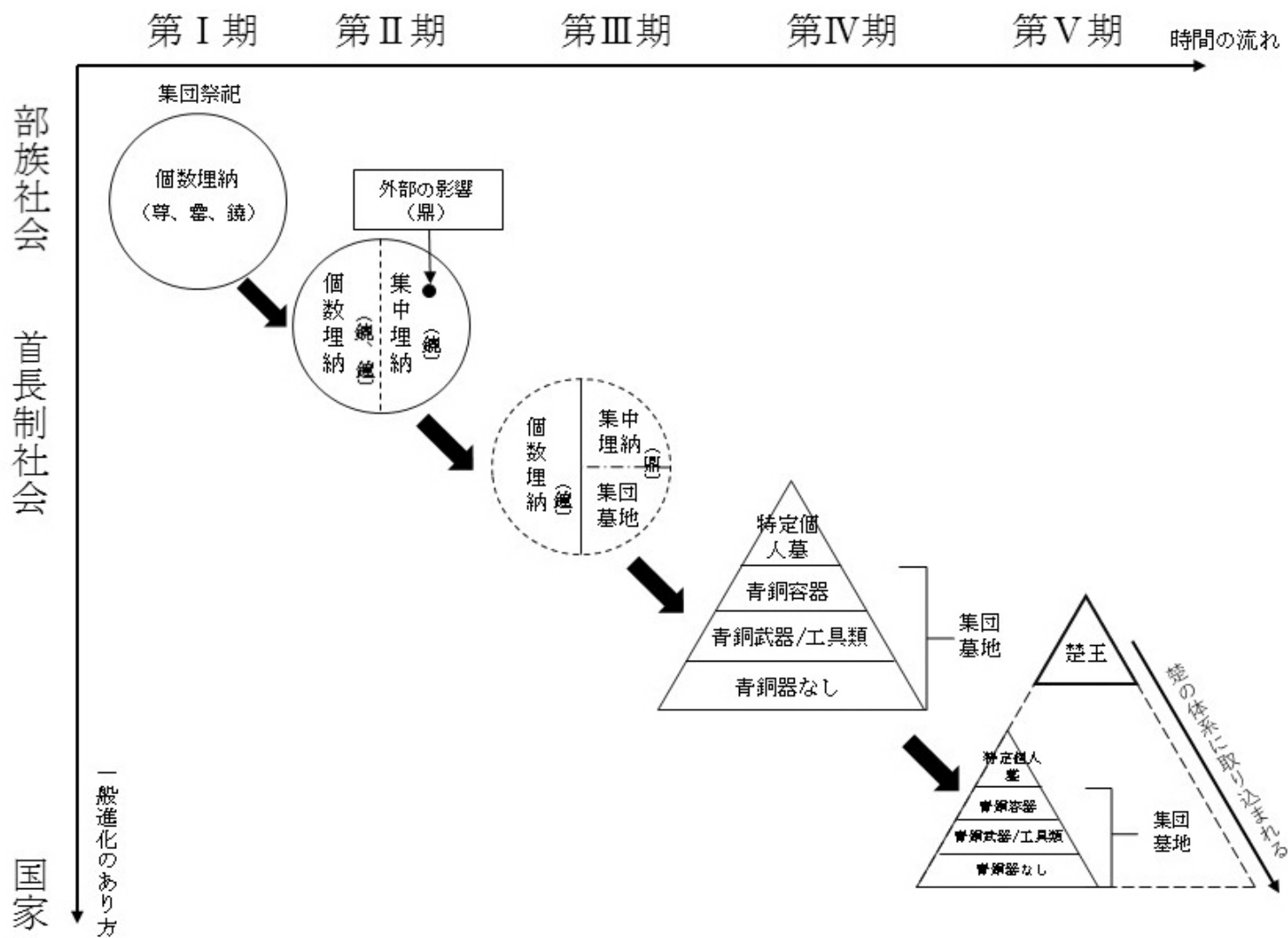


図 8-9 殷周時代における長江中流域の社会変化

結 語

本章では、第2章から第6章で行った個別研究の結果に基づき、長江中流域の青銅器文化の展開について纏め、より一般化する。以下、本論で行ってきた検討および考察の内容について要約し、結びとしたい。

第1章では、長江中流域の青銅器、および長江中流域の文化様相に関する研究を整理するとともに、本論で使用方法を提示した。型式学の方法論的問題点を示した他、先学では、長江中流域の社会様相の変化も、単純に中原青銅器文化の影響によるという説明になる場合が多いこと、そして、長江下流域独自の変化を、幅広い器種で認識する必要性を指摘した。

第2章では、青銅尊、壺の型式学分析、分布を行い、中原青銅尊、壺と比較した。結果、当該地域の青銅尊、壺について、殷墟3期併行から本格的在地生産が始まり、形態上の在地色が次第に強まることが明らかになった。この時期の青銅器がいわゆる華中型青銅器（難波 1998）である。また、当該地域の青銅尊、壺の型式・機能・出土状況は共通性を持ち、ここから中原青銅器文化とは異なる生産、消費集団が示される。在地集団が大型青銅尊、壺によって、同様の埋納形態で集団祭祀を行ったのである。また、殷墟4期併行（第Ⅲ期）以後は流通が次第に低下し、各地域社会が自らのあり方に適応しつつ各要素を選択し、長江中流域青銅器文化が開始されたものと考えられる。

第3章では、殷周時代の青銅鏡を対象に、その器形、文様に基づく系譜関係を明らかにし、青銅鏡の展開過程を検討した。その結果、まず、殷墟4期に出現する長江中流域の大型青銅鏡は、形態では殷墟文化の小型青銅鏡の系譜を引き、文様では華中型饕餮文様に関連する。つまり、長江中流域では、中原の小型青銅鏡という外部要素は、青銅尊、壺という華中型青銅器の在地要素を融合しつつ、地方型青銅器文化をさらに展開させたのである。この点では青銅鏡は青銅尊、壺と共通した展開を見せている。その後、大型青銅鏡の枚部が発達し、西周文化の青銅甬鐘との類似性が次第に高まり、青銅甬鐘に置き換わっていく様相が看取された。

第4章では、地方型青銅甬鐘の出現、展開を検討した。長江中流域は、中原からの強い影響を受けつつ、甬鐘を独自生産し始めた。それらは機能的には従来の大型青銅鏡と同様であり、在地での埋納による消費が続くが、同時期の大型青銅鏡がさらに広い範囲に分布し、長江中流域内でも、中原との関係によって地域差が生まれる。西周後期併行には、異なる系統であるA型、B型甬鐘の流通差が明瞭となる。同時期には、大型青銅鏡の消失（向 2008）や、地方型青銅鼎の副葬品としての利用（村野 2005）が先学で指摘されており、何らかの関りが考えられる。

第5章では、地方型青銅鼎の展開を検討した。殷末周初期～西周後期併行では、中原型青銅鼎が長江中流域に搬入され、在地生産が開始された。西周後期併行～春秋前期では、長江中下流域の地域ごとに地方型青銅鼎が定着し、春秋中期には、長江下流域が長江中流域に強い影響を与えた。さらに春秋後期後半～戦国前期頃の長江中流域（湘江流域）では、楚系青銅器の存在や、地域色希薄化が認められ、戦国中期以降には楚国に組み込まれていくことが看取される。

第6章では、第2章から第5章までの個別の検討をまとめ、各型式の青銅器の編年を統合し、長江中流域の青銅器文化全体を五期区分した。また、地方型青銅器文化やその出土状況の変遷に基づき、当該地域の青銅器の扱われ方を検討したうえで、当該地域の青銅器文化が自律性を保ち、内的階層化が進展する様相を指摘した。

第7章では、以上のような議論をもとに、中原や他地域の影響を参照しつつ、長江中流

域青銅器文化の展開および社会の具体像についての考察を行った。長江中流域では、殷墟文化との交流の下、地方型青銅器文化が成立したが、当初、青銅器は共同体の集団祭祀を示すものとして利用された。西周前中期、王朝が長江中流域に対して政治的支配を示す（「昭王の南征」）が、長江中流域の殆どの地域は、引き続き集団の共同性を指向していた。一方で、湘江流域に代表されるような、首長による階層構造を有する集団が分散的に出現した。西周後期～春秋前期には、中原の影響を強く受けつつ、地域全体で、青銅器を基にした階層秩序が形成された。これがピラミッド状のより発達した階層構造として確立するのが春秋中期～後期前半である。そして、春秋後期後半～戦国前期には、ピラミッド型の階層構造が、楚国におけるより大きな秩序の下に組み込まれた。

長江中流域には銅鉱があり、鉱物を提供する資源供給地として、中原文化に結びついてきた。殷墟社会が青銅器生産拡大のため、製作技術と引き換えに、ネットワーク（宮本 2005）を通じて、長江中流域に資源を求めたことが推定できる。西周王朝では、王権強化や銅資源確保のため、長江中流域の銅鉱物を獲得する目的で（佐藤 2016）、外征の必要性があった（宮本 2020）。さらに、春秋中期には儀礼の再編（佐藤 2016、宮本 2020）が行われた。文献史学によれば、この時期には諸侯間の戦争が常態化しており（渡辺 2019）、「鼎の軽重を問う」のように、楚荘王が周王と並び立ち（丸橋 2020）、諸王間の競合関係が顕著化した（渡辺 2019）。この時期の長江中流域では根強い伝統が存在していたが、外部からの情報・モノなどが特定の集団に管理・掌握されはじめ、集団の組織化、統合化が導かれた（村野 2005）。

一方で村野氏は、地方型青銅鼎の展開によって、湘江流域の社会が西周前期～中期には複雑化しているものの、西周後期～春秋前期にかけて、単純化していくことを指摘した（村野 2005）。しかしながら、本論では、長江中流域の社会を、地域間関係に基づく自律的な展開によって、単純社会から複雑社会へ移行する 1 つのあり方として捉えた。このような差が生じた原因は、当該地域において埋納品として扱われた地方型青銅器と関連し、湘江流域に位置する高砂脊遺跡、寧郷炭河里遺跡の評価も関係している。こうした細部における解釈の齟齬に関しては、その解決を将来の課題とする他ない。しかしながら、長江中流域の社会が、外部との相互作用の中で、内的階層化が進展したという、本論の根幹については、村野氏の解釈と矛盾することはない。本論の成果は、殷代から戦国までの長期間に関して、外部の影響の詳細を明らかにしつつ、本地域の発展を一般進化のあり方（Service 1971）の指標で評価した点にあるのである。

当該地域では、地方型青銅彝器がその機能を変化させていることがわかる。日常生活の場所から隔絶したところで、神々を象徴する祭祀具（大型青銅尊・罍）から、祭祀活動に伴う音楽機能を有する楽器（大型青銅鐃・甬鐘）に変化し、さらに、副葬品へと変化したのである。前者の変化は、共同体の神を象徴するモニュメントのようなものから、次第に祭祀の場の活動に結びつく祭祀具への変化であり、そうした祭祀活動を司るリーダーが、集団祭祀の中で逸脱し、威信財を通じて、個人身分を強調していく。このように、青銅器を通じた祭祀活動の継続と、青銅器の機能変化が、当該地域の階層化と密接に関わっていたのである。

したがって、本論の学史的意義は、以下の 2 点にまとめられる。一つは、殷周時代の地方型青銅器の型式間関係、中原型青銅器との併行関係を示し、地方型青銅器全体の型式変遷の詳細を明らかにした点である。長江中流域は、中原地域一周辺地域という体系から、次第に秦漢帝国の政治的領域に取り込まれた地域として知られる。本論では、地方型青銅器の検討から、長江中流域と他地域の関係の詳細を明らかにし、それが長江中流域文化自体の自律性を示した。中原王朝の意図を超えたところで青銅彝器は異なる人間集団を結び

つき、中華文明の多元一体化の形成を反映する。もう一つは、こうした社会変化が、新進主義的枠組みにおける諸段階に対応することを示したことである。前国家段階において、青銅器のような希少資源を所有する不平等から、次第に機能変化によって、威信財を媒介として、徐々に階層化が進展し、最後には楚・秦の体系に至るのである。本論で取り上げた考古学現象に基づく解釈は、人類学における社会変化モデルに対しても一定の寄与が期待されよう。

一方、本論は主に長江中流域の地方型青銅彝器について検討を行ってきたが、地方型青銅器文化の展開、および社会変化という問題を論じる上では、青銅武器、青銅農具などの検討が欠かせない。特に青銅農具には、華中地域の特色が強く現れており（林 1995）、鉱石採掘を含む生業活動に密接に関係するものである。また、社会分化による他の威信財として玉器類の検討を行う必要があるだろう。さらに、青銅彝器の生産のあり方も課題として残る。長江中流域では鑄造工房、鑄型は未発見であるものの、製品の范線等の鑄造痕跡の詳細な観察や、科学的分析を活用する方向が考えられる。また、殷周時代の地方型青銅彝器は、中原以外の中国周辺地域などと密接な結びつきを有するものであり、さらマクロな視点からみると、東アジアの各地域の青銅器時代の様相と比較検討することが重要な課題であろう。

図出典

- 図 1-1 自然資源部 2020 より転載 筆者加筆
図 1-2 内山 2001 より転載 筆者改変
図 1-3 筆者作成
図 2-1 中国科学院 1985 より転載 筆者加筆
図 2-2 筆者作成
図 3-1 筆者作成
図 3-2 筆者作成
図 3-3 西北大学文博学院編 2006 1 : p4 図五、2 : p58 図五六
図 3-4 筆者作成
図 3-5 筆者作成
図 3-6 筆者作成
図 3-7 筆者作成
図 3-8 筆者作成
図 3-9 尊 1 式：中国青銅器全集編集委員会編 1996 p115 尊 2 式：西北大学文博学院編 2006 p78 図七五 尊 3 式：湖南省博物館 1983 p38 尊 4 式：湖南省博物館 1983 p17
図 3-10 筆者作成
図 3-11 筆者作成
図 3-12 筆者作成
図 3-13 筆者作成
図 3-14 罍 1 式古相：西北大学文博学院編 2006 図版 18 罍 (1980CHLTT:1) 罍 1 式新相：中国青銅器全集編集委員会編 1998 p94 罍 2 式：中国青銅器全集編集委員会編 1998 p91 罍 3 式：中国青銅器全集編集委員会編 1998 p92
図 3-15 筆者作成
図 3-16 筆者作成
図 3-17 筆者作成
図 3-18 筆者作成
図 3-19 筆者作成
図 3-20 筆者作成
図 3-21 筆者作成
図 3-22 夔龍文：陳 2013 p94 鳳鳥文：陳 2013 p103 蕉葉文：陳 2013 p134
図 3-23 虎食人卣：中国青銅器全集編集委員会編 1998 p148 鴉卣：中国青銅器全集編集委員会編 1998 p152 象尊：中国青銅器全集編集委員会編 1998 p127 牛尊：中国青銅器全集編集委員会編 1998 p85 豕尊：中国青銅器全集編集委員会編 1998 p132
図 3-24 第Ⅱ期に併行する中原型青銅尊：左：中国青銅器全集編集委員会編 1997 p96 右：中国青銅器全集編集委員会編 1997 p100 觚形尊：中国青銅器全集編集委員会編 1997 p107 西周時代の有肩尊：林 1984 より転載
図 3-25 筆者作成
図 3-26 平江浯口罍：蘇・李 2017 p49 図 15.3 ほぞ接ぎ（榫卯構造）：劉 2018 p83 図三
図 3-27 内田 2010 より転載 p53 図 5 筆者加筆
図 3-28 筆者作成
図 3-29 筆者作成
図 4-1 林 1984 より転載 p92 筆者改変

- 図 4-2 筆者作成
- 図 4-3 筆者作成
- 図 4-4 筆者作成
- 図 4-5 筆者作成
- 図 4-6 1: 中国社会科学考古学研究所 1980 p101 2: 李純一 1996 p114 3: 中国社会科学考古学研究所 2005 p308 4: 河南省文物考古研究所 200 p123 5: 河南省文物考古研究所 2000 p125
- 図 4-7 1: 李純一 1996 p127 2: 炭河里遺跡管理处、寧郷県文物管理局、湖南大学岳麓書院 2014 p38 3: 林巳奈夫 1981 p23 4: 江西省文物考古学研究所 1997 p89 5: 江西省文物考古学研究所 1997 p83 6: 江西省文物考古学研究所 1997 p85 7: 中国音楽文物大系総編集部 1997 p16 8: 中国音楽文物大系総編集部 2006 p12 9: 中国音楽文物大系総編集部 2006 p38 10: 林巳奈夫 1981 p23 11: 中国音楽文物大系総編集部 2006 p41 12: 中国音楽文物大系総編集部 2006 p40
- 図 4-8 筆者作成
- 図 4-9 筆者作成
- 図 4-10 筆者作成
- 図 4-11 筆者作成
- 図 4-12 筆者作成
- 図 4-13 筆者作成
- 図 4-14 筆者作成
- 図 4-15 難波 1998 より転載 p4、p18 筆者改変
- 図 4-16 難波 1998 より転載 p21 図 4-3
- 図 5-1 図 4-1 に参照 筆者改変
- 図 5-2 筆者作成
- 図 5-3 筆者作成
- 図 5-4 筆者作成
- 図 5-5 1 (A1a 式): 中国音楽文物大系総編集部編 2006 p70 2 (A1b 式): 中国音楽文物大系総編集部編 2006 p80 3 (A2 式): 中国音楽文物大系総編集部編 2006 p72 4 (A3 式): 中国音楽文物大系総編集部編 1999 p21 5 (A4 式): 中国音楽文物大系総編集部編 1999 p16
- 図 5-6 1 (B1 式): 袁 1982 図版玖 No. 6 2 (B2 式): 高 1984b 図版捌 No. 1 3 (B3 式): 中国音楽文物大系総編集部編 1999 p26
- 図 5-7 筆者作成
- 図 5-8 筆者作成
- 図 5-9 筆者作成
- 図 5-10 筆者作成
- 図 5-11 筆者作成
- 図 5-12 筆者作成
- 図 5-13 筆者作成
- 図 5-14 筆者作成
- 図 5-15 宮本 2020 より転載 p197 図 108
- 図 5-16 側鼓部の鳥文: 中国音楽文物大系総編集部編 1999 より転載 p67、p68、p75 銘文の拓本: 中国音楽文物大系総編集部編 1999 より転載 p57、p54、p64
- 図 5-17 筆者作成
- 図 5-18 筆者作成
- 図 6-1 ①: 中国社会科学院考古研究所 1980 ②: 湖南省文物考古研究所 2001 p38 図一三

—1 ③:青陽県文物管理所 1998 p21 図五—9 ④:湖南省文物考古研究所 2001 p40 図一五—1 ⑤:周亜 1997 p65 図十一 A ⑥:李朝遠 1997 p33 図四—A ⑦:湖南省文物考古研究所 2001 p40 図一五—2 ⑧:湖南省文物考古研究所 2001 p41 図一六—1 ⑨:湖南省博物館 1978 図版肆 No. 1 ⑩:益陽市文物管理处 2003 p528 図一九—1 ⑪:鎮江市博物館ほか 1980 p3 図一—2 ⑫:蘇州博物館考古組 1980 p18 図一—1

図 6—2 Aa 型:図 6—1 の④に参照 Ab 型:図 6—1 の⑦に参照 Ac 型:図 6—1 の⑧に参照 B 型:図 6—1 の⑤に参照 C 型:図 6—1 の⑪に参照 Da 型:図 6—1 の⑥に参照 Db 型:図 6—1 の⑩に参照 Dc 式:図 6—1 の⑫に参照 E 型:図 6—1 の⑨に参照

図 6—3 筆者作成

図 6—4 獣面文(上) 蟬文(下):湖南省文物考古研究所 2001 p39 図一四—1 曲折文:湖南省博物館ほか 1982 p27 図三を改変 S 形龍文:雷 1999 p126 図一—2 櫛文:湖南省博物館ほか 1982 p27 図三を改変 ヨコ S 形文:宋 1991 p136 図三—7 囧文+井文:湖南省文物考古研究所 2001 p39 図一四—8 囧文+龍文:湖南省博物館ほか 1982 p27 図三を改変

図 6—5 筆者作成

図 6—6 Ac1 式:湖南省文物考古研究所 2001 p41 図一六—1 Ac2 式:向 2008 p263 図七二—1 Ac3 式:広東省文物考古研究所ほか 2000 p41 図一四

図 6—7 筆者作成

図 6—8 足部の断面形:村野 2005 p163 図 16 を転載 足部の平面形:筆者作成 瞳有り龍文:変形龍文:雲文:宋 1991 p136 図三—3 格子文:宋 1991 p136 図三—5

図 6—9 筆者作成

図 6—10 耳部形態・文様・装飾:長方形有文:益陽市文物管理处 2003 p527 図一八—1 長方形有文、装飾:益陽市文物管理处 2003 p527 図一八—2 胴部文様:変体雷文:益陽市文物管理处 2003 p527 図一八—7 波浪文(中間凸線文):益陽市文物管理处 2003 p527 図一八—4

図 6—11 Da1 式古相:李朝遠 1997 p33 図四—A Da1 式新相:村野 2005 Da2 式:益陽市文物管理处 2003 p528 図一九—6 Da3 式:益陽市文物管理处 2003 p528 図一九—12

図 6—12 Db1 式:益陽市文物管理处 2003 p528 図一九—1 Db2 式:益陽市文物管理处 2003 p528 図一九—14

図 6—13 筆者作成

図 6—14 筆者作成

図 6—15 筆者作成

図 6—16 筆者作成

図 6—17 筆者作成

図 6—18 筆者作成

図 6—19 筆者作成

図 6—20 筆者作成

図 6—21 筆者作成

図 6—22 筆者作成

図 6—23 筆者作成

図 7—1 筆者作成

図 7—2 図 3—23 に参照

図 7—3 筆者作成

図 7—4 筆者作成

- 図 7-5 筆者作成
 図 7-6 筆者作成
 図 7-7 袁 1982 図版捌、図版玖
 図 7-8 熊・劉 1980 p95 図一、p96 図三
 図 7-9 筆者作成
 図 7-10 筆者作成
 図 7-11 左:湖南省文物考古研究所 2001 p30 図四 右:湖南省文物考古研究所 2001 p31 図五
 図 7-12 左:湖南省文物考古研究所 2006 p31 図五四 右:湖南省文物考古研究所 2006 p32 図五五
 図 7-13 筆者作成
 図 7-14 筆者作成
 図 7-15 筆者作成
 図 7-16 筆者作成
 図 7-17 益陽文物管理处 2003 p513 図二 筆者を改変
 図 7-18 筆者作成
 図 7-19 左上:湖南省博物館 1978 p299 図四 右上:湖南省博物館 1978 p297 図一 左下:湘郷県博物館 1987 p40 図一 右下:湘郷県博物館 1987 p43 図五
 図 7-20 何家湾 1 号墓の一括遺物:向 2008 p180 図五六 五里橋 1 号墓の一括遺物:向 2008 p179 図五五
 図 8-1 筆者作成
 図 8-2 筆者作成
 図 8-3 筆者作成
 図 8-4 筆者作成
 図 8-5 筆者作成
 図 8-6 筆者作成
 図 8-7 筆者作成
 図 8-8 筆者作成
 図 8-9 筆者作成

表出典

- 表 2-1 中国科学院 1985 より転載 筆者翻訳
 表 3-1 筆者作成
 表 3-2 筆者作成
 表 3-3 筆者作成
 表 3-4 筆者作成
 表 3-5 筆者作成
 表 4-1 筆者作成
 表 4-2 筆者作成
 表 4-3 筆者作成
 表 4-4 筆者作成
 表 4-5 筆者作成
 表 4-6 筆者作成

表 4-7 筆者作成
表 5-1 筆者作成
表 5-2 筆者作成
表 5-3 筆者作成
表 6-1 筆者作成
表 6-2 筆者作成
表 6-3 筆者作成
表 6-4 筆者作成
表 6-5 筆者作成
表 6-6 筆者作成
表 6-7 筆者作成
表 7-1 筆者作成
表 7-2 筆者作成
表 7-3 筆者作成
表 7-4 筆者作成

参考文献

英語（アルファベット順）

- Bernhard Karlgren, 1952 Some New Bronzes in the Museum of Far Eastern Antiquities, *The Museum of Far Eastern Antiquities (Östasiatiska Samlingarna) Stockholm Bulletin N:o 24*
- Bernhard Karlgren, 1968 Some Sacrifices in Chou China, *The Museum of Far Eastern Antiquities (Östasiatiska museet) Stockholm Bulletin No. 40*
- David H. Thomas, 1979 *Archaeology*, New York: Holt, Rinehart and Winston
- David L. Clarke, 1978 *Analytical archaeology second edition*, London: Methuen
- Elman R. Service, 1962 *Primitive social organization: an evolutionary perspective*, New York: Random House
- Friedman, J. and Rowlands, M. (ed) 1977 *The evolution of social systems*, Random House
- Gordon Childe, 1930 *The Bronze Age*, London: Cambridge University Press
- Lewis H. Morgan, 1964 *Ancient society*, Cambridge Mass.: Belknap Press of Harvard University Press
- Kwang-Chih Chang, 1977 *The Archaeology of Ancient China*, New Haven and London: Yale University Press
- Lewis R. Binford, 1983 *In pursuit of the past : decoding the archaeological record*, New York: Thames and Hudson
- Max Loehr, 1953 The Bronze Styles of the Anyang Period. *Archives of the Chinese Art Society of America Vol. 7*
- Morton H. Fried, 1967 *The Evolution of Political Society: An Essay in Political Anthropology*, Random House
- Robert Bagley, 1987 *Shang Ritual Bronzes in the Arthur M. Sackler Collections*. Washington, D.C.: Arthur M. Sackler Foundation
- Robert Bagley, 2008 *Max Loehr and the study of Chinese bronzes: style and classification in the history of art*, Ithaca, N.Y.: East Asia Program, Cornell

University

Rowan K. Flad, Pochan Chen 2013 *Ancient Central China : centers and peripheries along the Yangzi River*, Cambridge : Cambridge University Press

Virginia. C. Kane, 1974 The Independent Bronze Industries in the South of China Contemporary with the Shang and Western Chou Dynasties. *Archives of Asian Art Vol. 28*

日本語（五十音順）

- E. R. サーヴィス著、松園万亀雄訳 1979 『未開の社会組織：進化論的考察』、弘文堂
- L. H. モルガン著、青山道夫訳 1958 『古代社会 上巻』、岩波書店
- L. H. モルガン著、青山道夫訳 1961 『古代社会 下巻』、岩波書店
- V. G. チャイルド著、近藤義郎・木村紀子訳 1969 『考古学とは何か』、岩波書店
- 明石茂生 2002 「国家の形成：空間的視点からの考察」『成城大学経済研究』第 156 号
- 浅原達郎 1985 「蜀兵探原—二里岡インパクトと周・蜀・楚—」『古史春秋』第 2 号
- 飯島武次 2003 『中国考古学概論』、同成社
- 石橋茂登 2011 「銅鐸・武器形青銅器の埋納状態に関する一考察」『千葉大学人文社会科学研究』第 22 号
- 岩永省三 1989 「土器から見た弥生時代社会の動態—北部九州地方の後期を中心として—」『横山浩一先生退官記念論文集 1 生産と流通の考古学』、横山浩一先生退官記念事業会
- 岩永省三 1998 「青銅祭祀とその終焉」『日本の信仰遺跡』、雄山閣
- 伊藤道治 1987 『中国古代国家の支配構造：西周封建制度と金文』、中央公論社
- 今村佳子 2010 「中国先史時代の動物意匠」『中国考古学』第 10 号
- 植木武 1996 『国家の形成：人類学・考古学からのアプローチ』、三一書房
- 内田純子 2010 「商周青銅器の紋様・装飾研究」『中国考古学』第 10 号
- 内山幸久編著 2001 『長江流域』、大明堂
- 梅原末治 1940 「古銅器形態の考古学的研究」『東方文化研究所研究報告』第 15 号
- 岡村秀典 1986 「呉越以前の青銅器」『古史春秋』第 3 号
- 岡村秀典 2005 『中国古代王権と祭祀』、学生社
- 岡村秀典 2006a 「殷周青銅器と儀礼」『古代アジアの青銅器文化と社会：起源・年代・系譜・流通・儀礼』、国立歴史民俗博物館
- 岡村秀典 2006b 「礼制から見た国家の成立」田中良之・川本芳昭編『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ』、すいれん舎
- 岡村秀典 2008 『中国文明農業と礼制の考古学』、京都大学学術出版会
- 小澤正人 2005 「東周時代青銅礼器の地域性とその背景」『中国考古学』第 5 号
- 小澤正人 2010 「西周時代後期における青銅礼器の副葬についての一考察」菊池徹夫編『比較考古学の新地平』、同成社
- 小澤正人・谷豊信・西江清高 1999 『中国の考古学』、同成社
- 角道亮介 2010 「西周時代関中平原における青銅彝器分布の変化」『中国考古学』第 10 号
- 角道亮介 2014 『西周王朝とその青銅器』、六一書房
- 鞍掛昭二・小桜秀爾・廣中宏雄・山田輝子・若林延昌 2001 『音楽の基礎—音楽理解ははじめの一步』、音楽之友社
- 甲元眞之 1992 「長江と黄河」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集
- 甲元眞之 2006a 「殷周青銅器文化の拡大」『古代アジアの青銅器文化と社会：起源・年代・系譜・流通・儀礼』、国立歴史民俗博物館
- 甲元眞之 2006b 『東北アジアの青銅器文化と社会』、同成社

- 甲元眞之 2009『東アジア先史学・考古学論究』、慶友社
- 小杉一雄 1959『中国文様史の研究—殷周時代爬虫文様展開の系譜』、新樹社
- 小南一郎 2005「西周王朝の成周経営」小南一郎編『中国文明の形成』、朋友書店
- 佐藤信弥 2016『周一理想化された古代王朝』、中央公論新社
- 佐野和美 2004「中国における初見期の銅器・青銅器」『中国考古学』第4号
- 近藤義郎・横山浩一・甘粕健・加藤晋平・佐原眞・田中琢・戸沢充則編 1985『岩波講座 日本考古学<1> 研究の方法』、岩波書店
- 近藤義郎・横山浩一・甘粕健・加藤晋平・佐原眞・田中琢・戸沢充則編 1991『岩波講座 日本考古学<4> 集落と祭祀』、岩波書店
- 秦小麗 2005「中国初期国家形成期の長江中流域地区—土器からみた地域関係分析」小南一郎編『中国文明の形成』、朋友書店
- 末房由美子 1995「江西新干大洋洲出土の青銅方鼎の装飾意匠について」『論集』第36号、青山学院大学
- 末房由美子 1999「江西新干大洋洲出土の臥虎大方鼎に就いて」『日本中国考古学会会報』第9号
- 杉原荘介 1972『日本青銅器の研究』、中央公論美術出版
- 鈴木舞 2013「湖北盤龍城遺跡における青銅礼器の生産—青銅爵・鼎・罍を中心に—」『中国考古学』第13号
- 鈴木舞 2017『殷代青銅器の生産体制』、六一書房
- ジャン・ル・ロン・ダランベール著、片山千佳子・安川智子・関本菜穂子訳 2012『ラモー氏の原理に基づく音楽理論と実践の基礎』、春秋社
- 田中琢 1983「方格規矩四神系倭鏡分類試論」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立三十周年記念論文集、同朋舎
- 田中良之 1982「磨消縄文土器伝播のプロセス—中九州を中心として」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』、森貞次郎博士古稀記念古文化論文集刊行会
- 田中良之・松永幸男 1984「広域土器分布圏の諸相—縄文時代後期西日本における類似様式の並立—」『古文化談叢』第14集
- 譚永超 2020「殷周時代における青銅鏡の展開」『中国考古学』第20号
- 張光直著、小南一郎・間瀬収芳訳 1989『中国青銅器時代』、平凡社
- 張光直著、小南一郎・間瀬収芳訳 2002『中国古代文明の形成』、平凡社
- 辻田淳一郎 2007『鏡と初期ヤマト政権』、すいれん舎
- 辻田淳一郎 2019『鏡の古代史』、角川選書
- 寺沢薫 2000『日本の歴史 02 王権誕生』、講談社
- 寺沢薫 2010『青銅器のマツリと政治社会』、吉川弘文館
- 林巳奈夫 1978「殷西周間の青銅容器の編年」『東方学報（京都）』第50冊
- 林巳奈夫 1981「殷、西周時代の地方型青銅器」京都大学考古学メモワール編集委員会編『考古学メモワール 1980』、学生社
- 林巳奈夫 1984『殷周時代青銅器の研究 殷周青銅器総覧 1』、吉川弘文館
- 林巳奈夫 1986『殷周青銅器文様の研究 殷周青銅器総覧 2』、吉川弘文館
- 林巳奈夫 1989『春秋戦国時代青銅器の研究 殷周青銅器総覧 3』、吉川弘文館
- 林巳奈夫 1994「華中青銅器若干種と羽渦紋の伝統」『泉屋博古館紀要』第10巻
- 林巳奈夫 1995『中国文明の誕生』、吉川弘文館
- 林巳奈夫 1997「殷周時代における死者の祭祀」『東洋史研究』第55巻第3号
- 林巳奈夫 2002『中国古代の神がみ』、吉川弘文館

- 樋口隆康 1963「西周銅器の研究」『京都大学文学部紀要』第7号
- 平勢隆郎 2005『都市国家から中華へ：殷周 春秋戦国』、講談社
- 廣川守 1997「殷周青銅器研究の現状と課題—型式研究を中心に—」『考古学雑誌』第82巻第4号
- プラチェフ・セルゲイ 2012「華南と東南アジアに於ける青銅器の造形に表された水牛・牛類の動物に就いて—水牛・牛に関わる儀式を探る」『中国考古学』第12号
- 中川香 2013「三星堆遺跡出土青銅容器（尊、壺、甗）と地方型青銅容器の形式分類」『国学院大学考古学資料館紀要』第29輯
- 長澤文彩 2017「西周時代の「編鐘」：文様と音高組成の分析を中心として」『駒沢史学』第88号、駒沢史学会
- 難波純子 1995『殷代器物製作の流派と生産機構—青銅彝器と骨器を中心に—』、京都大学文学研究科博士学位論文
- 難波純子 1998「華中青銅彝器の発達」『日本中国考古学会会報』第8号
- 難波純子 2004「商末周初の青銅器編年試案」『中国考古学』第4号
- 難波純子 2005a「商末周初青銅器の製作地」小南一郎編『中国文明の形成』、朋友書店
- 難波純子 2005b「商周青銅彝器のひろがり—青銅器のGIS解析より—」『中国考古学』第5号
- 西江清高 1987「春秋戦国時代の湖南、嶺南地方—湘江・嶺南系青銅器とその銅剣をめぐって」『紀尾井史学』第7号
- 西江清高 1995「印紋陶の時代の中国東南部」『日中文化研究』第7号、勉成社
- 西江清高 2018「多様な青銅器文化—形成期の「中国」的世界とその周辺—」『東洋文化研究』第21号
- 間瀬収芳 1986「戦国時代楚文化の中の鼎と敦—周辺文化との関連を主眼にみる—」『古史春秋』第3号
- 松丸道雄 1980『西周青銅器とその国家』、東京大学出版会
- 松本圭太 2018『ユーラシア草原地帯の青銅器時代』、九州大学出版会
- 丸橋充拓 2020『江南の発展：南宋まで』、岩波新書
- 三船温尚・畠山禎・高濱秀・長柄毅一・劉治国・荒友里子 2012「古代における燃焼消失原型鑄造法使用の可能性」『Fusus：アジア鑄造技術史学会誌』第4号
- 宮本一夫 1996「長江中流域新石器時代の集団構造」『比較社会文化』、九州大学大学院比較社会文化研究科
- 宮本一夫 1997「呉越の文化」『福岡からアジアへ5 長江にみる弥生の源流』、西日本新聞社
- 宮本一夫 1999「欧米における近年の中国考古学研究と日本における中国考古学研究」『日本中国考古学会会報』第9号
- 宮本一夫 2005『神話から歴史へ：神話時代 夏王朝』、講談社
- 宮本一夫 2006「中国における初期国家形成過程を定義づける」田中良之・川本芳昭『東アジア古代国家論—プロセス・モデル・アイデンティティ』、すいれん舎
- 宮本一夫 2008「遼東の遼寧式銅剣から弥生の年代を考える」『史淵』第145号
- 宮本一夫 2009「結語」『中国初期青銅器文化の研究』、九州大学出版会
- 宮本一夫 2016「東アジア青銅器文化の潮流」『季刊考古学』第135号、雄山閣
- 宮本一夫 2020『東アジア青銅器時代の研究』、雄山閣
- 溝口孝司 2000「墓地と埋葬行為の変遷—古墳時代の開始の社会的背景の理解のために—」北條芳隆・溝口孝司・村上恭通著『古墳時代像を見なおす：成立過程と社会変革』、青木書

店

- 村野正景 2005「中国周代における青銅鼎の動態とその背景——湖南湘江地域を中心に」『古文化談叢』第53号、九州古文化研究会
- 山本堯 2013「殷末周初期の長江中流域における青銅礼器受容形態に関する考察——江西省贛江流域を中心に——」『中国考古学』第13号
- 吉田広 2014「弥生青銅器祭祀の展開と特質」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集
- 吉開将人 1999「印からみた南越世界（中編）——嶺南古璽印考——」『東洋文化研究所紀要』137号
- 横倉雅幸・西江清高・小澤正人 1990「所謂「越式鼎」の展開——紀元前1千年紀後半の東南中国——」『考古学雑誌』第76巻第1号
- ロータール・フォン・ファルケンハウゼン著、吉本道雅解題・訳 2006『周代中国の社会考古学』、京都大学学術出版会
- 渡辺信一郎 2019『中華の成立：唐代まで』、岩波新書

中国語（アルファベット順）

- 安徽大学・安徽省文物考古研究所 2006『皖南商周青銅器』、文物出版社
- 貝格立（Bagley）1997「南方青銅器文飾与新干大洋洲の時代」『吳越地区青銅器研究論文集』、両木出版社
- 貝塚茂樹・彭適凡 1981「商代中期文化向江南の発展」『江西歴史文物』1981年代3期
- 常懷穎 2014「論商周之際鐃鐘随葬」『江漢考古』2014年第1期
- 曹学群 1993「論湖広地区的越文化与楊越的關係」『南方文物』1993年第3期
- 陳公柔・張長寿 1990「殷周青銅容器上獸面文的断代研究」『考古学報』1990年第2期
- 陳荃有 2005『中国青銅樂鐘研究』、上海音楽学院出版社
- 陳小三 2017「長江中下流域周代前期青銅器对中原地区的影響」『考古学報』2017年第2期
- 陳小三 2019「西周早期地方生産銅器一例—江陵万城銅器群分析」『江漢考古』2019年第2期
- 陳夢家 1956「西周銅器断代研究（五）」『考古学報』1956年第3期
- 陳夢家著 2004 趙誠・俞国林責任編集『陳夢家著作集 西周銅器断代』、中華書局
- 陳佩芬 1997「越文化青銅鉦の若干問題」『吳越地区青銅器研究論文集』、両木出版社
- 陳公柔・張長寿 1990「殷周青銅容器上獸面文的断代研究」『考古学報』1990年第2期
- 豆海峰 2011『長江中游地区商代文化研究』、吉林大学博士学位論文
- 杜乃松 1983「從湖北崇陽出土的獸面文銅鼓談起」『中原文物』1983年第2期
- 方建軍 1989「陝西出土西周和春秋時期甬鐘的初步考察」『交響』1989年第3期
- 方建軍 1990「河南出土殷商編鐃初論」『中国音楽学』1990年第3期
- 方建軍 1992「西周早期甬鐘及甬鐘起源探討」『考古与文物』1992年第1期
- 方建軍 2006「从商周樂器的出土情况看其与祭祀活動之關係」『中央音楽学院学報』2006年第3期
- 費孝通編 1989『中華民族多元一体格局』、中央民族学院出版社
- 傅聚良 2004「盤龍城、新干和寧鄉——商代荆楚青銅文化的三個階段」『中原文物』2004年代1期
- 傅聚良 2007「湘江流域西周時期的銅器窖藏」『華夏考古』2007年第9期
- 高成林 2016「商周時期湖南与嶺南的交通——以出土銅器為中心——」『湖南考古輯刊』第12輯、岳麓書社
- 高西省 1991「商周時代南北甬鐘之關係及南北文化交流之檢討」『東南文化』1991年第6期

- 高西省 1998 「論湖南寧鄉新出土一組鏞」『故宮文物月刊』第 189 号
- 高至喜 1981 「“商文化不過長江”辨——從考古發見看湖南的商代文化」『求索』1981 年第 2 期
- 高至喜 1984a 「中国南方出土商周青銅鐃概論」『湖南考古輯刊』第 2 輯、岳麓書社
- 高至喜 1984b 「湖南省博物館藏西周青銅樂器」『湖南考古輯刊』第 2 輯、岳麓書社
- 高至喜 1984c 「論湖南出土的西周銅器」『江漢考古』1984 年第 3 期
- 高至喜 1993 「論中国南方商周時期青銅鐃的型式、演變与年代」『南方文物』1993 年第 2 期
- 高至喜 1996 『楚文化的南漸』、湖北教育出版社
- 高至喜 1997 「晋侯蘇鐘筆談」『文物』1997 年第 3 期
- 高至喜 1999 『商周青銅器与楚文化』、岳麓書社
- 高至喜 2007 「湖南出土扁茎銅劍研究」『中国歷史文物』2007 年第 3 期
- 高至喜 2010 「論早期甬鐘起源于湘江中下游地区」『湖南省博物館館刊』第 6 輯、岳麓書社
- 郭勝斌 1999 「商時期洞庭湖東岸青銅文化的年代分期与文化性質」『考古耕耘錄——湖南中青年考古學者論文選集』、岳麓書社
- 湖南省博物館編 2007 『湖南出土殷商西周青銅器』、岳麓書社
- 黃曲 2001 「湘江下游商代“混合型”青銅器問題之我見」『江漢考古』2001 年第 3 期
- 華覺明·賈六福 1983 「先秦編鐘設計製作的探討」『自然科學研究』第 2 卷
- 何介鈞·何紀生 1986 「古代越族的青銅文化」『湖南考古輯刊』第 3 輯、岳麓書社
- 何介鈞 1982 「長江中游原始文化初論」『湖南考古輯刊』第 1 輯、岳麓書社
- 何介鈞 1984 「湖南商周時期古文化的分区探索」『湖南考古輯刊』第 2 輯、岳麓書社
- 何介鈞 1996 「試論湖南出土商代青銅器及商文化向南方傳播的幾個問題」『湖南先秦考古學研究』、岳麓書社
- 井中偉 2002 「我国南方出土商周銅鐃的類型学研究」『文物春秋』2002 年第 1 期
- 李伯謙 1985 「長江流域文明的進程」『晋文化研究座談会紀要』、山西省考古研究所
- 李伯謙 1990 「中国青銅文化的發展階段与分区系統」『華夏考古』1990 年第 2 期
- 李伯謙 1998 『中国青銅文化結構体系研究』、科学出版社
- 李朝遠 1997 「煙墩山墓青銅器的時代及其他」『吳越地区青銅器研究論文集』、兩木出版社
- 李朝遠 2002 「江西新干中稜青銅器的再認識」高崇文、安田喜憲編『長江流域青銅文化研究』、科学出版社
- 李純一 1957 「關於殷鐘的研究」『考古學報』1957 年第 3 期
- 李純一 1964 「試论用、庸、甬并試論鐘名之演變」『考古』1964 年第 6 期
- 李純一 1996 「周代甬鐘正鼓雲文断代」『音樂研究』1996 年第 3 期
- 李純一 1996 『中国上古出土樂器總論』、文物出版社
- 李宏飛 2020 「江西清江盆地商代諸遺存興起背景探討」『南方文物』2020 年第 4 期
- 李龍章 1994 「試論兩广先秦青銅文化来源」『南方文物』1994 年第 1 期
- 李龍章 1995 「湖南兩广青銅時代越墓研究」『考古學報』1995 年第 3 期
- 黎海超·崔劍鋒·盛偉 2019 「湖南寧鄉炭河里与望城高砂脊出土銅器的鉛同位素分析及相關問題」『考古』2019 年第 2 期
- 黎海超·崔劍鋒·王竑·任周方 2020 「論強国本地風格銅器的生產問題」『考古』2020 年第 1 期
- 黎海超 2020 『資源与社会——以商周時期銅器流通為中心』、中国社会科学出版社
- 林巳奈夫著、徐朝龍譯 1994 「新干大洋洲出土青銅器的年代鄒議」『南方文物』1994 年第 1 期

- 李濟 1948 「記小屯出土之青銅器」『考古學報』1948 年第 3 期
- Lukas Nickel 著、劉煜譯 2011 「不完美的对称—重新思考中国古代青銅鑄造技術」陳建立・劉煜主編『商周青銅器的陶範鑄造技術研究』、文物出版社
- 劉和惠 1995 『楚文化的東漸』、湖北教育出版社
- 劉彬徽 1995 『楚系青銅器研究』、湖北教育出版社
- 劉煜 2018 「試論殷墟青銅器的分鑄技術」『中原文物』2018 年第 5 期
- 羅泰 1991 「論江西新干大洋洲出土的青銅樂器」『江西文物』1991 年第 3 期
- 馬塞爾・莫斯[仏](Marcel Mauss) 著、汲喆譯 2019 『礼物：古式社会中交换的形式与理由』、商務印書館
- 馬承源 1981 「商周青銅双音鐘」『考古學報』1981 年第 1 期
- 馬承源 1982 『中国古代青銅器』、上海人民出版社
- 馬承源 1987 「長江下游土墩墓出土青銅器的研究」『上海博物館輯刊』第 4 輯
- 馬承源 1997 「吳越文化青銅器研究」『吳越地區青銅器研究論文集』、兩木出版社
- 馬江波・吳曉桐・金正耀・田建花・武仙竹 2018 「湖南寧鄉出土商代大型青銅甗初探—兼談甗肩銅甗的年代与產地」『四川文物』2018 年第 6 期
- 馬今洪 2000 「試論青銅甗」『上海博物館集刊』第 8 集、上海古籍出版社
- 馬今洪 2008 「略論湖南出土的青銅甗」『湖南省博物館館刊』第 5 輯、岳麓書社
- 蒙文通 1983 「越族古居“楊子江以南整個地區” 辨」『越史叢考』、人民出版社
- 蒙文通 1983 「百越民族考」『越史叢考』、人民出版社
- 內田純子・飯塚義之 2010 「中央研究院收藏殷墟青銅器的冶金學研究」『紀念殷墟發掘 80 周年學術檢討會論文集』、中央研究院歷史語言研究所
- 牛世山 2017 「考古視野下的周人滅商—以殷墟從晚商到西周的文化變遷為例」『南方文物』2017 年第 4 期
- 牛世山 2020 「湖北東北部晚商文化的新認識—從蘄春毛家咀遺址和新屋灣青銅器談起」『南方文物』2020 年第 4 期
- 彭浩 1984 「我國兩周時期的越式鼎」『湖南考古輯刊』第 2 輯、岳麓書社
- 彭明瀚 2005 『吳城文化研究』文物出版社
- 彭適凡 1979 「江西地區出土商周青銅器的分析与分期」『中國考古學會第一次年會論文集』、文物出版社
- 彭適凡 1986 「試述南方早期印文陶的特點及其淵源」『東南文化』1986 年第 2 期
- 彭適凡 1987 「贛鄱地區西周時期古文化的探討」『江西歷史文物』1987 年第 2 期
- 彭適凡 1993 「江西新干商代青銅禮器的造型与裝飾藝術」『南方文物』1993 年第 2 期
- 彭適凡 1998 「贛江流域出土商周青銅鐃和甬鐘概述」『南方文物』1998 年第 1 期
- 彭適凡 2011 『中國南方青銅器研究』上海辭書出版社
- 秦小麗 2013 「夏商時期江淮河地區与中原地區的地域間文化動態關係—以陶器資料分析為中心」『江漢考古』2013 年第 2 期
- 裘錫圭 1980 「甲骨文中的幾種樂器名稱」『中華文史論叢』1980 年第 2 輯
- 容庚 2008 『商周彝器通考』上冊、上海人民出版社
- 施勁松 1997 「我國南方出土銅鐃及甬鐘研究」『考古』1997 年第 10 期
- 施勁松 1998 「論我國南方出土的商代青銅大口尊」『文物』1998 年第 10 期
- 施勁松 2002 「中原与南方在中国青銅文化統一體中的互動關係」『長江流域青銅文化研究』、科學出版社
- 施勁松 2003 『長江流域青銅器研究』、文物出版社
- 施勁松 2018 「商時期南方地區的青銅器与社会:複雜性与多样性的例証」『考古』2018 年第

5 期

施勁松 2020 「論三星堆—金沙文化」『考古与文物』2020 年第 5 期

蘇秉琦 1997 『中國文明起源新探』、商務印書館

蘇榮譽・李建毛 2016 「華容大口折肩青銅器研究—兼及挂飾管形犧首飾諸器（上）」『美術研究』2016 年第 6 期

蘇榮譽・李建毛 2017 「華容大口折肩青銅器研究—兼及挂飾管形犧首飾諸器（下）」『美術研究』2017 年第 1 期

孫明 2020 「湖南瀘水流域出土商周青銅禮器研究」『南方文物』2020 年第 2 期

譚德睿 1997 「吳越青銅技術考察報告（之一）」『吳越地區青銅器研究論文集』、兩木出版社

唐海萍・譚德睿 2008 「湖南出土商周青銅器製作技術初探」『湖南省博物館館刊』第 5 輯、岳麓書社

童恩正 1986 「從出土文物看楚文化與南方諸民族的關係」『湖南考古輯刊』第 3 輯、岳麓書社

王宏 1996 「論周梁玉橋文化」『江漢考古』1996 年第 3 期

王世民・陳公柔・張長壽 1999 『西周青銅器分期斷代研究』、文物出版社

王世民・陳公柔・張長壽 2000 「西周青銅器分期斷代研究」『文物』2000 年第 4 期

王友華 2015 「西周甬鐘編列的「拚合現象」—兼析甬鐘的來源」『中國音樂』2015 年第 1 期

王子初 2003 『中國音樂考古學』、福建教育出版社

汪松桂 1991 「試論湖南晚商青銅器上的“羊”飾」『江西文物』1991 年第 3 期

夏鼐 1972 「無產階級文化大革命中的考古新發現」『考古』1972 年第 1 期

向桃初 1998 「湖南商代銅器初探」『四川大學考古專業創建三十五周年紀念文集』四川大學出版社

向桃初 1999 「湖南商代晚期青銅文化的性質及其與殷墟商文化的關係」『考古耕耘錄—湖南中青年考古學者論文選集』、岳麓書社

向桃初 2002 「湖南商代考古和青銅器研究的新進展」高崇文・安田喜憲編『長江流域青銅文化研究』、科學出版社

向桃初 2005 「“越式鼎”研究初步」『古代文明』第 4 卷、文物出版社

向桃初 2006a 「炭河里城址的發見與寧鄉銅器群再研究」『文物』2006 年第 8 期

向桃初 2006b 「湘江流域商周青銅文明研究的重要突破」『南方文物』2006 年第 2 期

向桃初 2008 『湘江流域商周青銅文化研究』、線裝書局

向桃初 2009 「寧鄉銅器群與新干銅器群比較研究」『江漢考古』2009 年第 1 期

向桃初 2010 「從殷墟出土銅鏡看南方銅鏡的年代」『考古与文物』2010 年第 4 期

王恩田 1992 「湖南出土商周銅器與殷人南遷」『中國考古學會第七次年會論文集』、文物出版社

王友華 2009 「西周前期黃河流域甬鐘用制分析—兼析西周前期樂懸制度的演進軌跡」『中國音樂學』2009 年第 4 期

王友華 2015a 「西周甬鐘編列的“併合現象”兼析甬鐘的來源」『中國音樂』2015 年第 1 期

王友華 2015b 「西周後期甬鐘編列的二分現象」『中國音樂』2015 年第 4 期

吳銘生 1989 「湖南東周時期越人墓葬的研究」『湖南考古輯刊』第 5 輯、岳麓書社

熊建華 2013 『湖南商周青銅器研究』岳麓書社

熊伝新・吳銘生 1985 「湖南古越族青銅器概論」『中國考古學會第四次年會論文集』、文物出版社

熊伝新 1986 「湖南商周青銅器的發見與研究」『湖南省博物館開館三十周年暨馬王堆漢墓發

掘十五周年記念文集』、湖南省物資局豐華印刷廠

晏成佳・童忠良 2006『基本樂理教程』、人民音樂出版社

楊達源 2006『長江地貌過程』、地質出版社

陽傑 2010「廣東早期青銅文化試析」『華夏考古』2010 年第 3 期

楊錫璋 1983「殷墟青銅容器的分期」『中原文物』1983 年第 3 期

楊錫璋・楊宝成 1985「殷代青銅器礼器的分期与組合」『殷墟青銅器』、文物出版社

葉文憲 1988「越式鼎溯源」『東南文化』1988 年第 6 期

尹檢順 1999「湘江流域原始文化初論」『南方文物』1999 年第 4 期

殷璋璋・曹淑琴 1986「長江流域早期甬鐘的形態分析」『文物考古論集』、文物出版社

殷璋璋・曹淑琴 1989「早期甬鐘的区、系、型研究」『考古学文化論集』第 2 集、文物出版社

殷璋璋・曹淑琴 1990「從青銅樂鐘的類型談中国南方青銅文化的相關問題」『南方民族考古』第 2 輯、四川科学出版社

袁艷玲 2015「楚式鼎的分類、組合及其礼制涵義」『考古』2015 年第 8 期

袁艷玲・張聞捷 2015「楚系青銅器的分期与年代」『考古学報』2015 年第 4 期

岳洪彬 2006『殷墟青銅礼器研究』、中国社会科学出版社

岳占偉・岳洪彬・劉煜 2011「殷墟青銅器的鑄型分範技術研究」陳建立・劉煜主編『商周青銅器的陶範鑄造技術研究』、文物出版社

俞偉超 1980「關於楚文化發展的新探索」『江漢考古』1980 年第 1 期

張昌平 2004「論殷墟時期南方的尊和壘」『考古学集刊』第 15 集、文物出版社

張昌平 2006「夏商時期中原与長江中遊地区的文化聯系」『華夏考古』2006 年第 3 期

張昌平 2008「北美地区所見中国商時期南方或南方特徵青銅器」『全球化背景下考古学新前沿：解讀中国古代傳統』、AMS 芸術；科学和人文基金会

張昌平 2010「二里岡文化至殷墟文化時期青銅器範型技術的發展」『考古』2010 年第 8 期

張昌平 2016『商周時期南方青銅器研究』、商務印書館

張長寿 1979「殷商時代的青銅容器」『考古学報』1979 年第 3 期

張長寿 1980「論宝鷄茹家莊發見的西周銅器」『考古』1980 年第 11 期

張光直 1982『中國青銅時代』、中文大學出版社

張孝光 1985「殷墟青銅器的裝飾芸術」中国社会科学院考古研究所編著『殷墟青銅器』、文物出版社

張玉石 1994「中国南方青銅器及中原王朝与南方的關係」『南方文物』1994 年第 2 期

鄭小烜 2007『吳越和百越地区周代青銅器研究』、科学出版社

中国社会科学院考古研究所 1979『甲骨文合集』、中華書局

中国社会科学院考古研究所 1980『小屯南地甲骨』、中華書局

中国科学院『中国自然地理』編輯委员会編 1985『中国自然地理 總論』、科学出版社

周世荣 1980「湖南古代文化初探」『中国考古学会第一次年会論文集』、文物出版社

周亜 1997「吳越地区土墩墓出土的青銅器研究」『吳越地区青銅器研究論文集』、兩木出版社

朱鳳瀚 1995『古代中国青銅器』、南開大学出版社

朱鳳瀚 2009『中国青銅器總論』、上海古籍出版社

朱華東 2020「安徽江淮地区出土西周甬鐘簡論」『江漢考古』2020 年第 5 期

朱華東・王建国 2019「安徽寿縣蒼陵城出土商代青銅器年代及相關問題」『東南文化』2019 年第 1 期

朱文璋・呂琪昌 1994『先秦樂鐘之研究』、台北南天書局

鄒衡 1980「試論殷墟文化分期」『夏商周考古文化論文集』、文物出版社

発掘報告書・簡報（アルファベット順）

- 安徽省文物工作隊 1959「安徽屯溪西出墓葬發掘報告」『考古學報』1959年第4期
安徽省文物工作隊 1984「安徽肥西金牛春秋墓」『考古』1984年第9期
安陽市文物工作隊 1991「殷墟戚家莊東 269 号墓」『考古學報』1991年第3期
安陽市文物考古研究所編著 2015『安陽殷墟：戚家莊東商代墓地發掘報告』、中州古籍出版社
北京市文物管理处 1977「北京市平谷縣發現商代墓葬」『文物』1977年第11期
蔡德初 1984「湖南耒陽縣出土西周甬鐘」『文物』1984年第7期
柴福有 1995「記浙江江山出土的一套青銅編鐘」『南方文物』1995年第3期
柴福有 1996「浙江江山出土青銅編鐘」『文物』1996年第6期
長沙市博物館 1997「湖南寧鄉老糧倉出土商代青銅饒」『文物』1997年第7期
長興縣文化館 1973「浙江長興縣的兩件銅器」『文物』1973年第1期
陳柏泉 1962「新余縣界水調查銅鐘記」『文物工作資料』1962年第3期
陳國安 1995「湖南安仁縣豪山發見西周銅饒」『考古』1995年第5期
程先通 1988「黃山鳥石鄉出土一件西周甬鐘」『考古』1988年第5期
程應麟 1963「萍鄉市彭高公社發見周代銅甬鐘兩件」『文物工作資料』第31期
鄂兵 1973「湖北隨縣發見曾國銅器」『文物』1973年第5期
鄂博・崇文 1978「湖北崇陽出土一件銅鼓」『文物』1978年第3期
葛介屏 1959「安徽阜南發現殷商時代的青銅器」『文物』1959年第1期
葛治功 1965「安徽嘉山縣泊岡引河出土的四件青銅器」『文物』1965年第7期
馮玉輝 1980「衡陽博物館收藏三件周代銅器」『文物』1980年第11期
阜陽地區博物館 1985「安徽潁上王岡、趙集發見商代文物」『文物』1985年第10期
高次若 1991「寶鷄市博物館藏青銅器介紹」『考古與文物』1991年第5期
高至喜 1960「商代人面方鼎」『文物』1960年第10期
高至喜 1963「湖南寧鄉發見商代銅器和遺址」『考古』1963年第12期
高至喜 1984「寧鄉商代象文大饒」『樂器』1984年第2期
故宮博物院 1966「故宮博物院藏品資料選介」『文物』1965年第5期
廣東省博物館 1975「廣東四會鳥旦山戰國墓」『考古』1975年第2期
廣東省博物館 1983「廣東羅定出土一批戰國青銅器」『考古』1983年第1期
廣東省博物館 1986「廣東羅定背夫山戰國墓」『考古』1986年第3期
廣東省文管會 1963「廣東清遠發見周代青銅器」『考古』1963年第2期
廣東省文管會 1964「廣東清遠的東周墓葬」『考古』1964年第3期
廣東省文物考古研究所 2000「廣東樂昌對面山東周秦漢墓」『考古』2000年第6期
廣西壯族自治區博物館 1973「廣西恭城縣出土的青銅器」『考古』1973年第1期
廣西壯族自治區博物館 1984「近年來廣西出土的先秦青銅器」『考古』1984年第9期
廣西壯族自治區文物工作隊 1978「廣西出土的青銅器」『文物』1978年第10期
廣西壯族自治區文物工作隊 1983「廣西賓陽發見戰國墓葬」『考古』1983年第2期
漢壽縣文管所 2004「漢壽縣三和出土青銅鐘」『湖南考古 2002』、岳麓書社
何標瑞 1983「靖安縣出土西周甬鐘」『江西歷史文物』1983年第2期
何介鈞・王文建 1992「湖南石門皂市商代遺存」『考古學報』1992年第2期
河南省文化局文物工作隊 1958「1958年春河南安陽市大司空村殷代墓葬發掘簡報」『考古』1958年第10期

河南省文物考古研究所 2001『鄭州商城：1953—1985 年考古發掘報告』、文物出版社
 河南省文物考古研究所・周口市文化局 2000『鹿邑太清宮長子口墓』、中州古籍出版社
 河南省文物研究所・鄭州市博物館 1983「鄭州新發見商代窖藏青銅器」『文物』1983 年第 3 期
 河南省信陽地區文管會・河南省羅山縣文化館 1986「羅山天湖商周墓地」『考古學報』1986 年第 2 期
 衡陽市博物館 1984「衡陽市苗圃五馬埕槽茅坪古墓發掘簡報」『考古』1984 年第 10 期
 衡陽市博物館 1998「湖南衡陽縣赤石春秋墓發掘簡報」『考古』1998 年第 6 期
 衡陽縣文化局 1985「湖南衡陽出土兩件西周甬鐘」『文物』1985 年第 6 期
 賀縣博物館 1993「廣西賀縣龍中岩洞墓清理簡報」『考古』1993 年第 4 期
 懷化地區文物工作隊・芷江縣文管所 1987「芷江發見東周遺址和宋元窯址」『湖南考古輯刊』第 4 輯、岳麓書社
 黃岡地區博物館・黃岡市博物館「湖北省黃州下窯嘴商墓發掘簡報」『文物』1993 年第 6 期
 黃綱正 1986「瀏陽、雙峰出土商周青銅器」『湖南文物』第 1 輯
 黃東梅 1981「清江縣發見西周甬鐘」『江西歷史文物』1981 年第 3 期
 黃陂縣文化館・孝感地區博物館・湖北省博物館 1982「湖北黃陂魯台山兩周遺址與墓葬」『江漢考古』1982 年第 2 期
 湖北黃岡市博物館・湖北蘄春縣博物館 1997「湖北蘄春達城新屋灣西周銅器窖藏」『文物』1997 年第 12 期
 湖北省博物館 1972「湖北京山發見曾國銅器」『文物』1972 年第 3 期
 湖北省博物館 1975「湖北棗陽縣發見曾國墓葬」『考古』1975 年第 7 期
 湖北省博物館・隨州市博物館 1985「湖北隨州擂鼓墩二號墓發掘簡報」『文物』1985 年第 1 期
 湖北省文物考古研究所 2001『盤龍城—1963—1994 年考古發掘報告』、文物出版社
 湖北省文物考古研究所・隨州市博物館 2011「湖北隨州葉家山 M65 發掘簡報」『江漢考古』2011 年第 3 期
 湖北省文物考古研究所・隨州市博物館 2011「湖北隨州葉家山西周墓地發掘簡報」『文物』2011 年第 11 期
 湖北省文物考古研究所・隨州市博物館 2016「湖北隨州葉家山 M107 發掘簡報」『江漢考古』2016 年第 3 期
 湖北省文物考古研究所・隨州市博物館 2020「湖北省隨州葉家山 M111 發掘簡報」『江漢考古』2020 年第 2 期
 湖南省博物館 1960「介紹幾件從廢銅中撿選出來的重要文物」『文物』1960 年第 3 期
 湖南省博物館 1966「湖南省博物館新發見的幾件銅器」『文物』1966 年第 4 期
 湖南省博物館 1972「湖南省工農兵群眾熱愛祖國文化遺產」『文物』1972 年第 1 期
 湖南省博物館 1978「湖南衡南、湘潭發見春秋墓葬」『考古』1978 年第 5 期
 湖南省博物館 1982「資興舊市春秋墓」『湖南考古輯刊』第 1 輯、岳麓書社
 湖南省博物館 1984「長沙縣出土春秋時期越族青銅器」『湖南考古輯刊』第 2 輯、岳麓書社
 湖南省博物館 1984「長沙樹木嶺戰國墓阿彌嶺西周墓」『考古』1984 年第 9 期
 湖南省博物館 1986「新邵、瀏陽、株洲、資興出土商周青銅器」『湖南考古輯刊』第 3 輯、岳麓書社
 湖南省博物館・耒陽縣文化局 1985「耒陽春秋、戰國墓」『文物』1985 年第 6 期
 湖南省文物考古研究所 2006「湖南省寧鄉炭河里西周城址與墓發掘簡報」『文物』2006 年第 6 期

胡紹仁 1985 「宜豐鼎出土商代銅鏡」『江西歷史文物』1985 年第 1 期
 江蘇省文物管理委員會 1955 「江蘇丹徒縣煙墩山出土的古代青銅器」『文物參考資料』1955 年第 5 期
 江蘇省文管會 1956 「江蘇丹徒煙墩山西周墓及附葬坑出土的小器物補充資料」『文物參考資料』1956 年第 1 期
 江蘇省文物管理委員會、南京博物院 1965 「江蘇六合程橋東周墓」『考古』1965 年第 3 期
 江西省博物館 1997 『新干商代大墓』、文物出版社
 江西省文物工作隊 1986 「江西高安太陽墟春秋墓」『江西歷史文物』1986 年第 2 期
 江西省文物考古研究所 1995 「江西德安縣陳家墩遺址發掘簡報」『南方文物』1995 年第 2 期
 江西省文物考古研究所·樟樹市博物館編 2002 『吳城—1973～2002 年考古發掘報告』、科學出版社
 雷芬 1999 「株洲白關西周晚期越人墓出土的青銅器」『湖南考古輯刊』第 7 輯、岳麓書社
 李國梁主編 2006 『屯溪土墩墓發掘報告』、安徽人民出版社
 李恒賢·彭適凡 1976 「西周甬鐘」『文物工作資料』1976 年第 1 期
 李建 1963 「湖北江陵萬城出土西周銅器」『考古』1963 年第 4 期
 李家和·唐昌朴·彭適凡 1977 「近年江西出土的商代青銅器」『文物』1977 年第 9 期
 李金橋 1984 「江底淘沙喜獲古鐘」『江漢考古』1984 年第 3 期
 李喬生 1997 「湖南寧鄉出土商代大銅鏡」『文物』1997 年第 12 期
 溧水縣圖書館 1986 「江蘇溧水出土的几批青銅器」『考古』1986 年第 3 期
 李勇 2000 「安徽六安出土一件大型商代銅尊」『文物』2000 年第 12 期
 劉懷君 1987 「眉縣出土一批西周窖藏青銅樂器」『文博』1987 年第 2 期
 劉建·黃英豪·王煉 1984 「萬載縣出土西周甬鐘」『江西歷史文物』1984 年第 1 期
 劉敏華 1998 「江西萍江新出土的西周甬鐘」『南方文物』1998 年第 1 期
 黎澤高·趙平 1989 「枝城市博物館藏青銅器」『考古』1989 年第 9 期
 龍福連 1987 「郴州市出土的戰國越人墓」『湖南考古輯刊』第 4 輯、岳麓書社
 盧連成·胡智生 1988 『寶雞強國墓地』文物出版社
 羅西章 1980 「扶風出土的商周青銅器」『考古與文物』1980 年第 4 期
 洛陽市文物工作隊 1999 「洛陽林校西周車馬坑」『文物』1999 年第 3 期
 馬得志·周永珍·張雲鵬 1955 「一九五三年安陽大司空村發掘報告」『考古學報』1955 年第 1 期
 南波 1975 「介紹一件青銅鏡」『文物』1975 年第 8 期
 龐文龍 1992 「岐山縣博物館藏古代甬鐘、鐃鐘」『文博』1992 年第 2 期
 彭錦華 1987 「沙市近郊出土的商代大型銅尊」『江漢考古』1987 年第 4 期
 彭適凡·劉林·詹開遜 1991 「江西新干大洋洲商墓發掘簡報」『文物』1991 年第 10 期
 青陽縣文物管理所 1998 「安徽青陽縣龍岡春秋墓的發掘」『考古』1998 年第 2 期
 饒澤民 1987 「株洲發見西周青銅器」『湖南考古輯刊』第 4 輯、岳麓書社
 饒澤民 1993 「湖南株洲發見二件商周青銅器」『考古』1993 年第 10 期
 山東省文物考古研究所 1989 「青州蘇埠屯商大墓發掘報告」『海岱考古（一）』、山東大學出版社
 山西省考古研究所大河口墓地聯合考古隊 2011 「山西省翼城縣大河口墓地」『考古』2011 年第 7 期
 陝西省文物管理委員會 1957 「長安普渡村西周墓的發掘」『考古學報』1957 年第 1 期
 陝西周原考古隊 1978 「陝西扶風莊白一號西周青銅器窖藏發掘簡報」『文物』1978 年第 3 期

期

- 盛定国 1986 「寧鄉月山鋪發見商代大銅鏡」『文物』1986 年第 2 期
- 四川省文物考古研究所 1999 『三星堆祭祀坑』、文物出版社
- 宋紹華 1991 「長沙出土商、春秋青銅器」『湖南省博物館文集』、岳麓書社
- 蘇州博物館考古組 1980 「蘇州城東北發見東周銅器」『文物』1980 年第 8 期
- 隨縣博物館 1980 「湖北隨縣城郊發見春秋墓葬和銅器」『文物』1980 年第 1 期
- 隨州市博物館 1982 「湖北隨縣新發見古代青銅器」『考古』1982 年第 3 期
- 隨州市博物館 1982 「湖北隨縣安居出土青銅器」『文物』1982 年第 12 期
- 隨州市博物館 1984 「湖北隨縣發見商周青銅器」『考古』1984 年第 6 期
- 隨州市博物館 1989 「隨州東城區發見東周墓葬和青銅器」『江漢考古』1989 年第 1 期
- 孫力楠 1998 「介紹一件青銅鏡」『文物』1998 年第 11 期
- 孫清遠・廖佳行 1988 「河南平頂山發見西周甬鐘」『考古』1988 年第 5 期
- 唐金裕・王壽芝・郭長江 1980 「陝西省城固縣出土殷商銅器整理簡報」『考古』1980 年第 5 期
- 期
- 唐先華 1993 「耒陽發見春秋越墓」『江漢考古』1993 年第 4 期
- 田海峰 1983 「湖北棗陽縣又發見曾國銅器」『江漢考古』1983 年第 1 期
- 王從禮 1993 「記江陵岑河廟興八姑台出土商代銅尊」『文物』1993 年第 8 期
- 王士倫 1965 「記浙江發見的銅鏡、釉陶鐘和越王石矛」『考古』1965 年第 5 期
- 王興成 2020 「陝西漢中南鄭縣發見西周青銅甬鐘」『考古與文物』2020 年第 5 期
- 王振鏞 1980 「福建建甌縣出土西周甬鐘」『文物』1980 年第 11 期
- 吳承翟 2005 「平江縣涇口鎮商代銅壘」『湖南省博物館館刊』第 2 期、岳麓書社
- 吳銘生 1986 「資興發見西周甬鐘」『湖南考古輯刊』第 3 輯、岳麓書社
- 吳山菁 1977 「江蘇六合縣和仁東周墓」『考古』1977 年第 9 期
- 吳縣文物管理委員會 1984 「江蘇吳縣何山東周墓」『文物』1984 年第 5 期
- 咸寧地區博物館 1981 「湖北陽新縣出土兩件青銅鏡」『文物』1981 年第 1 期
- 湘鄉縣博物館 1986 「湘鄉五里橋、何家灣古墓葬發掘簡報」『湖南考古輯刊』第 3 輯、岳麓書社
- 信陽地區文管會・羅山縣文化館 1981 「河南羅山蟒張商代墓地第一次發掘簡報」『考古』1981 年第 3 期
- 熊伝新 1981 「湖南新發見的青銅器」『文物資料叢刊』第 5 集 文物出版社
- 熊伝新 1983 「湖南寧鄉發見一批商周青銅器」『文物』1983 年第 10 期
- 熊卜發 1988 「湖北孝感地區商周古文化調查」『考古』1988 年第 5 期
- 熊卜發・劉志升 1980 「大悟發見編鐘等銅器」『江漢考古』1980 年第 2 期
- 徐長青 2002 「江西永修發見商代青銅鏡」『南方文物』2002 年第 2 期
- 徐恒彬 1973 「廣東德慶發見戰國墓」『文物』1973 年第 9 期
- 徐正国 1984 「棗陽東趙湖再次出土青銅器」『江漢考古』1984 年第 1 期
- 徐正国 1990 「湖北棗陽發見一件商代銅尊」『文物』1990 年第 6 期
- 徐之田 1991 「安徽宣州市孫埠出土周代青銅器」『文物』1991 年第 8 期
- 薛堯 1963 「江西出土的几件青銅器」『考古』1963 年第 8 期
- 嚴霞峰 1984 「江西靖安出土西周甬鐘」『考古』1984 年第 4 期
- 楊宝順 1975 「溫縣出土的商代銅器」『文物』1975 年第 2 期
- 楊豪 1961 「介紹廣東近年發見的几件青銅器」『考古』1961 年第 11 期
- 楊錦新 1982 「武昌縣發見西周甬鐘」『江漢考古』1982 年第 2 期
- 楊育彬 1979 「河南靈寶出土一批商代青銅器」『考古』1979 年第 1 期

益陽地区博物館 1986「寧鄉月山舖發見商代大銅鏡」『文物』1986年第2期
 益陽市文物管理处 2001「湖南益陽出土商代銅鏡」『文物』2001年第8期
 益陽市文物管理处 2003「湖南桃江腰子畚春秋墓」『考古學報』2003年第4期
 袁家榮 1982「湘潭青山橋出土窖藏商周青銅器」『湖南考古輯刊』第1輯、岳麓書社
 岳陽市文物管理所 1984「岳陽市新出土的商周青銅器」『湖南考古輯刊』第2輯、岳麓書社
 余從新 1994「湖北安陸發見商代青銅器」『考古』1994年第1期
 余家棟 1982「江西新余連續發見西周甬鐘」『文物』1982年第9期
 張家芳 1982「湖北襄樊揀選的商周青銅器」『文物』1982年第9期
 張家 1996「福建建甌縣發見一件西周銅甬鐘」『文物』1996年第2期
 張國茂 1990「安徽銅陵謝壠春秋銅器窖藏清理簡報」『東南文化』1990年第4期
 張建中 1955「鄭州市白家莊商代墓莊發掘簡報」『文物』1995年第10期
 張翔 1985「浙江簫山杜家村出土西周甬鐘」『文物』1985年第5期
 張學武 1980「廬山縣發見商代銅鼎」『江漢考古』1980年第1期
 趙叢蒼主編、西北大學文博學院・陝西省文物局編 2006『城洋青銅器』、科學出版社
 趙康民 1983「臨潼零口再次發見西周銅器」『考古與文物』1983年第3期
 趙一新 1987「浙江磐安深澤出土一件雲文鏡」『考古』1987年8期
 趙玉泉 1989「武進縣淹城遺址出土春秋文物」『東南文化』1989年第4、5期
 浙江省文管會 1960「浙江長興見出土的兩件銅器」『文物』1960年第7期
 鎮江市博物館 1980「江蘇丹陽出土的西周青銅器」『文物』1980年第8期
 鎮江市博物館 1981「江蘇丹徒出土東周銅器」『考古』1981年第5期
 中國科學院考古研究所編 1959『洛陽中州路』、科學出版社
 中國社會科學院考古研究所編著 1998『安陽殷墟郭家莊商代墓葬 1982年～1992年考古發掘報告』中國大百科全書出版社
 中國科學院考古研究所湖北發掘隊 1962「湖北圻春毛家咀西周木構建築」『考古』1962年第1期
 中國社會科學考古學研究所 1980『殷墟婦好墓』、文物出版社
 中國社會科學考古學研究所 2005『滕州前掌大墓地』、文物出版社
 中國社會科學考古學研究所 2007『安陽殷墟花園莊東地商代墓葬』、科學出版社
 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊 1979「安陽武官村北一座殷墓」『考古』1979年第5期
 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊 1979「1969—1977年殷墟西區墓葬發掘報告」『考古學報』1979年第1期
 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊 1981「安陽小屯村北的兩座殷代墓」『考古學報』1981年第1期
 中國社會科學考古學研究所安陽考古隊 1988「安陽大司空村東南的一座殷墓」『考古』1988年第10期
 中國社會科學考古學研究所安陽考古隊 1998「河南安陽市郭家莊東南26號墓」『考古』1998年第10期
 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊 1991「安陽郭家莊160號墓」『考古』1991年第5期
 中國社會科學院考古學研究所安陽工作隊 2004「河南安陽市花園莊54號商代墓葬」『考古』2004年第1期
 中國社會科學院考古學研究所安陽工作隊 2006「河南安陽殷墟花園莊東地60號墓」『考古』2006年第1期

周意群 2005 「安吉發見一件西周時期銅鏡」『文物』2005 年第 1 期
鄒衡主編、北京大学考古学系商周組・山西省考古研究所編著 2000『天馬一曲村 1980-1989』、
科学出版社

図録（アルファベット順）

安徽大学・安徽省社会科学院・安徽省文物考古研究所編著 2014 陸勤毅、宮希成主編『安徽江淮地区商周青銅器』、文物出版社
安徽省博物館 1987『安徽省博物館藏青銅器』、上海人民美術出版社
安陽文物工作隊、安陽市博物館 1993『安陽殷墟青銅器』、中州古籍出版社
陳佩芬編著 2013『中国青銅器辞典 第一冊』、上海辞書出版社
国家文物局主編 1995『中国文物精華大辞典 青銅卷』、上海辞書出版社・商務印書館
國立故宮博物院編輯委員会編 1986『海外遺珍 銅器続』、國立故宮博物院
湖南省博物館 1983『湖南省博物館』、文物出版社
劉東升・胡伝藩・胡彦久編著 1987『中国樂器図志』、輕工業出版社
李学勤・艾蘭編著 1995『欧洲所藏中国青銅器遺珠』、文物出版社
泉屋博古館編 2002『泉屋博古 中国古銅器編』、泉屋博古館
上海博物館青銅器研究組編 1984『商周青銅器文飾』文物出版社
深圳博物館・山西省考古研究所・山西博物院編 2016『封邦建霸：山西翼城大河口墓地出土西周霸国文物珍品』、文物出版社
炭河里遺跡管理处・寧鄉県文物管理局・湖南大学岳麓書院 2014『寧鄉青銅器』岳麓書社
文物出版社編著 1976『中国古銅器選』、文物出版社
Willem van Heusden, 1952 *Ancient Chinese bronzes of the Shang and Chou Dynasties : an illustrated Catalogue of the van Heusden Collection with a historical introduction* Tokyo: Privately Pub. (Willem van Heusden)
張一品編 1998『長江三峡出土文物精粹』、中国三峡出版社
中国青銅器全集編輯委員会編 1993『中国青銅器全集 西周 1』、文物出版社
中国青銅器全集編輯委員会編 1996『中国青銅器全集 夏・商 1』、文物出版社
中国青銅器全集編輯委員会編 1997『中国青銅器全集 商 2』、文物出版社
中国青銅器全集編輯委員会編 1997『中国青銅器全集 商 3』、文物出版社
中国青銅器全集編輯委員会編 1998『中国青銅器全集 商 4』、文物出版社
中国文物精華編輯委員会 1997『中国文物精華 (1997)』、文物出版社
中国音楽文物大系総編集部 1996『中国音楽文物大系 河南卷』、大象出版社
中国音楽文物大系総編集部 1997『中国音楽文物大系 上海卷 江蘇卷』、大象出版社
中国音楽文物大系総編集部 1999『中国音楽文物大系 北京卷』、大象出版社
中国音楽文物大系総編集部 1999『中国音楽文物大系 湖北卷』、大象出版社
中国音楽文物大系総編集部 2006『中国音楽文物大系 II 湖南卷』、大象出版社
中国音楽文物大系総編集部 2009『中国音楽文物大系 II 江西卷 続河南卷』、大象出版社

長江中流域青銅器の一覧表

番号	器種	出土地点または青銅器名	出土遺構名	器高 (cm)	本論の型 式	中原の併行年代	本論の 時期	出典
1	青銅尊	安徽省阜南県朱砦区常廟鄉月兒河地区	墓？	47	尊1式	殷墟Ⅰ期		『文物』1959.1
2		安徽省阜南県朱砦区常廟鄉月兒河地区	墓？	50.5	尊1式	殷墟Ⅰ期		『文物』1959.1
3		陝西省城固県五郎廟	五郎廟銅器点	34.9	尊2式	殷墟Ⅱ期		『城洋青銅器』2006 図五七
4		陝西省城固県蘇村塔冢自然村	塔冢銅器点	39.2	尊2式	殷墟Ⅱ期		『城洋青銅器』2006 図七五
5		陝西省城固県蘇村塔冢自然村	塔冢銅器点	38.5	尊2式	殷墟Ⅱ期		『城洋青銅器』2006 図七六
6		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	二号祭祀坑	31.5	尊2式	殷墟Ⅱ期		『三星堆祭祀坑』1999
7		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	一号祭祀坑	43.3	尊2式	殷墟Ⅱ期		『三星堆祭祀坑』1999
8		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	二号祭祀坑	69	尊2式	殷墟Ⅱ期		『三星堆祭祀坑』1999
9		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	二号祭祀坑	44.2	尊3式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『三星堆祭祀坑』1999
10		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	二号祭祀坑	41.6	尊3式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『三星堆祭祀坑』1999
11		湖北省江陵県岑河鎮廟興村磚瓦厂	個数埋納	46.2	尊3式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『文物』1993.8
12		陝西省城固県蘇村塔冢自然村	塔冢銅器点	46	尊3式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『城洋青銅器』2006 図六九
13		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	二号祭祀坑	45.5	尊3式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『三星堆祭祀坑』1999
14		湖北省襄陽市新店村	個数埋納	48.5	尊3式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『文物』1990.6
15		湖南省岳陽県費家河	個数埋納	56.2	尊3式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『湖南省博物館』1983
16		湖北省江陵県岑河鎮廟興村磚瓦厂	個数埋納	63.5	尊3式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『文物』1993.8
17		重慶市烏山大昌李家滩	個数埋納	42.8	尊3式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『中国文物精華』1997
18		安徽省六安地委党校教学楼施工工地	個数埋納	70	尊4式	殷墟Ⅳ期～殷末周初期	第Ⅰ期	『文物』2000.12
19		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	二号祭祀坑	52.6	尊4式	殷墟Ⅳ期～殷末周初期	第Ⅰ期	『三星堆祭祀坑』1999
20		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	二号祭祀坑	56.5	尊4式	殷墟Ⅳ期～殷末周初期	第Ⅰ期	『三星堆祭祀坑』1999
21		湖南省華容県東山	個数埋納	73.2	尊4式	殷墟Ⅳ期～殷末周初期	第Ⅰ期	『湖南省博物館』1983
22	青銅壘	陝西省城固県龍頭鎮龍頭小学	龍頭銅器点	37.1	壘1式古相	殷墟Ⅰ期		『城洋青銅器』2006 図三一
23		陝西省城固五郎廟	a地点	24	壘1式古相	殷墟Ⅰ期		『城洋青銅器』2006 図四八
24		陝西省城固県龍頭鎮龍頭小学	龍頭銅器点	34	壘1式古相	殷墟Ⅰ期		『城洋青銅器』2006 図二九
25		陝西省城固県龍頭鎮龍頭小学	龍頭銅器点	37.8	壘1式古相	殷墟Ⅰ期		『城洋青銅器』2006 図三
26		湖北省黃州市王家坊郷蓼葉嘴村下窯嘴	個数埋納	23	壘1式新相	殷墟Ⅱ期		『文物』1993.6
27		安徽省嘉山県柏岡引河中	個数埋納	27	壘1式新相	殷墟Ⅱ期		『文物』1965.7
28		湖北省黃陂県魯台山東北瀉水左岸河	個数埋納	26.4	壘1式新相	殷墟Ⅱ期		『江漢考古』1998.4 図一:4
29		三羊首甗	？	52	壘2式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『中国青銅器全集 商4』1998
30		江蘇省江寧	？	28.7	壘2式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『中国青銅器全集 商4』1998
31		四羊首甗	新干商墓	60.5	壘2式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『新干商代大墓』1997
32		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	二号祭祀坑	33.4	壘2式	殷墟Ⅲ期～殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『三星堆祭祀坑』1999
33		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	二号祭祀坑	35.4	壘3式	殷墟Ⅳ期～殷末周初期	第Ⅰ期	『三星堆祭祀坑』1999
34		湖北省沙市郊区立新郷東岳廟村二組	個数埋納	51.5	壘3式	殷墟Ⅳ期～殷末周初期	第Ⅰ期	『江漢考古』1987.4
35		四羊首甗	？	38.8	壘3式	殷墟Ⅳ期～殷末周初期	第Ⅰ期	『中国青銅器全集 商4』1998
36		湖南省岳陽市栄湾公社農科二隊魴魚山山腰	個数埋納	50	壘3式	殷墟Ⅳ期～殷末周初期	第Ⅰ期	『湖南考古輯刊』1984.2
37		四川省広漢市南興鎮三星堆遺跡	二号祭祀坑	54	壘3式	殷墟Ⅳ期～殷末周初期	第Ⅰ期	『三星堆祭祀坑』1999
38		湖南省平江県沅口镇	個数埋納	54	壘3式	殷墟Ⅳ期～殷末周初期	第Ⅰ期	『湖南商周青銅器研究』2013
39	大型青銅鏡	浙江省余杭徐家畝	個数埋納	29	大A1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『考古』1965.5
40		湖北省陽新県白沙郷	個数埋納	27	大A1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『文物』1981.1
41		獸面紋大鏡	？	67	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・北京卷』
42		湖南省寧郷師古寨	？	70	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・北京卷』
43		湖南省寧郷師古寨	？	69	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・北京卷』
44		獸面紋鏡	？	43	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
45		獸面紋鏡	？	48.6	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
46		湖南省益陽市赫山三畝土	個数埋納	73.8	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
47		界欄式獸面紋大鏡	？	65.2	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・上海卷』
48		湖南省望城高塘嶺高冲村	個数埋納	48.4	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』第2集
49		湖南省寧郷県唐市陳家湾楚江河岸	個数埋納	72.8	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』第2集
50		湖南省瀏陽県柏嘉村	個数埋納	43.5	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『湖南文物』第1期
51		江西省宜豊牛形山	個数埋納	56	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『江西歴史文物』1985.1
52		湖南省寧郷県月山鋪転耳命	個数埋納	103.5	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1986.2
53		湖南省寧郷県老糧倉師古寨	個数埋納	80	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1997.12
54		湖南省寧郷県老糧倉師古寨	個数埋納	70	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1997.12
55		湖南省岳陽県黄秀橋費家河河岸	個数埋納	72.9	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物資料叢刊』第5集
56		湖南省寧郷県老糧倉北峰灘	個数埋納	87	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』第2集
57		湖南省株洲収集	個数埋納	53.5	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』第2集
58		湖南省寧郷北峰灘	個数埋納	90	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1978.6
59		象紋大鏡	集中埋納	69	大A2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・北京卷』
60		湖南省寧郷県老糧倉師古寨	集中埋納	54	大A3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『文物』1997.12
61		小型虎紋鏡	？	49	大A3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
62		湖南省寧郷県老糧倉師古寨	集中埋納	68	大A3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』第2集
63		湖南省寧郷県老糧倉師古寨	集中埋納	70	大A3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『文物』1966.4
64		湖南省寧郷県老糧倉師古寨	集中埋納	44.5	大A3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『文物』1966.4
65		安徽省馬鞍山市郊外	個数埋納	50.6	大Ba式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『皖南商周青銅器』
66		新干大洋洲066号大鏡	新干商墓	45.6	大Ba式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『新干商代大墓』
67		双目式獸面紋鏡	？	25.3	大Bb1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『大系・上海卷』
68		江西省永修燕坊郷	個数埋納	34.2	大Bb1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『南方文物』2002.2
69		江蘇省江寧許村	個数埋納	46.5	大Bb1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『文物』1975.8
70		湖北省陽新県白沙郷	個数埋納	24	大Bb1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『文物』1981.1
71		新干大洋洲064号大鏡	新干商墓	41.6	大Bb1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『新干商代大墓』
72		安徽省潜山市	個数埋納	41.5	大Bb1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『安徽省博物館藏青銅器』
73		双目式獸面紋鏡	？	33.9	大Bb2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・上海卷』
74		獸面紋鏡	？	30.6	大Bc1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『大系・上海卷』
75		安徽省宣州市石山	個数埋納	37.7	大Bc1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『皖南商周青銅器』
76		新干大洋洲065号大鏡	新干商墓	43.6	大Bc1式	殷墟Ⅳ期	第Ⅰ期	『新干商代大墓』
77		湖南省寧郷三畝地	個数埋納	66.3	大Bc2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『湖南博物館』図29
78		湖南省湘郷黄馬塞	個数埋納	39.9	大C1式	殷末周初期	第Ⅰ期	『湖南考古輯刊』第2集
79		江西省永修燕坊郷	個数埋納	42.5	大C1式	殷末周初期	第Ⅰ期	『南方文物』2002.2
80		湖南省寧郷師古寨	集中埋納	36.5	大C1式	殷末周初期	第Ⅰ期	『文物』1997.12
81		湖南省株洲県傘鋪	個数埋納	51.8	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
82		湖南省安仁荷樹	個数埋納	42.5	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
83		浙江省長興上草楼	個数埋納	51.4	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1960.7
84		福建省建甌陽澤村	個数埋納	76.8	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1980.11
85		湖南省寧郷県西南老糧倉郷師古寨山西北坡	集中埋納	47	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1997.12
86		湖南省寧郷県西南老糧倉郷師古寨山西北坡	集中埋納	45.7	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1997.12
87		湖南省寧郷県西南老糧倉郷師古寨山西北坡	集中埋納	48	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1997.12
88		湖南省寧郷県西南老糧倉郷師古寨山西北坡	集中埋納	48.5	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1997.12
89		湖南省寧郷県西南老糧倉郷師古寨山西北坡	集中埋納	49.5	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1997.12
90		湖南省寧郷県西南老糧倉郷師古寨山西北坡	集中埋納	50	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1997.12
91		湖南省寧郷県西南老糧倉郷師古寨山西北坡	集中埋納	51.6	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1997.12
92		湖南省祁東金橋	個数埋納	34.1	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『南方文物』1993.2
93		渦雲紋大鏡	？	62	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『大系・北京卷』
94		湖南省寧郷県西南老糧倉郷師古寨山西北坡	集中埋納	53.5	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『文物』1997.12
95		江西省万載株潭	個数埋納	32.2	大C2式	西周前期前半	第Ⅱ期	『江西歴史文物』1984.1
96		湖南省株洲頭壩	個数埋納	34.3	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
97		雲紋鏡	？	37.3	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』

98	湖南省岳陽鄒家山	個數埋納	37	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
99	湖南省耒陽夏家山	個數埋納	32	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
100	湖南省長沙縣望新鄉板橋	個數埋納	43. 5	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『文物資料叢刊』 第5集
101	湖北省江陵泉收集	個數埋納	41. 5	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖北卷』
102	龍紋鏡	？	35. 5	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
103	湖南省衡陽岳屏	個數埋納	41. 6	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
104	湖南省衡陽	個數埋納	39. 6	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
105	湖南省衡南梨頭	個數埋納	46	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
106	湖南省衡陽泉口	個數埋納	44	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
107	江西省宜春金橋	個數埋納	48. 8	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
108	湖南省醴陵	個數埋納	29	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』 第2集
109	雲紋鏡	？	49. 5	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』 第2集
110	湖南省衡陽石口鄉	個數埋納	35	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
111	湖南省桃江石牛鄉	個數埋納	42	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
112	江西省南昌李家莊	個數埋納	39. 8	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
113	廣西省灌陽仁江	個數埋納	36	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『文物』 1978. 10
114	福建省建甌梅村	個數埋納	35	大C3式	西周前期後半～西周中期	第Ⅱ期	『文物』 1996. 2
115	江西省宜春蜈公塘	個數埋納	38. 3	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
116	江西省新余羅坊	個數埋納	40	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
117	湖南省資興天鵝山	個數埋納	38	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』 第3集
118	羅田人面紋鏡	個數埋納	44. 5	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖北卷』
119	江西省永新烏龜嶺	個數埋納	45	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
120	江西省新余水西	個數埋納	44. 8	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
121	江西省萍鄉鄧家田	個數埋納	40. 1	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
122	江西省安源十里埠	個數埋納	39. 9	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
123	江西省安源十里埠	個數埋納	40. 3	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
124	湖南省漢壽三和鄉	個數埋納	51	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『湖南考古2002』
125	湖南省漢壽三和鄉	個數埋納	50	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『湖南考古2002』
126	湖南省株洲昭陵鄉黃竹	個數埋納	41. 5	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』 第2集
127	湖南省資興蘭市	個數埋納	34	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』 第3集
128	湖南省株洲漂沙井鄉	個數埋納	39. 5	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』 第4集
129	江西省樟樹雙慶橋	個數埋納	50	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『江西歷史文物』 1981. 3
130	江西省吉安泰和	個數埋納	56	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『江西歷史文物』 1990. 3
131	江西省靖安梨樹窩	個數埋納	44. 1	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『江西歷史文物』 1993. 2
132	江西省新余界水	個數埋納	50. 3	大C4式	西周中期	第Ⅱ期	『文物工作資料』 1962. 3
133	浙江省長興知城長興中學	個數埋納	21	大C型	西周前期～西周中期	第Ⅱ期	『文物』 1973. 1
134	浙江省磐安深澤	個數埋納	27	大C型	西周前期～西周中期	第Ⅱ期	『考古』 1987. 8
135	浙江省安吉高禹	個數埋納	32	大C型	西周前期～西周中期	第Ⅱ期	『文物』 2005. 1
136	湖南省寧鄉縣回龍鋪村	個數埋納	43. 5	A1a式	西周前期後半	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
137	湖南省衡山縣	個數埋納	43. 5	A1a式	西周前期後半	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
138	湖南省衡陽縣長安鄉	個數埋納	43. 3	A1a式	西周前期後半	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
139	細線雲文鐘	個數埋納	28	A1b式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
140	湖南省岳陽縣西塘鄉	個數埋納	22. 4	A1b式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
141	安徽省長豐縣義井鄉	個數埋納	28	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『安徽江淮地區商周青銅器』
142	江西省吉水縣	個數埋納	42. 5	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『江西歷史文物』 1990. 3
143	江西省吉水縣	個數埋納	32. 6	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『江西歷史文物』 1990. 3
144	浙江省蕭山縣杜家村	個數埋納	41. 5	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『文物』 1985. 5
145	江西省萍鄉縣彭高公社村	個數埋納	38. 2	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
146	安徽省太湖縣弥陀鎮	個數埋納	42	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『安徽江淮地區商周青銅器』
147	江西省萍鄉縣彭高公社村	個數埋納	41	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
148	長沙市收集	個數埋納	41	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
149	湖南省瀏陽縣澄潭村	個數埋納	45	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
150	湘潭市收集	個數埋納	38	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
151	湖南省湘鄉市馬龍村	個數埋納	46. 3	A2式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
152	湖北省鐘祥縣洋梓區花山水庫	集中埋納	39. 4	A3式	西周後期前半	第Ⅲ期	『文物參考資料』 1958. 6
153	湖北省大悟縣豐店鄉龍潭村	集中埋納	24	A3式	西周後期前半	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
154	湖北省大悟縣豐店鄉龍潭村	集中埋納	30	A3式	西周後期前半	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
155	湖北省大悟縣豐店鄉龍潭村	集中埋納	32	A3式	西周後期前半	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
156	湖北省大悟縣豐店鄉龍潭村	集中埋納	37. 2	A3式	西周後期前半	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
157	湖北省大悟縣豐店鄉龍潭村	集中埋納	37	A3式	西周後期前半	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
158	湖北省鐘祥縣洋梓區花山水庫	集中埋納	21. 6	A3式	西周後期前半	第Ⅲ期	『文物參考資料』 1958. 6
159	長枚鐘	？	47	A4式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『大系・湖南卷』
160	湖南省平江縣鐘洞鄉	個數埋納	38	A4式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『大系・湖南卷』
161	湖北省武昌縣湖泗鄉木頭嶺	個數埋納	45. 3	A4式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『江漢考古』 1982. 2
162	湖北省武昌縣湖泗鄉木頭嶺	個數埋納	36	A4式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『江漢考古』 1982. 2
163	湖北省武昌縣湖泗鄉木頭嶺	個數埋納	30	A4式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『江漢考古』 1982. 2
164	湖南省沅陵縣五強鎮界首村	個數埋納		A4式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『湖南商周青銅器研究』
165	安徽省當塗新市鄉收集	個數埋納	29. 4	A4式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『江漢考古』 2020. 5
166	湖北省通山縣楠林鎮南城畝	個數埋納	94	A4式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
167	鄂州蟬紋鐘	個數埋納	38. 1	A4式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
168	雲紋鐘	？	31. 5	B1式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
169	湖南省湘鄉縣金石鎮坪如村	個數埋納	45. 3	B1式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
170	湖南省湘潭縣花石洪家峭	墓？	42. 5	B1式	西周中期	第Ⅱ期	『文物』 1966. 5
171	湖南省湘潭縣花石洪家峭	墓？	45. 4	B1式	西周中期	第Ⅱ期	『文物』 1966. 5
172	江西省南昌李家莊	個數埋納	34. 4	B1式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
173	鷹潭地區收集	個數埋納	35. 8	B1式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・江西卷』
174	湖南省湘潭縣青山橋鄉	個數埋納	48. 7	B1式	西周中期	第Ⅱ期	『湖南考古輯刊』 第1集
175	雲紋鐘	？	50. 8	B1式	西周中期	第Ⅱ期	『大系・湖南卷』
176	湖北省大悟縣豐店鄉龍潭村	集中埋納	30. 6	B2式	西周後期前半	第Ⅲ期	『江漢考古』 1980. 2
177	湖南省雙峰縣鎮石公社	個數埋納	30	B2式	西周後期前半	第Ⅲ期	『大系・湖南卷』
178	湖北省鐘祥縣洋梓區花山水庫	集中埋納	37	B2式	西周後期前半	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
179	湖北省通山縣下泉村	個數埋納	21	B2式	西周後期前半	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
180	湖北省鐘祥縣洋梓區花山水庫	集中埋納	31. 3	B2式	西周後期前半	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
181	湖南省郴州市臨武縣	個數埋納	46. 5	B2式	西周後期前半	第Ⅲ期	『大系・湖南卷』
182	浙江省江山市須江鎮	集中埋納	36. 5	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『文物』 1996. 6
183	浙江省江山市須江鎮	集中埋納	30. 5	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『文物』 1996. 6
184	浙江省江山市須江鎮	集中埋納	26. 5	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『文物』 1996. 6
185	廣東省博羅縣陂頭鄉	集中埋納	50. 9	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『考古與文物』 1987. 6
186	安徽省繁昌縣湯家山	個數埋納	23. 2	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『皖南商周青銅器』
187	湖北省武穴市鴨兒洲	集中埋納	38. 1	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
188	湖北省武穴市鴨兒洲	集中埋納	35. 6	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
189	湖北省武穴市鴨兒洲	集中埋納	35. 2	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
190	湖北省武穴市鴨兒洲	集中埋納	34. 7	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
191	廣西壯族自治區恭城縣加會公社	墓？	43	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『考古』 1973. 1
192	湖北省通城縣銀城區鉄柱山	集中埋納	46	B3式	西周後期後半～春秋前期	第Ⅲ期	『大系・湖北卷』
193	湖南省望城縣高塘嶺鎮高砂脊	集團墓地	13. 5	Aa式	西周前期	第Ⅱ期	『考古』 2001. 4
194	湖南省望城縣高塘嶺鎮高砂脊	集團墓地	14. 5	Ab1式	西周中期	第Ⅱ期	『考古』 2001. 4
195	湖南省望城縣高塘嶺鎮高砂脊	集團墓地	13. 8	Ab1式	西周中期	第Ⅱ期	『考古』 2001. 4
196	湖南省望城縣高塘嶺鎮高砂脊	集團墓地	13. 8	Ab1式	西周中期	第Ⅱ期	『考古』 2001. 4
197	湖南省株洲縣白關鎮团山村	墓？	15. 5	Ab2式	西周後期	第Ⅲ期	『湖南考古輯刊』 第7集
198	湖南省湘潭縣青山橋公社高屯大隊	集中埋納	16. 6	Ab2式	西周後期	第Ⅲ期	『湖南考古輯刊』 第1集

199	湖南省醴陵市北鄉黃達嘴	？	19	Ab2式	西周後期	第Ⅲ期	『湖南博物館文集』1991
200	安徽省屯溪市西郊奕棋鄉	屯溪土墩墓		Ab2式	西周後期	第Ⅲ期	『皖南商周青銅器』
201	湖南省長沙縣金井公社干壩坳山	集團墓地？	22. 2	Ab2式	西周後期	第Ⅲ期	『湖南博物館文集』 図版拾貳:3
202	湖南省長沙縣福臨區	？	14. 6	Ab2式	春秋前期	第Ⅲ期	『湖南博物館文集』1991
203	湖南省資興縣旧市馬背形山	集團墓地	19. 2	Ab3式	春秋前期	第Ⅲ期	『湖南考古輯刊』1982. 1 図三:1
204	湖南省寧鄉縣垾塘	1号		Ab3式	春秋前期	第Ⅲ期	向2008より 図七一:3
205	湖南省長沙縣路口區高橋鄉	？	18. 4	Ab3式	春秋前期	第Ⅲ期	『湖南博物館文集』1991
206	湖南省湘潭縣青山橋公社高屯大隊	集中埋納	25. 7	Ab3式	春秋前期	第Ⅲ期	『湖南考古輯刊』第1集
207	湖南省資興縣旧市馬背形山	集團墓地	17. 5	Ab3式	春秋前期	第Ⅲ期	『湖南考古輯刊』1982. 1 図三:3
208	湖南省湘潭縣青山橋公社高屯大隊	集中埋納	18. 8	Ab3式	春秋前期	第Ⅲ期	『湖南考古輯刊』第1集
209	湖南省長沙縣金井公社干壩坳山	集團墓地？	17. 3	Ab3式	春秋前期	第Ⅲ期	図版拾貳:1
210	湖南省望城縣高塘嶺鎮高砂脊	集團墓地	15. 5	Ac1式	西周中期	第Ⅱ期	『考古』2001. 4
211	湖南省寧鄉縣黃材栗山收集	？		Ac2式	西周後期	第Ⅲ期	向2008 図七二:1
212	寬折冶金形鼎	？		Ac2式	西周後期	第Ⅲ期	向2008 図七二:2
213	広東省樂昌市城郊河南鄉大拱坪村對面山	集團墓地	21. 6	Ac3式	春秋前期	第Ⅲ期	『考古』2000. 6
214	江蘇省溧水境內白馬公社上洋大隊	土墩墓？	40	B1式	西周後期～春秋前期	第Ⅲ期	『考古』1986. 3
215	江蘇省丹陽縣城東司徒公社磚瓦厂	？	33	B1式	西周後期～春秋前期	第Ⅲ期	『文物』1980. 8 図一:2
216	安徽省肥西縣金牛公社	土墩墓	31. 8	B1式	西周後期～春秋前期	第Ⅲ期	『考古』1984. 9
217	湖南省湘潭縣古塘橋公社黃狗洞	特定個人墓	26	B2式	春秋中期	第Ⅳ期	『考古』1978. 5 図版五:3
218	湖南省衡陽縣赤石鄉黃泥嶺	集團墓地	23	B2式	春秋中期	第Ⅳ期	『考古』1998. 6 図九
219	江蘇省丹陽縣城東司徒公社磚瓦厂	？	23	B2式	春秋中期	第Ⅳ期	『文物』1980. 8 図十五
220	湖南省衡南縣胡家港山	特定個人墓	20. 5	B2式	春秋中期	第Ⅳ期	『考古』1978. 5 図版肆:4
221	湖南省衡南縣胡家港山	特定個人墓	16	B3式	春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古』1978. 5
222	湖南省湘潭縣古塘橋公社黃狗洞	特定個人墓	16	B3式	春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古』1978. 5
223	湖南省湘潭縣古塘橋公社黃狗洞	特定個人墓	13. 5	B3式	春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古』1978. 5 図五:1
224	湖南省衡南縣胡家港山	特定個人墓	12. 5	B3式	春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古』1978. 5 図版肆:3
225	広西壮族自治区恭城縣加会公社	墓？	12. 5	B3式	春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古』1973. 1
226	安徽省屯溪市西郊奕棋自然村	屯溪土墩墓		C1式	西周後期	第Ⅲ期	『吳越地區青銅器研究論文集』1997
227	安徽省屯溪市西郊奕棋自然村	屯溪土墩墓		C1式	西周後期	第Ⅲ期	『吳越地區青銅器研究論文集』1997
228	燕尾紋變形獸面紋鼎	？		C1式	西周後期	第Ⅲ期	『吳越地區青銅器研究論文集』1997
229	湖南省長沙縣金井公社干壩坳山	集團墓地？	13. 8	C2式	春秋前期前半	第Ⅲ期	『湖南博物館文集』 図版拾貳:2
230	湖南省長沙縣金井公社干壩坳山	集團墓地？	13. 6	C2式	春秋前期前半	第Ⅲ期	『湖南博物館文集』 図版拾貳:4
231	湖南省長沙縣路口區高橋鄉	？	12. 8	C3式	春秋前期後半	第Ⅲ期	『湖南博物館文集』1991
232	湖南省寧鄉縣垾塘	？		C3式	春秋前期後半	第Ⅲ期	向2008 図七〇:6
233	湖南省長沙縣福臨區	？	10. 6	C3式	春秋前期後半	第Ⅲ期	『湖南博物館文集』1991
234	湖南省長沙縣福臨區	？	12. 4	C3式	春秋前期後半	第Ⅲ期	『湖南博物館文集』1991
235	江蘇省丹徒縣龍泉鄉下聶村煙墩山	陪葬坑	9. 4	Da1式古相	西周後期～春秋前期	第Ⅲ期	P46－甲
236	江蘇省丹徒縣龍泉鄉下聶村煙墩山	陪葬坑	10. 8	Da1式古相	西周後期～春秋前期	第Ⅲ期	P46－乙
237	江蘇省丹徒縣龍泉鄉下聶村煙墩山	陪葬坑		Da1式古相	西周後期～春秋前期	第Ⅲ期	P46－丙
238	安徽省青陽縣廟前鎮十字村龍岡磚窯厂	墓	13. 2	Da1式新相	春秋中期	第Ⅳ期	図六:1
239	茶陵縣	？		Da1式新相	春秋中期	第Ⅳ期	向2008 図七一:1
240	湖南省湘潭縣古塘橋公社黃狗洞	特定個人墓	21	Da1式新相	春秋中期	第Ⅳ期	『考古』1978. 5 図版五:2
241	広東省封開杏花斑石猛虎頭山	墓？	15. 7	Da2式	春秋後期前半	第Ⅳ期	
242	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	16	Da2式	春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古學報』2003. 4
243	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	16. 5	Da2式	春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古學報』2003. 4
244	湖南省湘鄉縣城郊何家灣	特定個人墓	22	Da3式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『湖南考古輯刊』1986 図十
245	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	20	Da3式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古學報』2003. 4
246	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	18. 2	Da3式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古學報』2003. 4
247	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	19. 5	Da3式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古學報』2003. 4
248	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	16. 5	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古學報』2003. 4
249	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	14. 8	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古學報』2003. 4
250	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	15	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古學報』2003. 4
251	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	18. 3	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古學報』2003. 4
252	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	14. 4	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古學報』2003. 4
253	広西壮族自治区恭城縣加会公社	墓？	14	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古』1973. 1
254	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	12	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古學報』2003. 4
255	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	16	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古學報』2003. 4
256	広西壮族自治区賀縣沙田鎮龍中村	岩洞墓	17. 8	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古』1993. 4 図二:3
257	広西壮族自治区恭城縣加会公社	墓？	15. 5	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古』1973. 1
258	広東省德慶縣馬墟人民公社落雁山西坡	戰国墓	16	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『文物』1973. 9 図六、図一二
259	広東省四会縣大旺農場烏旦山	戰国墓	20. 3	Db1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古』1975. 3
260	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	22. 5	Db2式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古學報』2003. 4
261	湖南省長沙市樹木嶺赤岡冲	特定個人墓	14. 2	Db2式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古』1984. 9 図二:左
262	湖南省郴州市內東區、南區	集團墓地	14	Db2式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『文物』1990. 10
263	湖南省衡陽市江東區涂家山	集團墓地	15. 4	Db2式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古』1997. 12 図八:11
264	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	16. 8	Db2式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古學報』2003. 4
265	湖南省桃江縣城關鎮桃谷山鄉腰子畚村	集團墓地	25. 2	Db2式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古學報』2003. 4
266	江蘇省六合縣程橋鎮	墓	31. 6	Dc式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古』1965. 3 図四:5
267	江蘇省六合縣和仁	東周墓	23	Dc式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古』1977. 9 図七:2
268	江蘇省蘇州城東北新蘇絲織厂	？	29. 5	Dc式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『文物』1980年. 8 図一:1
269	広東省羅定縣羅平區沙頭鄉橫垌村背夫山	戰国墓	32	Dc式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古』1986. 3
270	広東省四会縣大旺農場烏旦山	戰国墓	28. 2	Dc式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古』1975. 3
271	湖南省衡南縣胡家港山	特定個人墓	25	E1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『考古』1978. 5 図版肆:1
272	江西省太陽墟鄉田南村	春秋墓	17. 5	E1式	春秋中期～春秋後期前半	第Ⅳ期	『江西歷史文物』1986. 2 図－4
273	広西壮族自治区賀縣沙田鎮龍中村	岩洞墓	28. 5	E2式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古』1993. 4 図二:2
274	広東省四会縣大旺農場烏旦山	戰国墓	？	E2式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古』1975. 3
275	広西壮族自治区賓陽縣甘棠公社韋坡村	戰国墓	23	E2式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古』1983. 2
276	広東省羅定縣羅平區沙頭鄉橫垌村背夫山	戰国墓	12. 2	E2式	春秋後期後半～戰国前期	第Ⅴ期	『考古』1986. 3 図七:24